



令和5年度 全国私立中学高等学校

# 全国私学教育研究集会香川大会

研究集録

## 持続可能な社会を実現する私学教育の創造

---

主催 一般財団法人日本私学教育研究所

実施 中国・四国地区私立中学高等学校連合会／香川県私立中学高等学校連合会

後援 香川県／高松市／日本私立中学高等学校連合会



# 目 次

発刊のことば	1
実施概要	3
大会役員等一覧	4
全体集会	5
開会式	6
記念講演	9
報告	1 5
香川県私立学校活動紹介	2 1
部 会	
私学経営部会	2 2
教育課程部会	3 8
法人管理事務運営部会	4 7
生徒指導部会	6 5
特色教育部会	8 6
参加者アンケート	1 0 6
参加者数	1 1 1
開催地・研究目標一覧	1 1 2
編集後記	1 1 6



# 発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長 平方邦行

令和5年度全国私学教育研究集会香川大会は、令和5年11月9日（木）・10日（金）の2日間、香川県高松市のJRホテルクレメント高松を会場に「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」を研究目標に掲げて開催しました。本大会は香川県、高松市及び日本私立中学高等学校連合会の後援により、中国・四国地区私立中学高等学校連合会、香川県私立中学高等学校連合会及び一般財団法人日本私学教育研究所が実施し、全国の私立中学校・高等学校・中等教育学校から513名の参加者を得て、盛会裡に終了することができました。関係各位に心より御礼申し上げます。

初日は全体集会（開会式・全体会）を行い、開会式では香川県知事の代理として香川県副知事の大山 智様と高松市長の代理として高松市副市長の加藤昭彦様に臨席頂き、祝辞を賜りました。全体会では東京大学大学院工学系研究科人工物工学研究センター技術経営戦略学専攻教授の松尾 豊先生による記念講演「人工知能の進展と人材育成」を行い、続いて、日本私立中学高等学校連合会の吉田 晋会長及び当研究所の平方による「教育政策と私学情勢について」をテーマとした報告、香川県私立学校活動紹介として、坂出第一高等学校少林寺拳法部の生徒が「少林寺拳法演武」を、尽誠学園高等学校和太鼓部の生徒が「和太鼓演奏」を披露しました。全体集会終了後の教育懇談会では香川県知事の池田豊人様と高松市長の大西秀人様に臨席頂き、祝辞を賜りました。

2日目は私学経営、教育課程、法人管理事務運営、生徒指導、特色教育の5部会に分かれ、それぞれの部会研究目標の下で、講演、パネル・ディスカッション、実践発表等を行いました。2日間を通して参加者からは今後の参考となる内容であり、自校に持ち帰り、実践したい等の評価を頂きました。

最後に、本大会の成功は、講演・発表を頂いた方々、運営に携わって頂いた中国・四国地区私立中学高等学校連合会と香川県の私立中学高等学校の先生方と当研究所の役員、専門委員の先生方、全国から参加された先生方、また会場のスタッフの方々、すべての方々が一丸となって、ご準備、ご協力を頂いた結果と確信しています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。



# 実施概要

- 1 研究目標 持続可能な社会を実現する私学教育の創造
- 2 会 期 令和5年11月9日(木)～10日(金)の2日間
- 3 会 場 JRホテルクレメント高松
- 4 参加人員 513名(募集500名)
- 5 基本日程

月日	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	30
初日 11/9(木)					受付	開 会 式	全体会				教育懇談会	
							記念講演	★	報告 I	※1	★	※2
2日目 11/10(金)		部 会		昼 食	部 会			(※1)報告Ⅱ (※2)私立学校活動紹介 (★)休憩(移動)				

## 6 全 体 会

### 記念講演 「人工知能の進展と人材育成」

東京大学大学院工学系研究科 教 授 松 尾 豊  
人工物工学研究センター／技術経営戦略学専攻

### 報 告 「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋  
一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 平 方 邦 行

### 香川県私立学校活動紹介

「少林寺拳法演武」 坂出第一高等学校少林寺拳法部

「和太鼓演奏」 尽誠学園高等学校和太鼓部

## 7 部 会

1. 私 学 経 営 部 会 持続可能な社会への私学の指針～子供たちの豊かな未来を築くために～
2. 教 育 課 程 部 会 新たな社会の創り手の育成～個別最適かつ協働的な学びへの転換～
3. 法 人 管 理 事 務 運 営 部 会 私学だからできる持続可能な働き方とは
4. 生 徒 指 導 部 会 若者たちの多様な個性が生きる社会の創造
5. 特 色 教 育 部 会 地域、社会と連携した若者たちの学び

## 8 教育懇談会(希望者のみ)

日時 11月9日(木) 18時～19時30分(受付:18時より)

会場 JRホテルクレメント高松 3階「飛天」

# 大会役員等一覽

## 1. 大会役員

吉田晋	一般財団法人日本私立中等教育研究所	理事長
長塚篤夫	一富士見丘中本私学教育研究所	理事長・校長
山中幸平	一般財団法人日本私立中等教育研究所	副理事長・全国集会総括責任者
平方邦行	一般財団法人日本私立中等教育研究所	校長
鈴木康之	一般財団法人日本私立中等教育研究所	副理事長
		学園長
		理事・所長
		理事・全国集会副総括責任者
		理事長・校長

## 2. 実行委員

委員長 中村道郎	中国・四国地区私立中等高等学校連合会	会長
副委員長 山中幸平	愛媛県私立中等高等学校連合会	会長
副委員長 香川泰造	中国・四国地区私立中等高等学校連合会	副会長 (中国地区代表)
副委員長 村崎正人	日本私立中等高等学校連合会	副会長
副委員長 橋本和紀	香川県私立中等高等学校連合会	会長
副委員長 野田修	高松中央高等学校連合会	会長
副委員長 水谷厚志	徳島県私立中等高等学校連合会	理事長
副委員長 金光道晴	高知県私立中等高等学校連合会	会長
副委員長 田中清峰	一般社団法人鳥取県私立学校協会	会長
副委員長 古田圭一	島根県私立中等高等学校連盟	理事長
副委員長 溝渕聖豪	岡山山県私立中等高等学校協会	会長
副委員長 長塚篤夫	山口県私立中等高等学校協会	理事長
副委員長 平方邦行	香川県私立中等高等学校連合会	副会長
副委員長 鈴木康之	大手前高松中等高等学校	校長
	一般財団法人日本私立中等教育研究所	副理事長・全国集会総括責任者
		校長
		理事・所長
		理事・全国集会副総括責任者
		理事長・校長

## 3. 運営総括委員

委員長 溝渕聖豪	大手前高松中等高等学校	校長
副委員長 三谷雄治	坂出第一高等学校	校長
副委員長 光田大介	香川誠陵中等高等学校	校長
副委員長 西本泰三	英明高等学校	校長
副委員長 草薙浩	四国学院大学香川西高等学校	校長
副委員長 乃村久信	藤井学園寒川高等学校	校長
副委員長 下山優	尽誠学園高等学校	校長



# 全 体 集 会

1 日 時 令和5年11月9日(木) 13時～17時30分

2 会 場 JRホテルクレメント高松 3階「飛天」、「玉藻」

3 開 会 式 司会：和氣 士緒／記録：合田 意  
運営総括委員長 溝 渕 聖 豪  
(1) 開会のことば  
(2) 主催者挨拶 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋  
(3) 実行委員長挨拶 中国・四国地区私立中学校高等学校連合会 会 長 中 村 道 郎  
(4) 来賓祝辞 香川県知事 池 田 豊 人 様  
高松市長 大 西 秀 人 様  
(5) 登壇者紹介  
(6) 次期開催地区代表挨拶 九州地区私立中学高等学校協議会 会長 小 山 康 直  
(7) 閉式の辞 副運営総括委員長 三 谷 雄 治

4 全 体 会 司会：和氣 士緒／機材担当：合田 意／記録：合田 意  
記念講演 講師紹介：溝渕 聖豪／謝辞：香川 泰造

「人工知能の進展と人材育成」

東京大学大学院工学系研究科人工物工学研究センター 技術経営戦略学専攻 教授  
松 尾 豊

報 告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉 田 晋  
一般財団法人日本私学教育研究所 所長 平 方 邦 行  
進行：草薙 浩・下山 優

香川県私立学校活動紹介

「少林寺拳法演武」 坂出第一高等学校少林寺拳法部

「和太鼓演奏」 尽誠学園高等学校和太鼓部

5 全体集会運営委員・指導員(順不同)

委員長 三 谷 雄 治 坂 出 第 一 高 等 学 校 校 長  
副委員長 三 池 誠 一 郎 大 手 前 高 松 中 学 高 等 学 校 教 頭  
岸 輝 人 坂 出 第 一 高 等 学 校 副 校 長  
城 下 正 樹 坂 出 第 一 高 等 学 校 教 頭  
和 氣 士 緒 大 手 前 高 松 中 学 高 等 学 校 教 頭 補 佐  
合 田 意 大 手 前 高 松 中 学 高 等 学 校 教 諭  
空 河 内 由 華 高 松 中 央 高 等 学 校 養 護 教 諭

# 開 会 式

## 【開会の言葉】

運営総括委員長 溝 渕 聖 豪

皆様、ようこそ松の緑とアートの県、香川県において下さいました。心より歓迎いたします。全国より513名の先生方が参加され、「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」をテーマに全国私学教育研究集会香川大会を開催いたします。この2日間の研修がご参加の先生方にとって有意義なものとなり、全国の私学教育の更なる発展に大いに寄与することを祈念いたしまして、ただいまより「令和5年度全国私学教育研究集会香川大会」の開会を宣言いたします。



## 【主催者挨拶】

一般財団法人日本私学教育研究所  
理事長 吉 田 晋

本日は全国私学教育研究集会香川大会に500名定員のところ、513名の先生方にお集まり頂きましたこと改めて感謝申し上げます。また、お忙しい中、大山副知事、加藤副市長にご臨席頂き誠にありがとうございます。2019年12月に新型コロナウイルス感染症が発生して、2020年3月に「学校閉鎖」という事態がありました。しかし、それを乗り越えて各私立学校が対面形式の授業をしっかりと行いました。そして、この研究集会も規模を縮小はしたものの、秋田大会、京都大会、岐阜大会と毎年続けて参りました。そして、その中で本日久方ぶりに定員を超えました。改めて今大会を主催して頂きました中国・四国地区の先生方、そして、ご協力頂いた全国の先生方に改めて感謝申し上げます。



今回の研究目標「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」は、まさにこれからの時代を反映したテーマです。記念講演では、人工知能研究の第一人者であられる東京大学の松尾先生に「人工

知能の進展と人材育成」と題して記念講演を頂きます。そして、2日目の各部会のプログラムを見ても、まさにこれからの21世紀の新たな教育というものを皆さんが意識していくのにふさわしい内容になっています。これからDX化等課題がたくさんございます。少子高齢化社会で少なくなっている子ども達が未来社会の主役になってもらえるように育てていくのが我々私学の使命だと思っております。今回の研究集会を活かして頂いて、皆様の更なる発展を祈るところでございます。

## 【実行委員長挨拶】

中国・四国地区私立中学高等学校協議会  
会長 中 村 道 郎

讃岐うどんの町、香川へようこそ。四国の玄関口として知られている高松。私が学生の頃は上京するのに、高松と宇野を結ぶ宇高連絡船が重要な交通手段であったことが思い出であります。現在では、四国と本州を結ぶ橋が3ルート、瀬戸大橋、しまなみ海道、大鳴門橋と明石海峡大橋があり、車で本州に渡ることができるようになりました。この橋を架けるために苦労した人達のチャレンジ精神を我々は忘れてはなりません。



さて、今回の香川大会の研究目標「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」においては、この瀬戸内海に架かる橋の建設と同様、一見不可能に思えることへのチャレンジ、変革と挑戦の精神が重要だと考えます。我々教職員は、私学教育という大変重要な仕事に携わっているという誇りと責任を感じ、いつも感動、喜び、いきいき、わくわくで変革と挑戦を続けていこうではありませんか。現在、新型コロナウイルス感染症、そして、インフルエンザ感染の恐れが続いておりますが、マスク、手指消毒、健康観察等に十分な配慮をお願いし、この研究集会が実り多い機会となることを願ひまして、歓迎の挨拶といたします。

## 【来賓祝辞】

香川県副知事 大山 智 様

「令和 5 年度全国私学教育研究集会香川大会」が盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。また、皆様方には香川県にお越し頂き、ありがとうございます。心から歓迎を申し上げます。吉田理事長、中村会長、香川会長をはじめ、一般財団法人日本私学教育研究所、中国・四国地区私立中学高等学校連合会、香川県私立中学高等学校連合会の皆様方には本大会を香川県で開催頂き、ありがとうございます。大変光栄に思っております。



近年、子ども達を取り巻く環境は大きく変化しており、子ども達一人ひとりが様々な変化に主体的に向き合い、よりよい社会の創り手として必要な資質・能力を養うことが大変重要となっております。こうした中、私立学校におかれましては、子どもの自主性や創造性が発揮できる教育環境の整備に努められますと共に、子ども達一人ひとりの人格を尊重した個性豊かな教育を進められ、優秀な人材を多数輩出されておられる等、地域の教育拠点として私立学校の重要性はますます大きくなっております。このため、本県では私立学校の経常的経費に対する助成や授業料・入学金に対する保護者負担の低減、特色ある学校づくりに取り組む私立学校への助成等、本県公教育の一翼を担う私立学校振興のための各種施策に取り組んでおります。

さて、本大会の研究目標は「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」で、また、記念講演は本県の出身で AI 研究の日本の第一人者である、地域に根ざした教育活動にご理解を示し、実践されている松尾豊先生と伺っております。大変有意義な興味深いお話を頂けるものと期待しております。時代の要請に応え、人材の育成に尽力されている皆様の熱意によりまして 2 日間の研修内容が意義深く、充実したものとなるようお願いいたしますと共に、皆様方には未来を担う子ども達の育成に一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。結びに今大会のご盛会と、私学教育の益々のご発展、また本日お集まりの方々のご健勝・ご活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。

## 【来賓祝辞】

高松副市長 加藤 昭彦 様

本日、「令和 5 年度全国私学教育研究集会香川大会」が、ここ瀬戸の都・高松におきまして、盛大な開催されますことを心からお慶び申し上げますと共に、全国各地からお越し頂きました皆様が高松市を代表いたしまして、心から歓迎を申し上げます。また、ご出席頂いている皆様におかれましては、時代を拓く創造性を身につけた持続可能な社会の担い手を育成する、日々他愛なくご尽力頂いておりますことを深く敬意と感謝を表したいと思います。



さて、社会の変化はさらに加速し、予測困難となっている中、社会の担い手となる子ども達の資質・能力を画一に育成するためには学習指導要領を確実に実施する上で、中央教育審議会の答申で示された「令和の日本型学校教育」の実現に向けた個別・最適な学びと協働的な学びを一体的に両立させることが求められております。本日、全国の私学教育関係者が一堂に会され、私学教育の振興・発展のために研鑽を重ねられますことは大変意義があるものと存じております。どうかこの度の研究集会が実り多きものとなりますようご期待申し上げますと共に、今後とも教育の振興にご尽力を賜りますようお願いを申し上げます。また、ご参加の方々におかれましては、せっかくの機会でございますので、本会場近くでございます「高松城跡・玉藻公園」や国の特別名所「栗林公園」、そして、史跡天然記念物であり、瀬戸内海の美しい風景を一望できる「屋島」等本市が誇る景勝地をご覧頂きますと共に、本場の讃岐うどんや瀬戸内海の新鮮な海の幸等もご賞味頂きます高松・香川でのひとときを満喫して頂ければ幸いに存じます。

終わりにになりましたが、一般財団法人日本私学教育研究所及び日本私立中学高等学校連合会の本益々の飛躍・発展を、本日お越し頂きました皆様のご健勝・ご活躍を心から祈念申し上げまして開催市代表挨拶の歓迎の言葉とさせていただきます。

## 【次期開催地区代表挨拶】

九州地区私立中学高等学校協議会  
会長 小山 康 直

来年度、全国私学教育研究集会は大分県で開催いたします。四国地区代表の中村実行委員長、中国地区代表の山中副実行委員長、そして、開催県代表の香川副実行委員長他運営に携わった先生方の尽力により、研究目標「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」として久方ぶりに募集定員を超える規模で開催されますことは、いかに素晴らしい大会が準備されていたことが結果として出ていると思います。大分県の運営に携わる先生方も多数、本大会に出席させて頂いており、しっかり視察させて頂いた上で、来年度大分大会の運営に携わりたいと思っています。



大分大会の研究目標は「新しい時代の創造に向けた私学の挑戦～多様性と包括性の実現に向けて～」ということで、ワンランク上の研修に挑戦したいという想いも含んでおります。大分県は日本一の温泉県で「味力」も満載、そちらも是非、楽しみにして頂ければと思います。実は大分県は来年度様々なホットな話題がございまして、4～6月までにはJRと地元の自治体で地域の新たな魅力を創造し、顧客を集めるという「福岡・大分デスティネーションキャンペーン」というものがございまして、もう1つが7月に「インターハイ北九州大会」があります。11月10日には「全国豊かな海づくり大会」も大分県で開催される。その前の10月31日・11月1日が「令和6年度全国私学教育研究集会大分大会」であります。是非とも大分県にお越し頂いて、おおいたを知って頂きたいと思っています。

## 【閉式の辞】

副運営総括委員長 三 谷 雄 治

持続可能な社会を実現する私学教育の創造を目指して、本日から2日間、全国の仲間と共に真に有意義な大会となることを祈念いたしまして「令和5年度全国私学教育研究集会香川大会」開会式を閉式といたします。



# 記念講演

## 「人工知能の進展と人材育成」

東京大学大学院工学系研究科

人工物工学研究センター／技術経営戦略学専攻 教授 松尾 豊

松尾研究室は人工知能の研究室なので、知能を作るということに挑戦をしている。人工知能の研究は以前から、認知科学や哲学ともつながりが深い分野で、そもそもなぜ、我々は「見る」のかという問いにつながっていく。こうやって、皆さんの前で話したり、ここは立派な会場だなと感じたりするわけだが、この状況は本当に実在するのだろうか。それとも、この認識が作り出しているだけなのだろうか。これは、哲学で言うと存在か認識かという問いなのだが、答えは分からない。本当にあるのかもしれないし、うその世界かもしれない。いずれにしろ、我々の脳がこのような認識を生み出しているらしいということは確かだ。



ところが、この認識を生み出している脳の仕組みが、いまだによく分かっていない。そのことが私は昔から不思議で、これだけ科学技術が進んで、様々なことが分かってきているのにも関わらず、我々自身の認識の仕組みがいまだに分かっていない。なぜ、我々が見たり感じたり、考えたりすることができるのか。それが脳のどのような仕組みによって生み出されているか、誰も知らないのだ。これは驚くべきことで、今、脳科学はかなり進歩しているが、結局、非常に微少な神経細胞の活動の分析をしているだけなのだ。これがたくさん集まった時に、いったいどのような計算をしているのか。どのような機能を果たして、我々の認識を与えてくれているのかは、いまだに分かっていない。

それを解くためには大きく2つの道がある。1つは脳科学だ。脳のことを一生懸命調べると分かるのではないか。もう1つが人工知能で、これは作ることによって分かる学問である。例えば、鳥がなぜ飛ぶのか。鳥のように飛びたいというのは、人類は昔からずっと思ってきた。鳥を真似して、一生懸命羽ばたくような飛行機を作るなど、様々な挑戦をしてきたが、飛べなかった。ところが、ある時、固定翼で飛ぶことができたわけだが、それは要するに、飛ぶということは揚力をいかに得るかということだった。揚力を得るにはプロペラで推力を作り出して、それを上と下と換えれば良いということで、固定翼でもプロペラを回せば飛ぶということが分かり、飛行機になったわけだ。そのため、鳥のように飛びたいと思った時に、飛ぶということは結局、揚力を生み出すことだということが分かった上で、飛行機が作られたのである。これは脳科学においても同じで、鳥が飛ぶことの原理（揚力を生み出すこと）と同じように、人間の知能の原理があるはずで、これを検証したのが人工知能の分野だ。したがって、人工知能の一番の目的は、我々自身を知りたい、知能が何かを知りたい。そのためにコンピュータという素晴らしい道具を使って作ってみよう。作ってみるによって、同じようなものができたら、人間の知能がどのようなものか理解できるのではないかという考え方である。だから、一番根本的なところは人間をよく知りたい、自分で何かを知りたいということだ。その時に、今のような哲学的な話や認知科学の話などもとても大切だと思っているし、同時に技術を進めていくためにはエコシステムを作らなければいけないと思っている。

技術者・研究者が1人で戦うことは、今の時代では無意だ。よく日本は兵站が弱いと言われる。戦闘の最前線で戦っている人はすごいが、後ろに補給路がないので負けてしまうことが多くある。松尾研究室はエコシステムを作りたいということで、補給路を含めて戦えるようなものを作っていきたいと考えている。大きな活動としては、基礎研究・講義・社会実装・インキュベーションの4つだ。大抵の大学研究室は、基礎研究や講義を先生が年に何コマかやっているが、松尾研究室の場合は違う。今、20講義以上を松尾研究室だけでやっていて、ウェブ、データサイエンス、ディープラーニング、アントレプレナーシップと大きく4つに分けられる。おおよそ、今の時代に活躍するために必要な武器を取りそろえているというつもりで、これらウェブ、データサイエンス、ディープラーニング、アントレプレナーシップを学ぶことでどこでも戦えると私は思っている。

この講義の受講者は年々、指数関数的に増加している。昨年度1年間で松尾研究室の講義を受講してくれた方は5,600人いた。今年は軽く1万人を超える予定だ。4、5年後には、20万人を目標にやっている。今、東大の学生が、1学年3,000人だが、数が合わないのは、他大学の学生も受講しているからだ。オンラインでやっている「GCI」が幾つかあるのだが、最近は、高校生と中学生の受講者が増えている。大学

に入る前に、松尾研究室の AI の講義で勉強していて、トップ 5%に入る優秀生になるような高校生がいる。今の時代、本当に AI を学びたい人がかなり多いということだ。今、生成 AI、ChatGPT 等いろいろと注目されているが、一番基盤となる技術が大規模言語モデル LLM という。この大規模言語モデルの講義を 9 月に日本で恐らく初めて開講した。この講義も受講者が 2,000 人いた。受講者の約半分が全 7 回の講義の最後までたどり着き、GPU を何十時間も使って学習してくれた。これはまさに生成 AI の最先端なので、このような分野に非常に強い学生が 2,000 人程誕生したということだ。そして、講義を受けた学生の中から、希望者を企業との共同研究プロジェクトに招待する。やりたいという学生はマッチングするのだが、うまく OK が出れば企業とのプロジェクトに配属される。このような企業との共同研究のプロジェクトが常時 15 から 20 くらい走っていて、例えば、とある教育事業者との共同研究がある。オンラインの学習システムのデータを AI 解析してほしいという依頼で、復習問題を出す時に一番良いタイミングで問題を出したいというものだった。忘れる直前に復習問題をやると定着率が一番高いのだが、この忘却曲線が生徒によって違う。この忘却曲線を生徒ごとに推定して、その生徒に合った形で復習問題を出すというシステムと一緒に考えた。別の例では、大手出版社との共同のプロジェクトがある。本は出した瞬間が一番売れていて、基本的にそのあとの売上げが落ち続けて終わりだ。唯一、売れなくなった本をもう 1 度売る方法が書店のフェアである。この書店のフェアは担当者の方の勘と経験で行われていて、購買者が引っ掛かりそうなテーマを設定し、テーマに沿った本を集めてフェアにしていた。これを、データを使ってやると、今どのようなテーマを設定すれば良いかも AI で導き出せるし、過去の売れ筋からマーケティングによるものか、本当に本が面白いから売れているのか分析できる。そうすると、このテーマにおいて、本当に面白くて読んでほしい本を並べることによって結果的に売上げが上がる。

ということで、人間が勘と経験でやるよりは、AI を使った方が効果が上がる。学生は AI の講義で学んだ後、このようなプロジェクトに所属し、メンバーとして頑張った中でさらに優秀であればプロジェクトマネージャーになる。プロジェクトマネージャーになると、企業との交渉や進捗報告、営業を行ったり、メンバーが離脱した時に補給をしたり、元気づけたりする。そうして、プロジェクトを回せるようになる。すると次に、起業し始める。松尾研究室の中で、企業との共同研究プロジェクトを回せるようになれば、独り立ちできる。今、松尾研究室から起業がどんどん増えている。これまで松尾研究室から出てきたスタートアップ企業は 19 社だ。この中で 2 社が上場している。基礎研究をベースにしながらか、講義をして、共同研究して、スタートアップを実現する。こういった一連のエコシステムを作っていくことが松尾研究室の活動である。日本はかつて技術大国であったが、現在は競争力が失われかけている。もう一度、世界で戦えるような技術大国を作ることを目標に今、エコシステムの形成を進めている。

次に生成 AI の話だ。今、生成 AI の話題で盛り上がっているが、歴史を振り返ると、人工知能という分野が誕生したのは 1956 年だ。この 67 年の間にブームと冬の時代を繰り返してきた。第一次ブームが 1950 年代から 1960 年代、第二次 AI ブームが 1980 年代、そして 2010 年代から第三次 AI ブームになっている。この第三次 AI ブームの中心になったものがディープラーニングで、これが伸びてきた背景には、計算機能力、コンピュータ能力が向上してきたこと、それからデータが増えてきたことがある。今注目を集めている生成 AI は、ディープラーニングの中の技術だ。したがって、AI (人工知能) という広い領域があり、その中に機械学習という領域があり、その中にディープラーニング (深層学習) という領域があり、さらにその中に生成 AI が含まれるという相関関係になる。生成 AI という言葉は学術的にはあまり正しい用語ではなくて、バズワードに近いものだ。もともと生成モデルという言い方があり、生成モデル・識別モデルという区別があった。識別モデルは、画像認識のように、これが猫か犬かを識別するという AI だ。生成モデルはデータを生成するが、画像の生成と言葉の生成はかなり技術が違う。画像の生成には拡散モデル (Diffusion model) を使う一方、言葉の生成にはトランスフォーマーを使い、中身が全然違うのだが、一緒くたにして生成 AI という呼ばれ方をしている。大規模言語モデル (large language model; LLM) と呼ばれるものは、特に言葉の生成だけを取り上げたものを指す。

それでは、そもそもディープラーニングとは何か。これは脳の神経回路を模したモデルで、ニューラルネットワークと言う。脳は神経細胞がつながってネットワークを形成している。同じように、このニューラルネットワークも一個一個のニューロンがつながった構図をしている。一個一個のニューロンは非常に簡単な処理をする。周りの敷地が十分に大きいと発達する。数学的に言うと、重みを測って、周りの値に重みを掛け算して、 $\Sigma$  を取る。これが一定以上だと発達する。一定以下だと発達しないだろう。このようなシグモイド関数というものを使う。一個一個のニューロンはすごく単純なことをやるのだが、ネットワークにするとなぜか賢いことができる。例えば、 $x$  に画像を入れ、画像のピクセルの値を入れる。 $y$  にこれは猫か犬かを出力させる。最初、学習の処理はたくさん間違える。間違えると、間違いを遡って、この重みを修正していく。この線の太さ  $w$  を修正していく。これを誤差逆伝播と言う。この誤差逆伝播を何回

もやって学習していくと、だんだん当たりが良くなっていく。このパラメータの重みを調整することを学習と言う。いったん重みが学習されると、入力すると自動的に出力が得られる。犬だ猫だというのが、自動的に判別できるようになるのだ。

このディープラーニングは、2012年に画像認識で非常に大きな性能の飛躍があり、2015年頃から様々な形で実用化が進んでいった。顔認証や画像診断、自動運転などに使われている。私は9月にサンフランシスコに行って、ロボタクシーというものに乗った。これは運転手のいない自動運転のタクシーだ。ウェイモという会社が運営しているが、指定したところまで連れていってくれる。これはかなり未来的だなと思ったし、ここまで使えるのであれば日本でも様々な地域で使えるのではないだろうか。日本では2026年から自動運転の実証実験を予定しているが、ここまで来ていたら使って問題ないのではないかと感じた。自動運転の中ではこのディープラーニングが画像認識として使われている。

そして、もう1つは自然言語処理だ。言葉を扱う処理は2018年頃から徐々に精度が向上してきていた。このきっかけになったのが、Googleの研究者らが研究した「トランスフォーマー」というモデルだ。

もう1つ重要なのが、「自己教師あり学習」だ。これは先程お話ししたような画像認識だと、猫だったり犬だったりというラベルのペアをたくさん用意しないと行けない。これをアノテーションと言う。あるいは、医療画像だとレントゲンの写真で、これはこういう診断名だというの付けないと行けない。したがって、 $x$ と $y$ の両方のデータが必要なのだが、 $y$ の情報量は少ないし、得るにはコストがかかる。一方、 $x$ のデータはあふれているわけだ。 $x$ だけから学習させるものが自己教師あり学習で、Next Word Predictionと言う。どういうことかという、まず文が与えられる。文が与えられた時に、文の途中までを読み込ませて、これを $x$ として次の単語を当てる。つまり、次の単語を $y$ とするわけだ。また途中までを読み込ませて、これを $x$ として次を $y$ にする。そうすると、単に文章が与えられただけで、 $x$ と $y$ のデータがたくさん作れる。そうすることで学習ができる。そうすると、文章を途中まで与えると次の単語を非常に的確に予測するAIができる。次の単語を当てることができるということは、実は文法が分かっている、話の流れが分かっている、そして、文章の意図が分かっているからだ。したがって、次の単語を当てることをやらせるだけで、このAIは文法も学習するし、その背後にある様々な知識も学習するし、因果関係も学習するということだ。

人間の知能の話に戻ると、我々人間も今こうしている一瞬一瞬も常に予測している。何を見るか、何を聞かずと予測し続けている。例えば、何か職場が変わったりすると、最初は予測できないことがたくさんある。ところが、1カ月、3カ月、1年経つと慣れて、予測が当たるようになってくる。その過程の中では、背後にある様々な構造や因果関係などを学んでいる。これは赤ちゃんの時から一緒に、赤ちゃんとして生まれてきた時には三次元構造等もちろん知らないが、見る方向によって物の見え方が変わることを予測している。物というのは形が変わらないが、液体は変わる等、様々なことを予測する中で学んでいるということ、恐らく大脳新皮質がやっていることがこの自己教師あり学習である。予測をすることによって、世界の構造を見つけ出すのだ。

したがって、この自己教師あり学習とトランスフォーマーの2つが今の生成AIの特に言葉の処理の肝なのだが、かなり本質的な技術だということだ。知能の仕組みとしてはいい線を行っているのではないかなと思う。今のトランスフォーマーと自己教師あり学習の仕組みが非常に強力なのだ。

スケール則というもの知られており、これはパラメータの数を大きくすると、テスト誤差が下がるということだが、テスト誤差は訓練してテストする時の間違いのことだから、要するにAIの性能が上がるということだ。つまり、パラメータの数を増やすとAIの性能が上がる。パラメータの数は先程のようなニューラルネットワークの中の線の数である。したがって、この線の数が多いほど、ニューロンが多く、賢くなるということだ。哺乳類では人間が脳のサイズが最も大きく、脳のサイズと賢さが相関していると言われているが、それに近い話だ。パラメータの数が大きいほど性能が上がる。ただ、理想としてはパラメータの数は増やしすぎず、データのサイズに比べると適切な数に設定した方がよい。データが少ないのにパラメータの数を増やすと、オーバーフィットするのだ。これを過剰適合という。訓練データに対してはうまくいくのだが、新しいデータに対して当てはまりが極端に悪くなる。逆にパラメータの数を少なくするとアンダーフィットする。したがって、モデルのサイズ、パラメータの数は適切な数にすべきだということが今までの常識だった。ところが、このスケール則が言っていることは全く逆のことで、パラメータの数をとにかく大きくしろ、そうすると性能が上がると言っているのである。中で何が起きているのか、まだよく分かっていないが、恐らく、基本的にデータを丸覚えして、必要な程度に汎化しているのだと考えている。それを先程のトランスフォーマーと自己教師あり学習で、次の単語を当てるために必要な程度に一般化している。つまり、基本的に丸覚えなのだ。従来の統計とか機械学習は、汎化能力というものにこだわっていた。そのため、学習データで学習して、それが、新しいデータが来た時にきちんと当たることが大切だったのだ。だから、パラメータの数を大きくしない方がよいと言っていたのだが、現実の

問題は、丸覚えしても良いことがたくさんあるということなのだ。例えば、歴史の問題で出来事や年号を覚えることは別に汎化する必要はない。ところが、数学の問題や日常的な変化など、あるいは英語で話す場合などは汎化した方が良いこともあるということで、これは条件によって違う。だから、基本的に丸覚えする。一般化するほうが良いことに関しては一般化するということ、中で起こっているらしいのだ。これをグロッキングという。丸覚えが先に起こって、しばらくしてから一般化が起こる。そこにかかなりの時間がかかる。かなり面白い現象だ。このパラメータの数を大きくすればするほど、丸覚えできるようになるので良いわけだが、パラメータの数を大きくすればするほど性能が上がるのが分かったものだから、より大規模なものを作ろうということになっていった。ChatGPTを出しているOpenAIは、GPT-1、2、3、4と出している。1が1億パラメータ、2が15億パラメータ、3が1,750億パラメータ、4が2兆パラメータと言われている。ちなみに人間の脳は200兆パラメータ以上で、まだ人間のほうが上なのだが、それに近づく勢いでどんどん大きなモデルが作られている。

昨年11月30日にChatGPTが公開された。世界中で使われており、非常に高度な会話ができている。例えば、本の感想文を書いてと言えば、様々な形で感想文を書いてくれる。なぜかという、学習しているデータがインターネット上のデータと書籍だからだ。基本的に丸覚えしているから、感想文が書いてしまう。そして、なりきりの能力というのが非常に高い。相当なところまで、事前学習で学習しているということだ。また、プログラミング能力が非常に高く、今、プログラマーはChatGPTを手放せなくなっている。今までは検索エンジンで検索していたのだが、ChatGPTに聞いた方が早いのである。文章の添削、校正からアイデアの提案、何かになりきって答える、プログラムを生成する、様々なことができるのだ。

ChatGPTのような大規模言語モデルは、インターネット、トランジスタ、エンジン、電気などに匹敵する、数十年に一度の技術であり、社会に大きな影響を与えていると言われている。ある調査によると、米国の労働者の8割が今後何らかの影響を受ける。中でも19%の労働者は、半分以上のタスクで影響を受けると言われている。半分以上のタスクという、その職業が大きく変わることだ。それが高賃金の職業や参入障壁の高い業界程影響がある。例えば、証券、金融、保険、IT、出版などでは大きな影響があるのではないかとされている。他にも、生成AIは今後、主要な経済圏で3億人規模のフルタイム労働者の仕事に影響を与える。ChatGPTは能力の低い労働者の利益を負担し、労働者間の不平等が減少する。70%の人が自分の仕事量を減らすために、多くの仕事をAIに任せたいと考えているという調査結果もある。

このような技術が世の中を大きく変えていくというのはほぼ間違いないわけだが、日本の動きは非常に速い。新しいデジタルのテクノロジーに関してここまで速く反応できたことは、かつてなかったのではないと思うくらい非常に速い反応をしている。昨年11月30日にChatGPTが出たが、わずか2カ月後の2月3日には自民党にAIプロジェクトチームが立ち上がり、4月10日には岸田総理がOpenAIのCEO、サム・アルトマン氏と面会している。5月11日には私が座長を務めているAI戦略会議が立ち上がり、それから15日後にはAIに関する暫定的な論点整理が出ている。

AIに関する暫定的な論点整理は大きく3つあり、リスクへの対応、AIの利用、AI開発力だ。プライバシーの問題、セキュリティの問題、知的財産、著作権、これらに対して懸念を持っている方もたくさんいるので、しっかり対応していくというのが最初の項目だ。2つ目の項目がAIの利用だ。生成AIは間違いなく生産性が上がる。わが国は労働力が不足していて、それについてみんな困っているわけだが、うまくやれば様々な問題を解決していけるということで、国が先頭になって、様々な形で使っていこうとしている。3つ目がAI開発力である。開発をしていくに当たって、大きなモデルを学習させないといけないので、GPU、特殊なグラフィックの計算機が必要であるが、これが全然足りない。NVIDIAのGPUと呼ばれるチップを買うのだが、これが全世界で取り合いになっている。様々な国が何千億、何兆という単位で注文を出していて、さばききれていない。様々な推定があるが、日本のGPUをかき集めて1カ所にまとめたとしても、実はOpenAI1社が持っているGPUの10分の1以下である。そのため、とにかくGPUを増強しないとイケないのだが、GPUが世界中でひっ迫している。だから今、NVIDIAという会社の株価、時価総額が150兆を超えているのだ。GPUの会社が今や、GoogleやAmazonと並ぶくらいの超巨大企業になっている。したがって、これからが非常に大変でしっかりやらないといけない。

日本は今年G7の議長国なので、広島AIプロセスとして、生成AIに関しての議論を進めていこうと頑張っているが、今、ヨーロッパはかなり強いAIの規制案を出している。それに対して今度はアメリカが、逆にイノベーションを重視するということで、バイデン大統領がホワイトハウスに大手AI企業7社を呼んで自主規制を約束した。先日も大統領令が出ていたが、かなり包括的だ。例えば、AIの優秀な研究者、技術者を世界中から集めるためにビザの要件を緩和するとか、そういうことも含めて、相当包括的に力を入れている。規制をしようとしているヨーロッパと推進しているアメリカの間で、日本はバランスを取りながらどうやっていくのか。文部科学省から生成AIの利用に関する暫定的なガイドラインが今年の7月



4 日に出ている。これは生成 AI を使って良い場面、使わない方が良い場面を様々な形で提示している。例えば、生徒が十分に議論したあとに論点漏れをチェックするのに生成 AI を使うというのは良いだろう。ところが、問題をそのまま生成 AI に答えさせて、それを黒板に書くのは駄目だということだ。使って良い場面、悪い場面があるし、生成 AI がうそをつくハルシネーションも起こり得るので、事実確認をしつかりすることも必要だ。ちなみにニューヨークで、生成 AI、ChatGPT の使用を禁止するというものが今年の年始にあったのだが、この禁止は撤回されており、やはり、教育においては様々な効果もあるので、良い形で使っていこうという方針になっている。

教育に関してできそうなこととして、松尾研究室で試しに作っているものをご紹介したい。生成 AI では、生徒に合わせた教え方や問題の出し方ができるところが一番大きな価値なのではないかと思い、松尾研究室の学生が様々な形でやっている。例えば、微分の計算について PDF の資料をアップロードする。これをベースに講義の内容を作ってくださいと入れると、どんどんスクリプトを作ってくれる。これを読み上げれば良いという話ではないと思うが、資料から講義の準備をしやすくする。次はテストを作るツールだ。『微分に関するテスト問題を作成してください』とプロンプトを書くと、問題が自動で生成され、模範回答も作ってくれる。次に小論文の自動採点である。採点基準が 1 から 6 までであるときに、ChatGPT を使って自動的に採点することができる。ちなみに、熟練の採点官には劣るものの、東大生のバイトよりもできが良かったようだ。ほかにも、教科書や参考書の分からない箇所を LINE 上にスクリーンショットでアップロードすると、問題を作ってくれて、ヒントも出してくれるので、自分で勉強ができる。また、自主学習で英語の作文をしたときに、そこに文法的なアドバイスやフィードバックを自動的にしてくれる。これも全部 ChatGPT、大規模言語モデルを使っている。もちろん現場で使えるようにするには相当な工夫が必要だが、技術としては様々なことができそうだ。

少し人材育成の話に戻る。今、お話ししてきたように、AI の技術がすごいスピードで進んでいる。それから、スタートアップする学生が増えたり、日本全体でデジタル化技術が重要だと言われたりしているが、これらに共通する何か本質的なことがあるのではないかと数年前から思っている。それを 1 つの式で表すと、 $y(t)=ax(1+r)^t$  だ。これは何の式かということ、複利計算の式で、 $t$  年後の資産額は、元本を  $a$  として利率を  $r$  とすると、 $ax(1+r)^t$  となるという式である。では、 $t$  年後の自分の資産額を一番増やしたいと思ったとき、皆さんどうするかということ、 $r$  を大きくしようとする。つまり利回りの良い金融商品を買うなど、 $r$  を大きくすることを頑張るのだ。ところが今、世の中で起こっていることは、実は  $t$  を大きくすることなのではないかというのが私の仮説だ。 $t$  年後だから普通は大きくできない。ところが、今の時代、様々な要因で  $t$  を大きくすることができるようになってきた。1 つはデジタルなのだが、この  $t$  を大きくすると何が起きるかということ、例えば、年利 5% で 10 年間運用する。頑張って 5% を 10% に上げる。10% に上げると、10 年経てば約 2 倍になる。ところが、金利は 5% のままだったけど、5 倍速にする。 $t$  を 5 倍速にすると、実はすごく増えるのだ。複利が非常に効いているということである。複利というのは人類史上最大の発明だというように良く言われるが、ところが、複利の中でも高回転の、高速の複利の方がもっとすごいということなのだ。これが実は、今、世界中で起こっていることの一番重要なことなのではないかと考えている。なぜ高速回転させることができるのか、 $t$  を大きくできるのかということ、インターネット企業、販売から開発からお金を取るからというのが全部デジタルになっているので、非常に早い。今までの社会で言えば、社会全体が 1 年単位で動いていたものを高速にできる。例えば、Facebook の方に聞いた話では、彼が 15 年程前に本社に初めて行った時に驚いたのは、Facebook の外に公開しているものではなくて、会社の人だけが使える開発版の Facebook があって、そこにはバージョン 38 万と書いてあったというのである。今までの製品のアップデートは、年に 1 回や何年に 1 回程度だったが、38 万回改良している。インターネットなので AB テストをすぐにできて、良い方を採用することが高速にできているので、どんどん使いやすいものになっている。

GAF A の売り上げの推移を表したグラフは非常にきれいな指数曲線である。Apple だけ少し違うが、それ以外の 3 社は、あれだけ大きいにも関わらず、いまだに指数的な成長をしている。テスラの売り上げも指数的に伸びていて、今、トヨタよりも大きくなり、上位 8 社の合計よりも時価総額が高い。物を売っているにもかかわらず指数的なのだ。テスラがやっていることを見ると、ディーラーを持たないロコマーケティング、ワイヤレスアップデート、工場の自動化の推進だ。これが全部  $t$  を大きくするため、高速回転させるための方針だと考えるとすごい。ディーラーは、クリスマスに何を売ろうかなど、1 年単位でやる。だから、オンラインで売った方が良い。ロコマーケティングではなくて、テレビ CM をやると、テレビ業界は半年、1 年だから遅い。ワイヤレスでアップデートできないと、車を売る時にしかアップデートできない。工場の自動化も改良しやすいので、とにかく改良のサイクルを早くする、高速回転させている。結果、指数的な成長をしていて、あっという間に自動車メーカー 8 社の時価総額の合計よりも上がった。したがって、こ

れは、 $r$ を大きくするというゲームから、 $t$ を大きくするゲームに変わっているのだ。そのために、DXやAIで速くできることを速くした方が良いということであり、人がもっと速く動かないといけない。

$t$ を大きくするため、高速回転させるためにはどうすれば良いかという、慎重に検討して進めるより、まずやってみる。どうせ失敗するなら早く失敗した方が良い。これはリーンスタートアップの考え方である。仮説思考、仮説を持って検証して駄目なら駄目で良い。また、次の仮説でやる。良いアイデアを出すために多様性が大事だし、挑戦と失敗に寛容であることも大切だ。オープンマインド、コラボレーションも大事だし、フラットな組織も大事だ。これは、シリコンバレーに似ている。シリコンバレーは $t$ を最大化しようとしている文化なのだ。これは、複利の成長を最大化するために一番高速にやるにはどうしたら良いかと考えた結果、フランクな組織に行き着いたわけだ。

松尾研究室で、学校教育と今の $t$ を大きく速くすることがどう関係しているか調べてみた。人間の持つ能力はいろいろあるが、これと数学、国語、理科、社会、英語で学べることの相関を出した。例えば、仮説を作る力は、恐らくどの教科にも関係ない。そして、考えたことをすぐ実行する力もほとんど関係ない。よく考えなさいとは言うのだが、考えてすぐやりなさいとはあまり言わない。プレゼンテーション力といった人を惹きつける力もあまり関係がない。ビジョンを設定することも関係がない。ということで、今の学校教育と $t$ を大きくすることは実は関係がない。つまり、「 $t$ を大きくする教育」ができていないのだ。

さらに面白いのが、学校の各教科で学べる能力と様々な職業に必要な能力の相関を松尾研究室独自で調べたのだが、例えば、エンジニアは非常に相関が高い。学校の成績が優秀な人ほど良いエンジニアになる。医師もそうだ。学校の成績が良いと、良いお医者さんになるのだ。コンサルタントも官僚もそうだ。ところが、企業家は逆相関なのだ。学校の成績が悪い方が良い企業家になる。他、営業や研究者も無相関なのだ。よって、人を惹きつけて新しいことを早くやっていくという人材育成は、今の学校教育ではできていない。今後、こういう人を作っていけないといけない。 $r$ から $t$ うい追い求める時代が変わっているからこそ、そういう人をつくっていけないといけないのだ。

松尾研究室で私が思っている理想的な人材育成は、今の時代、社会に活躍している人のパターンはだいたい共通して3つの要素を持っている人だ。1つが仮説思考でPDCAの高速回転、高速ループを回せる人。とにかく考えてやってみる。実行力があって、結果からまた吸収して組み立て直すということが、すごいスピードでできる人だ。2つ目がデジタル、AI、Web、ITシステム、こういったものの全体がちゃんと理解している人だ。3つ目が、目的思考で未来を想像できる人だ。未来から逆算して今の行動を決められる。この3つの能力を持っている人が明らかに様々なところで活躍しまくっていると思っていて、松尾研究室はこういう人をとにかくたくさん作っていききたい。こういう人をたくさん作ることができれば、日本社会は必ず変わってくると考えている。

# 報 告

## 「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋

急速な少子化が進行している。「第1次ベビーブーム」と呼ばれる頃の出生数は269万6,638人で、この団塊の世代は現在74歳ぐらいである。2022年の出生数が77万759人で、団塊の世代と比較すると3分の1である。団塊の世代の方達が16歳になった時に高校への進学数が非常に増えたため、この次の「第2次ベビーブーム」の子ども達が高校に入る頃に、公立高校は一気に学校数を増やそうと計画し、東京でも学校数が増加した。



公立学校の役割は、高等学校に子ども達を1人でも多く入れることにより、国力になる「子どもの教育」を引き上げることだ。生徒数が減ってきた時に、これから先の公立学校と私立学校が、どのような比率で生徒を収容していくかを定めるために、「公私連絡協議会」を作ったことは国の方向性として素晴らしいことだった。つまりそれは、高等学校が義務教育化されるのと同じことを理解していたのではないかと思う。そのような中で、公立、私立それぞれの存続についてどう考えていくか、各自治体で真剣に考えなければいけない。一方で、定時制・通信制の高等学校の修業年限を3年以上にしたことで、これによって、通信制に通う生徒が一気に増え、新たな問題が生じた。通信制の中に本来の学校の目的と違う方向に進んでいる学校がある。通信制高校のあり方を見直すべきではないか。

公立学校と私立学校の大きな違いのひとつが、私立学校は、卒業して10年たっても20年たっても、母校に行けば先生がいることだ。公立学校は、卒業して5、6年経って学校に行っても、知っている先生が1人もいない。その特性などを考えた時に大事なことは、私立学校はそれぞれの学校が責任を持って運営し、その学校を残すことである。

ただ、経費が違う。公立学校は都道府県や国がほとんど経費を負担しており、生徒1人当たり130万円かかる県がある。さらに、教育委員会という組織はまた別予算であるにもかかわらず、私立学校は百万円もかかっていると言われる。理事会などの費用も全部含まれているので、一律に比較するのはおかしい。例えば、東京都内の私立中学校への進学者が50%に近い区では、区は私立に対して補助金を支出していないため、私立中学校への進学者の分だけ区が負担する教育経費が抑えられることになっている。さらに、他の区では、公立の小中学校なのに学校によっては私立学校受験向けの授業をやっている。

さて、人口推移と将来性という将来の推計を見ても、2020年から比較して2070年の推計は、どんどん人口が減っていく。そして、18歳人口は2023年が110万人。それが昨年生まれた子たちが18歳になる時には、79万人で、7割しかいなくなるのである。そして、OECD加盟国の生産年齢人口の推移予測を見ると、日本は2011年に63.3%。それが2030年には、このOECD加盟国の中で最低になる。生産年齢人口の減少に対処するためには、外国人に日本で働いてもらわなければならない時代だと思う。ただ、日本が今とっている技能実習制度では、3年経てば何があっても帰国しなければならないし、ビザも取れない。今後の日本を考えた時、真面目に取り組んできた技能実習生のような人達にしっかり日本国籍を取ってもらって、「外国人日本人」を作らなければいけない。ラグビーのナショナルチームが良い例である。彼らは日本に憧れて、日本の国籍を取ってまで日本人選手として参加している。学校にも2割か3割程外国籍の子がいるが、その子達は日本で生まれて育って、教育を受けている。

大学の生徒数の減少を食い止めようと、今、政府がやっていることは「大学の無償化」だ。大学を無償化して単に大学生を増やしても、日本の生産人口は増えない。中卒、高卒で働いている若者もたくさんいる。日本の生産年齢人口を増やすことを考えれば、やはり、「外国人日本人」を入れなくてはならない。ここで着目すべきは、先進国からの留学生の数だ。東京大学や慶應大学においても、留学生のうち、先進国の人達は2割もいない。先進国の人達は先進国同士で移動すれば、全部英語で授業を受けられるし、住んでいる国の言語も覚えられる。フランスやイタリア、ドイツも一流大学は8割方が英語の授業だ。しかし、日本で今、英語で単位が取れる大学がどのくらいあるだろうか。大学が変わらないのであれば、高校以下の学校で変えていかなければならない。一部の地域では、働き手として来ている東南アジアの人達の子どもが小学校に集中している。英語も日本語も話せない子達がたくさんいるが、環境に慣れてくれば日本語を話せるようになる。中高でも、そういった子ども達を受け入れてあげるようにしていかないと、生産人口は増えない。日本の魂を持った外国人、つまり、「外国人日本人」を確保していくためには、大学だけでは無理だろう。やはり、初等中等教育の段階からそのような教育を取り入れなければならない。

そのためには教育課程だって変えなければならない。日本に特例校は今、2,800校ある。教育課程を変えていく際、「柔軟に作り直せるシステムを準備しないと、日本は衰退する」と思うくらいに危機感を持っている。それとともに、我々私学も生徒数が減った分、留学生を集める覚悟をしなければいけない。その際、留学生の経費は、日本の将来を支えてくれる礎になることを考えると、10分の10の補助が受けられる仕組みになることが望ましいと考えている。OECDの中でも日本の教育支出は少なく、中等教育では、支出の3分の1ずつを国、県、市区町村で分担している。原資は地方交付税になるかもしれないが、この体制を考えた時に、10分の10の補助であることは少ない。ICT補助も都道府県は2分の1、我々私学は3分の1の負担だ。最近では、新型コロナウイルス感染症対策の補助金が初めて国から10分の10の補助を受けた。

今後、日本の子だけが対象の経費枠組みでは無理な時代がやってくる。そして逆に、我々の生徒教育をカバーしてくれるのは外国人だと思うぐらいの気持ちを抱いて頂きたい。それが真のグローバル化時代の日本だと思うし、少子高齢化の少子の部分をカバーして、逆に高齢化の人達を助けてくれるような仕事をしてくれる人達に、手厚く日本で迎えられるような環境を作っていかなければいけない。

学校数・生徒数については、高等学校もこの10年間近くの間で3、4%程増えてきている。そして、生徒比率という部分では、今も増えているのだ。これも就学支援金のおかげなのではないだろうか。しかし、総人口は減っていることから、生徒数は減ってきている。これについては危機感を持たないといけない。また、企業がDXを進めるにあたり、人材不足に課題を感じていると言われているが、果たして本当にIT人材を今の教育未来創造会議で言われているような考え方で作れるのだろうか。その前に、大学が本当に理工系人材を増やせるのかという疑問もある。

教員採用問題の解決策で一番簡単なのは教員免許状をなくすことだ。実際に企業で働いていて、子どもをきちんと育てたいと思った人達が戻ってこられるように、特別免許状は大幅に変わった。また、つい最近も、JETプログラムのALTが契約満了後にネイティブの教員として雇ってほしいという依頼が自治体国際化協会CLAIRから来るケースもあった。同様に、IT人材不足を補うには、そのような教養を身につけた人が適任だが、理工学部の学生が増えれば解決できるのだろうか。また、IT関係の人達は本当に理工学部出身だろうか。例えば、専門学校の人や好きが高じて携わっている文系出身者もいるだろう。基本知識の習得は必要であるが、何も理工学部に限らなくても良いのではないか。

平成4年に始まった学習指導要領ではAレベルやIBなどを真似して、ScienceやMathという大きな括りにしていこうという「文理融合」の話が出た。ところが、結局、「理数探究」という授業を取れるようなカリキュラムしか作れなかった。その原点は、教育系の大学教授が作ったものだ。教育系の大学ではこれから益々教員免許状を取る人が減るだろう。新たに理工系の大学を作るのは大変だから、例えば、全都道府県にある国立の教育系の大学をリベラライズの学校にしたらどうだろうか。理数系の教授もいて、そこにITを少し加えれば、女子学生も入りやすくなる。入試も現在の共通テストのような細かい科目ではなく、子ども達が理数系に興味を持ち、大学1年生で徹底的にその専攻に合ったものにする。そして、就職活動では現在のような制度をやめ、インターンシップで様々なところに出て行って、自分で就職を勝ち取ってあげればいいのではないだろうか。大学3年生までに単位を取り終わることも可能である。先程のよ

うな改革をせず、今のままの大学や高校の学習指導要領でいくと、日本は変わらない。高校以下は大学以上に危機感を持っているだろう。なぜなら、留学生を預かった時から学校の存続に影響するからである。我々私学は決して公立学校補完校ではない。日本人を作るための最高の教育を実践しているのが私立学校である。そのプライドを捨ててはならない。

次に私学助成についてこの10年間で、30%程度増額している。しかし、各都道府県においては、国の財源措置額を満たしていない県がある。このままだと公私間格差どころか、都道府県格差によって私私間格差まで出てくるだろう。

来年度の予算要望の概要として、生徒一人あたりの端末もGIGAスクール構想の補助金で賄えば良いと言われるが、私立学校は10分の10の補助ではないため、支払われないから、来年度の予算を1台あたり4万5,000円から5万5,000円に、そして3分の2まで補助率を増やしてもらおうということで、要望している。高校についてもICT補助をもっと増やしてほしいと言っているが、中々できていない。それから、校内ネットワーク。例えば、オンラインスピーキングのような動画で海外と一斉に通信を行うことができる学校はそれほど多くないと思う。

教育未来創造会議の第二次提言で書かれている理想も教育再生実行会議と同じように、絵に描いた餅になるのではないかと心配している。例えば、外国人材の受入制度も今の日本の英語教育や就職制度の下で適応できるのか不安だ。2033年までの目標として、日本人学生の海外派遣について、高校段階での研修旅行(3ヶ月未満)者数を4万3,000人から11万人にすると書いてあるが、航空運賃等諸経費の上昇が続く中、そのための経費はどこにあるのだろうか。日本の将来を担う子ども達にどのようにお金をかけるべきなのか、真剣な議論を重ねなければ、日本からの留学生は増えないだろう。

「高等学校教育の在り方ワーキンググループの中間まとめ」を読むと、今までの学校教育がコロナによって大きく変わったことがご理解頂けるだろう。オンライン化が進み、それによって今、不登校の生徒がどんどん増えている。不登校で困っている子達を支援する学校は必要だと思うが、オンラインが快適になってしまった子や、自分の好きなことだけをやっていることがベストだと思う子がどんどん増えてきたら、学校現場は本当に大変である。外国人と違った日本人の勤勉さは、やはり、本来、学校は通うものであるという感覚から作っていかねばならない。しかし、今はそのような時代ではない。だから、ある程度オンラインを認めようという話にもなっている。しかし、その前に国は新しい日本の教育制度の必要性をきちんと訴えてもらわないと困る。つまり、全日制の高校だって、何も絶対に通わなければならないというわけではない。それよりも、どのようなことを学ぶための学校であるか、習得させるものが何なのかが大切である。そこで学習指導要領のあり方をもう少し変えていかねば、対応できなくなってくる。そのためには、やはり、国が方向転換をはっきり表してほしい。

それから、「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」という諮問が出されたが、「今後の高等教育全体の適正な規模を視野に入れた地域における質の高い高等教育へのアクセス確保の在り方」について、大学の見直しをもう一度行い、合併や縮小について話していくとしている。少子高齢化の時代に、子どもの取り合いを強者の論理でやるのではなくて、それをカバーするための具体案をもっと真剣に考えるべきである。

生成AIの利用についても、現在、就職の自己紹介文に最も使われているようだ。就活生の7割程度が利用していて、内定率も生成AIを使った学生が一番高いらしい。このままだと全て人頼みの人達が世の中にどんどん増えることになる。

最後に、高等学校DX加速化推進事業「DXハイスクール」という予算が、令和5年度の補正予算案の中に100億円盛り込まれる。これは令和5年度の補正予算だが、実施は令和6年度である。内容は、大学教育段階でデジタル理数分野への学部転換の取り組みが進む中、その政策効果を最大限発揮するためにも、高校段階におけるデジタル等成長分野を支える人材育成の抜本的強化が必要で、大学できちんと取り組めるために高校を突き上げたいという願いの補助金である。事業内容としては、情報数学等の教育を重視するカリキュラムを実施するとともに、ICTを活用した文理横断的な探究的な学びを強化する学校などに対して、そのために必要な環境整備の経費を支援する。デジタルを活用した文理横断的な探究的な学びの実施や、生徒の興味関心を高めるデジタル課外活動の促進、高大接続の強化や多面的な高校入試の実施が例として挙げられる。100億円の内訳は1,000校程度ということで、1校1,000万円、それも10分の10の

比率である。そして、対象は公立と私立の高等学校だ（国立は除外）。この 1,000 万円は ICT 機器の整備に充てるとされていて、ハイスペックパソコン、それから 3D プリンター、動画画像生成ソフト、遠隔授業用を含む通信機器の整備や理数教育の設備で必要なもの、専門高校の高度な実習設備を作る等、専門の人材派遣の業務委託費もある。これは、今の SSH のように継続されるものではなく単年度予算であるので、是非、多くの学校に応募してほしい。ICT の充実によって学びの楽しさを教えることができると思う。

## 「教育政策と私学情勢について」

一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 平 方 邦 行

香川大会の研究目標は『持続可能な社会を実現する私学教育の創造』だった。その中で教育情勢と私学情勢についての一端をお話したい。

2020 年からの新型コロナウイルスによるパンデミックによって、学校は大変な苦労をした。しかも、パンデミック以前の生活には戻ることはもうできない。未知の局面を経験した生徒たちは、ポスト・コロナ時代の新しい学校生活をしている。コロナ禍でパソコンの導入が進んだ学校もあると思うが、現在は十分に活用できているだろうか。公立学校ではパソコンの持ち帰りを禁止している学校があると聞くが、パソコンがフルに活用できる環境でなければ果たして効果的に使用できるのだろうか。今後、日本の経済は大きなイノベーションを起こさない限り停滞から改善しない。2045 年にはシンギュラリティが起これと言われているが、シンギュラリティを深く理解し、AI の進化にともなって起こりうる現実の可能性を学校教育の中で考えていかなければいけない。



2007 年に改正された学校教育法の 51 条 1 項「義務教育として行われる普通教育の成果をさらに発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び、健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと」はどのくらい高等学校の授業で実践されているだろうか。これまで行われていたような授業のなかで豊かな創造性を持った若者を育てられることはできないだろう。クラブ活動や、修学旅行などの学校行事を含めた全ての学校教育のなかで創造性が磨かれるということはあっても、授業の中だけでは難しい。日本のさまざまな方面で活躍する創造性豊かな人に直接聞くと、授業で磨かれたものではないという人が多いだろう。レベルの高い人のなかには、意味がないからと学校を辞めてしまう人もいる。しかし、今回の新しい指導要領では、授業の中で創造性を身に付けさせようとしている。どのようにしていくのか、それぞれの学校や地域でぜひ研修を繰り返し、良い方法があれば、みんなに伝えていくことが必要だろう。

深い学びと教科については、興味関心をかきたてる授業の組み立てが重要である。課題探究といっているが、本当の意味での感性とか思いやり、好奇心や興味関心は、教師がテーマや課題を決めるのでは、創造性はなかなか育たないだろう。私立学校は、先進性、先見性、特に独自性を守る精神性を大切にしてきた。創造性は自由がないところには育たない。豊かな創造性を育むためには、多様性を受け入れる受容力、そして、寛容性も絶対に必要であり、それを授業の中にどう取り入れていくのかが授業力である。

そのために福岡で 6 月、新たなブランドビジョンを描くというテーマで私学経営研修会を開催した。参加者は 135 名。アンケート回答をした中で、新時代への教育、経営への対応に興味を示したのが 67.7%、他校の参考事例、課題と収集も同様に 67.7%だった。学習指導要領の改訂によって改良しなければならないということが、この数字に現れているのだろう。他にも、参加者と情報交換をしたいという回答が 50%を超えた。吉田理事長の講演や株式会社安川電機の津田氏の基調講演もあったが、特に福岡県の学習支援への取り組みは大変興味深いものだった。全く同じではないが神奈川県と京都府も行っていて、成果を上げているようである。

6 月 23、24 日には、東京都豊島区で教育課程部会の研修会があった。午前中は聖心女子大学現代教養学部教育学科の益川教授による「協働的な学びと ICT 活用による創造性を育む探究活動に向けて」とい

うテーマで講演が、午後は同志社女子大学の上田名誉教授のワークショップがあった。明日、教育課程部会でも上田先生が講師として登壇される。

8月4日には「ウェルビーイングを実現させるために」というテーマで法人管理事務運営部会を開催し、多くの参加者が集まった。働き方改革を含めて、今とても関心の高いテーマなのだろう。ウェルビーイングは、WHOが1945年に提唱し広まるように見えたが、結局世界には受け入れられなかった。メンタル（精神的な健康）、フィジカル（肉体的な健康）、ソーシャル（社会的な健康）の3つを提唱したが、宗教が入っていないという批判があった。世界には多くの宗教がある。どれを指すのかは難しい問題だ。しかし不登校、自殺が増えている今、ウェルビーイングは必要ではないだろうか。学校だけではなく、企業のホームページからも見て取れる。ウェルビーイングの要素に宗教を入れる言葉として、スピリチュアルが使われるようになった。これを上手く日本語訳し、ゴールデンルール（黄金律）と言い換えて、この4つが大切だと言えるのではないか。2021年にできたジュネーブ憲章が広がりつつある。ウェルビーイングに関しては慶応義塾大学院の前野先生が基調講演をされた。

イノベーション教育研究部会では東京大学大学院の吉田墨先生、神田外語大学の高橋一也先生兩名を講師として招き、募集を上回る参加者があった。1日目の懇親会では、情報交換がたくさんできてよかったという感想があったAIをどう学校に導入するか、興味を持っている方が多いだろう。

生成AIは本当に進んでいる。生成AIが出現する前の2018年の群馬大学教育学部推薦入試では、東山魁夷の作品『道』から感じたこと、考えたこと、読み取ったことを踏まえて、自分の道をテーマに論述せよという問題が出た。同じ年の日本医科大学でも、東山魁夷の『道』から、思うところを600字以内で述べよという問題が出た。受験生がこの絵を見た時、誰の絵でどういう思いで描かれたかを知っているのと知らないのでは、回答がまったく違う。知っているということはそれなりの教養があるということである。

この絵は東山魁夷の『道』だと明かしてChatGPTに回答を書いてもらった。「東山魁夷の『道』は単純だが象徴的な意味を持つ作品です。静謐な雰囲気と直線的な道は、人生を歩む私たちの姿を投影させます。人生の道とは何か。人生のなかでの役割や意味を見つけることでしょうか。人生には多くの岐路があります。どの道を選ぶか、どの方向へ進むかは自分次第です。選ぶ道がどれだけ長く険しくしても、その先には確かな光があると信じることが大切だと思います。」という回答だった。続けて、「東山魁夷の『道』は、独特な色彩とデザインで多くの人々の心に深く響く作品である。ただの道を描いたものではなく、人生の旅路や心の道程を象徴しているといえる。画像から感じられるのは、先の見えない道のりとそれを取り巻く深い緑と青い空。それは人生の不確実性や未来や、未来への期待を表現しているように思える。先に何が待っているかわからない道を選ぶ私たちの姿を東山魁夷はどのように感じていたのだろうか。東山魁夷の作品には、常に自然や宇宙とその人との関わりをテーマにした哲学的な考えがある。『道』でも、自分を感じ、存在意義や価値を追求する。自分自身の内なる道を探求することが大切だと伝えている。自分自身の内なる景色や心の動きに目を向け、自分の価値や存在意義を見つけ出すことが、真の意味での私の道の探究と言えるのではないかと出力した。

この絵をモエレ沼公園の一部を撮影した写真と比べてみよう。イサム・ノグチが設計した公園で、ノグチは札幌市のゴミ捨て場だった189ヘクタールの土地を彫刻作品にしたのだ。東山魁夷の『道』にもモエレ沼公園にも道がある。実は、東山魁夷の絵の道はまっすぐではなく、上のほうで曲がっている。造形的なセンスで立体的に見えるようにしたとか、まっすぐには行かない人生を表しているなど、考えさせられる。モエレ沼公園の写真は単純に切り取った風景なので、道はただまっすぐだ。この2枚の画像を比較して私の道をテーマに300字で論述しなさいとChatGPTに質問した。

「東山魁夷の『道』は単純に見えるが象徴的な意味を持つ作品で、静謐な雰囲気と無限に続くような直線的な道は、人生を進む私たちの姿を投影しています。私の道とは何か。人生のなかでの役割や意味を見つけることでしょうか。人生には多くの岐路があります。どの道を選ぶか、どの方向へ進むかは自分次第です。選ぶ道がどれだけ長く険しくても、その先には確かな光があると信じることが大切だと思います。モエレ沼公園の写真については、整然と並んだ木々に囲まれたコンクリートの道が中央の塔へ続いている様子が捉えられた画像です。人生において目的や目標に向かって進むことの大切さと、そのための明確な計画や組織、規律を表しているようです。これらの画像を通して、私の道というテーマについて、私は次のように考えます。人生において、私たちは多くの選択を迫られます。穏やかな道のりであったり、明確な

目的を持って進む道であったりします。どの道を選んでも未知のものが待っています。それに挑戦し、自分自身を成長させることが人生の神髄であると思います。どれを選んだとしても、その道を自分の舞台として進んでいくことの大切さをそれぞれの画像は教えてくれるのではないのでしょうか」と回答した。

Bing チャットでも簡単に聞いてみた。「この絵画から何を感じますか？」に対しては「作者が誰かは明かされていません。青と緑を基調とした柔らかい色合いで描かれた道が、地平線に向かって続いている風景画です。道は、両側に緑の草が生えた丘や堤防に囲まれています。空は地平線に向かってグラデーション効果がかかった淡い青色です。右下には赤い落款があり、作者の署名が入っています。私はその絵画を見て、落ち着きと静けさを感じます」。

「この絵画から何を連想しますか」とさらに聞いてみた。「この絵画は平和で静かな風景と関連していると思います」と答えた。「もう少し具体的に記述してください」というと「青と緑を基調とした柔らかい印象派のスタイルで書かれた風景画です。画面中央には、地平線に向かって続く土の道が描かれています。道は両側に草の葉が書き込まれています。右下隅には赤い印があり、作者の署名が入っています」という答えであった。

今、生成 AI を無視して、学校や企業で使わないわけにはいかない時代である。もっと進化していこう。その時に教師の役割は何か、支援するとはどういうことなのかを考えなくてはいけない。生成 AI を使える、あるいは活かしていける教師とできない教師の差が生じるだけでなく、生成 AI だけに頼る教師が出てきて、これだけやっていたら授業ができるというかもしれない。そのような未来に人間の学問に対する、あるいは知識に対する考え方はどうなっていこう。生成 AI の利用だけで成り立つ教育が蔓延する可能性もある。それは気をつけなければいけないのではないか。教師自身も人間としてより深いところまで鍛えていかなければならないのではないだろうか。今年最も話題になったのは生成 AI だったので、日ごろから考えていただくように重点的に触れた。



# 香川県私立学校活動紹介

## 「少林寺拳法演武」

### 坂出第一高等学校少林寺拳法部

少林寺拳法は1947年（昭和22年）、香川県多度津町において、宗道臣が創始した教え・技法・教育システムによって、自信と勇気と行動力、そして、慈悲心を持った社会で役立つ人を育てる人づくりの武道です。

一人ひとりがまず頼りにできる自分を確立し、人間同士が助け合い、共に幸せに生きるための道を問っています。現在、少林寺拳法は世界41カ国

に普及し、総人数は180万人を超え、日本国内では、スポーツ少年団、中学校から高校での部活動を経て、大学や全日本実業団、全国教職員連盟、自衛隊、警察支部等で増えています。

本日は坂出第一高校少林寺拳法部員が普段の修練で行っている一部を披露させていただきます。

(坂出第一高等学校少林寺拳法部)



## 「和太鼓演奏」

### 尽誠学園高等学校和太鼓部



本校和太鼓部は、1999年創部以来、福祉施設や地域のお祭りのボランティア演奏を中心に活動しております。近年では、日本太鼓財団 日本太鼓協議会が主催する各大会に出場したり、幅広く活動しております。今年の夏には「全国高等学校総合文化祭」郷土芸能部門で香川県代表として、鹿児島県奄美大島で演奏させていただきました。

本日は短い時間ではございますが、和太鼓の音をお楽しみ頂ければ幸いです。

それでは、どうぞお聴き下さい。

(尽誠学園高等学校和太鼓部)

# 私学経営部会

国際連合及び我が国は2030年にSDGs達成を目指しているが、その達成には程遠いと感じる。持続可能な社会の実現は本当に可能なのだろうか。次の世代、さらにその次の世代がその実現に向けて真剣に考えるような教育環境を、我々の世代が作ることが急務である。そのために、今、我々にできることは、未来に向けて私学の叡智を集め、新しい教育により創造性豊かな若者を育てていくことである。

当部会では、建学の精神を根幹にした教育実践によって、未来に向けて豊かな地球を再生していくためにこれからの私学経営について考察していきたい。

- 1 研究目標 持続可能な社会への私学の指針～子供たちの豊かな未来を築くために～
- 2 会場 JR ホテルクレメント高松 3階「飛天（西）」
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務局長、事務長またはこれらに準ずる管理職
- 4 参加人員 137名
- 5 日程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15	45					30	
11月10日 (金)	開 会 式	講演 I	講演 II	昼 食		パネル・ ディスカッション		閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受付 (永易永吏子／林 由加理)	機材担当：渡部 直子 記録(写真)担当：林 由加理 集録担当：中澤 潤二
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：井口 真弓／記録：中澤 潤二 私学経営部会運営委員長 光 田 大 介
9:15	講 演 I 演 題 「猪熊弦一郎の画業 素直な、虚飾のない姿で」 講 師 古 野 華奈子 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館学芸課 上席学芸員	司会：井口 真弓／記録：中澤 潤二 講演及び講師紹介：平方 邦行
10:45	講 演 II 演 題 「地域社会に求められる役割を果たす」 講 師 眞 鍋 有紀子 富士建設株式会社 代表取締役	司会：井口 真弓／記録：中澤 潤二 講師紹介：永易永吏子
12:00	昼 食	
13:00		

13:00	パネル・ディスカッション テーマ 「持続可能な社会への私学の指針 ～子供たちの豊かな未来を築くために～」 パネリスト 広 石 英 記 (東京都) 東京電機大学 副学長 香 川 泰 造 (香川県) 高松中央高等学校 校長 菅 沼 宏比古 (長崎県) 学校法人西海学園 理事長 コーディネーター 長 塚 篤 夫 (東京都) 順天中学高等学校 校長	司会：井口 真弓／記録：中澤 潤二
15:30	閉 会 式 1. 開式の辞 2. 総 括 3. 専門委員長挨拶 4. 閉会の辞	司会：井口 真弓／記録：中澤 潤二 私学経営部会運営委員長 光 田 大 介 私学経営専門委員長 長 塚 篤 夫
16:00	解 散	

7 講師・パネリスト・コーディネーター (順不同)

古 野 華奈子	丸 亀 市 猪 熊 弦 一 郎	現 代 美 術 館 学 芸 課	上 席 学 芸 員
眞 鍋 有 紀 子	富 士 建 設 株 式 会 社		代 表 取 締 役
広 石 英 記	東 京 電 機 大 学		副 学 長
香 川 泰 造	高 松 中 央 高 等 学 校		校 長
菅 沼 宏 比 古	学 校 法 人 西 海 学 園		理 事 長
長 塚 篤 夫	順 天 中 学 高 等 学 校		校 長

8 運営委員・指導員 (順不同)

委員長 光 田 大 介	香 川 誠 陵 中 学 高 等 学 校	校 長
副委員長 井 口 真 弓	香 川 県 藤 井 中 学 高 等 学 校	教 頭
委員 永 易 永 吏 子	香 川 県 藤 井 中 学 高 等 学 校	教 頭
中 澤 潤 二	香 川 県 藤 井 中 学 高 等 学 校	教 諭
渡 部 直 子	香 川 誠 陵 中 学 高 等 学 校	教 諭
林 由 加 理	香 川 誠 陵 中 学 高 等 学 校	教 諭

9 専門委員・指導員 (順不同)

委員長 長 塚 篤 夫	順 天 中 学 高 等 学 校	校 長
副委員長 鈴 木 康 之	水 戸 女 子 高 等 学 校	理 事 長 ・ 校 長
委員 山 本 与 志 春	学 校 法 人 青 山 学 院	院 長
梅 村 光 久	学 校 法 人 三 重 高 等 学 校	理 事 長
摺 河 祐 彦	姫 路 女 学 院 中 学 高 等 学 校	理 事 長 ・ 校 長
大 多 和 聡 宏	学 校 法 人 大 多 和 学 園	理 事 長
菅 沼 宏 比 古	学 校 法 人 西 海 学 園	理 事 長

私学経営部会 講演 I

## 「猪熊弦一郎の画業 素直な、虚飾のない姿で」

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 上席学芸員

古野 華奈子

丸亀市にある猪熊弦一郎現代美術館は、MIMOCA（ミモカ）という愛称で親しまれている。このMIMOCAは、丸亀市の市政90周年を記念し、1991年に開館した美術館で、今年で31周年を迎える。美術館の開館当時、猪熊は88歳だった。彼の絵は子どもが描いたような絵だとよく言われるが、88歳の画家は、そのような絵を大真面目に描き、画家として精進していた。猪熊は、画風が変化し続けるといった、クリエイティブシンキングが備わった画家だったが、クリエイティブシンキングはそもそも彼の目的ではなく、画風が変化していくことも、そのこと自体が目的ではなかったのだ。画風が変化した理由や画風の変遷について、猪熊の画業を知ること、様々な手がかりやヒントをつかんでもらいたいと思っている。そのためには、まず猪熊の全体像を知ってもらいたいと思う。



MIMOCAに来る子どもたちに猪熊弦一郎を紹介するための、絵本『いのくまさん』を2006年に発行した。これは、詩人の谷川俊太郎氏に猪熊の紹介文をお願いしたもので、この絵本に猪熊のすべてが含まれている。子どものころから絵が好きで、人の顔、鳥、猫、形、色等、好きなものや面白い絵を多く描いた人だということを、谷川氏が200字ほどの少ない言葉で言い表してくれた。そして、この絵本を見ただけでも、様々な絵が描かれていたことや、画業の変化がわかる。

猪熊は、1902年（明治35年）に香川県高松市に生まれた。地元の香川県立丸亀中学校、現在の丸亀高等学校を卒業したあと上京し、東京美術学校、現在の東京藝大の西洋画科に入学し、画家の藤島武二に師事した。学生時代に帝展に初入選し、その後も帝展を舞台に活動を続けるが、30代半ばに帝展を飛び出し、同級生や仲間らと新制作派協会を設立した。その後はパリに2年間滞在し、アンリ・マティスの指導を受け、日本に戻ってきてからは、猪熊の代表作でもある、三越の包装紙『華ひらく』を1950年にデザインしている。そして、その翌年の1951年にJR東日本上野駅の壁画『自由』を制作した。その後、50歳を過ぎて渡米し、ニューヨークで20年間、画業を続ける。そこで体を壊した猪熊は、厳しい気候のニューヨークでの活動が困難になり、アトリエを閉じて日本に帰ってきた。その後は、日本と暖かいハワイを行き来しながら制作を続ける。晩年には丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が開館したが、その1年半ほどあとに亡くなった。

猪熊の絵は、活動場所が、香川、東京、パリ、東京、ニューヨーク、ハワイと東京、と移動するごとに変化を続けた。およそ50歳までが猪熊の具象表現の時代、それ以降は抽象表現の時代と言えるだろう。

具象表現とは、具体的なものの形、本や椅子、猫などが描かれているものである。猪熊は戦後、猫と奥様の絵を多く描いていた。『猫と食卓』という絵を見るだけでも、絵に変化があることがわかると思う。最初は、鏡で見たものを写したような写実的な絵だったが、徐々に、いわゆるヨーロッパの遠近法のようなものはすべて無視して、好きなように描いていた。実際は写真のような絵も描けるのだが、自分の表現として、面白い絵にしてやろう、自分の絵にしてやろう、と思いながら描いているのである。したがって、形や色は自分の好きにしようと、『妻と赤い服』という絵では背景も1色で塗られており、どこまでが床でどこからが壁かもわからない。このころには、色と形で絵を作り、そのバランスで、誰もこれまで描いたことがないような美しい絵を描きたいと思っていた。猪熊本人は自分にしか描けない絵を描きたいという考えがあったのだが、絵を見る人は、可愛い猫の絵だ、綺麗な女の人の絵だ、と見ていた。しかし、本人は、自分のなかの究極の色と形のバランスで、別の場所には置けない、別の大きさにも出来ない、そこまで考え抜いた絵を描いているため、少しジレンマがあった。そこで、絵のなかから意味をなくしてしまいたいと考えていたが、ものや人を描かないのであれば、何を描けばいいのかと悩み、なかなか抽象表現に移行出来なかった。

ところが、50歳を過ぎてニューヨークに行ったことで、環境の変化から抽象表現に大きく変わった。抽象表現は、パッと見て何が描かれているかわからないと言われがちだが、絵本『いのくまさん』にあったように、色と形を描いているのだ。その後、ハワイで活動を始めると、また絵の雰囲気が変わったのである。そして、なんとも言えない形で、具象も抽象もなく、自分が描きたいものを描きたいように描いていたのが、最晩年の画風である。

すべての絵を並べると、同じ人の絵だと思えないのだが、『妻と赤い服』と『緑の中の美しき顔』を並べたとき、共通点に気がついた。猪熊は、異なる形の厳密なる均衡のなかに美しさがあり、統合の美が生まれると、1937年、34、5歳のときに言っている。様々な形が厳密に何か決まった場所に置かれ、それぞれに均衡を保つ、そこに美しさが生まれるということに30代で気がついており、そのような絵を描きたいと考えていたのである。具象であっても、抽象であっても、そう考えながら描いていたので、四角や丸といった幾何学形のなかに、なんとも言えない不定形の形が混じり合いながら、それぞれに均衡を保って美しく置かれているのである。したがって、実際は反発し合うものもあり、別の場所に置くことと決して共存出来ないものがあるかもしれないが、それを上手く置くことで、1つの絵として、1つの環境として美しいまとまりが出来るのだということ、70年の画業のあいだ猪熊は追求していた。

猪熊は、幼少期から、とにかく絵が好きだったと繰り返し述べている。その幼少期に1番好きだったものは美しいもので、形の美しさについて、幼少期から興味があった。たとえば、走る馬を美しいと思い、しばらく見ていると、形の美しい馬ほど早く駆けることがわかったそうだ。つまり、機能美と創造美は一致するというのを、子どもながらにして学んだと言っていた。また、お友達のバイオリンがとてがかっこいいと思い、借りて一生懸命練習したそうである。それを父親が見て、マンドリンを買ってくれたそうだが、マンドリンの形は猪熊の好みではなく、バイオリンのあの形が好きだから、マンドリンはどうしても受け入れられなかったという、とりわけ形にこだわる性質を、幼少期から持っていた。このように、形がわかるということは、ものの形をよく見ていたということだろう。つまり、目で見るという能力が幼いころから長けており、形を見るからこそ、好きなものと嫌いなものがはっきりしているのではないだろうか。

ほかにも、環境のなかで大きな影響を受けたのが、いとこの存在である。猪熊が幼いころ、すでに東京美術学校の彫刻科に在籍している、いとこがいた。その彼が、帰省のたびに東京で描いたスケッチブックを見せてくれて、それにとて憧れたと話していた。また、育った環境も彼に作用している。猪熊は香川県出身で、幼少期は香川県から出ることはなかったが、転校は多かったそうだ。特に、小学6年生の時の教員はとて変わった指導をする方で、ほかの児童たちが勉強をしているときでも、猪熊は絵を描いていなさいと言われていたそうである。そして、猪熊が描いたものは、誰もが見えるところにすべて掲示してくれたそうで、その先生にはとて感謝していた。中学校1年生のときに母親が亡くなった。転校や引越しをするなか、母親が病気で家を離れた際、親戚の家に預けられた時期もあったようだが、母親が亡くなったあとは、父1人子1人の2人の生活が始まった。父親はとて優しい人で、1度も怒られた記憶はなく、中学校を卒業する前に画家になろうと決めたときも、父親は全く反対せず、美術学校の入学資格書等を調べてくれたそうだ。そうして東京に行き、東京美術学校の西洋画科に入学する。上京した年は、試験の時間を間違えて1年浪人したが、次の年には入学し、藤島武二に師事する。入学時、学長の黒田清輝が、約40人の新入生に、このなかで芸術家になれるのは1人いるかどうかだと語ったそうだが、この年は小磯良平、岡田健三、中西利雄、山口長男といった、のちに名を残す画家が何人も出た稀有な年だった。つまり、学生時代からいいライバルに恵まれるという、またこれも、いい環境だったのである。ところが、意気揚々と通い出したにもかかわらず、夏休みの帰省中に病気に罹り、1年間の休学を余儀なくされた。その休学中に行った、丸亀の本島にいた松葉杖の少年に自分を重ねた絵『少年』を描いたのが、19歳のとき。この学生時代に師事していた藤島武二氏の指導はとて変わっており、学生が木炭デッサンをしているところに週に2度ほど来て、ふらっと部屋に入り、1人ずつ絵を見ていくが、お前はデッサンがないと全員に言って出て行ったそうである。いつも同じ状況だったため、猪熊の同級生で反発した人もいるようだが、猪熊は違った。猪熊は素直に、どういう意味だろうと考えたのだ。とにかく考えて、先生の言うデッサンがないというのは、ものを見た通り正確に描く

ということではないのだと、今、描いているものを理解して、その理解したことを表現しているかどうか、そこが問われているのではないかと解釈したのである。本当に藤島がどう思っていたかはわからないが、猪熊はそれを前向きに肯定的に捉え、自分がどうするかを考えた。そのような切磋琢磨のなかで、ついに猪熊も帝展に初入選することが出来た。『婦人像』が初入選し、これが画壇デビューの作品となった。モデルになった女性は、のちに猪熊の奥様になる片岡文子さんである。その後、猪熊は東京美術学校を退学し卒業はしなかったが、帝展に出品を続けており、毎年入選し、ときには特選に選ばれていた。初特選を獲った絵も、やはり奥様を描いている。このころは、ものをきちんと見て、いかにものを理解して表すかという描き方をしている。

それから少し経った 1935 年ころから、少し変化が見られる。この時代は軍国主義が進み、文化や芸術にも影響が及んだ。そして、猪熊が出品していた帝展にも、政府の統制が入り、若い画家たちは、表現とはそれでいいのかと思ひ、悩んで、反発して、帝展、官展を飛び出した。その年に描いた『海と女』は、初めて外に人を配置して描いた、広がりを見せる絵で、この絵の端にいるのも奥様である。さらにその翌年の 1936 年に、新制作派協会を仲間と設立する。小磯良平や中西利雄という、猪熊の同級生や、ほかにも佐藤敬や脇田和といった、今も著名な画家である彼らと共に、とにかく純粋に芸術を追求したいと、新制作派協会を立ち上げた。その直後、猪熊はパリに渡る。

当時、画家になる人たちは裕福な家庭の人が多かったのだが、猪熊は一般家庭のため、渡航費が簡単に用意出来るわけではなく、同級生より 10 年ほど遅れてパリに行った。パリでは美術館や画廊等に通い、多くの絵を見て、自分も様々な描き方で絵を描いていた。『サクランボ』という絵は、以前とは一気に雰囲気が変わり、色使いや形も、見た通りには描いていない。自分が描きたいように描いている。このように活動しながら、アンリ・マティスに出会い、マティスに絵を見てもらったのだ。そこでマティスは、お前の絵は上手すぎると言ったそうである。お前の絵は上手すぎるとするのは、決して褒められたわけではなく、自分の絵になっていないと言われたのだと、猪熊は素直に解釈した。上手く描くということは、人によく見てもらいたいと思うために描くということに通じており、技術の巧拙、上手い下手は自然なもので、思ったことを素直な、虚飾のない姿でキャンバスにぶつけることこそ最も大切だと理解した猪熊は、急所をひと突きされたようだったと話している。この言葉は一生を通じ、すべてに対して最も大きな教訓となったそうで、このマティスの教えを猪熊は一生涯頭において絵を描いた。

また猪熊は、自分にしか描けない新しい美を描きたいと述べている。1 人しかいない自分は、ほかの誰とも違うのだから、自分自身が表現出来れば、それは新しいものだということである。素直な、虚飾のない姿をキャンバスにぶつけ、それを一生続けたことから、画風の変化が生まれてきたのだと思う。これが、猪熊のクリエイティブシンキングではないか。第二次世界大戦が始まったことでパリでの滞在が危険になり、最後の帰国船で日本に戻る。その帰国船が出る直前まで描いて仕上げた作品が『マドモアゼル M』である。これは、マティスの言葉を真摯に受け止め、モデルのマグダさんを、とにかく自分なりに理解して描いた作品だ。この作品で自分の具象表現に得心がいったという猪熊の具象時代の代表作と言われている作品である。その後、戦後の東京では、『妻と赤い服』と同様に明るい色でモチーフを捉えながら、見た通りではなく、自分が美しいと思う絵を描き、大きくて派手な色の色面をバランスよく配置しながら、大好きな妻と大好きな猫を描いた。このように描き始めた当初は、マティスにそっくりだと揶揄されたし、実際マティスの影響をとっても受けていた。マティス研究に熱心で、おそらくこの時代で、マティスのことを最も理解していたのは猪熊だと私は思う。猪熊は、なぜマティスは美しい絵が描けるのかということを考えながら、自分だったらどのように描くだろうかと考えていた。すると 3 年後には、また絵が変わったのだ。形と色のバランスで猫と人を描いているが、今までとはまた異なる描き方で、ピカソのキュビズムのようにも感じる。だが、ピカソの技術を真似たのではなく、自分が描こうと思うことを表現するのに、試行錯誤して出来た絵なのだ。ものの意味をなくして形を純粋にし、抽象絵画を描きたいけれども上手くいけないというジレンマもあった一方、猫と人を、そのときの猪熊なりに精一杯表現した絵である。

そして戦後、最も有名な作品が、三越の包装紙『華ひらく』だ。『華ひらく』は、終戦から 5 年後の 1950

年に、三越がクリスマス用の包装紙を作製するために、宣伝部所属の、やなせたかし氏が猪熊に依頼したことで作られたデザインだ。バラバラの型紙を、バランスを見ながら、どのように配置すれば美しいかを考え、さらに、どのような形や大きさのものを包んでも美しく見えるよう工夫されている。デザインの元になったのは、千葉の犬吠埼を散策中に見つけた、波に揉まれた石だった。その美しい石をモチーフにして、この包装紙はデザインされた。とても好評だったため、翌年からは1年を通して『華ひらく』が使用され、現在でも使用されている。また、JR 東日本上野駅の中央改札の上にある、大きな壁画『自由』も、戦後すぐの1951年に描かれたものである。戦後の上野駅は、戦争から帰ってきてても家がない人や、家のない子どもたちがたむろする荒んだ怖い場所だった。その一方で、東北の玄関口としても利用されており、人が集まる場所だが環境が良くないという状況を見た広告代理店の若者が、ここに何か美しい芸術作品を置くのはどうかと考え、3年がかりで国鉄を口説き、満を持して猪熊に依頼したそうだ。この壁画も、修復を重ね、今もなお残されている。

戦後の猪熊は、このような人の生活に美しいものを届ける仕事に、画家の使命として積極的に取り組んだ。それにはやはり、第二次世界大戦の影響があるのだと思う。猪熊も従軍画家として戦地に赴き、戦争画を描いて国に提出している。その絵は、現在も東京国立近代美術館に残っているが、そういったプロパガンダの経験を持っているからこそ、画家として人々に届けられるものは美しいものではないか、そしてアートと生活は不可分のものであるという考えのなかで、積極的にこういった取り組みを続けていた。

また、香川県庁にも猪熊の壁画がある。猪熊は、当時の香川県知事である金子正則に、素晴らしい若い建築家として丹下健三を推薦した。それが現在では重要文化財として、世界から注目される建築物として残っているのだ。しかし、壁画というものは建物と運命を共にするものである。東京会館の猪熊のモザイク壁画は、建て替えの際、1度コンクリートからモザイクをはがし、バラバラにして洗浄したのち、同じ場所に付け替えたものを、今は額装して当時の記録として、新たな建物のなかに設置されている。猪熊がその空間に合わせて考え設置した場所ではないが、現存している壁画の1つである。特に猪熊は、建築家と共に、その空間に合うものを設計段階から考えることに戦後から長く取り組んでおり、単に出来上がったものを置くのでは意味がないと考えていた。空間を考えなければいけないということを、非常に強く唱えていた。

猪熊は、戦後10年が経った1955年には、上野駅の壁画や、三越百貨店の包装紙以外でも、表紙絵や絵画により日本では第一線で活躍していた。しかし、もう1度パリで勉強し直したいと思い、それならば世界一周旅行をしながらパリへ向かおうと、アメリカ回りで出発した。最初は、アメリカ西海岸に渡った。ロサンゼルスからニューヨークに行くため、偶然出会った初対面の人の車に乗せてもらい、何日かアリゾナ砂漠を車で移動した。見渡す限り地平線しか見えなかったところから、ニューヨークに着き、縦にのびる高層ビル群に驚いた。美術の中心もヨーロッパからアメリカに移ってきていた。ニューヨークが持つ何か底知れないエネルギーが猪熊を捕らえ、パリ行きを止め、ニューヨークでアトリエを探して、そのまま20年間ニューヨークに住んだのである。ニューヨークに行った最初の年に、すぐにギャラリーがついて翌年初の個展を開いた。その時に出したのが『埴輪』である。まだ少し具象を引きずっているが、日本にいたときとは少し絵が変わっている。それが10年ほど経つと、全く違う絵になった。猪熊はニューヨークで過ごし、人が行き交う様子や、建物が建築され解体される様子を見て、混乱と秩序という言葉に連想した。混乱しているように見えても、実はそこに、何かオリジナルの秩序のようなものがある。たとえば、自分の部屋は、綺麗に保たれているほうがいい人もいれば、適度にものが散らばっているほうが落ち着く人もいる。そのような混乱と秩序、その人なりのバランスがあるということが、面白く美しいという考えに至った。また、都市というテーマでも、都市をそのまま描くのではなく、そのような考え方を絵にすることで、自身の抽象表現を開花させたのである。

猪熊は、ニューヨークに渡ってから14年ぶりに日本に帰国した際、『驚く可き風景』を描いている。色数は少なく、直線を多用した都会的でシックな絵である。また、『Landscape』というタイトルの絵は、何層にも重ねる水平線によって、風景が抽象的に描かれている。1973年、猪熊は、ニューヨークから日本に一時帰国しているときに倒れ、ニューヨークに戻れなくなった。しばらく日本で療養していたが、ニューヨークで今後活動を続けていくのは厳しいと考え、アトリエを閉じて東京に戻ってくる。それからは体のことを考え、

冬は暖かいハワイで過ごし、東京とハワイを、半年ずつ往復しながら活動を続けた。

このように環境が変わったことで、また絵ががらりと変わった。ニューヨークでは直線が多用され、シャープで都会的な描き方だったが、ハワイは自然豊かで、陽光が明るい土地柄のためか、色が明るくなり、多くの色を使うようになった。ハワイの夜空に見える多くの星や、世界初のスペースシャトルの打ち上げ、スターウォーズの映画公開等があり、彼は宇宙に興味を持ち、表現が変わってきた。それからは様々な形を自由に表現するようになるが、自由に描きながらも厳密な均衡を保っていた。若いときよりも、このような表現が出来るようになってきた。80歳になると、昔のようにあれこれ考えず、自分の体から、ずっと出てくるような、そういう境地のようなものを得たようである。

その後にもまた絵が変わっている。この変化のきっかけは、何度もモデルを務めた妻の文子さんが先に亡くなったことだった。猪熊には子どもはおらず、とにかく夫婦仲が良かったため、奥様が亡くなったことに大きなショックを受けたのだ。人の顔を描いていれば、そのうち妻の顔も出てくるかもしれないという思いから、顔シリーズが晩年に始まった。そして、描いているうちに、やはり顔も形ではないか、ということに気がついた。人の顔は、目や耳などの変わった形が、丸いキャンパスのなかに、様々なバランスで置かれているもので、人によってバランスも形も違うのだと思ったのである。そして、すべての顔が違うように、様々な顔を、形として、抽象形態として描いた。

このころ猪熊は、母校の旧丸亀中学校で、高校生に『美はいずこに』というタイトルで講演している。その講演で、皆さんの顔がこの講堂のなかに散らばっている状態は、絵であり立派な構図であると話した。そして、それをとても美しいと思うと語ったのだ。また、皆さんが異なる位置で、違う考えを持ち、ここに点在している、これが1つの美しさなのだと話した。美を意識する良いレシーバーを持っていると、あらゆるものが幸福になる、美しいものに大きな目を開くようにと繰り返し伝えていた。晩年の猪熊は、世の中にあるものすべてが美しい、自分らしくそこにあるということが美しいと述べていた。そして、丸亀市に猪熊の美術館、MIMOCAが出来た。猪熊は、記念館のように1度来たら終わってしまう場所ではなく、理想の美術館を作ろうとした。

今を生きる私たちと同じ時代を生きる、真摯で優れたアーティストは、先を見て、先を考え、今の時代を表現している。そこには今を生きていくヒントのようなものが含まれていると猪熊は考えていた。そして、自分の絵だけではなく、積極的に現代美術を紹介することを1つの条件として出した。またもう1つ、美しい空間にすることも条件にした。行きやすい場所にすることも重要視していた。そして、子どもたちには、小さいころから多くの良い作品を見せてあげてほしいと、何度も話していた。この美術館は、子どもたちの豊かな感性と想像力を伸ばし育むことを理念にしている。子ども向けのワークショップも熱心に行い、鑑賞プログラムや学校の来館対応を行う。ピフォアミモカという美術館に来る前に小さいお子さんに見てもらった映像も作った。猪熊は「美術館は心の病院」だと述べている。日常の垢を流して心をリフレッシュする、そういう場所であるために、美術館は美しい空間でなければならない、入ったときにはっとするようなものが必要で、一方でただその空間に身を置いてお茶を飲むだけでもいいと話している。美術館に入らなくてもカフェを利用出来るのは、建物自体を日常的に楽しんでほしいという思いがあるからだ。美術館開館時のインタビューで猪熊は、この美術館の活動を通じて、美がわかる人を増やしたい、美がわかる人は人の気持ちがわかる人。そういう人が増えることで、世の中が平和になるといいと思うと述べている。以上が猪熊弦一郎の画業の紹介である。



## 「地域社会に求められる役割を果たす」

富士建設株式会社 代表取締役  
眞鍋 有紀子

昭和 27 年に富士建設株式会社は創業し、現在は民間の企業をメインに営業を行っている。民間の企業での仕事を通じ様々な機会を得ることができたことを非常に誇りに思っている。建設工事は、今の施設ではできない何かを達成したいとき、今の施設では解決できない課題があり修繕したいとき、あるいは、やりたいことがあるときに初めて発生する。お客様のポジティブな意思、これから向かっていきたい方向性というものを傍で見ることができる仕事である。そのなかで気づいたことは、我々を含め企業には各々目指す大義や、その仕事ならではの社会的視点があり、それを活かすことでビジネスチャンスにし、また新たな展開につなげている。



私たちの大義の 1 つ目は、良い建築を通じてお客様や地域の未来を変えること、2 つ目は建設業界及び建設業に従事する人の地位所得の向上に取り組むこと、そして 3 つ目は、地域社会の担い手として参画できる企業になることである。

たとえば香川県の場合、1970 年代に埋め立てが行われ、そこに建てられた工場は非常に多くある。1970 年代ということは創業して約 50 年だが、設備投資をして 4、50 年経つと老朽化も進んでいる。建設業法も変わり、既存不適格等の様々な問題が起き、次代に代替わりする際、建物が負債になるといった状況が現実になっている。また、設備投資と経営計画がリンクしておらず、建物が経営計画に則していないこともある。ほかにも、人口が減り、古民家やお寺、神社の維持が困難になり、取り壊しが必要になる等、様々な問題が起きつつある。また、木材の活用や担い手不足等、様々な課題もある。

1 つ目の課題は、老朽化が進んだ建物が増加し、設備投資と経営計画がリンクしていない状況である。私たち建設業ができることを考えてみよう。問題は何かと言うと、建物が既存不適格となった場合、必要な投資ができないということである。製造業を 50 年間続けてきた会社が、必要に応じて拡張、増設を行ったことにより、現在の建物が建築基準法に違反している場合がある。休憩所の増設や、ラインを伸ばすために増築することはよくあるが、これらは既存不適格な建物とされ、そのままでは次の投資ができない。その場合、この既存不適格な状態を、適法な状態に戻す必要が出てくる。私たちは、操業を続けながら適法な状態にできるのかといった問題や経済的な問題も含めて、建物を経営基盤と捉え、補修や改築等の計画を長期的な視野で立て、順番に解決し、建物の負債化を防ぐ取り組みをしている。この取り組みは 2020 年ごろから始めたが、既存不適格を遵法化していき、必要な投資を続け、雇用を継続し、持続可能なものにしていくよう進めてきた。具体的には、適法化までのロードマップを共に描くということである。ロードマップを描いていくために、改修するあいだは違法な状態にあることを認めてもらうための協議にも参加して伴走する。また、既存不適格の建物は違法になるため、銀行も設備投資の資金を融資することができない。担保を取りたいと考えても、その物件の状態を把握できないため、既存不適格な建物については、銀行にとっても課題であった。そこで、銀行も含めて課題解決をするために、ビジネスマッチングを行った結果、現在では金融機関からの引き合いも増加している。

2 つ目の課題は木材活用である。国として、木材を活用するという大きな指針があり、オリンピックや万博等、都市の木質化、あるいは木材活用の CLT (クロス・ラミネーティッド・ティンバー) 等、木材活用の方針が打ち出されている。しかし、香川県産の木材は、残念ながら活用が進んでいない。香川県産の木材が活用されていないことの大きな問題は、木材市場がないということだ。香川県は海に面しているため、外材を使う文化である。徳島は山がメインのため、自分の県に木材市場があり、それを製材して流通させる仕組みがあるのだが、香川県は外材から成っていることと、そもそも木の太さが違うため、製材所の機械も合わないのだ。そのため、木材市場でストックすることがなく、急に木が必要になっても、山から切り出し、乾燥してから製材するとなると、1 年半ほどかかるため現実的ではない。このような課題があるなかで、どのよう

に香川県産の木材を使用していけばいいのだろうか。香川県は北向き斜面に木が生えるため、成長が遅く、木の品質は良いと言われているが、ヒノキの価格もスギと同程度まで下がっている。県産材だからといって高いわけではないが、木材市場がないため、行政と山と製材所と私たちが連携して動くことが必要になる。また、普通の木材だけでなく、CLT という選択肢があるということを世の中に広めていくことや、CLT 材を使うための専門家とのマッチングも行うことで、住宅だけでなく、法人の建物でも、木材を活用できるように取り組んでいる。一般企業や学生向けの見学会の企画や、林野庁や県の補助金を取得することで、地元企業が法人の建物として県産木材を活用できる流れを作ろうとしている。

3 つ目の課題は、お寺や神社、古民家等、日本の文化や景観を形作るものの維持保全が困難になっていることである。伝統的・文化的に価値があるものを残すか否かという問題でもある。今も役割を持っている現役の建物であれば、ものとしての機能や品質を担保すればいいのだが、お寺や神社が元々持っていた機能や性能が失われつつある。人口が減っているため、檀家だけで頭割りで改修費を捻出するのが難しくなってきた地域もあれば、神社のお祭りの寄付さえも出さないということも非常に増えている。また、古民家や景観を形成するような文化財等の建物は、そもそも機能や性能が期待されていない。そのため、残さなくてはならないと思っても、誰が維持費を払うのかといった問題が出てくる。古い建物だから、伝統や文化を受け継ぐものだから、というだけでは残せない時代になっていると実感している。国の文化財指定を受けていると、ある程度の補助金が出るが、その場合でも国の補助金は半分ほどのため、県や市に予算がなければ維持するのは難しいのだ。情熱や知識だけではお寺さえも残せない時代になっており、残していくための経済的な基盤が必須になってきたのだと思う。その建物の物語を地域で伝え、それを使って地域に人を呼ぶ、何かの拠り所になるといった、そのような流れをどのように作っていくかに注目せざるを得ない時代と言えるだろう。そこで私たちは、技術だけではなく、プロジェクトの進め方や考え方を身につけた人間を社内に育てなくてはならないと考え、ヘリテージマネージャーの講座に 1 年間通い、現在では 3 名が取得している。

そして 4 つ目の課題は、建設会社の担い手不足である。安心安全にかかわるものだから、多くの法律や検査機関の指導のもと、私たちは建築を行っている。だが、最終的に携わるのは人間だ。最近頻発している不祥事は、若手社員による認識不足、危機管理不足から起きているようだ。私たちは、それについて教育をするべきだが、文章では頭になかなか入らないということもあり、穴吹デザインカレッジに、コンプライアンス教育のための漫画製作を依頼した。コンプライアンスの重要性等、テーマをその都度決め、それについて描かれた漫画をフックにした教育を始め、若手社員にコンプライアンスについて肌身に染みて感じてもらえるようにと考えている。また、建設業界は日給月給制が残っている業界である。日給月給制とは、雨が降れば仕事がなく、給料がない。そうすると、晴れている限り、土日祝日関係なく働きたいものだが、土曜日に学校に通ったことがない若者は、土曜出勤を受け入れられないのだ。このような状況では、建設業界は必ず衰退する。そこで、なんとか日給月給制を解決しなければならぬと考え、元請けである私たちは、見積りエントリーシステムを開発した。従来、受発注の権利は元請けが持っており、下請けが工事内容により選ぶことはできない。私たちは、安定的・計画的に協力業者が受注できるよう、案件のすべてを開示し、どのような工事内容であれば受注したいか等、意見を聞くことを始めた。これは、入札案件が減り、特命工事が増えてきたことでできるようになったことだと思う。上手く稼働しないところもあるが、私たちが大義として、職人、建設業界全体の底上げ、従事者の地位所得の向上を掲げているため、継続的に行っていきたいと思っている。

それでは次に、丸亀市指定名勝である中津万象園を未来に繋ぐという、もう 1 つの役割についてお話ししたい。中津万象園とは丸亀にある大名庭園で、丸亀市の指定名勝となっており、丸亀京極家の別邸として 1688 年に築庭された 1 万 5 千坪の池泉回遊式庭園である。昭和 45 年に、不動産会社を通じて売りに出していたところを、私の祖父が取得した。しかし、取得したものの、どのように手をつければよいか分からず、その後 12 年かかったが、丸亀美術館を併設し、昭和 57 年から一般公開した庭園だ。ここは、民間が所有する大名庭園ということになる。庭園には邀月橋（ようげつばし）という大きな橋が架かり、右側には美術館棟があり、元々の松林を中心とした海辺にある庭園である。京極家には 7 代目まで殿様がいたが、6 代目の殿様は非常に漢詩が好きで、漢詩をたくさん残されている。そのなかの琴峯詩集という詩集のなかに、中津万象園で詠まれた歌もたくさん残されている。中津万象園は借景が美しく、夕焼けも池に映り、非常に美しい風景になる。また、園内の観潮楼という茶席は、現存最古の煎茶席と言われている。この庭園は、京極家の

手を離れたあと、民間の所有者を転々とした。明治以降、地元の富裕層や病院、また、かつての商社である鈴木商店等を転々としていく。それでも、明治42年には既に観光地であり、絵葉書も出されるほどに観光地として認められた存在であったようである。しかし、観光地として親しまれた場所ではありつつも、所有者が転々としたため、荒れる場所も出てきた。そして南海大地震を経て、荒れた様相があらわになっていく。

私は、この庭園の最も素晴らしいことは、私たちが守っていることではなく、多くの所有者を転々としたにもかかわらず、誰も開発しなかったことだと思う。大名庭園は、とても素晴らしい場所にあるものだ。開発すればいい土地になったと思うが、誰も壊さず、持ちきれなくなるまで頑張り、そのあとも必ず誰かにきちんと引き取ってもらい、手放してきた。今まで守ってこられた方たちの苦労の上に、今の庭園がある。昭和45年に弊社が購入したが、その当時は様々な木が生い茂り、池のなかからも葦が生え、松の木が倒れ、荒れた状態で、どのように直せばよいのか分からなかった。そのようなとき、足立美術館の作庭をされ、兼六園や栗林公園等、様々な名園の修復を手がけられた中根金作先生に出会い、修復に取りかかることができたのである。現在は、春には多くの花が咲き、夏にはスイレンが、秋には紅葉が色をつけ、冬になると晴着を着て訪れる方も多く見られる。

今では、そのような庭園だが、なぜ大名庭園は荒れた状態になっていたのだろうか。それは維持費がかかるからである。私たちも、入園・入館料収入だけではカバーができず、富士建設からの寄付金が維持費の約6割を占めている。主な支出は庭師の給料だ。文化財特有の課題、特に庭園特有の課題だが、庭とは生き物のため、手入れを止めることができない。コロナ禍でも、木の剪定をやめることができないため、庭師は出続けた。また、定期的な修景や屋根の吹き替え等、大型投資がどうしても必要になる。さらには、庭師の属人的な技術と知恵に頼るところが大きいこともあり、長年身につけてきた勘と技術によって支えられている。こうした課題が、文化財庭園特有のものとしてある。このように、莫大な費用がかかるにもかかわらず、入園料等だけではまかなえないのも、大名庭園の大きな課題と言えるだろう。だが、維持管理ができないからと言って、やめるべきなのかと言うと、そうではない。地域の文化や街づくり、そして観光の核として必要なものと認められ、それに対してお金を使っていくのが、従来ある世界だと市民に思ってもらいたいのである。確かに、入園者1人当たりのコストと入園料を比較すると、どうしても入園者のコストが大きくなるため、現在では大名庭園が姿を消しつつある。この20年で見ても2つなくなっており、1つはNTTが持っていた万象園が高齢者複合施設に、もう1つは岡山の個人所有の庭園がマンションになった。莫大な維持費がかかるゆえに、経済的な基盤があることが重要である。弊社の創業者の、企業が得た利益を地域に還元すべきであるという言葉があるとはいえ、あくまでも得た利益が元になるため、私たちの行動は、庭園にとって持続性に欠けることかもしれない。現在でも、丸亀市の負担になるのであれば、万象園は不要だと考える方もいる。文化にお金を使うということに、市民が理解を示さなくなっている。

そこで、クラウドファンディングや、ふるさと納税が使われることが増え、市民のお金で維持しようという動きが大きくなってきている。今、私たちがすべきことは、文化財庭園を守るためにお金を使うことに、理解や共感を得て、それを広げていくことだと考えている。そこで、継続して文化を守っている人を、地域の人が支える仕組みを作るため、クラウドファンディングサイトの運営等を行い、支援の輪や共感の輪を広げていく行動を起こしている。たとえば、庭園の魅力を伝える活動や、修景作業、さらには万象園の不明だった歴史的経緯や価値を再発見し、地域に発信することで、今では市と共同して、城とセットで観光キャンペーンができるまでになった。そして地元の方に愛されるために、子ども向けのお茶教室や、外国人のインターンの場としての提供、法人向けの新しい試みである、お掃除ボランティアの体験等を行おうと考えている。理解と共感の輪を広げることで、様々な人にかかわってもらい、観光人口を増やしていくことが、富士建設に課せられたことだと思い、取り組んでいる。

そして、今非常に注目されているSDGsについても、取り組みを行っている。丸亀市も、日本版持続可能な観光ガイドラインに則って取り組みを進めており、万象園も文化セクションで参加している。また、SDGsのほかの取り組みとして、庭園で多く出る松の剪定ごみを、三豊市仁尾町のレモン農家に引き取ってもらい活用していただいている。初めはSDGsという認識はなく、ごみを引き取ってもらったという感覚だった。だが、弊社の仁尾町出身者が、レモン農家と土壌の酸性度について話した際、常緑樹では中性になり、針葉樹等では酸性になるという話になり、実験的に松の活用を始めたところ、非常に質のいいレモンができるようになり、継続して行っていたものだ。また、丸亀市とのサステナブル観光の会議で、これらはSDGsの観

光コンテンツや教育旅行にもできるということになり、今年は立命館大学の学生が訪れ、観光コンテンツ作りを共に行った。このような地域を巻き込む活動は、関係する人を増やしていくという意味では重要だと思っている。ほかには、企業所有のアートを、経緯やアーティスト、物語等と共に展示する取り組みも行った。確かに、これらを行ったことで、関係する人口が増加したと明確には言えない。しかし、地域の企業が文化にかかわり、文化を守る取り組みを行うことは、地域の文化を守る上で果たしている、企業の役割を周囲に知らせることができた、いいきっかけだったと思っている。

私の本業は建設業で、建設業から見た社会的課題はどのようなもので、どのように解決するかを考えながら行動している。しかし、万象園という存在を未来に引き継ぐということから学んだことは、文化を守り、社会に貢献するということが、きれい事ではないということだった。それでもなお、企業にできることはとても多い。今まで、数多くの方と出会ったが、皆さんに大義があり、それに則って解決する、または継続するために利益を得ていた。そのような見方をするようになると、地元企業や地域で働くことに目が行くのではないだろうか。このような心意気をよく表していると感じる絵が、『箬の梅』だ。箬（えびら）に梅の枝を挿して、戦場を駆け回っている絵だが、私がこの絵に出会ったのは、子母沢寛氏の『勝海舟』という本だった。箬に梅の枝を挿して戦場を駆け回るのはいいではないか、それともお前は梅の枝の代わりに矢をもう 1 本挿せというのか、という流れがあり、そこにとても感動した。私たち企業が、戦場で矢を挿して駆け回ることは当たり前で、今後も社員を守るために、事業を継続していくために、お客様にサービスを提供していくために、努力するのは当たり前なのだと、辛くても厳しくても、それが矢を挿して戦場を駆け回ることなのだと思った。しかし、勝海舟はこの絵になぞらえて、箬に梅の枝が 1 本挿さっていてもいいのではないかとやったというのである。この話の真偽は分からないが、私は、梅の枝とは社会的な視点や貢献、文化的な何かであると感じた。そして、梅の枝を挿すという色気のような美学のようなものは、誰も非難することはできない。また、矢を挿して戦場を駆け回っていることも非難できない。私は、これができてこそ誇れる会社にしていけないのではないかと考えているし、これを目指していつこそ、地域社会から求められる役割が果たせる企業になれるのではないかと考えている。すべてが問題なく進むわけではないが、理想として目指していきたいと思っている。

## 私学経営部会 パネル・ディスカッション

### 「持続可能な社会への私学の指針 ～子供たちの豊かな未来を築くために～」

(パネリスト) 東京電機大学 副学長 **広 石 英 記**

(パネリスト) 高松中央高等学校 校長 **香 川 泰 造**

(パネリスト) 学校法人西海学園 理事長 **菅 沼 宏比古**

(コーディネーター) 順天中学高等学校 校長 **長 塚 篤 夫**

(本報告は全私学新聞に掲載された内容を転載しています。)

#### ■私学の少子化への対応

【長塚】 初めにパネリストの皆さんから、私学の状況をお話しいただきたい。

【香川】 香川県下には私立高校が 10 校、通信制も 3 校あるが、ここは香川県私立中学高等学校連合会には入っていない。ただし、全ての学校は香川県の校長協会には属している。公立と私立の壁は低く、情報をやり取りしている。

【菅沼】 長崎県は 3 地区に分かれ、それぞれに校長部会があり、連携している。長崎市には私立高校が 14 校あり、人口の割合から考えると、非常に多い。人口流出率が非常に高く、それに輪をかけ、少子化が進行している。高校入学者は令和 4 年で 1 万 1 千人だったが、推計出生率で計算すると、令和 18 年には 8,800 人と予測される。

公立高校の募集定員に対する充足率は下がっているが、私立高校は緩やかな状況なので、努力した結果が出ていると思う。

【長塚】 次に私立大学の状況をご紹介いただきたい。

【広石】 全国の大学定員の約 8 割は私立大学であり、高等教育の多くを私立大学が担っている。学校基本調査から見ると、少子化は一律には進んではない。東北、甲信越、四国地方などの減少率は非常に高く、逆に、東京、神奈川、愛知、福岡、沖縄などは変化が少ない。

特に大学は、高校卒業後の地元残留率にも留意しなければならない。これも学校基本調査のデータから算出されており、地元残留率が高く出生率の変化が少ない、東京、福岡、愛知、大阪、熊本、宮城、広島、京都、北海道などは、大学教育のレベルでは少子化の影響は現時点では大きくない。しかし、出生率も低く残留率も低い、佐賀、島根、鳥取、香川、和歌山などは対策を早急に考えなければならない。

高校の先生方に留意いただきたいのは、近年の AO 入試や指定校推薦の急速な増加である。東京都内のほとんどの私立大学は、定員の約 5 割が年内入試で決まる状況である。

一方、入学後に入試の種類別で大学生を分析すると、指定校推薦で入った学生は、全体的に基礎学力が低く、退学者に占める割合が高くなっている。つまり、授業についていけないのだ。高校の先生方には、推薦がその生徒の人生にとって本当に幸せなサポートになるのか、今一度考えていただきたい。

【長塚】 香川先生、菅沼先生から改めて公立と私立の関係をお話しいただきたい。

【香川】 香川県の場合も、定員のルールを守っている。ただ、公立も定員割れの学科を持つ高校が半分ぐらいある。全ての公立高校が、瀬戸内留学という制度を設け、定員枠外に県外から生徒を集めている。私学が県外から学生を集めるのと同じことを公立でも始めている。

【菅沼】 長崎県は 20 年前くらいから特殊な補助金制度になった。一番定員の少ない学校の前年度かかった経常費をベースに計算し、その上に生徒の在籍数で単価を掛けて補助金が出る。ただし、定員の 130%を超えるか、あるいは 70%を下回った場合はゼロ査定になってしまう。



## ■質的な持続可能性に向けて

【長塚】 各校の経営管理職の立場から、生徒の確保だけではなく、質的な面から持続可能性に向けて、学校の魅力をどのように作り出しているか、お話しいただきたい。

【香川】 私は公立学校出身で、平成27年4月からこの学校にお世話になっている。平成28年度から「スーパーインパクトハイスクール (Super Impact High School)」をスクールポリシーとして掲げた。人間力を構成する要素、Independence (自立)、Morality (道徳性)、Passion (情熱)、Action (行動力)、Communication (コミュニケーション力)、Toughness (逞しさ) を頭文字で表している。

法人の傘下に高校と幼稚園がある。高校は全日制と通信制で、全日制には普通科と商業科がある。普通科は、特別進学コース、進学コース、総合進学コースで、総合進学コースは2年次に進学、生活文化、情報に分かれる。商業科は、2年生からビジネスコースと情報コースに分かれる。通信制は広域通信制で、トライ式高等学院にサポートをお願いし運営している。

【菅沼】 西海学園には、西海学園高等学校と菊の香幼稚園がある。建学の精神は、「本学園は、孝行を徳の源泉となし、個性を活かし、実践に優なる日本国民の育成を期す」である。思いやる心、感謝をする気持ちを人の源泉として、自分の持っている個性をさらに発揮していくということだ。



現在、生徒数は400名。高校は普通科のみで、特進コースの生徒は、国公立、有名私大を目指し、1年次から受験に向けて勉強する。進学コースは大学、短大、専門学校進学、医療コースは高等看護学校を目標にする。10年ぐらい前に公務員コースを作り、非常に順調に生徒募集ができ、卒業生も公務員になっている。部活動よりも進学に力を入れた方がいいと判断し、特進コースを強化した。

【長塚】 次に東京電機大学の様子をご紹介いただきたい。

【広石】 東京電機大学は創立115周年を迎え、建学の精神は「実学尊重」である。丹羽保次郎・初代学長が「単なる技術者でなく、人を幸せにできる科学技術を開発する人間を育成する」ことを学校の使命とされ「技術は人なり」を教育・研究理念に掲げている。

本学は、全国の私立大学平均の5倍以上の企業から求人を集めており、就職に強い大学である。学生は真面目で、就職も堅調だが、以前は、東京電機大学の独自性が見えにくかった。せっかく素晴らしい建学の精神と教育・研究理念があっても、入学式と卒業式で理事長、学長から講話があるぐらいでは、額縁に入った理念にとどまってしまう。

建学の精神ばかり強調し、最適な教育を追求しないのは、私学らしい教育とは言えない。私学らしい教育を展開する必要条件は、建学の精神を反映した個性的な教育であり、十分条件は、時代を見越した質の高い教育の推進である。私は、教育担当副学長として、この必要十分条件を満たす教育改革を進めてきた。

2020年にディプロマポリシーを「実学尊重を旨とし、科学技術の知識と技術をもつこと」と『「技術は人なり」の精神の下、科学技術と人間・社会との関わりを理解し、科学技術者として必要な教養、キャリア意識、倫理感を持つこと」とした。そして、実学尊重を実質的に進めるために、座学と実習科目を合体させ、座学で学んだらすぐに実践できるカリキュラムを開発するとともに、「技術は人なり」の精神を具体例を通して学ぶための技術者教養科目を必修化するなど、「建学の精神の具現化」に取り組んでいる。

## ■経営の持続可能性の方策

【長塚】 菅沼先生の法人ではリスク分散のためのポートフォリオ経営として、幼稚園、学童保育、地域のダンス教室もされているとお聞きしたが、ご紹介いただきたい。

【菅沼】 少子化で高校だけではもう成り立たないと考え、幼稚園に加えて、学童クラブを同じ小学校区に2か所作った。幼稚園に来ていた子供たちの半分ぐらいが、その校区にいて、今約80名の登録がある。学童クラブを地域の人に開くことも重要なので、ダンス教室を始めた。練習場所を見つけるのが大変だったのだが、うちの高校の校舎1教室を無料で提供した。その代わりにダンス教室の先生には、高校の部活動を、1週間に一度指導していただくようお願いした。さらに、老舗のスポーツクラブに入ってもらって体操教室も開いている。

1年前には、保育園を立ち上げた。定員は20名でスタートし、12名入れればいいかと計算していたら、あっという間に20名になり、これから希望される方は断らざるを得ない状況だ。保育園と学童クラブは収益が上がっていて、高校の分を補填している状況である。

【長塚】 香川先生の学校では、広域通信制の学校があるが、地元でのニーズは高いのだろうか。

【香川】 生徒は県内の全ての公立、私立の学校からやってくる。毎年10名ぐらいが全日制からの転籍者だ。月の1日に受け入れ、最終の受付が12月1日なので、3年生で受験を控えた時に不登校になり、持ち直して受験する生徒もいる。

経営上の問題では、経常費補助は全日制と比べて、6分の1の生徒数割なので、生徒数が増えても、大きく収益が上がるわけではないが、通信制があつてよかったという感じである。幼稚園は新制度に移行し、経費面では助かっている。その時々でいいものを探してそれに乗っていくことが大事だと経営の立場からは実感している。



#### ■ロールモデルから学ぶ

【長塚】 子供たちの未来について、広石先生と私から自校の取り組みをご紹介したい。

【広石】 世界の教育改革では、ペーパーテストを連想させる「学力」という言葉はほぼ死語になり、何ができるのかといった実行力としての「コンピテンシー」に取って代わっている。知識と技術だけでなく、それと態度や価値観が一体になった有能な力のことであり、日本では「資質・能力」と訳されている。



5、6年前から本格的に始まったアクティブ・ラーニングは、習得した知識・技能を活用し、思考・判断・表現することで実践力をつける学習方法だ。日本では、従来は探究学習でも先生が授業をリードして、テキストに従ってプログラム通りに学ぶというスタイルだった。今後は、そうではなく、PBL型の探究学習に挑戦していただきたい。情報を収集してまとめ、整理・表現することで知的な力は養われるが、実行力・協調性といった人間性を磨く場も必要だ。実際に現実社会と関わると、生徒たちは、想定外の事態に巻き込まれ、挫折や失敗を経験する。そういったリアルな現実と関わる機会が必要だ。少しでも世界（地域社会や身近な世界）を良い方向に変えるような活動をするために、計画し、アクションし、チェックし、もう一度アクションする実践能力を生徒に、身につけてもらいたい。

長塚先生の順天中学高校では素晴らしい教育実践が行われているのでお話しいただければと思う。

【長塚】 本校では2000年に、国際社会を見据えた教育をしようと議論し、これからの日本社会に必要な人材の力を3つまとめた。1つ目は新たな価値を創造できる力、2つ目は多様な国際社会で対話する力、3つ目は人間関係を構築する力である。

この3つの資質能力を育てるために重視した点はルーブリック、リサーチ、ロールモデルである。ルーブリックがないと資質・能力の評価はできない。スローガンだけがあっても何も変わらないし、生徒は具体的にどのように変わればいいのか分からない。新学習指導要領は学校が求める観点で評価するように変わっている。ルーブリックでの評価は世界標準だが、日本は8割が定期テストによる評価である。わが校では学習評価にもルーブリックを必ず入れ、生徒が授業によってどう変容したかも評価するようにしている。

2つ目のリサーチでは課題設定が大変だ。それで知見を提供する場として大学の先生、企業の人、

保護者、卒業生、そして在校生にもワークショップを開いてもらい、世代も立場も超えたコミュニケーションを行っている。

3つ目のロールモデルは、身近な卒業生にロールモデルがいると分かりやすい。本校の卒業生のロールモデルを紹介する。医学部に進学した卒業生が、大学在学中にアフリカのザンビアに診療所を作ることを決心し、その資金集めのために、材料の寄付を受けて日本でお好み焼きを売って歩いた。目標額には達することができなかったものの、クラウドファンディングを始め目標額の700万円が集まった。建物を作るだけでは医療の持続可能性は保てない。現地の人たちの協力が必要だ。そこで1年休学して現地に移り住み、キーパーソンや村人たちと対話を続け、協力を得ることができ、2棟の診療施設を完成させた。彼はザンビアを訪れて、国際対話力や人間関係力を磨きながら実現したのである。

では、菅沼先生、香川先生からコメントをいただきたいと思う。

**【菅沼】** 学校は常に変化をしなければならない。今日伺った先生方のお話を自分の学校に持ち帰って変化させて、挑戦しないといけない。子供たちには、建学の精神を分かりやすい言葉で説明し、理解させ、社会に出てもそれが使えるようにしていかなければならない。こういうものがないと持続可能にはならないと感じている。

**【香川】** 生徒には、教師自身が自ら向上する姿勢を見せることが大事だと思う。そのロールモデルの代表が校長であると考えている。校長自らが学び、実践しなければいけない。





## 私学経営部会

### 「総括」

香川誠陵中学高等学校 校長

光田 大 介

この度、講演とパネル・ディスカッションでご教授頂きました先生方、また、ご多用の中、全国各地より本大会にご参加頂きました全ての先生方、そして、部会を運営するにあたりご尽力頂きました専門委員・運営委員の先生方にも厚くお礼申し上げます。

まず、講演Ⅰでは丸亀市猪熊弦一郎現代美術館学芸課上席学芸員の古野華奈子様より「猪熊弦一郎の画業素直な、虚飾のない姿で」と題してご講演を頂きました。猪熊源一郎の生涯を子ども時代、東京美術学校時代、パリ時代、東京時代、ニューヨーク時代、ハワイ時代という6つの時代に分けて各時代のエピソードと各時代が彼の考え方や絵の描き方にどのような影響を与えたかご高察・ご解説を頂きました。彼が一定の枠に収まることなく自由な発想で画風が変わっていったのはそれぞれの時代に影響を受けた人物や刺激を受けた出来事があったからということに加えて、彼自身の素直さが大きく関係しているという話がありました。正解のない師匠の言葉やアドバイスの意味を自分で考え、自分なりの解釈をして自分の絵に反映させてきたという話もありました。父親に怒られたことは一度もないというエピソードからも、誰かに強制的に方向づけされることなく自分自身で自由な発想をして可能性を広げるということに繋がったのだと感じました。「美が分かる人は、人の気持ちが分かる人」美術を通して、そういう人を増やしていきたいと願い、丸亀市に現代美術館ができました。新時代を生きる子どもたち一人ひとりが自由に自分自身で考えるように育てるには、子どもたちとどのように日々を過ごしていかなければならないか考えさせられるご講演でありました。

講演Ⅱでは富士建設株式会社代表取締役の眞鍋有紀子様より「地域社会に求められる役割を果たす」と題して地元企業の経営者の視点でご講演を頂きました。考え方や姿勢で選ばれる企業、理念や未来像を共有できる企業を目指すというのは、持続可能な豊かな未来を築いていく子どもたちを送り出す我々私立学校にも通ずる考え方だと思います。また、同様に時代やニーズに応じて自ら変化することを恐れない姿勢の大切さも教えて頂きました。既存の不適合建物の適法化、香川県産木材活用の推進、神社仏閣等の維持・保全等、次々とニーズを掘り起こしておられます。最後に話された中津万象園の維持・継承についても学ぶべき点が多く、お金儲けだけでなく地域貢献も自分たちの役割であると考え、その役割を果たしておられる姿にも感銘を受けました。「箆に梅の枝挿して戦場を駆け回る」荒々しい坂東武者の梶原景季が、激しい戦の中でも雅の心、美学を忘れずに奮闘するイメージは、まさに厳しい建設業界の中でも文化を大切に作る心、経営者としての美学を忘れずに奮闘する眞鍋様の姿に重なって見えるものでした。

最後に、パネル・ディスカッションでは、コーディネーターの長塚篤夫先生の素晴らしい進行により、パネリストの香川泰造先生、菅沼宏比古先生、広石英記先生から各校の特色ある先進的な取り組みやそれぞれの地元・各県が抱える課題についてお聞きすることができました。「持続可能な社会への私学の指針」というテーマで、各学校・大学の管理職というお立場から私学経営上の持続性という点も踏まえつつ、また、子どもたちの豊かな未来、社会の持続性をどのように築いていくか各先生方の一人の教育者としてのご意見も伺うことができました。政治力を動かすということの重要性も実感して理解できました。このパネル・ディスカッションで得た情報、各先生方からのお話は今後の各校の学校経営に活かすことができると信じています。

結びと致しまして、ご参加頂きました皆様方の栄えある学校のさらなる発展とご活躍を祈念致しまして、総括とさせていただきます。

# 教育課程部会

次代を拓くイノベーションの源泉となる創造性を身につけた、持続可能な社会の創り手を育成することがいま、学校教育に求められている。子供たちの可能性を最大限引き出すためには、これまでの“一律一斉”から“個を伸ばす”教育への転換が欠かせない。生徒の多様性と主体性を尊重し、一人ひとりの認知特性を踏まえた個別最適な学びと協働的な学びを実践するファシリテーターとしての役割を担うのは教員である。各私学には、独自性と先見性を発揮して、生徒たちの多様な幸せ(Well-being)を実現するための教育課程と学習環境の構築に挑戦してほしい。

当部会では研究目標に加えて、分野横断型探究デザイン、キャリア開発などこれからの学びと教員の役割について講演やワークショップ、実践発表を通して考察していく。

- 1 研究目標 新たな社会の創り手の育成～個別最適かつ協働的な学びへの転換～
- 2 会 場 JR ホテルクレメント高松 3階「飛天（東）」
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、教務主任、教育課程編成等担当教員
- 4 参加人員 88名
- 5 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15						45	45
11月10日 (金)	開 会 式	基 調 講 演		実 践 発 表 I	昼 食	ワ ー ク シ ョ ッ プ	実 践 発 表 II	閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (光成 拓自／神野 翔一)	機材担当：柳井 祐介 記録(写真)担当：神野 翔一 集録担当：神野 翔一
9:00	開 会 式  1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：池田 悠子／記録：神野 翔一  教育課程部会運営委員長 西 本 泰 三
9:15	基調講演	司会：池田 悠子／記録：神野 翔一 講師紹介：前田 淳司
11:00	演 題 「『可能性の教育学』にチャレンジしよう！」 講 師 上 田 信 行 同 志 社 女 子 大 学 名 譽 教 授 ネ オ ミ ュ ー ジ ア ム 館 長	

11:00	実践発表Ⅰ テーマ 「読書科をベースとした探究デザインの改革～学校の全領域に読書を～」 発表者 上山 朋子 盈進 中学 高等学校 教諭	司会：光成 拓自／記録：神野 翔一
12:00	昼 食	
13:00	ワークショップ 演 題 「ファシリテーターとしての教員の在り方～『Yes and』のマインドセット～」 講 師 谷 益 美 株式会社 O N D O 代表取締役 早稲田大学ビジネススクール 非常勤講師	司会：池田 悠子／記録：神野 翔一 講師紹介：前田 淳司
14:45	実践発表Ⅱ テーマ 「地域のキャリア開発のプラットフォーム化を目指した キャリア教育プログラム群の開発」 発表者 合 田 意 大手前高松 中学 高等学校 教諭	司会：光成 拓自／記録：神野 翔一
15:45	閉 会 式 1. 開式の辞 2. 総 括 3. 専門委員長挨拶 4. 閉会の辞	司会：光成 拓自／記録：神野 翔一 教育課程部会運営委員長 西 本 泰 三 教育課程専門委員長 森 涼
16:00	解 散	

7 講師・発表者（順不同）

上 田 信 行	同 志 社 女 子 大 学	名誉教授
谷 益 美	株式会社 O N D O	館長
上山 朋子	早稲田大学ビジネススクール	代表取締役
合 田 意	盈進 中学 高等学校	非常勤講師
	大手前高松 中学 高等学校	教諭

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長 西 本 泰 三	英 明 高 等 学 校	校長
副委員長 前 田 淳 司	尽 誠 学 園 高 等 学 校	副校長
委 員 池 田 悠 子	英 明 高 等 学 校	教諭
神 野 翔 一	英 明 高 等 学 校	教諭
光 成 拓 自	尽 誠 学 園 高 等 学 校	教諭
柳 井 祐 介	尽 誠 学 園 高 等 学 校	教諭

9 専門委員・指導員（順不同）

委員長 森 涼	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校	理事長・校長
委 員 大 羽 聡	千葉英和高等学校	理事長・校長
松 谷 茂	文化学園大学杉並中学高等学校	校長
鈴木 弘	香蘭女学校中高等科	校長
齋 藤 眞 人	立 花 高 等 学 校	校長

教育課程部会 基調講演

## 『可能性の教育学』にチャレンジしよう！」

同志社女子大学 名誉教授／ネオミュージアム 館長

上 田 信 行

今日は『可能性の教育学』にチャレンジしよう」というテーマで講演する。講演中も先生方が主体的に参加できるワークショップを用意している。たびたび **playful** という言葉を使う。これは「どきどきわくわく」という意味だが、「どきどき＝不安」から「わくわく＝fun」に変わっていくことを先生方には体験してほしい。先生方が授業をしていると、生徒がつまらない顔をしていることがある。それは授業に対して本気で向かっていないからおもしろくないということが多い。生徒が本気で授業に臨めば、授業が楽しくなる。そして、楽しくなれば、新たな学びや気づきが生まれてくる。授業もワークショップも話を聞いて体験しただけでは学びにならない。聞いたことや体験したことを自分なりに解釈して、誰かに自分の言葉で話し、表現し、伝えるサイクルが大切だ。インプットの学びからアウトプットの学び、感じたことを言語化することも重視してほしい。



探究活動も同じだ。本当におもしろいと思っていることや、気になっていることをとことん掘り下げたいと思えば、「おもしろがって、巻き込まれて、ハマる（夢中になる）」ということが自然と起こる。おもしろがるのが学びの原点であるので、先生方は意識してその環境を生徒に提供してほしい。体験だけではそのプロセスは蒸発して消えてしまう。必ず振り返り（**reflection**）とセットで考えてほしい。体験を言語化して自分なりに意味づけを行い、価値づけをして次に進んでいくことが肝心だ。今回のワークショップの成果を気にされる先生もいると思うが、やってみなければわからない。しっかりと「どきどき」が「わくわく」に変わっていくプロセスを自らメタ認知して体験してほしい。

**★似顔絵ストームズ**：相手の顔を3秒間よく見た後、大きな模造紙に3秒間で顔のパーツをサッと描き、1つ右に動く。このようにして、20人くらいで1人の似顔絵を完成させていく。絵が上手い下手の問題ではなく、協働でひとつの物を創りあげる喜びに注目してほしい。“気づいたら夢中になってしまっていた”という中動態の感覚を体感するワークショップである。



**★cubeを用いたTKFモデルの実践**：似顔絵ストームズを体験して感じたことをcube（1辺5cmの立方体）の6面に書き出す。つくって（**T**）かたって（**K**）ふりかえる（**F**）を体験するワークショップである。日常の体験と重ね合わせて現れてきた感情を言語化し、それらの言葉をひとつずつ6面に書いて（つくって）、その言葉を見ながら他者とかたりあい、ふりかえりながら意味づけをし、ストーリーを紡いでいく。気づいたら夢中になっていたという体験と共に、**Feel**（感じる）から **Think**（考える）へと言語化していくプロセスを経て体験が経験に熟成していくのである。

アメリカで学んでいたとき、テレビを通じた教育の可能性にチャレンジしていた人たちを間近に見て、「教育とは辛くて暗いもの」ではなく、「教育はおもしろくていい！」「おもしろくなければ学びではない！」ということに気づいた。自分は努力しても変わらない、挑戦しても仕方がないといった固定的のマインドセットではなく、努力すれば自分はどんどん変わっていけるという成長的マインドセットの姿勢が大切だ。従来の知識伝達型の授業ではなく、一人ひとりが他者や世界と交流しながら知識を構築していく学び（**learn by making**）に変わってほしい。中・高等学校の学校生活の中では、“can not”ではなく“yet”の精神を持ち続けてほしい。まだまだやれるという気持ちはワクワクして楽しい。この楽しさの中にこそ学びはあふれている。Love Challenge!

# 「読書科をベースとした探究デザインの改革 ～学校の全領域に読書を～」

(広島県) 盈進中学高等学校 教諭

上山 朋子

## ◆はじめに

激変する現代社会において、最も求められる力を高める学習となる「探究」が必修化された。生徒自らが課題を設定し、解決に向けて情報収集・整理・分析を経て問題解決に取り組む一連の「探究」学習の指導は、教員にとってもまさに「解なき問い」である。奇しくも世界はコロナという深刻な「問い」に直面し、その結果急速に普及した ICT で「探究」学習はその手法を大きく躍進させている。しかし「読書科」を創設して 32 年目となる本校では、どんな学校にもある「本」という教育資源の価値を信じて疑わない。生徒の掌をスマホが占拠する今、一見「前時代的」に思われる「本」そして「読書」をベースにした探究デザインを試み、新たな学習形態の確立を目指している。



## ◆第 1 章 読書科のはじまり

1904 年創立、119 年の歴史を持つ本校は、1992 年に再開した中学校における特色教育の 1 つとして「読書科」を設置。武者小路実篤やケストナー、魯迅にパウルバッカー古今東西の名著を 3 年間で 100 冊読む活動は一定の成果と社会的評価（1996 年読売教育賞）を得たが、その後蔵書や図書館の老朽化、また学力とのミスマッチ等を理由に形骸化を余儀なくされる。「読書」の価値自体に異を唱える声は上がり教科の消滅は免れたものの、教科としての魅力や教員の熱量は漸減していった。

そこで 2016 年度から「読書科」改革に着手、時代や生徒たちの実態に見合った意欲をかきたてる教材・カリキュラムの見直しを継続的にこなってきた経緯がある。これは、学力のベースが「ことばの力」にあり、読書活動（＝読書科のテーマ「読むことは知ること、書くことは考えること」）にこそ学力向上の普遍的真理があるという信念に基づく改革だった。

## ◆第 2 章 読書科改革の具体

### (1) カリキュラム作り

まず各学年の学びのテーマを設定し、3 年間で 1 サイクルとするストーリー作りに着手した。生徒の成長段階や行事等も十分に鑑み、前半を「仲間と本を読む一体感を味わう集団読書」、後半を「私たちが生きる社会にある課題を解決する修了論文」と定めた。この中に読む・書く・伝える活動がバラエティ豊かに配置されている。

### (2) 本の選定と教材

次に本の選定に取り組んだ。1 万冊の集団読書本は古くて使えず、新たに 1 学年 10 冊、トータル 30 冊のラインナップになるよう選び直した。そしてこれらの本も 5 年おきには見直しを図る。クラス全員で同じ本を読むため 1 作品につ



読書科3年間の学びのテーマとカリキュラム

き 50 冊ずつ用意し、読書の授業は中学校の全てのクラスが図書館を使用できるよう重複しない時間割編成、なおかつ生徒たちの集中力の高い午前中に組んで頂くことにしている。さらにこの読書の授業を誰が担っても指導できるように、全ての教材と指導書を用意した。もちろん教員の個性に応じてアレンジは可能だが、汎用性のあるシステム作りが提供する授業の質を維持する上でも大切だと考えているからだ。本校の読書教育はあくまで全員で取り組んでこそその力を発揮する。教員の参画を実現した取り組みの事例を以下に 2 つ紹介したい。

#### 【事例①】 エリアスタディ (中学 2 年生)

地元を舞台にした作品を読み、実際にその地を訪れる企画を皮切りにエリア学習を開始。お好み焼の本を読んで実際に食べたり、ヒロシマを知るための本を読み読書郵便を送ったり、1冊の本がくれる感動的な体験を教科の枠を超えてプログラム化した。



#### 【事例②】 修了論文 (中学 3 年生)

生徒 1 人ひとりが設定した課題を仮説検証型で探究する本校オリジナルの探究活動。本 3 冊とフィールドワークを必須条件として、すべての教職員が個別指導担当にあたる。なお、まとめは先輩から後輩へのプレゼンテーションでおこない、伝統を受け継ぐ。



### ◆第 3 章 改革の過程で

地道な教科づくりが少しずつ形になり始め、本を通して人と出会うチャンスが 1 つまた 1 つと増えていった。本の作者がお手紙をくださったり、実際に会いに来てくださったりする感動的体験が続いたのだ。修了論文を書いて憧れの建築家に会えた生徒、企業や大学などの第一線で活躍する方たちから探究活動を応援して頂けた生徒も多い。こうした経緯もあって、医師、弁護士、作曲家、研究者などを招聘する「ホンモノ講座」という定期行事が生まれた。読書科をベースにした探究のデザインは、すなわちキャリア教育と軌を一にしている。

あわせて「読書の授業は楽しいですか」というアンケート結果は 9 割の満足度を維持している。一時期見合わせていた読書感想文も、今は全校を挙げた校内コンクールを実施できるようになった。「本って楽しい」——この声聞きたくて、教員も動き始める。教室の学級文庫だけにとどまらず校内のあちこちに本がある風景が広がり始めた。



### ◆第 4 章 これからの読書科

2019 年、本校は新校舎を建設し、以前の 3 倍の敷地面積となった学校図書館が「知の集積地」としてその中心に位置づけられた。2021 年には読書部を設立し、本と図書館を介した人やものとの出会いの場を創出するための仕掛けづくりをスタート。図書館を起点とする本の文化は学校中に広がり、Instagram で生徒たちが発信している。現在は、コロナによって頓挫していた学校図書館の地域開放に向けて再び試行錯誤する毎日が続く。さらに今後は、中学生までの読書科の授業を高校 1 年生まで広げ、現在中学 3 年生がおこなっている修了論文のさらなる深化を目指したい。未来を生き抜く力を引き出す読書科の取り組みをベースにした「探究」は、まだまだ可能性に満ちている。

教育課程部会 ワークショップ

## 「ファシリテーターとしての教員の在り方

～『Yes and』のマインドセット～

株式会社 ONDO 代表取締役／早稲田大学ビジネススクール 非常勤講師

谷 益 美

今日は「ファシリテーターとしての教員の在り方～『Yes and』のマインドセット～」をテーマに、教員がファシリテーターとして成長していくために必要なことを先生方と話し合いながら考えていきたい。「答えがわかっている問いでも発言してくれない」「積極的に手を上げてくれない」という相談をよく受ける。「対話の場づくりで感じる悩み事」を話し合うことから始める。

先生方から「自信が無いから発言しにくい」「恥ずかしいから消極的になってしまう」などの意見が出たが、ファシリテーターには、誰もが安心して何でも言い合える心理的安全性が高い場を意図的に作るなどの全体のコーディネート力が必要だ。学習や対話を促進していくために、インプットの量を減らし、自分で答えを出していく時間を増やしていくといった授業全体のデザインや、コミュニケーションの場をデザインすることもある。一言で表せば、ファシリテーターとは「引き出してまとめる」役割を担うことだ。それを実現していくためには「問いを立てる」、「聞く態度を整える」、「意見が見える化する」ことを意識していきたい。

そもそも「良い問いとは何か」を近くの人と話し合ってもらいたい。「答えやすい・意見を出しやすい問い」、「考えるヒントがちりばめられている問い」など回答があった。つまり、「相手が知りたい、わかりたいという興味を引き出せる問い」。生徒は、自分の発言によって自分の評価をされるというリスクを抱き、自信が無い、恥ずかしいという思いがそれを助長させる傾向にある。様々なコミュニケーションの中で「生徒から教員への発話と教員からの応答」によって、その場の発言のハードルの高さが決まる。だから、教員は「意見を出してくれてありがとう」と声をかけることから始めて環境を整えたい。

相手に色々な影響・効果を与える問いも必要だ。抽象度の高い問いは発言者に負荷をかけることもあるから、問いや質問の目的も精査していくべきだ。ここでは、問いの目的を「自分のための質問」と「相手のための質問」に分けて考える。前者は聞き手が欲しい情報を得るためや、相手の意思を確認するための問いであるのに対し、後者はファシリテーターとしてその場に問いを投げかけていくときや、じっくりと考えさせ対話を引き出させたいときに有効な問い。生徒に、真に考えさせたいことは何かを工夫して問うことで、新しい視点や発想を得ることもできる。しっかりと時間を用意し、話し合いができる機会を与えることも大切だ。

質問を投げかけながら場を作っていくために、3つのプロセスを意識したい。それは「問い」「対話」「見える化」だ。単に相手に質問するのではなく、「問い」に対する材料や情報を添えること、考えた内容に対して「対話」する場、発言しやすい環境を設定し、出てきた意見を「見える化」する。出された意見にプラスしていくことで、“Yes and”とつながっていく。

相手の状況を受け止めながら、色々な意見を「言ってくれてありがとう」と相手の気持ちを考え、想っていることを伝えることで学び合いが始まる。問いを重ねていく中で、大切なことを伝えながら、生徒の可能性を最大限に引き出せる学びの場を創りあげてほしい。



## 「地域のキャリア開発のプラットフォーム化を目指した キャリア教育プログラム群の開発」

(香川県) 大手前高松中学高等学校 教諭

合 田 意

### 1. はじめに

本校は香川県高松市にある私立の中高一貫校の進学校である。R5は中学6クラス176名、高校28クラス713名の計889名が在籍している。R5の合格実績は204名の卒業生のうち国公立合格が82名、うち23名が総合型・推薦型である。『品位ある人格の陶冶と、力の教育とを伝統とし、知性情操の両全を目指し、公共の福祉に貢献できる、指導的社會人を育成せんとする。』という建学の精神のもと、次世代のリーダーを育成する教育の実践を目指している。



### 2. 実践の背景・目的

地方の私立進学校において、国公立大学や有名私立大学の合格実績が生徒募集における非常に重要な訴求要件の一つである。その要件を満たすことを目指せば、生徒の県外進学志向をより高めることとなり、卒業生が県外へ多数流出し、就職時に地元に戻ってこず、結果として地元のマーケットである人口が先細りするのを自ら助長しているという構造的課題があると考えている。そうした課題を解決するために、進学校において、進学だけにとどまらない生徒のキャリア意識向上の機会や、地元も将来の就職の選択肢に入っているようなタッチポイントを授業の中に設けることを、総合的な探究の時間を中心に進めると同時に、その授業を地元企業の若手社員のキャリア意識向上やスキルアップの場にするすることで、学校を地域のキャリア教育のプラットフォームにするという方向での活動を構築している。

### 3. 実践の概要

R5現在、本校では中学で3単位、高校で1単位の総合学習・総合探究の時間を確保しており、様々な活動を行っている。これらの内容について概要を報告する。

①中1「ICT×SDGs」では、1・2学期にNTT Com.とJA香川県と連携し、「地産地消」を促進するための販促POPや動画を生徒が作成する取り組みを実施している。この活動から生徒は、自分

の作りたいものを作ればいいのではなく、クライアントが求める条件の中で自己表現をしていくことが必要であることを学ぶとともに、地元の企業や産業に目を向ける機会を得ている。3学期には、地元のYouTuberと連携し、社会課題解決のための動画作成を実施している。

②中2「課題探究」では、(株)エナジードの提供する教材ENAGEED COREを活用して、これからの時代を生き抜くために必要な思考法・マインドセットを学んでいる。中1で実地体験をしてから中2で方法やマインドセットの学習という、いわば逆転の順番で学びをデザインすることで、より深くマインドセットの習得に繋がることを狙っている。

③中3「Social Business」では、前期にプレゼン大会ENAGEED SUMMITに向けて、身の回りの課題を選び、その解決アイデアをビジネススペースで考える授業を行っている。今年度は蛍光ペンがかすれてしまってストレスであるという問題を取り上げた生徒がプレゼン大会で優勝し、その後文具メーカーと協働しなが

### 現在行っている探究活動

高3	総合探究(EXPOなど)		
高2	総合探究(locusなど)		＝地域企業と連携
高1	総合探究(プロジェクトToBeなど)		
中3	Social Business	表現技法Ⅲ(お笑い)	総合探究(1年先取り)
中2	課題探究(ENAGEED)	表現技法Ⅱ(演劇)	国際理解
中1	ICT×SDGs	表現技法Ⅰ(プレゼン)	地域理解



ら新商品開発に向けた可能性を模索するところまで行きついている。後期は今年度より J3 クラブのカマタマーレ讃岐と連携し、観客動員数を増やすためのイベントを生徒が企画し、実行するという取り組みを進めている。

④高1「プロジェクト ToBe」は本校の生徒・教員・地元企業の社員・地元出身の若手社会人のチームで開発した探究プログラムである。地元企業の若手社員さんに出講していただき、企業紹介と自身のキャリアについて講演していただいたのち、自社が抱える課題を提示していただく。生徒はその課題を分析し、解決するアイデアを考えてプレゼンする。社員さんにはそのプレゼンを「自身の立場で実行に移すとしたら」という前提で、アイデアをレベルアップさせてもらい、生徒に逆プレゼンをしてもらうことで、生徒は社会人との差分を感じ、これからのキャリアプランをリアルに考えていくようなプログラムである。事前と事後のアンケート比較で、生徒のキャリア意識に明確な上昇が見られ、地元就職志向にわずかな上昇が見られている。また、生徒の企業認知・企業イメージがともに大幅に上昇しており、就職のきっかけ創出だけでなく、将来の顧客創出にも寄与する可能性が高いことが示されている。また、出講社員のアンケートでも自身の価値観が広がり、仕事に繋がる良い気付きが得られたなどの意見が多数を占めており、若手社員の成長の機会になっているといえる。

⑤高2「locus」ではマイナビの locus を利用し、地域企業を訪問し、課題をヒアリングし、解決アイデアを考え、プレゼン動画を作成し、フィードバックをいただき発表にまとめる取り組みを実施している。前年度と似たようなことをレベルアップさせて実施することで、生徒の前年の学びを生かす場を作っている。

⑥高3「EXPO」は、学校をクライアント、生徒を広告代理店と見立てて、公立中学に配布する学校紹介パンフレットを生徒が作成するという取り組みである。作成したパンフレットは実際に中高連絡会で公立中学に配布し、非常に好評であった。

#### 4. まとめと今後の課題

本校ではこうした探究活動を始めてから推薦型・総合型の国公立大学合格が激増した。こうした活動は進学校では学習時間が奪われるため敬遠される傾向にあるかもしれないが、むしろ積極的に実施していくことで進学実績に繋がると考える。また、地方の私学にとって地元企業と連携した活動は学校にとって利益があるだけでなく、企業にとってもメリットのある Win-Win の関係を築けるものであるが、これも見落とされがちである。ぜひ多くの学校で取り組んでみてほしい。

一方、今後の課題は探究活動を実施して終わりではなく、こうした活動を経験した生徒たちをトレースし、一定程度地元就職に繋げていくネットワークを構築することである。そうした卒業生のネットワークにアプローチしたい企業をはじめとして地域に更に貢献することを目指したい。

## 教育課程部会

### 「総括」

英明高等学校 校長  
西本 泰三

教育課程部会は「新たな社会の創り手の育成～個別最適かつ協働的な学びへの転換～」をテーマとして、これからの時代をリードする新しい私学教育の教育課程を研究目標として開催いたしました。

当部会では2名の講師による講演・ワークショップ、そして、2名の学校現場の先生からの実践発表を通して、学習環境デザイン・キャリア開発等これからの学びとそれを実践していく教員としての新たな役割について考察することをねらいとして行いました。ご講演、ご発表頂いた先生方に厚くお礼申し上げます。

午前の上田先生の基調講演は6月に開催された「私立学校専門研修会・教育課程部会」でのワークショップからの継続というものでした。事前に会場レイアウトが変更となったり、ワクワクするようなプログラムであり、「プレイフル」をキーワードに可能性へのチャレンジ精神でどんどん活動しながら可能性を広げていきました。たくさんの人と関係を紡いでいくということが本当に楽しいことなのだと感じさせられました。そして、楽しさの中に学びがあふれているということを改めて感じさせられました。続いて、広島県・盈進中学高等学校の上山先生から「読書科をベースとした探究デザインの改革～学校の全領域に読書を～」のテーマの実践発表を頂きました。盈進中学高等学校の独自のひとつづくりの三教科という柱、中でもオリジナル教科である「図書科」は全ての学力の基盤となる言葉の力を養い、自分を知り、この世界で起こっていることを見つめ、各自が考え、課題解決を行っていくものでした。分野を横断した中で、全教員がその活動に関わっていく探究をデザインしていくという内容で本当に素晴らしいと感じました。そして、午後からのワークショップでは株式会社 ONDO の谷先生に「ファシリテーターとしての教員の在り方～『Yes and』のマインドセット～」というテーマで行って頂きました。我々が常日頃行っております協働的な学びを実現していく上で生徒が発言しにくい状況でうまく意見や考えを話しやすい場を作る等ファシリテートしていくノウハウが詰まった内容でありました。また、先生がワークショップを進めていく上で iPad や ApplePencil などの ICT 機器を巧みに使って私達の前で実践されている姿は我々が ICT 教育を進めていく上での参考になりました。最後の実践発表では香川県・大手前高松中学高等学校の合田先生より「地域のキャリア開発のプラットフォーム化を目指したキャリア教育プログラム群の開発」をテーマに社会と繋がる探究学習は地元企業との協力の下、中学から高校まで段階をおって実践しており、生徒は働く大人との関わりの中で知見を広げ、ソーシャルビジネスの課題を一つ一つ選び、深掘りし、最終的には企業が今抱えている悩みを解決するアイデアを発表するというものでした。社会に出るまでに見つけるべきスキルについて考えるきっかけとなり、進路選択へと繋がっていくようなものではなかったでしょうか。

是非、今回の学びを各学校に持ち帰って頂き、他の先生方と共有すると共に、各学校の校風や現状に合わせて更なる発展をして頂くことを期待しております。結びに多くの先生方が香川県にご参集頂き、本当にありがとうございました。ご参加頂きました先生方とのご縁が続き、次の大分大会に繋がることを祈念いたしまして、総括とさせていただきます。

# 法人管理事務運営部会

近年、少子化が進み、社会情勢が大きく変容する中、必要とされる人材や働き方に対する個人の意識も変化を見せている。若者の多くは自らの価値観やライフサイクルを重視しつつ、自分の力を存分に発揮できる職場を求めているといえよう。学校現場、特に私立学校では、建学の精神に基づき生徒を育み、教育目標の実現に向けて各校を支える教職員の確保・養成は喫緊の課題である。意欲ある教職志望者、前途有望な人材を確保するためには、教職員が日々やりがいと幸せを感じることでできる持続可能な職場づくりは、私立学校にとって急務であろう。

当部会は、①Well-being 実現のための組織改革、②部活動、③保護者対応の3つのテーマを取り上げ、講演や研究協議（全体会）を通して、参加者それぞれの学校における持続可能な働き方・組織のあり方について考える場としたい。

- 1 研究目標 私学だからできる持続可能な働き方とは
- 2 会 場 JR ホテルクレメント高松 3階「玉藻（東）」
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務局長、事務長またはこれらに準ずる管理職及び事務担当教職員、部活動担当教員
- 4 参加人員 105名
- 5 日 程

月日	9		10		11		12		13		14		15		16	
	15	30	30	45	15	30	45	15	30	45	15	30	45	15	30	
11月10日 (金)	開 会 式	講演Ⅰ		講演Ⅱ		昼 食		講演Ⅲ		研究協議 (全体会)		閉 会 式				

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (合田 誠／古本 果奈)	機材担当：新明 邦俊 記録(写真)担当：古本 果奈 集録担当：古本 果奈
9:00	開 会 式  1. 開式の辞 2. 専門委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：谷 繁久／記録：古本 果奈  法人管理事務運営専門委員長 工 藤 誠 一
9:15	講 演 I  演 題 「教職員の『働きやすさ』と『働きがい』を高めるリーダーシップ実践」 講 師 露 口 健 司 愛媛大学大学院教育学研究科 教授	司会：谷 繁久／記録：古本 果奈 講師紹介：大野 裕江
10:30		

10:30	講演Ⅱ	司会：谷 繁久／記録：古本 果奈 講師紹介：大野 裕江
12:00	演題 「学校教育活動の一環としての部活動の意義と役割～教育社会学の観点から」 講師 西島 央 青山学院大学コミュニティ人間科学部 教授 コミュニティ人間科学科	
13:00	昼 食	
14:30	講演Ⅲ	司会：谷 繁久／記録：古本 果奈 講師紹介：大野 裕江
14:30	演題 「保護者対応の視点と実践」 講師 佐藤 晴雄 帝京大学 教育学部長・教授	
15:45	研究協議（全体会）	司会：谷 繁久／記録：古本 果奈
15:45	テーマ 「私学だから出来る持続可能な働き方改革」 指導助言 法人管理事務運営専門委員 コーディネーター 谷 繁久 四国学院大学香川西高等学校 教頭（運営委員）	
16:00	閉会式	司会：谷 繁久／記録：古本 果奈
	1. 開式の辞 2. 総括 3. 専門委員長挨拶 4. 閉会の辞	法人管理事務運営部会運営委員長 草 薙 浩一 法人管理事務運営専門委員長 工 藤 誠一
16:00	解散	

#### 7 講師（順不同）

露 口 健 司	愛媛大学大学院教育学研究科	教授
西 島 央	青山学院大学コミュニティ人間科学部	教授
佐 藤 晴 雄	帝京大学	教育学部長・教授

#### 8 運営委員・指導員（順不同）

委員長 草 薙 浩	四国学院大学香川西高等学校	校長
副委員長 大野 裕江	香川誠陵中学高等学校	教頭
委員 谷 繁久	四国学院大学香川西高等学校	教頭
合 田 誠	四国学院大学香川西高等学校	事務部長
新 明 邦 俊	香川誠陵中学高等学校	教諭
古 本 果 奈	香川誠陵中学高等学校	教諭

#### 8 専門委員・指導員（順不同）

委員長 工 藤 誠 一	聖光学院中学高等学校	理事長・校長
委員 下 屋 浩 実	高山西高等学校	理事長・統括校長
服 部 泰 啓	学校法人信愛学園	理事長
摺 河 祐 彦	姫路女学院中学高等学校	理事長・校長
川 島 英 和	学校法人川島学園	理事長

法人管理事務運営部会 講演 I

## 「教職員の『働きやすさ』と『働きがい』を高めるリーダーシップ実践」

愛媛大学大学院教育学研究科 教授

露 口 健 司

文部科学省の「質の高い教師確保特別部会」に参加している私の役割は、教員養成の現場から意見を述べることだ。座長と私が教育学部の教員養成の現場にいるが、今、そこで特に議論されているのが勤務時間の話だ。行政の施策の成果指標も、勤務時間がどれだけ短くなったかとか、どれだけ早く帰れるようになったかを評価するが、それに警鐘を鳴らしたいと思っている。時短で働きやすいことは大事だが、教職の魅力は働きがいにある。両立させる手立てはないだろうかという意識で調査研究を進めている。

働き方改革の定義は、文部科学省と厚生労働省でかなり異なる。文部科学省の働き方改革の目的は「教師が疲労や心理的負担を過度に蓄積して心身の健康を損なうことがないようにすることを通じて、自らの教職としての専門性を高め、より分かりやすい授業を展開するなど教育活動を充実することにより、より短い勤務で、これまでわが国の義務教育で上げてきた高い成果を維持向上」で、時短が入っている。働き方改革を通じて先生方のコンディションを良くし、教育効果を維持向上させようということ、子どもたちのためというメッセージが入っている。書き出しから時短に触れているので、先生方が大変だということが注目されている。一方、厚生労働省の定義は「働く方々が個々の事情に応じた多様で柔軟な働き方を自分で選択できる」である。先生方も含む労働者全体が多様で柔軟な働き方を選択できるという主体性がある。働き方の多様化、弾力化、主体的選択の実現に価値を置いて実現できる、実感できる魅力ある職場作りを目指している。

最も重要なのは職場をどう作っていくかだろう。だが、文部科学省の定義には、職場作りという発想はない。職務、職業、職能の議論は多いが、職場の議論は抜けているのだ。その話があまり出てこないのが、文部科学省主導の働き方改革議論の特徴だ。様々な魅力のある職場づくりと、教員の増加や外部人材などの人的リソースを最終的に落とし込んでいくのはそれぞれの学校であり、管理職の方々であることが前提になっている。魅力のある職場を作り人材確保をし、業績を上げ利益を増やすという好循環を目指せば前向きになれるものだ。その点で文科省の定義はマイナスからゼロのような印象なので、もう一度目的を考え直したほうがいいのではないか、ということとところで、9月の会議の資料の中に、文部科学省による働き方改革の目的の再編がある。目的文には勤務時間の短縮も入っているが、働きがいという意味合いの言葉は入っていない。やりがい搾取だといわれたりするので使っていないのだろう。その代わりに、学ぶ時間の確保が大きく入った。先生方の幸福感を高めるウェルビーイングも入っている。

私が大事だと思うのは、働きやすさと働きがいの両立だ。働きやすさは、教員の健康、安全、福利厚生の充実によって、ゆとりを持って安心して働ける組織、職場によって達成される。働きがいは、仕事を通しての達成感、充実感を得て成長できる組織、職場から生まれる。

働きやすさは平成31年辺りから言われるようになったが、逆に働きがいは、やりがい搾取という言葉が出てきて、強調しづらくなった。しかし、働きやすさを追求して働きがいを失っている先生方がたくさん出てきて、抑うつ傾向が上がっている。今まで取り組み評価されてきた成果を、やらなくていい、悪だといわれているから、自分の教職人生が否定されたように感じているのだろう。ベテランの多い市町村になるほど時短を目指して抑うつ傾向になる現象が起きている。やはり両方が必要なのだ。校長先生には、時短だから帰れというだけでなく、先生方が日常的に達成感、充実感、成長感が得られる場を作るマネジメント力が問われる。教職には専門職、聖職、労働者職の要素があるが、時短で健康を目指すのは労働者職、働きがいを目指すのは高度専門職としての働き方だ。



ワーク・エンゲージメントという概念がある。働きがいという生活用語の科学的な概念で測定方法だ。ウェルビーイング、幸せを実感するためには、教職についている40年間の働き方を弾力的にすべきだろう。若い時には仕事を覚えるために熱心に働くけれども、結婚、産休、育休、介護を両立させなければならない時がある。健康によってペースを落とさなければならないときもあるだろう。その後、また熱心に働くといった、長いキャリアの中で温度差をつけていく必要がある。オランダの調査では、教師が若い時からワーク・ライフ・バランスを考えて働いている場合、3年経っても成長していないという結果が出ている。例えば、若い時には勤務時間が終わったらすぐに帰るのではなく、同僚の先生から学ぶ姿勢が必要だろう。高度専門職として学び続ける前提でキャリアデザインをしていかなければならない。しかし、ルールや管理することが多くなり書類が増えると、キャリアデザインのためではなく、それら进行处理するために勤務時間が長くなる。教育委員会などは管理を強化する傾向にある。この悪循環を断つためには自分で裁量できる自由度を上げないとならないのだが、そのためにも高度専門職としての教師像を目指せるようにする管理職のマネジメントが大事だ。働き方改革は、学校の管理職次第だろう。研修をすると、最後は教師の意識改革だと言われがちだが、その部分はもう終わっている。次は意識を変えなくても変えられる運営体制が求められている。先生方のペースで、やり方で、大事なものは大事にされながら帰れる自由、勤務の形を選べる自由のある職場が求められているのだ。帰れというだけでなく、マネジメントで変えていき、仕事を量から質へ転換することである。例えば、特別支援学校は、勤務時間でいえば最も短く、部活もない。どの教師も早く帰っているが、抑うつ度は最も高く、精神的に最も苦しい状態だ。つまり、時短して早く帰っても抑うつが解消できるかあやしいということだ。定時制、通信制の学校の先生方は、残業はほとんどない。ところが、抑うつ度はとても高く、やりがいはとても低いのだ。つまり、時短にすれば良いというわけではない。残業0で帰れる世界が極楽のようなイメージがあるかもしれないが、違う可能性もある。仕事を通して働きがいを感じられるかどうか、質が求められるのだ。働きがいなくなると離職が起こる。働きやすさが欠けると休職が増える。先生方を引き留める意味でも働きがいは大事なのだ。

それから信頼も大切である。子どもとの信頼関係がないなかで働きやすさ、働きがいは生まれにくい。誰も授業を聞かず騒がしいクラスで働きやすいなんて思えないだろう。保護者との信頼関係はどうだろうか。親がクレームを入れてくるなかで働きやすさ、働きがいを感じるのは無理だ。同僚や上司と対立し、孤立しているなかでも働きやすさ、働きがいは感じられない。職場での信頼関係は社会資本、組織のなかでの資本で効率化の機能もある。

そのマネジメントはどうすればいいのだろうか。例えば、家庭訪問は、6月に初めて保護者に会うのではなく、4月の早い段階で対応して信頼関係を作れば、良いスタートが切れるだろう。自分の幸せだけで止まるのではなく、子どもや他の人たちの幸せも含めた私たちの幸せを周りの人たちとどう実現させていくか。さらに今の仕事だけではなく、未来の仕事を楽にするために今ちょっと努力する、頑張ることもあるだろうし、仕事をおもしろくする発想も重要だろう。それから教師の使命をもう一度考えていく必要もあるかもしれない。社会貢献や人への貢献といった基本を忘れ、使命を忘れると働きがいが低下する。子どもたちも、自分が幸せになってほしい人たちが幸せになっているのが、自分の幸せなのだ。

実は今日のテーマである「学校が働きやすさと働きがいを両立する職場であることが大事だ」ということは中教審の2022年度の答申にも、今回の緊急提言にも出てきて、行政にも入っている。しかし、教員不足、受け皿不足によって実現しにくいのだ。教師確保特別部会大会では見ているものが違うのか、私は都市部の方々との実感が共有できなかった。私は愛媛県から来たが、香川県でも同じではないだろうか。地方の実情が考慮されていない都会の論理で、なぜできないのかと言われる。我々も考えて努力はしているのに理解してもらえない。年齢の問題もあって、若い先生の多い学校は時間がかかっている。教員の属性もある。日本の中学校は男性教師の割合が最も多く、60%を占めている。そんな国は他にない。欧米のOECD加盟国は70%が女性教師である。この男社会で、他の国にはない部活動をしている。校長先生の9割は男性だが、韓国と並んで世界一だ。前提が違うのに、欧米並みを目指せということになっている。マネジメントに関しては私立のほうが良いだろう。公立の校長の在校年数は2年でどんどん変わっていく。これでは落ち着いて改善することはできない。

親や同僚との信頼の価値を過剰に重んじ、丁寧にしすぎると時間がかかるようになる。例えば、赤入れや

宿題チェックなどのフィードバックはどうだろうか。負担だと思う場合もあるが、学力向上効果が高く重要だ。エビデンスでは3位である。これを勤務時間が長くなるから止めて早く帰るといふことになると、優先順位としてはどうだろうか。何をカットしていくか、優先順位の決め方が重要だ。

専門職性、聖職者性、労働者性の職業属性では、前二者が強い考え方だと勤務時間は長くなる。これはキャリアに応じて割り切りが必要な時期が必ずあるので、ずっと同じバランスはあり得ない。キャリアに応じて変わっていくものだ。格差抑止の使命感もある。地方の学校で他に教育の代替機能がないところは学校が最後の砦だ。塾やスポーツの受け皿がなく家庭や地域に任せると格差が生まれる。そこを先生が引き受けているのだ。止めた方が楽だが、ここでしなければ習得できない環境だからだ。特に高校には勤務時間が長い学校がたくさんある。時短が求められている今必要なのは、人的、物的、財的資源である。学校の社会関係上のつながりと信頼づくりも重要だ。国や教育委員会、理事からは資本提供を、現場では信頼づくりが重要になってくるだろう。

働き方改革の目標成果指標はどうなっているだろうか。学校で作られている目標は似ている。中教審から出てきて、大事なものは成果指標だ。働き方改革がうまくいったかの判断基準をどこに置けばいいだろうか。大半の都道府県市町村学校は時短を基準にしている。公立の場合は45時間未満としているだろうか。私たちはまず、80時間以上を0にするなどのスモールステップで行く予定だ。実態調査の結果、80時間だったものをいきなり45時間にするのは無理がある。少しずつ達成して最終的に45時間にするということだ。時短は測れるので指標化しやすいが、働きがい指標にするのは見えないのでむずかしい。働き方改革がうまくいったかどうかは、先生方の幸せの実感とウェルビーイングが上がったかどうかで、見える化できないが、大事なことだ。時短をして抑うつが下がったかも見ていく必要がある。職能開発も必要だ。業務改善して時間を生みだしたら、プライベートの充実と共に高度専門職として学びに時間を使ってほしい。これらが学校の働き方改革の指標に入っているだろうか。

この度、文部科学省も再編で学ぶ時間の確保やウェルビーイングなどに類する言葉を入れているので、都道府県によっては働き方改革の成果指標に加え始めている。時短だけでなく総合的に見ていかなければならない。時短をして抑うつを下げる相関性は低い。健康・安心の価値を追いかける、辞めない休まない職場づくり、先生方の幸せなどである。働き方改革といったら働きやすさの改革だが、今強調したいのが職能開発。学ぶ機会をつくりワーク・エンゲージメントを高める。また、日常的な達成感、充実感、成長感を高め、幸せを実感することである。目指すは働きたい職場づくり、10年後、30年後もいたい職場にして離職を防ぐことだ。世界的にもこの路線は大事だ。

幸せは信頼によっても大きく左右される。子ども、保護者、同僚上司と信頼関係をどう作っていくかも大きいのだ。これら幸せをどのように「見える化」しているか。OECDでも使っているスケーリングメソッドでアンケートをしている。この1ヶ月先生方は幸せだったかを0から10点で答えてもらう。7点の場合は、その引いた3点の理由を問うと、幸福感を損ねている現状がわかるのだ。回答が0から3点の場合は病気になる確率が高いそうだ。国民生活基礎調査での日本人1万人の平均は5.74。10から引いた点数を考えると、自分の幸せを蝕んでいる要素が分かるわけだ。

ワーク・エンゲージメントが日本で広く知られるようになったのは、慶應大学の島津明人先生が『ワーク・エンゲイジメント』という本を2014年に出されてからである。定義は、仕事に対するポジティブで充実した心理状態と、活力、没頭によって特徴づけられる。エンゲージメントは特定の対象、出来事、個人、行動などに一時的に向けられた状態ではなく、仕事に向けられた持続的、全般的な感情認知だということだ。仕事がおもしろい、頑張っているという状態である。四次元マトリクスにしてみると、仕事への態度認知は快、おもしろい、活動水準がプラス、つまり頑張っているのがワーク・エンゲージメントということになる。ワーク・エンゲージメントの対極がバーンアウト、つまり燃え尽きだ。仕事が嫌で動けない状態である。ワーカホリズム、長時間追い立てられるように働くのとも違うので、混同しないよう注意が必要だ。職務満足とは、仕事がおもしろいけど少し水準を下げようということ、つまり「余は満足じゃ」という状態である。日本は5、6年これでやってきた。しかし、民間企業は今、エンゲージメントのほうに向かっている。エンゲージメント・スタイルで、熱く燃えて引っぱってくれる人がいないと国際競争で勝てないからだ。学校も同じではないだろうか。どこの組織も、みんなが「余は満足じゃ」状態になってしまうと経営は保たないだろうし、

みんながエンゲージメントになると暑苦しい職場になって逆効果である。

子育ての時期など、キャリアに応じて職務満足も必要だろう。例えば、愛媛県の小中学校では、子育て世代である30代女性教員の幸福感はとても高い。改革の成果が上がっているのだろう。安心して子育てができる環境でないと、次の世代が教職を目指してくれない。しかし50代女性教員の幸福感は低いのだ。これは男性の管理職比率が高いために、いつまでも担任などの現場を任されているからだ。性別の差がはっきりと出ている。

ワーク・エンゲージメントは次の9項目で測定されることが多い。回答は、全くない0点、ほとんど感じない1点、ときどき感じる3点、よく感じる4点、とてもよく感じる5点、いつも感じる6点で集計される。1問目、仕事をしていると活力がみなぎるように感じる。2問目、職場では元気が出て精力的になるように感じる。3問目、仕事に熱心である。4問目、仕事は私に活力を与えてくれる。5問目、朝に目が覚めると、さあ仕事へ行こうという気持ちになる。6問目、仕事に没頭しているとき幸せだと感じる。7問目、自分の仕事に誇りを感じる。8問目、私は仕事にのめり込んでいる。9問目、仕事をしているとつい夢中になってしまう。この測定は世界中で使われていて、精度の高さが評価されている。リクルートの子会社が行った調査で、日本の民間企業の平均は23点だった。世界的に見ると最低水準で、管理されすぎの傾向があるようだ。公立学校の教諭の平均は30点で、管理職は37点。やはり自由度の高いほうが働きがいが高くなるようだ。島津明人先生のホームページでは無料でワーク・エンゲージメントの測定ができる。昨年11月の文部科学省の教員勤務実態調査では、先生方のワーク・エンゲージメントの測定のため、1、3、8問目のショートスケールが使われていた。令和5年度末の詳細分析で触れられるだろう。愛媛県では全職員対象のワーク・エンゲージメント調査を年1回している。残念なことに、毎年働きがい下がり、抑うつが上がっている。

国も関心を持って測っている。時短で抑うつになるというのはK6という尺度を使っている。無料で使用できるので、法人や学校で測定してみて比較ができる。絶望的だと感じたか。そろそろ落ち着かなく感じたか。気分が沈み込んで何が起ころうとも気が晴れないように感じたか。何をすることも骨折りと感じたか。自分は価値のない人間だと感じたか、という質問だ。ストレスチェックにも入っている。抑うつのスクリーニングによく使われているが、カット・オフ・ポイントというのがある。5点以上はイエロー、心理的にいい状態ではないので、注意が必要だ。10点以上はオレンジでハイリスクである。カウンセリング推奨のレベルだ。13点は超ハイリスクで医師の診察を受ける必要がある。誰に配慮すればよいか明らかになる方法だ。国も働きがい、幸せ、抑うつなど、世界中で使われている尺度を使って教育勤務実態調査を行い、日本の教員の幸福感を「見える化」しようとしているわけだ。各県の教育委員会では、今いわれているDXを使って、先生方の働き方の状況を把握している。年齢別、性別別、部活をしているか、などがクロス集計できるようにし、各校にフィードバックしている。校長はこの結果を踏まえて2月に研修をする。次の年度の初めには教頭先生が共同研修で同じ資料を使うのだ。データを返すだけでは終わらないように、次にどうしたらいいかを考えてもらうためにフィードバック型の研修をするわけだ。結果はこれから出るだろう。支援学校の先生方は45時間未満が多いにもかかわらず、抑うつも一番多いのだ。高校の先生は、部活と学習指導があるので長い。80時間を超えるのが28%。高校と特別支援学校はアンケートの回収率が85%以上なので、信ぴょう性は高いだろう。義務教育の回収率は55%ほどだ。公立の小中学校で80時間を超えているのは若い先生が多い。職位で見ると主管が最も長い。校長先生は最も早く帰っている。勤務時間の長い人の幸福感は蝕まれていて、抑うつは上がっていく。無茶をしないで自分のペースで仕事をすべきだ。100時間を超えている先生は、子ども、保護者、同僚、管理職に対して信頼関係の得点が一番低い。仕事を抱えこんで孤立し、周りとも共有できていない先生は労働時間が長くなるわけだ。仕事をシェアすれば早く帰れるようになる。幸福感について、小学校の先生は、一般成人の5.75に比べて、6.49で高い。特別支援学校は5.98で苦勞している。小、中学校の先生方を年齢別に見ると、年を重ねるほど幸せだという結果になっている。若者を犠牲にしながら年寄りも幸せになるという日本の縮図のようだ。小、中学校の先生方を職位別に見ると、県によって違いはあるが、校長が7.5で最も幸せだ。大変だといわれる教頭先生も意外に幸せな県もある。仕事を抱えこまず、シェアしているからだろう。県立高校でも教頭先生が意外と幸せのようだ。校長先生ももう少し負荷がかかってもいいかもしれない。ワーク・エンゲージメントについては下降気味だが、31と高いとはいえる。中学校で30.2、高校28.3、特別支援学校は28.6。この結果はコロナ禍が影響しているのだろう。部活や行事、技能系の教科で、先生にとっての働きがいは失われていたのだろう。コロナが明けつつある令和5年11月までの



調査の結果で、対策しなければならぬかわかるだろう。

ワーク・エンゲージメントのクロス集計を見ると、教師になったばかりのときの働きがいは高いが、20代後半になると下がる。その後、年を取るほどにまた上がっていく。再任用になると授業だけなど好きなことをするので働きがいを感じるようだが、高校からは指導要領が変わっているのという苦情が出る。ICT問題もある。校長先生などの働きがいは高いのは、ポストが上がると自由度が上がるせいだろう。若い先生の場合は、指示され、管理されることが多いので働きがいを感じにくくなる。もう少し裁量、自由度を与えていくことも重要だろう。民間企業の調査でも同じ結果が出ている。抑うつはじわじわ上がってきている。世の中では小学校の先生が最も大変だといわれているが、幸福度は最も高く、抑うつは最も低いのだ。中学校、高校は高く、特別支援学校は最も高めである。K6の度数分布を見ると、先ほどの質問に対してすべて0の先生が20%もいる。高い人は高く、ロングテールも高い。抑うつも年齢を重ねると下がるので、若い先生が多いと幸福度、働きがいは低く、抑うつは高い職場になる。部活はほとんど関係ない。職位で見ると、校長の抑うつ度が圧倒的に低いが、ストレスに強いから校長になっているのか、本当に楽だからかのどちらかであろう。一般成人の場合、ハイリスクが10.3%で、10人に1人が抑うつ調査で10点を超える。教員の場合は、小学校17.4%、中学校20.5%、高校22.6%、特別支援学校23.8%で、一般成人の倍以上いる。民間と比べて働きがいはあるが、心理的負担が重く、抑うつ度も相当高いのだ。

働きがい、ワーク・エンゲージメントを上げ、抑うつを下げるにはどうしたらいいだろうか。注意すべきは、早く帰っているが働きがいが低いケースだ。早く帰らされているだけで仕事を持ち帰って、結局家でしている可能性がある。業務改善なき時短をしているわけで、コミュニケーションの頻度が下がり、抑うつ度が高く、幸福感が低くなる。今回提示した公立学校のデータでは教職がブラックなのではなく、どの自治体で働いているかが問題だということが分かる。教育委員会のあり方が大きいのだ。学校単位で見ると、抑うつ度が高く、働きにくい、働きがいも低い学校上位25%は同僚との信頼関係もない。抑うつ度が高い学校のなかには、先生方が早く帰る学校がかなりある。早く帰るだけではだめなのだ。早く帰るプラス働きがいを目指すべきだろう。それには信頼関係を作るとするのがひとつのきっかけになるだろう。中学校の場合は、長時間労働が蔓延している学校でも先生方は抑うつが低く、幸せいっぱい、同僚との信頼もあるようだ。部活動を頑張っているなら、子どもたちの熱意の高い学校で、先生方がそれに応えているということなのだろう。中学校は長時間勤務の問題よりも働きがいの欠如のほうが問題なのだ。長時間勤務は改善しなければいけないので、部活動改革を進めているが、小学校とはだいぶ様子が違うということだ。高校の場合は、子どもや親が熱心な文武両道の進学校が長時間勤務になる。追跡調査をすると、別の学校に異動すると長時間勤務をやめている先生が多いので、子どもたちの熱意に反応している先生方が多いようだ。

最後に組織開発の研修についてお話ししたい。この研修では、働きがいゾーン、負担感ゾーン、手抜きゾーン、焦りゾーンが記されているシートを使う。携わっているいろいろな仕事を付箋紙に書いて、みんなでそれぞれのゾーンに貼っていき、それぞれ検討する。多くの先生が負担を感じている仕事を検討して変える。働きがいのある仕事は残す。焦るのも抑うつストレスの原因なので注意するなどだ。働きがいのツボはそれぞれ違うので、付き合ってみると相互理解が進むし、プライベートな話もできる。なぜあの先生がいつも早く帰るのか事情がわかって、納得もいくようになる。誰が何をしんどいと思って、どんな負担やつらさを抱えていて、何に働きがいを感じているかを校内でやってみるのだ。一律時短にするというのは、働きがいを削る恐れがある。削るのは、負担感が大きかったり、手抜きができたり、焦りを感じる仕事で、働きがいは維持向上させるという考え方だ。負担を感じる業務には「意味、意義がわかりにくい。子どもから距離がある。保護者対応、生徒指導を含め残業が何時に終わるかわからない」などの共通点がある。やらされ感のある業務も減らすべきだろう。この研修は1度だけではなく、フォローアップも行い、強みを持っている同僚の話聞くなど研修のようにして続けていくことをお勧めするといいたいだろう。

法人管理事務運営部会 講演Ⅱ

## 「学校教育活動の一環としての部活動の意義と役割

～教育社会学の観点から～

青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 教授  
西 島 央

私が 1990 年代後半に部活動の研究を始めた当初は、学会などの学術的な機会でも部活動が研究テーマに取り上げられることは滅多になかった。その状況で私は、学校現場では部活動の意義とか役割の範囲でどういう課題があって、その課題をどう解決をしていく必要があるのかということ論じてきた。教員の多忙の大きな要因は部活動だという雰囲気になってきたのは 2015 年頃だ。「ブラック部活動」という言葉も出てきて、部活動の推奨がしにくくなっていった。そうした社会の空気のなかで、部活動にはこういう役割、機能があると言える機会はほぼなくなった。私立学校のなかには、部活動を極力止めたい、減らしていきたい、または、ほどほどに続けられればいいと考えている学校もあるだろう。一方で生徒の技能向上に力を入れていきたい、学校経営上必要だと考えている学校もあるだろう。今回、学校教育のなかで部活動はどのような位置付けなのか、どんな役割があるのかということ幅広くお話しし、そのなかで私立学校の場合はどう考えていけばいいか、何かヒントをお伝えできればと思う。



まず、中学校を例に、部活動の実状を確認しよう。中学校の全国平均の規模は生徒数が 300 人強、運動部と文化部を合わせた部の数がおそらく 12、3 だから、全国中学校体育大会で開催されている 20 競技すべての運動部がある学校はめずらしい。現場にいれば普通に知っていることを、これから部活動をどうするか決めていくトップの人たちは知らないのが現状だ。何かのきっかけで出来上がった空気に乗って、一部の人たちが自分達だけの意図に沿った対応策を進めてしまっているのかもしれない。その結果、見過ごされている問題や新たな課題が生じてきているのが今の部活動の実状である。部活動にもいろいろな背景があるということを押さえておかなければ、適切な改善はできないだろう。

背景を押さえるためにはどうすればよいだろうか。いきなり、対応策を実行するのではなく、事実を認識して精査し、その結果に基づいて対応しなければならぬ。元日本教育学会長の広田照幸先生の本に出てくる例によると、頭痛のときの対応は、①頭痛薬を飲む。②仕事を休んで寝る。③気合を入れて頑張る。④大学病院に行って精密検査を受ける。⑤大根の葉を足の裏に貼る。⑥頭を切り落とす、があると述べている。①は、症状によっては有効だろう。②は、全体的な状況の改善に有効だ。③の「気合を入れて頑張る」は、一時的に有効だが、長期的には無効で、学校教育はこの対応策を取りがちだったのではないだろうか。④も有効だが、コストがかかるので、なかなかしない。⑤は迷信で無効。⑥は、頭痛はなくなるが、死んでしまうので無効である。学校教育においては③が多いが、②や⑤、時に⑥をしちりしているのではないだろうか。例えば、部活動の時間数、日数が多すぎるという問題に対して、平均平日 2 時間、週末 3 時間と決めるのは②だが、地域移行は⑥になると考えられる。部活動による先生方のしんどさはなくなるが、学校のあり方も今までどおりではなく、変わってしまうだろう。では、④の方法で部活動をめぐる実態と学校の状況を整理していく。

すべてをひっくるめて議論していいのかと思うほど、部活動はいろいろあって、先生方の部活動への関わり方も多様だ。公立中学は、部活動は 1 つしか入れないが義務にしているところも多いが、なかには全員入らなくてもいいし、いくつ入ってもいいし、途中で止めてもいいというところもある。それだけ部活動のあり方は多様だ。まず、生徒が部活動をどう捉えているかみてみよう。私が関わって東京都内の中学校で行った 2018 年と 2022 年の調査の結果を紹介する。「部活動で一番楽しみにしていることを、活動や練習、部員とのおしゃべり、試合やコンクール、その他のなかから 1 つ選んでください」という質問に対して、「活動や練習」が 4 割前後と最も多いのは当然だが、「部員とのおしゃべり」も 3 割前後いた。コロナ禍で大会がなくなっても部活動をしている人達にとって「部員とのおしゃべり」はけっこうな楽しみになっているのだろう。また、生徒が一番楽しいこと別に日々部活動をする目的を聞くと、「部員とのおしゃべり」に関しては、「友だちと一緒に時間を過ごすため」という割

合が高い。これに対して、2017年に中学校の教員対象に、部活動で生徒が何を一番楽しみにしているかと聞いたところ、「部員とおしゃべり」を選んだのは1割台にとどまっていた、生徒は活動や練習、試合やコンクールのために部活動をしていると教員は見ているようだ。部活動はみんな好きだから選んで、うまくなりたいたいと思っていると教員は考えているわけだが、現実にはそうでない生徒も一定の割合でいるのだ。

では、教員側は部活動をどう捉えているのだろうか。今年の春、朝日新聞に部活動指導縮小の動きに疑問ということで載った投書があった。「大変なので少しずつ縮小せざるを得ないのはわかるが、地域に移行したら継続できない生徒も出てくるだろう。部活動を通して色々経験させることがあるのではないかと述べていた。教員すべてが、部活動指導に対して地域に出せと言っているわけではなく、部活動指導に対する考え方、取り組み方は多様だ。地域移行したら生じる課題にも気づいていて、⑥の対応策でいいのかと疑問を呈しているのである。こういう教員は、部活動という学校教育活動を通して、指導したいこと、学んでもらいたいことがあるのだろう。

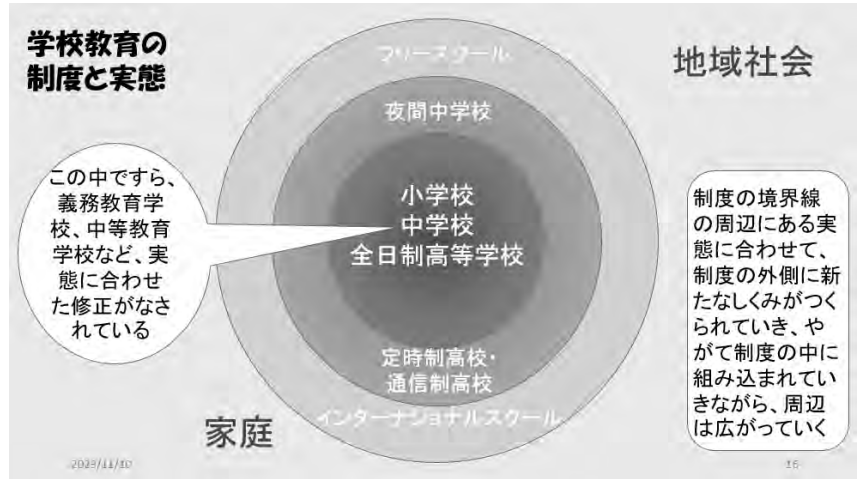
教員の多忙状況や負担感の原因は部活動ばかりではない。1990年代後半から2000年代の初めには、部活動指導に行くという言い訳で生徒と向き合う時間を確保していたという話を先生方から伺っていた。むしろ今は、部活動指導に行く時間すらない状況になってきているのではないだろうか。そこで押し出された部活動がなぜ「けしからん」ということになっているのだろうか。研究者はどう捉えているのだろうか。秋に弘前大学で教育社会学学会があったが、そこで教師研究が専門の早稲田大学の油布佐和子先生から次のように話しかけられた。「あなた、最近、発言してる？部活動の地域移行なんて、進めさせていいの？部活動の地域移行について学校で先生方と話す、最初はみんな部活動が地域に移るのに賛成というけれど、丁寧に聞いていくと文化部や科学系の部など学校でしかできない部があって、半分ぐらいの先生は反対している。部活動には生徒指導の役割もあるって聞くし。学校教育の立場から部活動が必要だと発言しないと、学校が大変なことになっちゃう。」とのことだった。教師研究が問題にしてきたのは他の職務による多忙化で、部活動指導には関心がなかったのだろう。OECDが行った中学校教員対象の調査TALIS(『OECD国際教員指導環境調査』)で、部活動指導が大変だと話題になった2014年のデータを見ると、調査参加国の中学校教員の1週間の平均勤務時間は38.3時間、日本が53.9時間で15時間くらい長かった。それに対して課外活動は、参加国平均は2.1時間だが、日本は7.7時間で約4倍だった。この4倍という数字が刺激的だったのだろう。しかし勤務時間は15時間長いのだ。課外活動がそのうちの5時間としても、あと10時間はどこかで余計に働いているわけである。ところが、誰もそこは問題にしていない。授業の持ち時間は、参加国平均19.3時間、日本は17.7時間で、日本のほうが短い。ということは、課外活動だけでなく、授業以外の部分で勤務時間が長いということに目を向けねばならない。こうやって見てみると、教員の職務全体のなかで、量的、質的に部活動指導はどう位置づけられているのだろうか。なぜ部活動指導の負担ばかりが指摘されるようになったのかということについて、関連諸学問を統合して検討することが必要だ。

学習指導要領では、部活動の意義や役割を定義しているが、よく指摘されるのが自主的・自発的な参加により行われる部活動なのに、全員を義務にしているということだ。本来、大事なはその先の「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」である。これに対してスポーツ庁の定義は違う。2018年に出された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の冒頭では「体力や技能の向上を図る目的以外にも」のあとに学習指導要領で示されているような教育的意義が述べられていて、教育的意義より体力や技能の向上のほうがより優先される目的に位置づけられている。2022年に出された「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」でも同じだ。「スポーツ・文化・芸術に興味・関心のある同好の生徒が」とあるが、そうとは限らないことには先ほど触れた。そのような思い込みの元で地域移行の政策は進んでいる。また、「体力や技能の向上を図る目的以外にも」で学習指導要領とスポーツ庁が定義している部活動の役割は違うことがわかる。ここが実は重要だ。また、先程の新聞投書でも勝利至上主義が問題だとあった。勝利至上主義でなくても勝つことを目標に一所懸命練習するのも大事なことはないだろうか。部活動を通して何かを指導したい先生もいるし、うまくなりたい、楽しみたい、友だちとおしゃべりしたい生徒もいる。スポーツ・芸術振興に役立つと思う人もいるだろう。他にもいろんな役割、機能があって、それら各色を混ぜると最後には真っ黒になるというのが、ブラック部活動の実態なのだろう。真っ黒のまま議論するのではなく、それぞれの色ごとに、または色と色の関係でどういう役割を果たしているか、それがどう評価されているのか、なぜ真っ黒になってしまったのかということを検討するのが必要だろう。その際、部活動のことだけを取りあげて議論してはいけない。学校教育の制度全体のなかに部活動を位置づけて捉えることが必要だ。

教育社会学で、実態として学校をどう捉え、部活動をどう位置づけているのか、どういう役割を果たしているのかを紹介しよう。

地域社会、家庭、学校という三者のなかで学校はどういう位置づけになっているだろうか。(シート 16 参照) まず、地域社会のなかに学校があって、家庭から子どもたちが学校に通う。普通の小中学校、全日制高校に通える子ばかりではない。夜間中学校も残っているし、高校には定時制、通信制といった制度の周辺に位置づけられるタイプの学校もある。さらに最近話題のフリースクール、インターナショナルスクールもある。制度の中心に位置づく小学校、中学校、全日制高校にも、義務教育、中等教育学校など実態に合わせた修正がなされていていっている。日本の学校教育は制度で作られているが、実は、制度の境界線の周辺にある実態に合わせて、制度の外側に新たな仕組みが作られていき、やがて、制度のなかに組み込まれていきながら、周辺が広がっていくという特徴がある。フリースクールは最近、文科省も積極的に認める方向だが、疑問を呈する市長もいて、まだどちらに行くというものではないようだ。

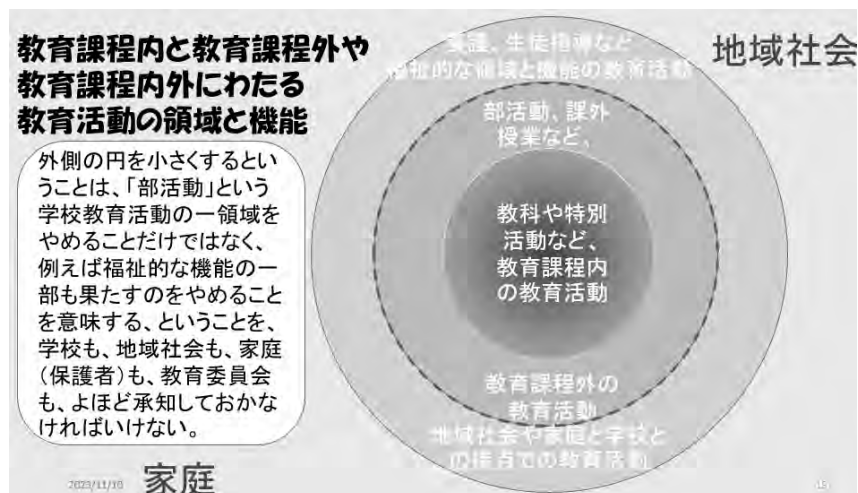
教育課程内のいろいろな教育活動でも同じようなことが見られる。(シート 17 参照) 一般的に中学では、いわゆる 5 教科を中心に、その周りに保健体育、音楽などの教科がある。さらに、特別活動や総合的な学習の時間、道徳など、教科とは言われていないが、教育課程内の活動として行われているものもある。学力といったときに思い浮かべるのは中心の 5 教科だろう。しかし、私は、生きる力を考える場合、周辺教科が重要な役割を果たしているという本を数人の研究者と一緒に書いたことがあるのだが、日本の学校教育では、周辺に位置づけた教科や教科外活動も大事にして、整備してきたという経緯がある。そして、教育課程内外にわたる教育活動もある。(シート 19 参照) 私は母校の高校でガーナの高校生との交流活動を手伝っているのだが、それなどは教育課程外の教育活動で、領域を明確に設定できない。養護や生徒指導など福祉的な機能の教育活動があったり、地域社会や家庭と学校との接点での教育活動があったりするものが、日本の学校教育活動の大きな特徴である。教員にとっては、教科や特別活動などであることが増えてきたという状況があった。境界の内側の制度化された部分も広がってきて教育活動が増えてきた。境界の外側から学校での対応が求められることも増えてきた。そうやって広げてきた部分を学校教育のなんらかの活動に載せなければいけなくなって、部活動をはじめとする課外活動が増えてきたら大変になった。だから、それを



【シート 16】



【シート 17】



【シート 19】

して、整備してきたという経緯がある。そして、教育課程内外にわたる教育活動もある。(シート 19 参照) 私は母校の高校でガーナの高校生との交流活動を手伝っているのだが、それなどは教育課程外の教育活動で、領域を明確に設定できない。養護や生徒指導など福祉的な機能の教育活動があったり、地域社会や家庭と学校との接点での教育活動があったりするものが、日本の学校教育活動の大きな特徴である。教員にとっては、教科や特別活動などであることが増えてきたという状況があった。境界の内側の制度化された部分も広がってきて教育活動が増えてきた。境界の外側から学校での対応が求められることも増えてきた。そうやって広げてきた部分を学校教育のなんらかの活動に載せなければいけなくなって、部活動をはじめとする課外活動が増えてきたら大変になった。だから、それを

止めて、地域社会に出してしまおうという流れなのだろう。では、広がった部分をまた小さくすればいいのだろうか。それは部活動という学校教育活動の一領域を止めることだけでなく、福祉的な機能の一部を果たすのもやめるということだ。それを学校も地域社会も、家庭も、教育委員会も十分承知しておかなくてはいけない。例えば、2019年に静岡市は先行して部活動の日数を減らした。その結果、市内のとある中学校では、部活動がない日に放課後のサークル活動を始めたのだ。部活動がない日に放課後をどう過ごさせるかが生徒指導上の重要な問題だったのである。この活動を素晴らしい活動だという有識者まで出てきたが、これなら部活動を2〜3日ずつ2種類入れるようにして、先生はどちらかだけを担当すればいいのではないだろうか。つまり、学校教育活動の範囲はそのまま部活動だけでなくしたところで意味はなく、範囲を小さくするか、そのままならなんらかの教育活動で対応するのかを考える必要があるのだ。

近年の教育社会学では、学校は福祉的な役割も担っていくと捉えるようになってきている。給食、学校保健、居場所の提供などである。これらを教育福祉として論じている。特に近年では、家庭環境や地域社会などの属性の違いによる格差が、学校生活や進路形成に与える影響を少しでも小さくするような取り組みが求められている。小学校の学級定員を減らすことや、給食費無償化に取り組む自治体が増えてきたのはそういうことだ。そのようななかで、部活動は中学生のいわば学童保育の役割を担っている。以前は部活動は生徒指導の役割のほうが強かったのだが、1990年代頃から保護者の働き方が多様になっているなかで16時から18時まで、または土日に学校で子どもを預かってくれるのは大事な福祉的な役割だろう。少子化の進展している今、子どもが外にいたら、事件、事故に巻き込まれる危険も高まっている。このように保護者や社会から学校に福祉的な役割を果たしてもらおうという期待が高まってきている。

一方、少子化による統廃合や教員の削減によって学校の規模は縮小してきている。少子化による、学校に対する福祉的な期待の高まりと、組織としての学校の縮小という矛盾が、教員一人ひとりの仕事を増やしている。多忙化の大きな要因はここにあると、教育社会学では分析している。

今でも新聞には、教員多忙化の一番大きな要因に部活動を上げている記事が載ることがあるが、それは違う。制度の周辺にある部活動は、保護者や社会から新たに期待される教育、福祉活動を行う場としての役割を担っている。それなりの時間にそれなりの人たちが関わって、それなりの場所を使う部活動はいろいろな役割を載せていきやすかったのだろう。そして周辺に位置するが故に多忙状況が目につきやすかったのだ。それに加えてこの2〜30年は、余暇活動として、スポーツや文化活動が盛んになってきた。スポーツの技能の向上や指導法の発達といったスポーツの論理、メディアの注目や経済的なコンテンツとしての期待といった経済の論理といったものが相まって、顧問教員に対して高い指導技術を求める風潮ができたことも、部活動指導の負担感が増す原因だっただろう。そのように見ると、活動時間や日数を減らす対策は部分的に、または一時的には多忙状況の改善に繋がるかもしれない。しかし、中学生の学童保育という福祉的な役割なども手放さないと、部活動に変わる放課後活動に取り組みざるを得ないということもあり得るだろう。地域に移行するという対応策も部分的、一時的に効果はあるだろう。技術指導面での負担感の解消に繋がる可能性もあり得る。しかし、昨年出されたガイドラインに、部活動を学校から完全に切り離すのではなく、学校の課外活動で社会教育の一環として、学校と地域社会や関係団体と一緒に取り組んでいくという転換が見られた。完全に切り離す対策は、多忙状況の改善に部分的、一時的な効果があるけれども、副作用として地域に移行できない部は廃部になる、または、移行過程のなかでどこかの部を重点的にテコ入れするために関わる先生が増えることがあるというふうに私は理解していた。ところが、昨年出されたガイドラインの地域クラブ活動のところに、「学校の教育課程外の活動として社会教育法上の社会教育の一環として捉えることができ」、「学校等の関係者の理解と協力の下、生徒の活動の場として、地域クラブ活動を行う環境を速やかに整備する」と書いてある。部活動を学校から地域に移行する一番の理由は「少子化が進むなかでのスポーツ・文化芸術を享受する機会の保障」と述べられている。部活動の地域移行や地域連携は、スポーツ政策、文化政策にすり替わってしまったと私は受け止めている。都内で何年間か実証事業をした市の教育委員会の方は、これによって地域移行ではなくなったと理解していると断言した。教育政策として、家庭環境や地域社会などの属性による格差を是正する対策が取られているにもかかわらず、地域クラブ活動だけが、今までより活動費がかかったり、送迎による家族の収入が減る可能性があるにもかかわらず、平然と受益者負担を打ち出している。教員に対しては地域クラブ活動への教育と理解という、ある程度の負担を求めている。その結果はどうなるだろうか。

1つ目の問題は、格差を小さくしようと言っているにもかかわらず、家庭の負担が増えることによって、学校の部活動では享受できていた機会が一部の生徒から奪われるかもしれないことだ。2つ目は、地域クラブ活動への協力によって、学校が主体ではない職務が新たに生じるだろう。既に、地域クラブ活動の案内を出すとか、土日

に学校を開けるという状況が生じている。それが教員の多忙状況の新たな要因になり、本来の教育活動を圧迫するかもしれない。3つ目に、部活動を通じて教えられたり、学んだりしていたことや、保障されていたことが失われるかもしれない、学校教育そのものがこれまで果たしていた役割を十分果たせなくなるかもしれない。

部活動は制度の周辺に位置し、使い勝手がよかったので、様々な立場の人達から都合のよい役割を期待され、果たしてきたというところがある。第一に、部活動がどのような立場から、どのような意義、役割、機能を期待され、実践されてきたのか整理すべきだ。第二に、学校教育にとって、部活動がどのような意義、役割、機能を期待され実践されていたのかを整理し、その整理する作業を通して、学校に残すもの、学校外に移すもの、止めるもの、などに選り分ける作業が求められる。

様々な立場から部活動に載せている意義、役割、機能を挙げてみよう。余暇活動の論理では、中高生が希望している活動の機会を提供することが望まれている。スポーツの論理では、裾野を広げる普及と、トップを伸ばす競技力向上の役割が期待されている。厄介なのは経済の論理だろう。経済産業省は部活動の地域移行にとっても期待しているようだ。経済活動に活かせるスポーツや芸術のコンテンツを増やすにあたって、義務教育段階の公立中学校の部活動を学校外に出せば、お金を回せるところに使えるのではないかというのが本音だろう。それはメディアも同じだ。他にも地域社会の論理など、様々な立場から部活動に期待している意義、役割、機能があるだろう。学校に関していえば、学習指導要領に書かれていること、部活動を通して何かを学ぶということ、仲間づくりに居場所づくり。それから、福祉的な役割である放課後や土日の居場所確保、生活の保障、格差問題への対応だ。生徒理解の場にもなるし、学校経営上のコンテンツとして使っている場合など色々だろう。こんなにたくさんを部活動に背負わせているのだ。部活動は、様々な立場の人達がいろいろな意義、役割、機能を押し付けてきた結果、ブラックになってしまったのだ。なのに、スポーツ政策、文化政策の論理だけから地域移行を進めようとするから、他の立場の人たちの反発を受け、移行も進まず、学校も困った状況になってしまうのだ。一旦整理をした上で、何を学校に残し、何を学校外に移し、何をやめるか、それを選り分ける検討をしなければならない。

私学として、部活動を止めずに持続可能な働き方に繋げるにはどうしたらいいだろうか。学校教育をめぐって、今起こっていることは、負担の押し付け合いで、学校で仕事をするのは悪いことのような気持ちにさせられる。部活動はスケープゴートで、学校で教員がしなければいけない仕事の多いことの免罪符になっている。地域移行すれば、魔法のように仕事が減ると思っているかもしれない。しかし、スポーツや芸術をすることも、部活動をする、指導をすることも、学校で学ぶこと、教育することは負担なのだろうか。ぜひやりがいも見出してほしいと思う。冒頭で紹介した衛生の定義（衛生とは、「生命・生活・生産を衛る」という意味である）、衛生学のスタンス（生命・生活・生産を人間がより人間らしく生きられる方向に衛り発展させていくという課題を明確に掲げ、諸学問を統合していくために必要な論理を提示する）を学校教育に持ち込んでいただくと見出しやすいだろう。子どもたちと未来の社会を守るという責任感と自負の気持ちを持って取り組んでいただければよいと思うが、そうは言っても、勤務時間からも運営や技術指導からも負担になっているのも事実だ。そこで、部活動を学校の正式な教育活動に位置づけるということを考えてみたらどうだろうか。部活動について、2010年代中頃までは少なからぬ学校が学校経営方針に部活動に期待する意義や役割を書いていたのに、ガイドラインが出されたのをきっかけに明記する学校が減ってしまった。これはよくなかったと思う。さらに制度の周辺に位置づけるようなことをしたらますます負担に感じるようになるだろう。

私学だからこそ、部活動を学校の正式な教育活動に位置づけたらいいだろう。学習指導要領上の教育課程内の活動ではないけれど、本校では正式な教育活動として行っているとして、部活動の運営・指導方針や部ごとの方針、各顧問教師の指導に任せきりにせず、学校が主体となって責任を担える体制を作り、学校として何のために部活動をするか、はっきりさせるべきだろう。つまり、教育上の責任を明確にするということだ。そのために、私立学校として、建学の精神を踏まえて取り組む教育活動はどこまでか、その範囲内で取り組める部活動はどういう意義、役割、機能かを検討する。部活動全体を統括する制度と組織をどう作り、どう運営するかを検討する。それぞれの部が担う意義、役割、機能はどれかを検討する。全部の部が担うもの、一部の部が担うもの、場合によっては廃部や休部もする。それぞれの部に合った指導体制と指導方針を検討して、顧問や指導者が替わっても方針を継続できるようにするのがよいだろう。

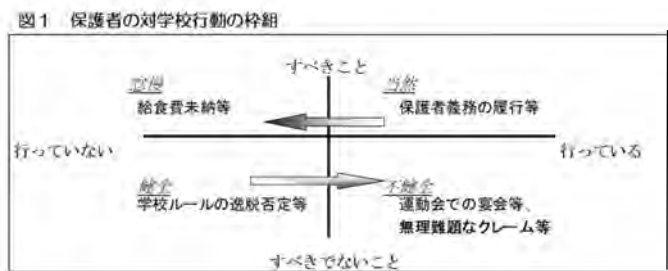
その際に考慮することは、2つある。第一に、見落とされがちだが、部の設置にあたって施設や指導者など、学校の規模を考慮した部活動数を考える。第二に、部活動の意義、役割、機能を検討するにあたり、それがハイリスクストラテジーなのか、ポピュレーションストラテジーなのか。ハイリスクストラテジーは、特に高い危険度を持つ者に対して、その危険を軽減するような概念だ。ポピュレーションストラテジーは、集団全体の危険度因子を下げるということで、学校教育もこれが使える場面がいっぱいあるだろう。部活動に関して、全体に対してどのような形にすべきなのかということと、ある特定の部についてどうするのかというのをいろいろ考えていく必要があると思う。

1. 保護者の問題行動の捉え方

保護者の問題行動とどう向き合うか。図1の縦軸の上が「すべきこと」、下が「すべきでないこと」。これらはクレーム以外の問題も含む。横軸の右が「行っているか」、そして、左が「行っていないか」。右上第一象限が、保護者がなすべき義務である。横軸は、だんだん左に寄ってきている傾向がある。典型的な例が、給食費の未納問題だ。つまり、本来やるべきことをやってくれない。下の、すべきでないことを行っていないことが普通である。上の方を見ると、すべきでないことが、左から右にどうも移っているのではないかと思われる。ただ、イチャモン研究会の会員の中には保護者のクレーム全てを否定すべきではないという方も結構いた。なぜかという、学校にとっては無自覚な問題点を教えてもらえるからだ。特に公立学校では一定の学校の文化があって、世間から見るとどうだろうということも時々あるわけである。



(1)問題行動の枠組



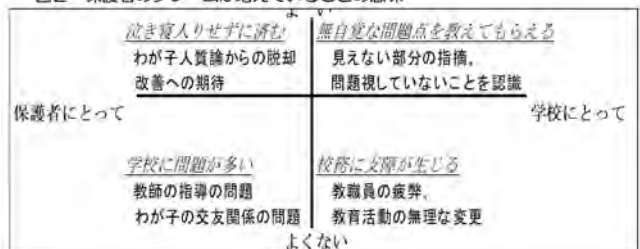
1950年代の終わり頃は、全国的に校則が問題になった。これは公立の中学校なのだが、「給食はグループごとに楽しい話題に持っていくようにする時には早くならないよう、遅くならないようにする」というどちらだか分からない校則があった。加えて、休み時間は最初の7分で用便を済ませ、残りの3分で次の授業の準備をするようにという校則もあり、これではトイレに8分行くと校則違反となる。しかし、いずれも学校側に詳細を聞くと理由がある。給食に関しては、すぐに食べ終わってどこかに行ってしまうグループとだらだら食べているグループがあるから、「時には早くならないよう、遅くならないよう」という表現にしているという。また、休み時間に関しては、用便は最初の7分で済ませておかないと次の授業に遅れてくるから7分に設定しているという。

神奈川県で当時問題になった校則に、高校での男女交際許可に関する校則があった。男女が交際する場合、双方保護者の申し出によって学校が認めた者のみとする。そして、学校から許可証を出すという。例えば、男女が歩いていると、生徒指導の先生が許可証の有無を問い、出せないと早く別れなさいという指導もなされたかも知れない。また、今も頭髪の校則があるが、当時、「天然パーマ証明書」というものがあった。天然パーマであることを証明するために、幼少期に保護者と一緒に撮った写真を提出するのだ。加えて、天然パーマの者は目立たないようにしろと書いてあるのである。私立のある学校では、校則に違反した服装をしてきたら、これを没収すると書いている。学校の先生が服を没収してしまうのだ。校則違反の服装をしている人が没収されると、どうやって帰るのだろうか。そんな校則もまかり通っている時代があった。今は「ブラック校則」と呼ぶ方もいるが、こういった学校側で無自覚な問題を保護者に教えてもらうという意味もあるかもしれない。

次に、図2の左側のいわゆる人質論の改善に関する部分である。これは右と連動している。学校でおかしいと思ったことを、保護者が改善を求めることができる。左下の部分は、学校にとって校務に支障が生じるなど望ましくない領域である。本講演に対しての事前アンケートでも、「保護者対応の仕事に追われ

(2)保護者によるクレームの意味

図2 保護者のクレームが増えていることの意味



て大変だ」というご意見もあった。保護者対応は教職員が疲弊したり、教育活動が無理に変更されてしまうこともある。結局、左側は学校に問題が多いということになる。最近、私立ではあまりないのだが、公立学校の先生が1週間に何件も問題を起こしている。性暴力、セクハラに関するものが顕著になっていて、毎日どこかで発生している。そのような問題を見た時に、学校は問題が多いのではないかという認識で、何か改善要求をするということもありうることになる。

## 2. 保護者問題の原因

### (1) 保護者自身の問題

これはイチャモン研究会でもいろいろ整理したのだが、保護者の問題は何だろうか。

まず、原因は学校外にあって、要するに着火点と発火点が別だということがある。小学校の時に何か不満があつてふたをしていたけれども、中学校に進学した段階で爆発してしまう。家庭に問題などがあって、家庭がうまくいかないのが学校の先生に当たってしまうという問題も出てきている。つまり、原因がよそにあるわけである。2番目は保護者対応の中でも最初は学校に対して厳しかったけれども、学校でボランティアをお願いするようになったらクレームが解消したという例である。3番目は、不満が蓄積してコップの水があふれる。不満が少しずつたまり、ある程度まで我慢していたけれども、限界に達して爆発するという解釈だ。4番目は学習と伝染である。例えば、給食費の未納問題。払ったら損という感情が広がったことで、給食に限らず、何か変なことをしても何も問題なければ、やらなければ損だという考えに至ってしまう。5番目はストレスの発散である。不満のはけ口がたまたま学校になってしまったというケースである。6番目は保護者の心の問題がある。これは学校では対応困難だろう。7番目は過度の学校依存。学校に任せると、学校が何をしているかが分からないので、結果としてそれがクレームにつながる。8番目は親の問題行動である。非常識な保護者のクレームを指し、自分がクレームを入れているという自覚がない。自分の全ての行動に問題はないと思っていて、良い・悪いの線引きが少し違うようなのだ。9番目は、最初は紳士的だったけれども、学校の初期対応に問題がある場合である。10番目は報復である。学校で何らかの不満があつて、その仕返しとしてクレームが来るという場合である。11番目は正当性のあるものである。確実に受け止めた方が良い場合もあるということだ。

### (2) 社会的背景

次に社会的背景として、保護者の高学歴化である。平成4年頃、大学進学で変化が起こっていて、女子の4年制大学進学志向が強くなる。大学・短大進学で、一時期逆転する時期があつて、その時何らかの資格を取ることが求められて、教員免許を取る人が多くいた。団塊ジュニアの世代で、大学が一時的に定員増をした時である。当時、様々な大学の偏差値がぐっと上がった時代である。そのように親も大卒が段々増えてきて、特に母親の大卒者が増えてきている。例えば、教員免許を取った親は教育のことについてある程度理解がある。だから、学校の方から上から目線で言われると、カチンとくるということもあり得る。2番目が少子化問題である。3番目が先程の「学習と伝染」と同様で、言わなきゃ損という風潮だ。4番目が学校の先生は比較的安定しているという世間の見方がある、公務員に対する批判的見方である。5番目が保護者の消費者意識の強まりである。1990年代頃から、このような意識が強まってきていて、子どもがお客様になるという現象が強く表れるようになった。6番目がストレス社会となり蓄積したストレスをどう発散するか。様々なところでストレスは発散できるのだが、学校というところは相手方がストレス発散で文句を言いに行っても返り討ちに遭うことはない。公務員や役所もそうだ。学校の問題になればどんどん露呈されてしまうので、特に問題だけが強調されるということだ。8番目が保護者の自己主義である。自分の子どもよりも自分が大事で、そのような問題も起こってくる。

## 3. 問題なクレーマーの特質

特に問題なクレーマーにはいくつかの特質がある。1番目が、自己本位・利己的だということである。自分のことしか考えていない。どちらかというと、わが子より自分のことが大事ということになりやすい。2番目がわが子だけ目立つのを嫌い、他者を巻き込む。3番目が他者の受け止め、あるいは立場を認識しない、先程の「自己主義」と一緒である。4番目が長時間や何度も尾を引く、加えて粗も見つけにくるしつこさである。



5 番目が感情に支配される、実現の可否が認識できない。できる、できないかが分からないということである。また、中には教師が嫌いな人もいる。自身の小学生頃の経験でマイナスイメージを持っている人もいる。特定のことにこだわってしまうということもある。6 番目が苦情ではなく要望であると認識している。自分はまだと信じていて、あとは何かにつけて被害者意識が強い。このことは、問題行動を起こす保護者の特徴だといわれる。これは某百貨店のお客様相談室長がよく話していることだが、保護者から見て、学校側の対応が事前期待のラインより下であれば、保護者側は不満で、逆にラインを超えれば大満足なのだ。その事前期待とは何かというと、マナーや約束の厳守、さらなる期待というものがあるといわれている。マナーだと、服装、身だしなみ、言葉遣い、笑顔、お礼、お詫びなどだ。ちなみに、お客様相談室長も実践されている例として、マナーに関する苦情があると服装は変えて、ダーク系のスーツを着る。しかし、学校だと保護者の誰かが苦情を言いに来た時、レベル1、体操服を着ていたり、立ったままで対応したりすると、これだけで保護者が不満を持つと思う。レベル2、対応の基礎で約束の厳守、次回またこのように相談に乗るや、すぐに対応するなどだ。レベル3、さらなる期待、今後どうなっていくか計画的に改善が図れるか、この改善方法は適当だったかどうかである。

#### 4. 学校の問題

では、学校の問題はどうだろうか。一般的に教職員は危機意識が希薄だと言われているが、具体的には、①大人相手に慣れていないということが多くと言われる。イチャモン研究会では、前さばきが下手という言い方をしている。ついお友達口調で話すとか、子ども相手に話すように話してしまう人も結構いるとよく言われる。②専門家の意識が強すぎるということがある。保護者も昭和時代と違って、教育に関する理解をだいぶ深めている。③学校の中の問題が外に漏れないように隠蔽・隠匿姿勢の名残がまだあって、それが発覚してしまう。④保護者が感じるであろうその閉鎖性。相談するにしても窓口が分からず、その間に不安がたまってしまうわけだ。私立学校は、まだ比較的窓口がはっきりしているとは思いますが、公立学校はどこに言ったらいいか分からなかったりする。⑤先生側が人の話を聞けない・聞かないというような傾向があるそうだ。話すことは得意だけど、聞くことが苦手という側面がある。あとは問題を過小評価するという傾向もある。⑥変化についていけないような学校文化。⑦ミスを認めたがらないというところもある。そんなことはないと思われた方は多いと思うが、このような傾向は公立学校の方で強いと思う。

#### 5. 学校の責任

何か問題が起こった時どうなるか。大きく分けると、「不法行為責任」と「債務不履行」がある。

「不法行為責任」は行為または過失によって他人に被害を与えた責任だ。例えば、体罰を受けたとして学校に問題があったとしても、保護者がそれを立証することが義務付けられているのである。

次に「債務不履行」とは、当然すべきことを行わなかったために生じた損害だ。「債務不履行」責任は、公立私立問わず、特に注意しなければいけないことだと思う。学校が立証できないと、有罪になる可能性が出てくる。訴えられると損害賠償が発生する。公立学校は国家賠償法が適用されることから自治体の問題になるが、私立学校の場合は適用されないため、法人の問題になる。その他、どのようなことを要求するかというと、教員の異動、交代が一般的に多い。加えて、不満の解消、原因の除去、いろいろあると思うのだが、この時お金の問題が絡むときもある。また、原因の除去ということもある。

#### 6. 学校の責任

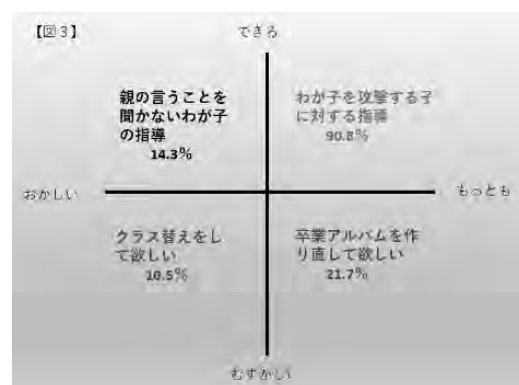
クレーム対応の基本の視点としてよく言われるのが、1 番目は、相手の枠組み、間合いに入るなということだ。2 番目が、初動を見極めること。すぐには反応しないことだ。「落ち着いて下さい」や「感情的にならないでください」という言い方はマイナスになる。時々黙って聞くことが良いだろう。3 番目は、相手の狙いを読み取る。お金なのか不満のはげ口か、それ以外か。クレームに対して録音することは、原則として許可を取るけれども、解決困難の場合、無断で録音するのも違法ではないという解釈がある。ただ、全て通用するかは分からない。ベテランの人は目の前でメモを取るそうだ。相手が見えるところでメモを取ると、相手の発言のトーンが落ちるのである。4 番目が、単独で行動・判断しない。問題が予想外に発展してしまうということがある。5 番目が、直接関係ない者が同席する場合は要注意である。クレームを言いに来た方が2人で

あれば、それ以上で対応するということが、一般的な対応の仕方だそうだ。相手方が専門家を装う場合もある。6番目が、服装や部屋の雰囲気づくりだ。よく言われるのは、対峙しないことで、対峙すると組合交渉のようになってしまう。百貨店の例で出ていたダークスーツで、目の前で記録する。立ち話はしない。7番目が説明の工夫である。説明の流れだが、説明は内容を伝えて理解を、気持ちを伝えて見通しを伝えるということが1つの流れと言われる。それと、8番目は相手を敵視しない。実は保護者対応に関しては、主な都道府県では教育委員会でマニュアルを発行している。大阪府が最初に出したのだが、そこに書いてあることは自治体によってかなり矛盾している。地域性もあるのかもしれない。9番目は、落とし所を見つける。学校の制約を伝えたら、相手に解決策を提示してもらおうということがある。集団で来た時は、必ず1人以上の学校の味方がいるとも言われている。そうした時、この人にどうしましょうかと意見を求めるのがベターだと言われている。10番目が、学校と保護者の話し合いの機会を設けるということが挙げられる。

## 7. 苦情・要望の実態

次に苦情、要望の実態である。全国21市町村の小中学校46校で、子ども、教員、保護者に対して大規模な調査をしている。保護者から3,422票、先生も900票弱ほど回収できた。

これは保護者に対しての質問だ。「この1年間に、学校に対して苦情等の申し入れをしたことがありますか。」という質問に対して、「はい」の割合は、学年に関係なく大体3割。3割の親が学校に何か苦情、要望を申し入れている。「はい」と回答した人の属性は、小中学生の親だから30代、40代が多く、わが子との関係でいうと3割が母親である。職業は、公務員という項目があって一番上が教員である。あまり差がない。これは過去1年間に苦情、要望を申し出た回数だ。0回が圧倒的なのだが、人数は少ないものの35回が1人いる。教育課程上35週授業がある学校もあるということで、ほぼ毎週行っている計算になる。10回が17名で、ピークは2、3回ぐらいが多めになっている。したがって回数が多い人が、いろいろな問題を抱えている人だ。ここにも自由記述を求めているのだが、回数が多い人が、学校に問題が多すぎるので当然だという書き方をしている。そして、要求。これは図3の4つの項目から選べた。縦軸は、上が「できる」、下が「できない」。横軸は、右が「もっともである」、左が「そうではない」。これは保護者の回答だが、例えば、わが子がいじめに遭ったので、それに対する指導を徹底してほしいという要求については、「もっともである」を選んだ人は9割いた。左側、「親の言うことを聞かない子を学校で指導してください」。これを容認する割合は14%。左下が、「自分の子どもと仲が良くない子が同じクラスになったので、クラス替えをしてほしい」という要求である。これに対して「もっともである」は10%だった。これはやはり難しい。クラス替えをしたら、また違う方からも再度クラス替えを要求されるかもしれないし、收拾がつかなくなる。右下が、卒業アルバムの作り直し要求である。これは、「もっともである」が21.7%である。親からしても気の毒だと思っている人が少し多い。これは学年ごとに見ても、あまり差は出てこない。少し中学校が多いだけだ。いじめなどの指導に対してもそれほど学年差が出てこず、小学5年生で少し増えているくらいである。親の言うことを聞かない子どもの指導についても、学年差はあまりない。卒業アルバムの作り直しについては、中学校が少し多いだけである。クラス替え要求について、これは学校関与率を出して、「学校に親がどれだけ行っているか、PTAの役員を務めたか、学校行事に参加しているか」、そういうようなことをまとめている。これによると、「当然だと思う」と答えた人は、学校に関与していない人のほうが少し数字が高い。それほど統計的な有意差はないものの、要するに、こういうことに対して学校に関与していないから、おそらくあまり分からないのだ。良い悪いは別である。十分に指導していても数字は変わらないので、これもあまり関係ない。学校関与率はそれほど関係がなかったということだ。



これは保護者に対しての質問だ。「この1年間に、学校に対して苦情等の申し入れをしたことがありますか。」という質問に対して、「はい」の割合は、学年に関係なく大体3割。3割の親が学校に何か苦情、要望を申し入れている。「はい」と回答した人の属性は、小中学生の親だから30代、40代が多く、わが子との関係でいうと3割が母親である。職業は、公務員という項目があって一番上が教員である。あまり差がない。これは過去1年間に苦情、要望を申し出た回数だ。0回が圧倒的なのだが、人数は少ないものの35回が1人いる。教育課程上35週授業がある学校もあるということで、ほぼ毎週行っている計算になる。10回が17名で、ピークは2、3回ぐらいが多めになっている。したがって回数が多い人が、いろいろな問題を抱えている人だ。ここにも自由記述を求めているのだが、回数が多い人が、学校に問題が多すぎるので当然だという書き方をしている。そして、要求。これは図3の4つの項目から選べた。縦軸は、上が「できる」、下が「できない」。横軸は、右が「もっともである」、左が「そうではない」。これは保護者の回答だが、例えば、わが子がいじめに遭ったので、それに対する指導を徹底してほしいという要求については、「もっともである」を選んだ人は9割いた。左側、「親の言うことを聞かない子を学校で指導してください」。これを容認する割合は14%。左下が、「自分の子どもと仲が良くない子が同じクラスになったので、クラス替えをしてほしい」という要求である。これに対して「もっともである」は10%だった。これはやはり難しい。クラス替えをしたら、また違う方からも再度クラス替えを要求されるかもしれないし、收拾がつかなくなる。右下が、卒業アルバムの作り直し要求である。これは、「もっともである」が21.7%である。親からしても気の毒だと思っている人が少し多い。これは学年ごとに見ても、あまり差は出てこない。少し中学校が多いだけだ。いじめなどの指導に対してもそれほど学年差が出てこず、小学5年生で少し増えているくらいである。親の言うことを聞かない子どもの指導についても、学年差はあまりない。卒業アルバムの作り直しについては、中学校が少し多いだけである。クラス替え要求について、これは学校関与率を出して、「学校に親がどれだけ行っているか、PTAの役員を務めたか、学校行事に参加しているか」、そういうようなことをまとめている。これによると、「当然だと思う」と答えた人は、学校に関与していない人のほうが少し数字が高い。それほど統計的な有意差はないものの、要するに、こういうことに対して学校に関与していないから、おそらくあまり分からないのだ。良い悪いは別である。十分に指導していても数字は変わらないので、これもあまり関係ない。学校関与率はそれほど関係がなかったということだ。

## 8. 保護者力について

次に、保護者力という指標を作ってみた。「ちゃんと朝食を作っているか」、「子どもと会話を交わしているか」などである。そうすると、保護者力の低い人は苦情要望なしが少し多いのに対して、保護者力が高い人

は、子どもについて関心を相当持っているから、苦情等の回数が多い人が多い。むしろ子どもに対して、教育に対して熱心な人ほど苦情を言う傾向があると見ることもできる。

次に教員調査について見ると、「この1年間で保護者からの苦情、要望を何回受けましたか」という質問に対して、平均が、小学校が2.26回、中学校が2.03回だった。大体1年間に2件ほど受けているということになる。地域住民からの問題も出てくるから、私立学校でも、地域のほうから何か苦情が来る場合も当然ある。次にしつけである。「保護者対応として何をやっているか」という質問に、「特にやっていない」という答えが4割以上になっている。保護者と教職員が交流できる機会を設けたのは4割ほどだ。中学校での取り組みは、学校対応で情報公開したということだ。次が苦情、要望と教員の悩み。上が0で、下の件数が多くなる。1年間に受けた苦情、要望の件数が多いと、教員の仕事について悩むことが多い人が少し増えている。当たり前と言えば当たり前である。教師になって良かったと思う人については、なぜか分からないが、苦情、要望を受ける数が多い人のほうが、「とてもそう思う」の回答が少し高くなってしまっている。信頼されているかどうかについては、明確な相関関係が出てこなかった。

保護者対応にはコミュニケーション力が鍵になることは、よく言われることだ。まずは、身だしなみ等第一印象が鍵になる。上目遣いは話を聞いていない。横を向くと落ち着きがないとか、下を向いていると、話を聞いていないと思われる。よく言われるのが、証明写真のサイズのように縦4、横3の中で相手を見なさいということ。そこから視線を外すと、話を聞いていないと思われる。うなずきで言葉と表情を重ねるということ、タイミングの良い返事、相づち。同じことを繰り返して言ってあげると良い。話の腰を折らない。ポイントを復唱する。これもよく言われるのはクッション言葉である。また、「ご苦労様」や「ご足労をかけますが」という言葉を間に入れてだけで、だいぶ相手の反応が違うということ。あるいは、「申し訳ありません」、「お手数ですが」という言葉だ。相手の立場、気持ちを尊重して、そしてその上で自らの主張をする、説得する。危機情報の伝達で、あなたの言っていることの問題点を、相手の立場を尊重しながら指摘してあげる。特に人によって感じ方、受け止め方が違うので、過去に問題がなかったというのは要注意ということもある。相手を察知するため、相手の発言を前向きか後ろ向きか、丁寧か乱暴か、声や話し方が暗い、速い、遅い、落ち着いているか、イライラしているか、腕組みしているか。この辺を意識していくことが重要である。

## 法人管理事務運営部会

### 「総括」

四国学院大学香川西高等学校 校長

草 薙 浩

当初、当部会の募集人数は60名となっておりますが、100名を超える参加者をお迎えしました。今回のテーマである「働き方改革」、「部活動」、「保護者対応」の3つは参加者の各学校で頭を悩ませている問題であるのだと感じております。これは昨今の教育現場での切実な問題でもあり、日頃、先生方が生徒達に対する様々な仕事と同様に真剣に取り組まなければならない課題であります。

本日は愛媛大学大学院教育学研究科 露口健司教授、青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 西島央教授、帝京大学 佐藤晴雄教育学部長・教授の3名にご講演頂きました。まず、講演Ⅰでは露口先生より「教職員の『働きやすさ』と『働きがい』を高めるリーダーシップ実践」と題した講演を賜りました。働きやすい安心・安全な職場環境の重要性を実感しました。また、働きがいを両立させるためにも、教員の使命感や信頼関係を擁立させることもこれから強く考えていかなければならないと思いました。講演Ⅱでは、西島先生より「学校教育活動の一環としての部活動の意義と役割～教育社会学の観点から」と題したご講演を賜りました。部活動は切り捨てではなく、必要であると改めて認識いたしました。負担の押し付け合いではなく、衛生学のスタンスを持ち込んで、子ども達の未来と社会を守る責任感と自負を持って教育に臨まなければならないと痛感いたしました。講演Ⅲでは、佐藤先生より「保護者対応の視点と実践」と題したご講演を賜りました。保護者のクレーム例を示して頂きました。参加者皆さんの学校現場で目にすることも多く含まれていたのではないかと思います。それに対する対応の仕方も示して頂き、これからの学校運営に活かしていきたいと思っています。最後に行われた3つの講演を踏まえた意見交換会では、それぞれのグループで熱心な議論がなされたと感じます。冒頭でも述べましたが、昨今の教育現場には以前にはなかった事案の対応に追われている現状が如実に話し合われたかと思えます。この場で先生方から得られた情報をそれぞれの学校に持ち帰り、是非、私学だからできる持続可能な働き方に繋げて頂けたらと思います。

最後に本部会の運営に携わられた先生方に感謝を申し上げますと共に、ご参加頂いた先生方のご健勝ご活躍を祈念いたしまして、総括とさせていただきます。

# 生徒指導部会

中学生や高校生の未来は「可能性」と「魅力」に満ち溢れている。これから未来を生きていく若者たちにとって、豊かな創造性を育むためには、「自由」や「思いやり」そして「寛容性」や「多様性」、さらにそれらを受け入れる「受容力」こそが大切である。

近年、民法改正による成年年齢引き下げに起因するトラブルやネット等依存症、さらには引きこもりや不登校などにより、生徒に係る問題が複雑化している。私立学校の教育は、生徒の学習と生活を2本柱として、教師と生徒が共に学習者であるという視点を重視して進んでいきたい。

- 1 研究目標 若者たちの多様な個性が生きる社会の創造
- 2 会 場 JR ホテルクレメント高松 3階「飛天(中)」
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、生徒指導担当等教員
- 4 参加人員 90名
- 5 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15	45						45
11月10日 (金)	開 会 式	講演Ⅰ	講演Ⅱ	昼 食	講演Ⅲ・ワークショップ			閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (竹下 真也/喜多 保夫)	機材担当：青木 剛士 記録(写真)担当：中瀬 弥生 集録担当：中瀬 弥生
9:00	開 会 式	司会：喜多 保夫/記録：中瀬 弥生
	1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	生徒指導部会運営委員長 乃 村 久 信
9:15	講 演 Ⅰ	司会：金川 真也/記録：中瀬 弥生 講師紹介：金川 真也
	演 題 「ネット・ゲーム依存症～i Swing を用いた支援の提案～」 講 師 海 野 順 医療法人社団光風会三光病院 院長	
10:45	講 演 Ⅱ	司会：金川 真也/記録：中瀬 弥生 講師紹介：金川 真也
	演 題 「18歳成人の時代における学校教育と生徒指導の役割」 講 師 神 内 聡 本郷さくら総合法律事務所 代表弁護士 兵庫教育大学大学院 准教授	
12:00		

12:00		
	昼 食	
13:00	講 演 III・ワークショップ	司会：竹下 真司／記録：中瀬 弥生 講師紹介：竹下 真司
	演 題 「アンガーマネジメント～適切な教育に向けたぶれない心の作り方～」	
15:45	講 師 矢 野 宏 光 高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門 教授	
	閉 会 式	司会：喜多 保夫／記録：中瀬 弥生
	1. 開式の辞	
	2. 総 括	生徒指導部会運営委員長 乃 村 久 信
	3. 閉会の辞	
16:00	解 散	

7 講師・発表者（順不同）

海 野 順	医療法人社団光風会三光病院	院長
神 内 聡	本郷さくら総合法律事務所	代表弁護士
矢 野 宏 光	兵庫教育大学大学院 高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門	准教授 教授

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長 乃 村 久 信	藤井学園寒川高等学校	校長
副委員長 竹 下 真 司	高松中央高等学校	教頭
委員 金 川 真 也	藤井学園寒川高等学校	教頭
青 木 剛 士	藤井学園寒川高等学校	教諭
喜 多 保 夫	高松中央高等学校	教諭
中 瀬 弥 生	高松中央高等学校	教諭

生徒指導部会 講演Ⅰ

## 「ネット・ゲーム依存症～i Swing を用いた支援の提案～」

医療法人社団光風会三光病院 院長  
海野 順

依存症医療をしていると、例えば、「アル中」や「ヤク中」という言葉がよく偏見を持って使われていた時代があったように、依存症はどうしても他の疾患（認知症やうつ病等）と比べて、本人が好き放題やっているであるとか、本人のだらしなさ、あるいは、性格や人格的な問題というような誤解を持って捉えられがちである。私達人間は、脳内報酬系という神経回路を持っているのだが、依存症というのは、この脳内報酬系が異常をきたした状態だと説明される。側座核や線条体と呼ばれる部分は、私達がゲームをしたいであるとか、何かをしたい等過去に快楽を経験してきた行動を、またやりたいと思うような衝動や欲求を起こす脳の部位である。一方で前頭前野は、理性的な判断をしたり、何かやりたいことがあっても、不適切な場所ではブレーキをかけたりする働きをしている。依存症の方で衝動が高くて、やるべきではないけれども、やり続けてしまう時には、ブレーキが弱まっているか、あるいは通常よりも激しい衝動が生じているかと考えるわけなのだが、子ども達の脳の発達を考えると、生まれてから大人の脳になるまで、この車のアクセルに相当するような衝動を起こす線条体の働きが発達する。それに対して、10代後半、あるいは20歳までかけながら、前頭前野でゆっくりブレーキを踏むような前頭前野の理性的な判断の働きが発達していく。この発達のスピードの差があるので、私達自身の10代の時を振り返ってみても、今なら絶対にしないような失敗をしていたり、その場だけの気持ちや気持ちの高ぶりで冷静ではない行動を取りがちだったりということがあがる。



この前頭前野と線条体の働きを小児期から見ると、まず小児期ではどちらも未発達である。そして、思春期になると、線条体がまず先に発達して、成人になるにつれて前頭前野が追い掛けて発達をしていく。したがって、小学生、中学生、そして高校生の年代は、よく親に「宿題を先にやってから遊びなさい」と言われながらも目の前のゲームの方をやってしまいがちだというのは、このような発達に関係しているのかと思う。そして、ネット・ゲーム依存症に限らず依存症関連の疾患を見ていくと、ADHDとの合併が多く指摘されている。近年言われているのは、ADHDの方はやはり、衝動的な場面が多くあるので、そもそもADHDの方が依存になりやすいということが想像できると思う。一方でネット依存が、ADHDのような発達脳を作り出すということも仮説として言われている。衝動性が高い子がゲームに熱中しているうちに、例えば、周りの人がブレーキをかけようとすると、すごく反発して怒りっぽくなったり、より待てない子どもになったりすることがあがる。つまり、ネット・ゲームのやりすぎがその子の衝動性の部分を加速させてしまって、本来ADHDの診断が閾値以下だった子が診断閾値を超えたり、元々ADHDで診断を受けていた子が、より激しい衝動性を持って行動面に現れたりすることがあがる。

また、宮城県の研究でスマホの使用時間と学力との関係がよく指摘されるようになった。当然、スマホをたくさん使えば使う子ほど成績が良くないというのは想像しやすいところなのだが、実は単にスマホをたくさん使うと勉強時間が減って成績が落ちるという話ではなくて、勉強したとしてもスマホ使用が増えると、成績面で逆転現象が起きるという研究が出ている。また、これは別の見方だが、学習中にスマホアプリをどれぐらい使用しているかを見ると、家庭学習が30分未満の子が、全くアプリを使用せずの30分未満だけ勉強すると偏差値は50近くある一方で、毎日3時間以上勉強しているにも関わらず、アプリを3から4種類使用すると、30分未満しか勉強しない子どもたちよりも、さらに成績が悪くなるという例がある。実は、勉強とネット・ゲーム依存、スマホ依存の関係は、単にスマホ使用時間が延びるがために成績が落ちてしまうわけではなく、その時間に、ながら使用をしていたり、あるいは、勉強した直後に全く別のことに集中することで知識・記憶の定着が悪くなったりすることが推察されている。

ここまで衝動性についての話だったが、依存症について少し説明を加えたい。ネット・ゲーム依存が世の中に単語として登場したときに、一部の児童精神科の先生や他の関連の専門家が、それは、例えば、ADHDの

子どもたちの衝動性によって長時間使用している、あるいはASDの子どもたちの興味の限局、のめり込みによってゲームをやめられない状態であって、わざわざ依存症概念として新しく扱う必要がないと主張したされた先生方がいた。しかし、例えば、ADHDの人たちがのめり込み、やりすぎてしまうことによって、大切なことが後回しになるということであれば、ADHDの症状として説明ができるのだが、実は依存症は単に衝動性が高いということだけではないのだ。

これはゲームに限らず、アルコール、煙草等、何か刺激行動の開始が、例えば、大人であれば、友人とお酒を飲んで盛り上がったという経験があると楽しい時間を過ごして快楽が感じられるわけである。その快楽を感じると、私たちの脳が学習をして、また機会があるとみんなと同じような食事会を持ちたいという欲求が生まれる。これが時々であれば問題ないのだが、おいしいお酒を飲んで楽しかったからという理由で、毎日のように自宅でお酒を飲むようになって陶酔感を感じる事が当たり前化していくと、むしろ、感じられない日にこそ不快を感じるように変化していく。これが、お酒好きの人と依存症の人との差だ。快楽を求めて行う行動は、動物としても人間としても当たり前なのだが、その快楽の感じ方がどんどん鈍化していつまでも、仮においしい料理を食べに行っても、それと同じメニューを毎日食べると、当然感動は薄れていく。そのように快楽を感じることが、どんどん鈍くなっていつ、一方で、その方法によって快楽を感じられない時にこそ、不快感情が生まれるようになる。これが依存症の境目と考えることができる。快楽を求めてではなくて、そういう不快な状態を生じさせないために連続使用していく。つまり、衝動よりも、むしろ強迫的な使用の仕方に変わっていくという変化が脳に生じてしまう。これは脳の機能からしても当然のできごとで、実は人間の脳が衝動を感じるの、線条体のお腹側にある腹側線条体というものなのだ。そこに強固な神経回路ができて、その回路が腹側から背側線条体に移っていくと強迫症状を生じるのだ。最初は煙草を吸って、みんなでお話をして楽しい数分を過ごしたという状態から、ニコチンが切れるから先に吸わないといけない、これから長い研修が始まるから先に吸っとかなければいけない等、ニコチンが切れて離脱症状が始まる前に前もってやらないといけないということが、まさに依存症的な切迫感であるといえる。

当初は快楽を感じるからやりたくなる、これを「正の強化」という。また、学校から帰ってゲームをしている日に、たまたま友達とトラブルしてしまったであるとか、あるいは忘れ物をして先生に怒られたであるとか、何か嫌な体験を子どもがしているとしたら、あえて意識しなくても毎日のようにやっているゲームによって、その気分が癒される経験も起こるわけだが、これを「負の強化」、不快な感情を解消する効果が得られると考えることができる。これを毎日のようにやっていると、快楽の部分はだんだん減少していくので、正の強化による連続使用が弱くなっていく。一方で、自分の気分転換の唯一の方法となっていくと、心のバランスを取るため、その不快な状態を解消するための使用がメインになっていく。これが、病状が深刻化していくというプロセスだ。最終的には、もはや快楽を感じる事ができないのである。学校がうまくいかなくなって、友達関係も薄れてしまって、家では両親から怒られるようになっていくと、その周りからのストレス原因に対して、ゲームをすることによって、嫌な感情が100から50や30にはなるかもしれない。しかし、むしろ楽しいという経験ができなくなって、実際に当院の治療に来られている子どもたちに後々聞いてみると、周りからは好きなことばかりやっている様に見られていたのだが、夜中にYouTubeを見ながら涙を流している日が続いていたと語ってくれる子もいた。

また、依存とうつはとても関係が深く、ゲーム依存の子たちを見ても、かなり高頻度でうつの合併が見られている。例えば、抑うつ、自信低下というところから見ると、リアルな場面でうまくいっていない状況を持っている子は、ネット・ゲームに没頭していくと、当然、現実からの回避ということが成立するわけだ。ところが、同様に楽しい時間を過ごそうと思うと、プレイしても満足感が得られにくくなり、できない時の不快感情が高まっていくので、さらに長時間の使用、あるいは課金額を上げたりしながら大胆なプレイスタイルが必要になっていく。そうすると、日常生活の中でも優先順位が変わってしまって、さらにリアルに対して力を使う時間が減り、社会生活への支障が多くなったり、学校に行けなくなったり、リアルの抑うつ、自信低下がさらに高まっていく。この悪循環の中をぐるぐる回りながら、かなり問題が重くなってから受診される子が非常に多くいる。

ここで前半のまとめなのだが、依存症は6つの要素によって成立しているという考え方がある。端から見ると、自分にとって快楽を生じるようなことばかり繰り返しているようにしか見えないのだが、本人の中で起きていることの1つ目が「顕著性」だ。例えば、牛乳がいくら好きでも、飲めない時に牛乳のことが頭から離



れないということは生じない。それは牛乳の中に依存性物質が入っていないからである。一方で依存性があるものだと、例えば、ニコチンにしてもカフェインにしても、それが体から切れて、摂取していない時にこそ、それがまた欲しいだとか、どこに行ってお吸おうだとかを考えてしまうのだ。依存症はよく、脳がハイジャックされている状態と言われるのだが、むしろできない時にこそ、その衝動が高まったり、条件反射のように欲求が高まってしまったりということが起こり得るわけである。2つ目が「気分修正」というポイントだ。これは好きでやっている、楽しくてやっている状態ではなくて、むしろ嫌なことがあった時にこそやりたくなるというライフスキルになっているわけなので、嫌な気持ちを感じるときにやりたくなる、日々の大変なことを忘れるために没頭するということが起こる。3つ目が、「耐性」だ。これはお酒に強くなることと同等なのだが、以前よりも長時間使用しないと満足できない。あるいは、以前よりハイスペックな機器を求めようになってしまう。4つ目は、「離脱症状」である。俗に言う禁断症状のことだが、ゲームができなくなると落ち着かない、イライラする、気力がなくなる。つまり、ゲームが存在することによって自分の心のバランスを取っている状態から、その支えを一気に失ってしまうとどうしていいかわからない。ゲームばかりして大変だからと家族がゲームを取り上げてしまうと、布団からすら出てこなくなったというようなことが生じるわけである。5つ目が、「葛藤」だ。ここが一番誤解されがちなのだが、仮にアルコール依存や薬物依存だったとしても、捕まりたくてやっている人はいない。アルコールによって寿命を縮めようとしたり、周りに迷惑を掛けようとしたり思って飲んでいる人はいないが、結果的にそうになってしまう。不利益を生じてしまうということは、本人が一番良く知っているわけだ。でもさらに、それを上回る欲求の大きさによって、その行動を続けてしまうわけなので、本人としては葛藤が続く。アルコールでも最後には泣きながら飲まざるを得ない。覚醒剤でも1時間後には後悔して自己嫌悪になる。最終的にはそんな使い方になる。ゲームの場合にも、進級できなくなるとか、将来のことをどう思っているのかとよく指摘されたりするが、当然それは子ども達自身が一番良く知っていることで、凶星のことを言われると、非常によく反応をして家族と衝突を繰り返してしまう。実は言語的に葛藤できるのは、比較的大人の方が多いわけだが、子ども達が言語化された葛藤を持ってないときには、正論を言われた時に過剰反応をして、けんかの原因になってしまう、そんな行動の症状として観察されることもよくある。最後は「再発」だ。自分なりに時間を減らしているだけではうまく続かなかった、あるいは再開すれば、すぐにまたもとの状態に戻ってしまう。

この6つの特徴を備えると、「こうしなさい」では通じないから、このような疾患概念があるわけだ。例えば、認知症で物忘れが出てきた時に、「ちゃんと覚えなさい」と言っても通用しないので、疾患として存在するのである。依存症の場合にも、やめなさいということだけでは、当然歯が立たなくなっている状態を支援の対象としている。したがって、正論をぶつけて予防的に関わるのは、依存症発症前の人には、ある程度の効果はあるかもしれないが、困りだしている子どもたちに同様の関わり方をすると、本人を余計に追い詰めてしまう。

さて、私達は世の中に刺激対象、依存対象となるものがあふれているにもかかわらず、なぜ一部の人達だけが依存症になり、一部の人ではないのだろうか。

まず紹介するのは、「自己治療仮説」というものだ。これはゲームではなくて、物質使用に関して古くから言われているものなのだが、実は依存症とは、自らの苦痛を自己治療するための選択である。すなわち、快感を求めた結果ではなくて、苦痛の緩和を求めた結果として依存症になるという話だ。楽しくてお酒を飲み、楽しくて家族でゲームをしている人が、急に他のことを後回しにしてやり続けるということは、そうそう起こらない。自分の中の痛みを緩和するであるとか、しんどさを解消する、疲れを癒す、何か自分のバランスを取る道具になっているからこそ、やめにくくなっていくわけである。つまり、依存症というのは、好き放題やっているわけではなくて、自分を支える道具として唯一の手段になっている状態だ。唯一の手段になっているからこそ、やめられないのである。依存症の啓発をしていると、ゲームをあまりしてほしくない親が、「そんなことをしていたら依存症になるぞ」と依存症になることが悪いことかのように教育するケースがあり、すごく危惧している。私達は当然、自分1人では生きていけない存在だし、自分自身が今、症状を持たずに済んでいるのは、仕事や家族など自分自身を支えるものがたくさんあるからだ。これはライフスキルが高い状態なので、一番安定感のある人生の送り方だと思う。一方で子ども達は、学校というコミュニティを失うだけでも大打撃だし、中学、高校になって部活動があったり、バイトを始めたなど、せいぜい2つや3つのコミュニティの中で支えられているわけである。1つのコミュニティが大きいと、うまくいなくなってしまうと、身近なもので自分を大きく支える存在が必要になるため、そこが一番手近なネットやゲームになりがちなのだろうと思う。

さらに最近のトピックは、小児期の逆境体験と依存症との関係だ。小児期に逆境体験を持っていた人達は、大人になってからもアルコールや薬物依存症の発症リスクを増大させるという研究がある。また、小学校入学時点で、既に抑うつ状態が強かった子どもは、そうではない人達よりも、若年でアルコール依存症になるという研究もある。つまり、自己治療というのは、成人後に自己治療をする必要性が出てくるケースも当然あるわけなのだが、より依存症と関連が深いのは、小児期の時代に自分を癒す手段を自分で探さないといけなかったような体験が大きかった子どもたちなのではないかと考えることができる。それを最近では、信頼障害と呼んでいる。自分1人で自分の心のアンバランスさを解消しようとする、まさに物質の使用やギャンブル、スマホのように、自分1人でできるような単独行動によって癒すスキルが上昇していくのだ。これ自体は決して悪いことだけが生じるわけではなく、自分で自分のバランスを取るスキルが高い子どもとして成長するかもしれないが、しんどさを誰かに表現する機会も減ってしまうと、周りから見ると大変な状況にあるにも関わらず、自分で大変な状況であることすら理解ができなくなる。精神医療では、「アレキシサイミア」という概念があって、失感情症と言うのだが、周りは心配するけれども、我慢するのが当たり前だと思って育ち過ぎて、しんどさを自覚できない。そのことによって、身体的な症状としてしか表れなくなるというケースもある。

実は小児期逆境体験と依存症はかなり研究されていて、神奈川県立精神医療センターの小林桜児先生の研究では、アルコール依存症の方に多い小児期の逆境体験を、エキスパートコンセンサスとして17項目挙げている。その17項目のうち、実際にどの程度該当するかをというアンケートを、初診の時にもう十何年以上取っている。1つ目が、15歳までに慢性身体疾患があったかどうか。例えば、アトピー性皮膚炎があった、小児喘息があったかどうか。これは学校で遊ぶ時に、自分だけあまり運動をしなないようにしないといけなかったであるとか、修学旅行や宿泊学習でこっそり陰に隠れて自分1人で軟膏を塗っていた経験があるとか、そういう体験があったかどうかということである。2つ目が成績不良、3つ目がいじめ被害、長期欠席、補導歴等々なのだが、興味深いのが6、7番で、端から見るといい家庭に育っているように見えるが、実は家の中で両親ともに厳しすぎる家庭に育っていた、厳格なしつけがあったかどうか、いわゆる善意の虐待だ。過剰な期待があったかどうか。小学校低学年の時から、本人が望まなくても習いごとばかりさせられた、学校の成績がクラスで3番でも怒られたなど、そんな経験がある子ども達もいる。それから、家族に慢性身体疾患があったか、精神疾患があったか等々だ。逆境体験というと、激しい身体的虐待や性的虐待をイメージしやすいのだが、決して誰かが悪いわけではなく、たまたまそういう体験の中にいたというケースもある子どもたちがいるのである。

どのような逆境体験であっても、我々が健康でいられるのは、仮に嫌なことがあったとしても家族とその不幸を一緒に分け合いながら乗り越えていくことができるからである。したがって、幼少期から何かしんどいことがあったとき自分1人で癒そうという体験をいかに積み重ねてきたかに注目をしている。幼少期から何かしんどいことがあると、自分1人で癒そうという体験がいかに積み重ねられていくかに注目をしている。

近年多くなっているのが、家庭や学校という場所は存在するのだが、そこで優等生的に振る舞う必要が出てくるような子ども達だ。本当は頑張れないのだけれども、頑張りますという答えを強要されてしまうと、本人すら頑張りが過ぎていくことに気付かずに、毎日生活する場所で過剰適応しながら10代を送っていく。こうなると、大人になって同じようにお酒を飲んだ時に、単に楽しい時間過ごしたいではなくて、何か得体のしれない、自分でも分からなかったこの苦しさを全部癒してくれるような魔法の水と出会ったという感覚で、早期に依存症になっていくという仮説があるのだ。

実はゲーム依存の外来を受診した成人だけを対象に、同様に17項目の逆境体験の有無について調べてみた。そうすると、薬物には少し劣るが、その次ぐらいに逆境を持つ子ども達ばかりがゲームによって支えられていることが明るみになってきた。ゲーム依存は本当にさまざまな子ども達が受診している。これは韓国の先生が、インターネット・ゲーム障害、いわゆるIGDを3つのタイプに分類する試みをされている。1つ目が「衝動攻撃型」。これは10代の男性に多いタイプで、その時期特有の男の子の攻撃的な衝動を充足させようとする場合、それをリアルで充足させようとする、プロレスごっこをしたり、けんかをしたりするかもしれないが、オンラインゲーム上でしようとする、FPSやTPS、MOBAのような過激なタイプのゲームに没頭しやすく、ADHD傾向を持つ人が多いタイプである。2つ目が「情動脆弱型」だ。これは低い自尊心を持っていたり、自分自身の気分が不安定だから、その気分調整のためにゲームをプレイするようなスタイルである。うつを合併するケースが多くある。うつっぽい子が、過激なゲームになかなかハマることは想像しにくいように、ゲームのキャラクターやストーリー性のような世界観に没入していくというハマり方をする。したがって、激しく

なくてゆったりプレイできるような MMO や SNS などにハマっていきやすいというタイプである。そして 3 つ目が「社会的条件型」である。これは孤独な境遇があり、リアルでの社会的交流がその人にとって不十分な場合に生じるタイプだ。本来なら学校でもっと仲良くして、クラスの友達グループの中に入っていきたいが、社交恐怖、社交不安があって、中々自分を表現できない。でも、その子ども達がうらやましいみたいな人は、実はオンラインの中では、割と自分の苦手分野を見せずに交流ができるので、本来の自分自身よりも社交的になって、より積極的な対人関係を作りやすい、そういう動機でハマっているようなタイプである。この「社会的条件型」の 2 つ目のサブタイプは「顕在型」と呼ばれるもので、これは社交恐怖がなくても、リアルの世界で十分に対人関係を持っているのだが、さらに自己愛的な動機で、オンライン上でも自己顕示欲を見せながら、自己表現をする場として利用しているタイプだ。

ゲームをしている子ども達は、なぜゲームをしているのか、ゲームによって何が支えられているのかを考えた時に、それをアセスメントすることはとても難しい。友達関係もうまくいっていて、彼氏もできて順風満帆な女子高生が、たまたま SNS にすごくハマっているからといって、スマホを親に取り上げられたとしても、恐らく自殺しないと思う。でも、中には家庭内あるいは友達関係の中でいじめ被害に遭ったり、すごく苦しい経験をしながらそれが誰にも言えず、自分 1 人で癒すために、四角の画面に没頭しているという子ども達もいるわけだ。周りから見ると同じように画面に向かって長時間過ごしているのだが、その子がゲームによってどんな部分が支えられているかに気が付かないと、非常に危険なことが起こるのではないかと思う。

アルコールはエタノールという依存物質が特定されているが、ゲームの場合には、そのゲームに依存させる 1 つの物質があるわけではないので、プレイスタイルによって、ハマり方が千差万別だ。よって、生理的な要求、安全要求を充足させる、すなわち、リアルでこれらの要求が充足されていないがためにオンラインに寄りかかっている子もいれば、あくまでクラスでうまくいっていない、部活動でうまくいっていないから、所属感や承認が足りなくて、オンラインによって満たされている子のケースもある。あるいは、リアルも完全にうまくいっているけれども、なおかつ、オンラインの中で楽しみを見つけて自己実現をしている子もいる。この高次から低次まで様々な動機によってなされているのがゲームの特徴でここが一番難しいと日々感じている。

さらにややこしくさせているのが、そこまで病的な背景を持たない子ども達でも長時間使用しているケースが増えてきていることだ。そちらが目立ってくると、簡単に時間を短くしろとかやめた方がいいと言ってしまうやすくなってしまう。これはアルコールベースの研究だが、同時にインターネット依存に関して、スクリーニングテストを行った。男子中学生では、2012 年時点で DQ という質問項目が 5 項目以上で病的使用に該当するのだが、4.4% が該当し、さらに 2017 年の 5 年後には 10.6% に倍増していた。これは女子高校生でも全く同じ傾向で、当然この 5 年間で逆境体験を持っている子ども達が増えるわけではないので、恐らくそういう動機ではなく、もっと身近なネガティブな状況の是正に対して使われるように、どんどん身近になってきたということだ。この研究成果だけで言うと、実は中高生の 7 人に 1 人が DQ5 項目以上を満たして、依存症疑いとされてしまう事態になった。この数年では、単に退屈だからネットを見ているケースがどんどん増えてきたという研究も出てくるようになった。最近のスマホは、一昔前のパソコンよりも高性能・多機能なので、自己治療ではなく、たまたま昼休みに次の講演まで 15 分あるからスマホをいじるというように、退屈感を自己治療するためにスマホが使われる。しかも退屈感という低度なネガティブ感情を、すごく充実したポジティブな依存形成の強いようなもので満たされてしまう。だから、退屈には十分すぎるような機能を持ったもので、日々を癒すようなことが起こってしまうと、より依存形成しやすいのだ。依存がどんな時に形成しやすいかという、現実性と速攻性がある時なのだ。ちょっとしんどい時に薬を飲めば痛みが確実に治るであるとか、速攻性、現実性があると、まさにその手段が自分にとって好都合なので、どんどん深まり、繰り返していきやすいという傾向があるわけだ。実はそのように、ゲームもスマホもどんどん身近になってきて、本当であれば、ちょっとしんどい状況というのは放っておきながら、そのネガティブな状態に耐える力を付けていかないといけないうきに、パッと摂取できるような方法によって自分のバランスを取るという便利すぎる手段が現れると、当然大人達は子どもが心配になっていく。

香川県でも 2019 年の時点で、ゲーム依存が心配だ、対策が必要だと考える香川県の成人は 84% にも上った。睡眠不足、成績低下、不登校、引きこもり等々、そのようなものが懸念されて 2020 年 4 月に「ゲーム条例」が誕生した。この条例は、子どものスマートフォン使用等における家庭におけるルールづくりという第 18 条が目ざされて、批判的にも報道されたのだが、この条例の言いたいところは、まず家庭内でルールを考えようとい

うところである。この条例に対する反対意見として、2020年9月には香川県内に住む高校生親子が、条例を作った県を提訴した。ところが、昨年の夏に請求棄却という判決が出て、この条例自体の危険性は全くないことが示されたのだ。

しかし、私達はこのゲーム条例ができた時に、それを歓迎した人たちと猛反発をした人がいたという社会の反応を大切に見る必要がある。これは海外の研究なのだが、予防戦略に対して、オンラインゲームが好きな人達が、どのような戦略に対して支持するか、支持しないかを調査した結果だ。オンラインゲームをする人達は、当然ゲームが好きなわけなので、予防戦略自体に何でもかんでも嫌かという決してそうではなくて、学校ベースでメディア教育をしてもらうことは8割が支持する。健全なゲーム使用に関するガイドラインを作ることを、同様に8割の人たちが支持する。すなわちゲームが好きな人達が、ゲーム依存に対して予防することを歓迎している方が多いのである。つまり、ハマってしまうことは分かっているので、どんな使い方をしたら大丈夫なのかについて当然興味があるわけだし、予防されることがゲームを取り上げられることにはつながらないわけだ。ところが、この調査で支持しない人達が多いところを見ると、刺激性のあるゲームに対する年齢制限についての賛否は半々だ。例えば、「フォートナイト」というゲームは、CEROではレーティングCなので15歳以上向けである。しかし、そんなルールがあっても守らないことが多いので、厳格に年齢制限するとしたら恐らく猛反発が出てくる。さらに支持しないで多いのは、開発者による非自発的なゲーム時間制限である。中国ではシャットダウン制度があって、3時間ぐらいプレイするとだんだんスピードが遅くなってきて、5時間ぐらいプレイすると勝手に電源が切れる仕組みがあるのだが、当然そんなことはやってほしくない。一番不人気だったのが、ゲームに関する時間制限を義務づける政策である。これは香川県のゲーム条例に似ているのだが、こういうことをされると一番反対が来る。すなわち、強い立場が弱い立場の行動を制限するという方法は当然不人気で、ネット・ゲーム依存症対策は、このような方法によってなされてしまうと、なかなか子ども達と協調して自分を律するような使い方の教育にはつながっていかないことが想像できると思う。

香川県で2020年に条例が施行されて最初になされたのは、啓発のリーフレットが全校配布されたことだ。内容自体は、DQというチェックリストを示していたり、ルールづくりの重要性を書いてあったりしているのだが、やはり一番大事なものは、このチラシの可愛さである。どこの県のリーフレットを見ても内容自体はいたり寄り寄りなのだが、一番違うのが、可愛いリーフレットを作っている県と、いまだに間違ったリーフレットを作っている県があることだ。日本はそもそも一次予防ばかり充実していた国として依存症の中でも有名で、本当の恐ろしさを過剰に表現して、まず手を出す人を作らないという手法ばかり取られてきた。ゲーム依存に対しても、そのような手法を取っている県があって、結構ひどいイラストを作って脅しの予防教育みたいなことをやっているのだから、反発がくるのではないかと心配している。

香川県で次に行ったのが、予防対策学習シートだ。これは教育委員会とともに作ったのだが、初年度には小学校低学年、高学年、それから中学生版の3種類を作成した。これはネット・ゲームの面白いところを挙げた上で、面白い、楽しい、没頭する、だからこそやりすぎてしまうという様な両面を見るバランスシートを作成してもらう。その上で、つつい面白いもの、魅力的なものほどやりすぎてしまうからどんな使い方をしたらいいのかというルールを、生徒たち自身に考えてもらう。それをグループ学習で扱って、自分が家庭に持ち帰って守りたいルールを作るのである。多くの学校では夏休み前のホームルームでやって、夏休みの間、週ごとに達成できたかどうかを自己評価して、それを休み明けに提出する取り組みを行った。こうすることで、自分で考えてやっていくことができる。親がルールを決めて命令するのではなく、自分たちで脳みそに汗をかきながら絞ぼり出すというプロセスに、すごく教育効果があると思う。同様に、保護者に向けてという冊子も作成した。予防教育を早くやったほうがいいということで、こども園の保護者向けに啓発をしたり、研修会をDVD化して配布したり、網羅的な取り組みを行ってきた。

1つの成果として、香川県では家庭におけるルールづくりということで、教育委員会が行った調査で、小学校高学年を見ると、平成29年時点で、家庭においてルールがあるのが87%だったのに対して、令和3年には91%まで増えた。この高確率をさらに5ポイント引き上げるとするのは相当な効果だと思う。むしろ逆に、ルール設定がなかった10%の家庭が6%に減ったということだから、ルールがなかった家庭の4割がルールを作ってくれたわけである。これは中学生でも同様に5ポイント増えていて、香川県の場合はこのルールを作ったあとに、守れなかったときにどうするかという次の課題があるのだが、今、一定の条例の成果が出たと思っている。

そして今回、一番お話ししたいのは、「回復プログラム」についてである。私達はもともとアルコール、薬物、ギャンブルやクレプトマニアという窃盗の依存症、痴漢、盗撮の方など、成人の依存症ばかりを治療してきたので、2017年に専門外来を始めたときに、実際に子ども達にどこまで通用するのか、恐る恐る始めた。病院につながる時は、家庭内だけで一生懸命してきたけれどもうまくいかなかったから外部の力を借りるという形が多くて、病院受診に至るまでがとても長いのだ。アルコール依存症の場合には、最初に内科や救急など病院受診をしてから依存症専門医療機関にかかるまで、平均7.4年かかると言われる。その間、どんどん家庭の中での問題が深刻化して、どうしようもなくなってからつながるパターンなのだ。ゲームの場合もかなり似ていて、小学校5年生の時にうまくいかなかった体験をもとに学校に行けなくなってしまって、受診した時には17歳になっていて、5年前からの病歴を聞かないといけないようなケースも決して珍しくない。小学校低学年のケースでどんなゲームが好きかと聞くと、FPSと言われた。私自身はその時、FPSという単語すら知らなかった。FPSというのはファースト・パーソン・シューターの略で、いわゆる戦争ごっこをするようなゲームのジャンルなのだが、ゲーム依存外来をする時に、その言葉すら知らなかったので治療が始まらなかったのだ。私達は、外来の中で少しだけ世間よりも早くこの分野に参入したので、その分、症例数、経験数が増えていると思う。支援する上で、この概念は知らなかったらまず支援が始まらないだろうということと、本当にゲームマニアしか知らない、普通の支援者は知らなくても通用するだろうという、ふり分けができる立場にあるので、「i Swing」のサポーターガイドという冊子の巻末にネット・ゲーム依存の関連用語集を作成した。この用語集には、単にゲーム用語だけではなくて、ハマっていくときの心理学的な用語も入っていて、一読すると当事者目線での気持ちが理解しやすくなるので、良かったら参考にしてほしい。

依存症支援の課題は、支援を必要とする人がなかなか支援につながりにくいことだ。衝動が勝ってしまっている状態なので、問題がある、このままではいけないという意識を持ちながらも、積極的な受診行動は期待されない。したがって、私たちのような病院に来る前にどのように支援を始めるかという、やはり、病院受診前に関わっているような信頼関係のある大人達が、子どもの支援を始めることが肝心ではないかと思う。「i Swing」は、依存症支援を専門としない人でも、当事者と一緒に読み進めながら支援を始められるように編集している。依存症は、各機関が専門性を生かしながら、重なり合うように社会の中で連携しながら支援をしていく。条例制定前のあるケースである。ある中学2年生が長期休暇中に長時間ゲームをして昼夜逆転していて、新しい学期が始まっても全く学校に行かず、そのまま完全不登校になってしまっていた。それを学校の先生に相談すると、ネットの使い方は学校で指導は一般的にはしても、本当に指導するのは家庭の問題だと言われる。かかりつけの小児科の先生に相談しに行っても、まずは昼夜逆転を直そうと言われるだけである。そして、依存症の専門医療機関では、成人の依存症はやっているけれども、子どもの依存症はやっていないと言われたりする。つまり、一番困っている子ども達と家族がどこの支援機関からも支援を受けられないという状態が長く続いていた。それは当然で、この新しい社会問題に対して、10年、20年前から専門的に支援をしている人は、この世の中にいない。したがって、学校の先生方、成人の依存症の専門家、児童精神科の先生、小児科の先生、それから子育ての専門家など、関係する人達がどれだけ重なる連携をできるかどうかなのだ。連携せず自分の専門にだけ対応していると、その狭間で落ちていくケースがたくさん出てきてしまうので、それをなくすために作ったのが「i Swing」である。すべての県内の小学校、中学校、高校、そして医師会、精神科、児童精神科、小児科を標榜するすべての医療機関、精神保健センターや保健所、児童相談所など、県内の約1,000カ所にこの冊子を配布している。専門医療機関を受診しなくても、当院でやっているプログラムを疑似体験できるし、学校に行っても中々教室に入れない子ども達が、保健室で養護教諭の先生と一緒にこの冊子を開きながらまず支援を始めていただくというコンセプトだ。子どもたちが登場しないときには、家族教室と銘打って、サポーターガイドという支援者向けの冊子と一緒に勉強会をするなど、そのような使われ方が県内各地で行われている。条例の基本理念には、専門家がいないので関係する機関がいかに連携して支援をしていくか、社会全体で取り組む必要があるということが書かれていて、それが実現されるためのツールとして役に立っていると思う。

「i Swing」は全14回から構成されていて、当院の外来では毎週やっていくので3カ月ほどで1周するのだが、最初に依存症という病気について勉強してもらおう。そして、自分自身の使い方を振り返ってもらおう。次に自分自身で適切な使用方法というのを模索して、不適切な使用パターンというのを定義してもらおうのだ。具体的には、依存を起す3要因、「ネット・ゲームの要因」、「個人の要因」、「環境の要因」のようなものをチェックリストから当てはまるものを探してもらおう。そして、グループで意見を出し合い、最終的にはネット・ゲー

ムの不適切な使用パターンを定義する。例えば、私自身がスマホの使用時間を5時間から3時間に減らそうと思った時、使用を3時間にする意識しながら日々を送っても絶対にうまくいかない。5時間を3時間にするスマホの触り方が分からないのだ。実は、オンライン時間を減らそうと思うと、自分の使い方のパターンの中でずるずる使っている部分を想像して、そこをやめようとする。実は子ども達も一緒に、1日何十分以内にしなさいという数字は、使っている最中のセルフコントロールには向かないのだ。恐らく、時間以外にネット・ゲームのハマり方を評価する術を持っていないから時間で言う人が多いと思うのだが、ほとんどの子ども達にはそれが難しい。したがって、自分自身のゲームのプレイ経験によって、つついやりすぎて沼にハマったみたいな失敗体験を思い出してもらって、だからその使い方はよくないということを定義してもらおう。これが、不適切な使用パターンの定義である。それからサポーターガイドは、医療の支援者、学校の先生方、それから子ども達を取り巻くすべての大人、つまり家族も含めて、それを「サポーター」と呼んで、コミュニティ強化アプローチとして、子ども達が減ゲームを実現するために、それぞれ一番有効な役割になっていくための方法を学ぶための冊子だ。

ここに書いている中で、「動機づけ面接」がある。動機づけ面接というのは、ああしなさい、こうしなさいと命令をするわけではなくて、当事者自身に今までのゲーム中心の生活パターンを変えようとする言葉を自分から発する。そのために、自分から発してもらえるように支援するための面接技法を指し、それを発することを、「チェンジトーク」という。思春期の子どもたちの時点でまず両価的だから、勉強しなさいと言われるほどやりたくなくなることが当然起こる。動機づけ面接というのは、そもそもその両価的な、矛盾するような気持ちを抱えている人たちに対して正しいほうを選んでもらう時に、こうしなさいと言うと、心理的な抵抗を生じてその逆の行動が助長されてしまうケースがたくさん観察されるので、あえてこうしなさいとは言わずに導いていく、そんな発想に立った面接である。特に、動機の3要素が、まず、自分がどうしなければいけない状況にあるのかという、「変化するための準備が整っているかどうか」。2つ目にあるのが、「意志」だ。誰かがやってくれるのではなく、自分が1歩を踏み出さなければいけないということだ。そして、最後にあるのが「自信」である。これは、どんな方法を取れば自分でも達成可能かという、具体的なやり方が分かっているということだ。この3つの動機の要素がそろって、必ず動き出す。中々、これをこうしなさい、ああしなさいではなくて、自分の言葉で発せさせるところがプロセスとしては大変だ。実は「iSwing」の面白いところは、この動機づけ面接に相当することを、冊子を順番に読み進めてやっていただくと、最終的にチェンジトークに相当する不適切な使用パターンを自分で定義するという項目を設定しているので、動機づけ面接の考え方に沿って支援が進められることである。

実際に行動変容ステージモデルもサポーターガイドで紹介していて、まずゲームに没頭することを変えることにに対して無関心な時期から始まる。ところが、ここがうまくいかないとか、友達から心配する声をもらった、親に怒られるようになった等々でこのままではまずい、どうにかしなければいけないという気持ちが芽生える関心期という時期がやってくる。そして、どうやって変えていこうかと模索するのが準備期だ。この無関心期から関心期、準備期の間は、結果として行動は何も変わっていないのだが、子どもたちの中では大きい変化があるわけだ。単に好きでやりまくっている状態から、まずいなと思いつつ始めたり、どのタイミングからもう1回学校に行こうか、あるいは、学校には行かないけれどもどうやって勉強するかなどを模索する時期があるわけだ。この無関心期から準備期に至るまで、この間に使えるものが動機づけ面接で、何一つ行動が伴っていないからといって支援の仕方がないわけではなく、それぞれの段階に相性のいい支援の仕方があるのだ。当然、無関心期の人にゲームのデメリットをいくら説明しても全く意味がない。むしろ、信頼関係を失ってしまう。無関心期でできる支援は、まずは協働関係を作ることだ。なぜハマっていったかというポジティブな側面と一緒に理解をしていくのだ。そこで信頼関係ができると、生じている不安や孤独な感情を、そっと打ち明けてくれる相手になっていくことができるわけである。それが関心期に向かう扉が開くタイミングだ。

実際に関心を持ち始めると、ここで初めてバランスシートが作れる。このままゲームをやっていくメリット・デメリットを整理していくことができる。この整理に付き合うということも非常に大事だ。当事者からすると、メリット・デメリットは複雑に、モザイク状に頭の中を揺れ動いて出てきたり消えたりしているわけだ。これをたった2つのメリット・デメリットに分けてあげることによって、どちらを選んだらいいのかが明確になっていくわけだ。でも結果、自分1人ではどのように変えたらいいのかが分からないので、立ち止まってしまふ。そこで、具体的な方法を一緒に考えてあげるのである。こうすることで、これだったら自分でも達成で

きそうだというものがでてくるわけだ。それを「i Swing」の不適切な使用パターンに反映して、自分たちの言葉でチェンジトークとして定義する。実際には行動期、維持期といって、動き出してからも支える必要性はあるのだが、一番支援が難しいのは、本人がゲームにばかり向いている状態を支援しないといけないところで、そこが一番、この冊子によって活用できる場所かと思う。アセスメントをするときに、正の強化が得られる状況を把握してほしい。ゲームの支援に慣れていない人たちは、バランスシートを作る上でもネット・ゲームの長時間使用を続けていくデメリットばかり強調したくなる。しかし、それは依存形成している人たちに対して信頼関係を失う方法にしかない。ハマっている本人からすると、何らかの魅力や、ゲームによって助けられてきた体験があるからハマっているのだ、そこを一緒に紐解いていくのだ。当事者のゲーム知識があると、より充実した心理教育を行うことができる。例えば、どんなイベントに好んで参加しているか、ゲーム内のランキングはどうか、どんな報酬をもらっているかなどが多くの場合、使用パターンとしてよりのめり込んでいることが多いと思う。でも、24時間行動考察をしても、これは見えてこないのだ。したがって、ワークをしながら子どもたちから教えてもらう。どのポイントでハマっているかを、子どもたちの言葉で説明してもらうという方法しか最終的にはないと思っている。

ネット・ゲーム依存症とは、高度情報化社会における適応的な行動として、あるいは日々の生活に抱える何らかの困難さに対する対処行動、コーピングとして、生活にポジティブな効果をもたらすはずであったネット・ゲームの使用が、どこかのタイミングで、何か不適切な使用パターンに陥ったことでコントロールを喪失し、結果として日常生活・社会生活に支障をきたした状態と定義できると思う。したがって、不適切な使用パターンを特定していく。これは当事者とサポーターがテキストを用いながら協働的な作業の結果として、どんなゲームの使用のパターンがその子どもにとって不適切かという共通認識を持つことができると、それを避けた使い方をしていこうという具体的な目標になるし、子どもたち自身が定義してくれるわけだから、より達成したい目標を作ることができると思う。この方法自体は予防教育にも通用すると思っていて、言われて制限されてゲーム時間が少なくて済むことは、子どもの成長としては期待されるべきことではないと思うので、結局は自分を律するような自律性を育てていくことに尽きると思うのだ。本人は、自分が避けるべきゲームパターンを冷静に分かっているのだ、こちらが想像もしないような目標設定を考えてくれる子どもたちばかりで、自分で言ったからには達成してくれる。子ども達も不適切な使用パターンを挙げるとか、やらされるの分かっているのだ、自分が達成できそうなものを目標として掲げて実行してくれるというメリットがある。

当院は毎週土曜日に「S-NIP」というプログラムを、こども外来で行っている。土曜日の9時から12時まで行っていて、9時から10時は毎週レクリエーションを行い、10時から11時に「i Swing」を活用したグループワークを行う。11時から交流会だ。病院自体は居場所の役割も担っていて、ゲームが好きな子しか来ないので、周りに引かれることなくゲームの話で盛り上がりつつある。一方で、葛藤や家庭内衝突があったり、怒りながらの治療なんてスタートできないから、実は9時から10時は、いろいろな活動しながら親子間の葛藤を無力化してあげるとか、のんびりした雰囲気治療に向かえるような心を作るために設定している1時間だ。そして、10時から11時でプログラム始めるが、11時以降を交流会にしているのは、やはり、依存症の子ども達は過剰適応の子が非常に多いので、グループワークをすると、大人が喜ぶような答えをしようと、嘘ばかり言うのだ。ゲーム時間を少なめに申告したり、自分の中で起こっている小さい問題は言えるけれども、本当の大事な問題が中々言えなかったりする。グループワークを優等生的にやったところで全く成果を上げないので、あえて11時からフリータイムを作ることによって、話題を延長させながら、支援者と関わることによっていろいろな他の発言を聞いていく時間になっているのだ。実際にやっているレクリエーションの活動は、病院の診察っぽくない。マシュマロを焼いたり、バウムクーヘン作ったりしている。こういうことをしながら割とダイナミックにやることで、子ども達の変化を促していく。当院の治療成績は、2019年は「S-NIP」に1年間で導入した症例が36例あった。導入後、4回以上継続できた群が16例。なかなか集団に入ることで体が難しく個別対応を要した症例が12例。一方で、治療が継続できずにドロップアウトされた8例があった。実際、3カ月経過すると、1週間当たりのオンライン時間が有意差を持って減少していたという成果が出た。さらに、当院に1年以上かつ1年間に20回以上継続参加している子ども達が8人いて、8人のオンライン時間をプロットすると全くバラバラなのだ。3カ月時点で1回は下がっているものの、リバウンドしてまた長時間使用している子がいる。1日あたり15時間のゲーム時間。オンライン時間以外に、日常生活・社会生活に不適応を起こしてしまうゲーム関連7症状の該当数をまとめた。7症状とは、小遣い以上の課金があるかないか、暴言・

暴力があるかないか、自宅じゃなく自室への引きこもりがあるかないか、朝起きない、学校行かない、ご飯を食べない、勉強しないである。この8例を3カ月目以降もオンライン時間を減少して維持しているA群、リバウンドして、また長時間使用が続いているB群に分けてデータを見ると、どちらの場合も、この関連7症状は減っていた。では、A群とB群で何が違うかというところ、A群は、通院している1年間の間にたまたま中学生が高校生になったケースと、高校に行っていた人が進級できずに転校したケースと、あとは少し大人だが車の免許を取ったケースと、彼女ができたケースだった。B群は、中学1年生から2年生になって不登校が続いているだけなどである。すなわち、自分で変えようと思っても、環境要因自体に大きい変化が望めなかったような1年間においては、やはり、ゲームによって支えられるということが必要で、オンライン時間は長いけれども生活の中で関連症状を作らないようなゲーム使用を身に付けたという治療になったわけだ。結果として、B群でも治療の意味があると思う。いざ自分自身を変えたいと思ったときに、例えば、次に環境が大きく変化するタイミングで、最初の1歩をきちんと踏み出してくれるような、どうやったらいいかという方法を知り、自分もやればできるという気持ちを高めながら、変化の準備性が高まった状態を維持していくことを念頭に置いて関わっている。

面白いのは、「S-NIP OFFLINE CAMP」だ。これは香川県の条例によって、2022年から正式にやっている。昨年は8月7日から11日まで4泊5日で行ったのだが、普段の外来と何が違うかというところ、精神科病院を受診するまで待たずに参加できるので、軽症の人たち、あるいは予備軍の人たちも参加できるということ、そして、親が勝手に申し込むケースはなるべくはじいているので、子ども達自身が自分で生活を見直したいという、自発的な治療動機、回復動機が高い子ども達が参加しているという点だ。そして、普段の診療ではないような大学生メンターにも協力をしてもらっていて、今年から、香川大学の心理学科と県立保健医療大看護学科の実習の単位にも認定される。大学生メンターと一緒にキャンプに参加してもらいながら、そこで交流をして1週間過ごしてもらおう。実際に自然体験活動をやってもらおうが、あまり自然に関しては重要ではなく、初めて出会う子ども達20人、そしてスタッフも入れて70人ぐらいの団体が1週間生活を一緒にして、様々なことに挑戦しながら成功していってもらおうことが重要だ。「やればできる」という体験を増やしていきたいのと、キャンプが終わるとどんなことに挑戦したいかを高ぶる気持ちの中で決めていきたいわけだ。調理活動をしてみんなと一緒にご飯を食べたり、毎日心理プログラムをやる。心理プログラム自体は「i Swing」のショートバージョンという全5回で終わる使い方があるので、それをキャンプ用に活用している。キャンプ参加前後の変化としては、精神的な健康度、GHQを取ると、キャンプ前、後に有意差をもって改善していた。さらにDQというネット依存度を見ると、キャンプ前と3カ月後のフォローアップキャンプ時には有意差をもって改善していた。あとは自己効力感や抑うつ尺度も測っていて、数値自体は良い方に変わっていった。これを毎年蓄積していくことによって、効果が出てくるのではないかと期待している。



生徒指導部会 講演Ⅱ

## 「18歳成人の時代における学校教育と生徒指導の役割」

本郷さくら総合法律事務所 代表弁護士／兵庫教育大学大学院 准教授

神内 聡



民法が改正され、2022年4月から成人年齢が18歳になった。成人年齢が、このタイミングで20歳から18歳に、140年ぶりに引き下げられた理由は諸説ある。1つ目は、現代の18歳は昔に比べて成熟しているため、18歳に成人年齢を引き下げても支障はないという説。2つ目は、海外の成人年齢は18歳の国が多いということだ。そのため、日本の成人年齢が18歳でないのは遅れているのではないかという説。3つ目は、若い世代に、社会の担い手として参画してほしいという説。若い人たちの意見が社会に反映されることは歓迎すべきで、社会が前進するだろうと言われている。4つ目は、おそらく一番実際的な理由で、これは法律上の話だが、憲法違反が生じる可能性が出てくるからという説である。憲法には、公務員の選挙について、成年者による普通選挙を保障すると書いてある。つまり、日本国憲法には何歳から成人とするのかは書いておらず、法律でそれを決めるように、と書いてある。ここでの「成年者」とは、基本的には「有権者」という意味で考えられているが、2016年に公職選挙法が改正され、選挙権の年齢が18歳に下がった。そうすると憲法上、憲法上の成年者は18歳を指すという解釈が出てくる。しかし、そうすると法律上での整合性が取れなくなる。公職選挙法での成年者が18歳で、民法では20歳となると、これはどちらかが憲法違反になるのではないかという意見が出てくる。それは不適切だということで、民法も成人年齢を18歳に変えようという議論になった。では、なぜ選挙権と民法の成人年齢を同時に引き下げなかったのだろうか。同時に引き下げることも可能だったと思うが、実は成人年齢の引き下げと選挙権年齢の引き下げは、世論の動向が異なっていたのである。成人年齢の引き下げについては、一貫して慎重論が強くあった。現に、改正する直前まで、世論調査では半数弱の人が反対だった。ところが、選挙権の年齢の引き下げについては、一貫して賛成派が多かったのだ。従来、保守政党は選挙権の年齢が引き下げられると、リベラル派が多い若者がリベラル政党に投票すると考えており、選挙権の年齢引き下げに慎重だった。しかし、ここ最近で変化があり、若者ほど自民党支持者が多い傾向にあるため、選挙権の年齢を下げるのは、自分たちにとって有利ではないかという意見が自民党からも出てきた。実際に保守政党に投票する若者が多かったため、選挙権の年齢引き下げが実現した。そして、選挙権の年齢を下げたことにより、法律上の整合性が取れなくなり、民法改正の意見が出てきたのである。

では、日本の成人年齢が20歳とされていたのはなぜだろうか。これについても定説は不明だが、そこまで大きな理由ではなかったと考えられている。明治時代に民法を作る際、ヨーロッパの成人年齢を調べたところ、当時のヨーロッパの成人年齢はおよそ21歳だと分かった。当時の日本人の平均寿命は、ヨーロッパの人より少し短かったため、21歳から1歳引いた20歳はキリがいいという話があったことと、徴兵の基準年齢が20歳だったこともあり、それに合わせたのではないかと考えられている。

ではなぜ、法律で子どもと大人を区別するのだろうか。ヨーロッパでは、子どもと大人を区別する価値観はなく、子どもは「小さな大人」の扱いだった。昔は学校という制度もなかったため、子どもも働いていたのだ。反対に、日本は比較的、子どもという感覚があったのだと思う。それは識字率に現れており、日本人の識字率は江戸時代から高く、教育熱心なことがうかがわれるし、日本では、子どもは学ぶもので大人が働くものという概念があったのだろう。それでも、昔は大人扱いされる年齢がとても低く、子どもは保護される対象ではなかったようだ。子どもは学ぶべきで、子どもは保護すべきだという考え方は、やはり学校制度ができたからだろう。

次は法律の話になるが、18歳になることで変わる最も大きな点は、親権者がいなくなることだ。学校教育法では、親権者は保護者と決められているため、親権者がいなくなるということは、同時に保護者がいなくなるということでもある。そして、親の同意がなくても契約ができるようになる。この点は、

社会的に最も議論されていることで、消費者問題も起こり得ると考えられている。例えば、携帯電話や賃貸契約、またクレジットカードの使用も、法律上は、18歳であれば高校生でもできるようになる。ただし、クレジットカード等は信用契約のため、おそらく審査が必要で、保証も必要になるため、高校生単独では難しいかもしれない。他には、男女ともに18歳であれば、親の同意がなくても結婚できるようになるし、国籍変更もできる。国籍変更は重要な問題で、在学中に国籍変更ができる可能性が出てくるし、留学する学生たちに関係してくるだろう。その他、単独で裁判の原告や被告にもなれる。高校生同士で裁判が起きることも今後考えられるし、18歳になった高校生から、不満のある校則等について、学校が裁判で訴えられる可能性も出てくるのだ。さらに、18歳になると裁判員になれる。民法改正に合わせて少年法も改正したのだが、死刑の評決に現役の高校生が関わる可能性が出てくるということだ。反対に、18歳になったからとはいえ、できないこともある。それは、飲酒、喫煙、ギャンブルだ。それらは現状通り20歳から可能になる。そして、養子になること、国民年金、これらも変更されない。

このように、成人年齢が引き下げられたことによって、18歳でも様々な権利がもらえるのだが、そのことについてメリットとデメリットを考えてみよう。

まずメリットは、18歳になると、親の同意なく、自分の意思で、様々な契約や取引が可能になることだ。親の意見は関係なく自分が主体的に決定するため、自立心が養われるだろうし、また自分で結んだ契約を守らないといけないという責任感が生まれる等、良いことでもあると思う。そして、有権者年齢と成人年齢が整合することで、若い世代の意見や価値観が、政治だけでなく、経済活動にも良い影響を与えると考えられる。自分で契約できる消費者が増えるため、若い世代の意見を取り入れたビジネスも出てくるだろう。他にも、被選挙権の年齢引き下げにもつながるかもしれない。現在の選挙権は18歳だが、例えば、衆議院議員の被選挙権は25歳で変わっていない。この被選挙権の年齢も引き下げてよいのではないかという意見も、今後出てくるかもしれない。さらに、自分で働き、家を借りることもできるため、親から早く自立できるようになる。親から虐待を受けている子や、親との折り合いが悪い子たちが、成人年齢に満たないために中途半端な状態で苦しんでいたが、そういった子どもたちにとっては、18歳で親元から離れ自活できるというのは、救済策になるのではないかと思う。また、能力のある若い人たち、例えば、自分で会社を起こしたい高校生には、間違いなく追い風になるだろう。

それでは、デメリットはどのようなものだろうか。やはり大きな問題は未成年者取消権がなくなることだ。現状は、保護者等の同意を得ずに自分が契約した場合、あとで取り消すことができた。それが取り消せなくなるということは、軽はずみに契約したことによって、取り消せずにトラブルになることもあり得る。実際、様々なトラブルに巻き込まれている大学生は多く、友人関係でマルチ商法の会員になることや、投資詐欺などである。そのような消費者トラブルが、18歳でも起こる可能性がある。他にも、高校生だからこそ起こり得る、未成年者と成年者の身近なトラブルも出てくるだろう。契約を結んだ場合、その責任を果たさなければならないし、少年事件でも18歳になれば実名報道も可能になる。では今後、高校ではどのようなことが起きるかを考えてみよう。

現在、全日制の高校で、成年者と未成年者が混在するという状況が起きている。これまでも、定時制や通信制では、様々な年代の人がいるため、成年者と未成年者が混在するのは一般的だった。では、全日制で混在することと何が違うのだろうか。全日制のクラスは、基本的に学校生活は集団で行っている。したがって、他の成年者と未成年者が混在している場合と比べて、成年者と未成年者の関係はかなり密だと言える。また、学年や部活等の集団で過ごすことが多いため、混在の質が異なるのだ。さらに、高校生は好奇心が旺盛で、集団心理も働きやすいため、リスクも生じやすいと考えられる。例えば、運転免許の取得だが、誰かが取得すると自分も取得したくなるといった心理が働くため、運転免許の取得自体を禁止している学校も多くあるのだ。他にも、学校にとって非常に重要なことは、成年高校生に保護者がいなくなるということだ。保護者への確認が不要になるので、進路決定や生徒指導に大きく影響する。また法律上、成年の高校生は、教員と同じ大人として扱わなくてはならない。未成年の高校生と成年の高校生を、同じクラスで平等に扱えるのかについても考える必要が出てくる。

では、成年高校生がもたらすリスクには、どのようなものがあるだろうか。例えば、法律上は単独で契約を結べない未成年の高校生が、成年高校生の友人に対して、名義貸しや名義借りを依頼する可能性も出てくる。他にも、成年高校生のアルバイトや一人暮らしといった行動が、未成年高校生の好奇心を

駆り立てることもあるだろう。さらには、成年高校生は裁判を起こせるため、教員や学校に対して、不満のある校則の廃止を申し立てる生徒も出てくるかもしれない。もちろん未成年の高校生に対する校則指導は、未成年者だからこそ学校が責任を持って生徒指導するべきで、必要かつ合理的なものであり、法律上も違法ではない。しかし、この理屈が成年高校生に通じるかは分からない。他にも、成年高校生が「反社」の人と結婚したら、生徒の配偶者として反社の人が学校に押しかけてくる可能性もある。まだそういった相談は出てきていないが、今後このようなことが起きるかもしれない。

では、我々学校の教員は、どのような生徒指導をすれば良いのだろうか。最近の政策の動向では、18歳を大人として扱うことに整合する意見と、整合しない意見がある。整合しないと考えている人たちの意見の1つが、こども基本法だ。この法律では「こども」とは年齢ではなく心身の発達の過程であるものと定義されている。つまり、心身の発達の過程であるものだったら何歳でも「こども」で、65歳以上の高齢者でも「こども」だという人が出てくるかもしれない。この法律の目的は、日本国憲法と子どもの権利条約の精神に則って、子ども政策を行うことだ。一方で、ガイドラインの一種である生徒指導提要が、昨年末に改定された。これは法律と異なり、守らなくても違法ではないが、インターネットですぐ閲覧でき、保護者が読んでいることが多いため、生徒指導に関わる人は読んでおくことが望ましいとされている。生徒指導提要は300ページあり、そこには生徒指導の定義が書いてある。生徒指導とは、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである、と書かれており、生徒指導というよりも生徒支援という理念である。実際に学校でも、生徒指導部や生活指導部という名称を、生徒支援部に変更する動きが出てきている。

成人年齢が引き下げられた時、私は、生徒が18歳になるまでに、法律上大人として扱われるだけの能力を、学校が家庭と一緒に育まなくてはいけない責任を感じた。これは学校の1つの責任で、学校教育でも、18歳になると自分で責任を負うということや、結婚相手を自分だけで決められる立場になる等、教えていかななくてはいけないということだ。しかし、今後18歳で成人することを見据えた校則を制定する必要があるのか、という話になったとしても、すぐに対応するのは難しいと思う。私が弁護士をしながら感じるのだが、基本的に法律と教育は相性が悪い。法律とは、基本的に法の下での平等で、各人の能力の違い等も、ある程度考慮するが、基本的には平等に扱う。だから、18歳の誕生日を迎えると、法律上は各人の実際の能力に関係なく、全員が子どもから大人になる。しかし、教育は現実と向き合っているもので、法律の理想と教育の現実の違いがあるのだ。やはり、法律で人間を画一的に扱うことは不可能だと思う。よく、中学2年生の生徒指導は難しいと言われるが、それは中学2年生の中でも、犯罪が成立する生徒と、しない生徒がいるからだ。14歳に達していない中学2年生は犯罪にならないが、14歳に達している中学2年生では犯罪になる。だが、13歳12カ月の中学2年生と、14歳1カ月の中学2年生とで何か違うのだろうか。法律には、このような現実が書かれていない。そのため、様々な矛盾点が出てくるのだ。そのことを頭に入れておかななくてはいけないのだが、法律家自身が、この法律の理念と教育の現実の葛藤を知らないため、十分に議論ができていないと感じる。では、実際にどのようなことが起きてくるのか、Q&Aを見ながら考えてみよう。

1つ目は、子どもが成人年齢になり、保護者がいなくなった場合、現状の学則や指導要領、配付物等で、保護者の扱いをどのようにするかという問題である。文科省は、保護者等、父母等という改称が考えられるとしているが、私立の大学では保証人という言葉を使っているようだ。今後、配付物等の記載を変更する必要があるかもしれない。また現在、入学時に保護者の念書や誓約書の提出が必要な学校も多いと思うが、これは生徒が成人した場合でも、誓約書自体は有効だ。しかし、保護者の連署が必要か、また保証人についてはどのような扱いになるかという、保護者の監督責任については解釈の違いが出てくるかもしれない。現在、未成年者は基本的に保護者が責任を負うという法律構成を作っている。これは、未成年者が加害者の場合、被害者の救済として、お金のない未成年者ではなく、保護者が賠償責任を負うという議論が必要だからだ。それでは、成年者になった場合はどのようになるのだろうか。成年者でも親（法律上はもはや保護者ではない）が監督責任を負うのかという話になるが、被害者救済の観点からは、成人したからといって高校生がお金を持っているとは考えにくいので、家族に請求し、被害者救済をするという裁判の実例になってくるのではないと思う。

2つ目は、実際に相談があった事例。成人した高校生が、やりたいことがあるという理由で、親の同意なく退学したいということだった。しかし親は反対しており、学校に退学を認めないよう求めてきた。そのような場合、学校として退学を認めないと言えるのかという問題である。成人した本人は退学を希望し、すでに保護者ではない人が子どもを退学させないでほしいと言ってきた時、どのようにすれば良いのか。難しい判断だが、学校教育では、生徒が休学、退学するときは、校長の許可を受けなければならないと書いてあるため、生徒が成人していても、校長の許可を得る必要があるとも考えられる。しかし、最高裁では、大学生の場合、18歳、19歳という、これまで未成年者とされていた学生でも、自分で契約を解除できるという判例が出ている。したがって、この最高裁の判例からすると、おそらく、成人した人間が、自分で学校との契約を解除することは可能だと考えられ、校長の許可も不要になる可能性がある。ただし、学校は教育機関のため、教育的な見地から許可しないとすることはあるかもしれない。

次は、成年高校生が校則に違反した場合の対処法についてである。校則とは、基本的に、未成年者は未成熟で法律上大人と同じ責任を負うわけではなく、保護者の下にいるため、学校も生徒の面倒を見なくてははいけないという、そういった立場から定められることもあったと思う。そうなると、成年者、つまり、大人に対する校則指導はどのようになるのだろうか。例えば、アルバイト禁止という校則がある場合、アルバイトをしている成年高校生に対して、どのように対処するのかという問題だ。校則とは、基本的に学校にいる限り守るべきルールだ。したがって、成年者、未成年者に関わらず、校則に違反した場合は指導することが可能である。アルバイトが禁止なのは学業に支障が生じるからであり、学業に支障が生じるのであれば、成年者でも未成年者でも関係なく、指導、処分することは可能だろう。しかし、アルバイト先との契約は別だ。アルバイト先では成年者として扱っているため、契約は有効で、親にも取り消せない。このような場合は、アルバイトを始めた高校生自身が、責任を負うことになると思う。次は、実際にトラブルが発生している事例。校則裁判で有名になった、大阪の高校での、髪を染めていることへの指導である。社会問題にもなり、様々な議論があったが、裁判所は、染髪を禁止する目的の校則は違法ではなく、その時、行われた校則指導も違法ではないとした。基本的には、内容が合理的な校則であれば、高校生は従わなくてはならない。それは、自分で学校を選んでいるからだ。他にも、名義借りや名義貸し等があれば、校風に合わないことをしたとして、成年高校生であっても、指導、処分できるだろう。これらのことを、どのように考えるかではあるが、やはり最も問題なのは、成年高校生が契約を結んだ場合、契約自体が有効であるということだ。成年高校生は個人で契約でき、そのリスクを成年高校生自身が負うことになるため、学校内での校則指導と、校外での法律上の扱いが変わってくるということが難しい。次は、校則で異性交際を禁止している学校で、学校外の人と結婚しようとする成年高校生が出てきた場合の対応について。交際禁止の校則については、裁判でも争われている。法律上は結婚できる生徒が、異性との交際を禁止されるのはおかしいのではないかという意見が多いと思うが、実際にも校則で結婚を認めず、結婚した場合は退学にするというルールを作れるかという、これはおそらく難しいと思う。それは憲法で、婚姻は両性の本質的平等で、両性の合意のみによって成立すると書いてあるからだ。そのため、校則で結婚を認めないと定めると、憲法違反の校則になってしまう、ただし、学業に支障を生じる結婚をすれば退学させるという校則であれば、可能かもしれない。

最後は、18歳という年齢に関わる法律についてだが、現在、18歳という年齢が、他の法律にも関わってきている。今年の7月に、性犯罪についての法律が改正された。幾つかあるが、いわゆる不同意性交等罪、16歳未満の者への面会要求罪、学校でよく問題になる盗撮に関する性的姿態等撮影罪だ。これらは、13歳以上16歳未満の子どもに対して、その人より5歳以上年上の人が性的な行為をした場合、同意しているかに関わらず成立する犯罪だ。私立学校に多い中高一貫校では、5歳差の生徒がいるため、それに対して対応が必要になるかもしれない。実際に、どこの学校でも盗撮罪や性犯罪は起きているし、相談も増えている。生徒であるが法律上は保護者が存在しない18歳の加害者が出てきたとき、どのように扱うかといった、新しいケースも今後出てくるかもしれない。

生徒指導部会 講演Ⅲ・ワークショップ

## 「アンガーマネジメント～適切な教育に向けたぶれない心の作り方～」

高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門 教授  
矢野 宏 光

スポーツ選手は、今、アンガーマネジメントを一生懸命やっている。なぜなら、試合の中でうまくいかなくなってくると、試合を捨ててしまったり、イライラによってパフォーマンスが激減したりしてしまうからだ。それだけではなく、暴言やハラスメントなどで選手寿命も、場合によってはそこで途切れてしまうこともある。

埼玉県の高校のサッカー部で、コーチが生徒を叩く場面が撮影された動画が SNS 上に投稿されて騒ぎになり、学校側は体罰だったと認めた事件があった。実はこのコーチは、この学校の OB だ。中々実績の出ないサッカー部を指導してもらおうと、サッカー界で活躍した経験のある OB をコーチとして学校側が招いたわけだが、やはり、自分でプレイするのと指導するのではまったく違う。思い通りに指導ができず、コーチが怒りを爆発させて、つい手を出してしまったのだ。手を出して、その状況に興奮して、さらにエスカレートしていく。よって、恐らく何度も体罰を行っていたのだろう。高校生側が限界だと気が付いて、体罰の様子をスマホで撮影してマスコミにリークした。全国にはこのような暴力事件が様々ある。そのため、2013年、日本スポーツ協会（当時、日本体育協会）、JOC、高体連、中体連が共同で、暴力をスポーツ界から無くそうという声明を出した。それが1つのきっかけになって、弁護士がいる相談窓口を設置し、指導者の暴力やハラスメントについての相談を受け付ける体制が始まった。私は日本スポーツ少年団の指導育成部にいたので、様々な情報を目にした。よく特定の子が被害を受けているだけで他の子達は関係ないだろうという意見を持つ人がいるが、それは違う。例えば、1人の子が指導者から暴力を受けたり暴言を吐かれたりすると、他の子たちも平気ではない。“次は自分かもしれない”とみんな恐怖する。しかし、人間のすごいところは、それを氷の中に封じ込めるようにして、知らないことにできるのだ。ところが、その後、とくに忘れた二十歳くらいになって、街中でけんかをしている様子を見た瞬間に、心の中に閉じ込めたドロドロしたものが溶け出して当時の恐怖が蘇り、それを契機にパニック障害になったりすることがある。したがって、その人が被害を受けていないから大丈夫だという考え方はやはり正しくない。



そこで、アンガーマネジメント、怒りのコントロールについてお話ししていく。アンガーマネジメントとは、アメリカの軍隊で、怒りに任せて方向性を間違えると大きな失敗になるため、それをなくすために怒りをコントロールするプログラムがつかれないかという考え方から始まった。今や教育界だけではなく、企業、政治、医療、さまざまな分野で導入されている。近年、アスリートも自分のパフォーマンスを十分に発揮するために、このようなトレーニングをしている。アンガーマネジメントとは、“怒りの感情とうまく付き合う”ことである。そこで、まずは怒りのメカニズムについて触れていく。

怒りはしばしば空のコップのイメージで表される。あなたの心のコップが空の時には怒りは全くたまっていない。しかし、段々とたまっていって、ある時爆発してしまう。これが怒りの厄介なところなのだ。やってしまったら、それを引っ込めるわけにもいかない。とかく、教員と生徒の立場、教員と保護者の立場などであると、なんとなく自分が悪かったと言えないようなこともある。自分のプライドや立場が邪魔をすることもあるかもしれない。感情があるということは悪いことではない。怒りは人間が持つ感情の1つで、怒りの感情があるからこそ、自分は怒っているのだと周りに示すこともできるのだ。怒りとは、もともとは身を守るときに使う感情で、原始時代から、自分の身を守るために緊張し、興奮状態をつくり、怒りをエネルギーに変え、今まで生き長らえてきたわけだ。でもそれが、生死に関わるようなことがない現代においても、われわれの DNA の中に残っているので「ピンチ」だと感じた時に、その感情が怒りとなって出るということもある。しかし、社会生活をしている中では、どのように怒ったか分からないぐらいに怒ってしまうと、やはり、信用を失うし、教育の場には適切ではない。そこで、もう少し怒りのことを細かく見てみると、怒りの感情は急に発現したりはしない。怒りに至るその背景に存在するのが「一次感情」と呼ばれるものだ。一次感情とは、不安、つらい、寂しい、苦しい、痛い、困った、嫌だ、疲れた、悲しいなどだ。疲れた、困っ

たというような一次感情だけであれば、二次感情である怒りには発展しないが、この一次感情が徐々に増えてきて、それがいっぱいになってあふれ出したとき、怒りとなって爆発するというイメージである。そのため、この一次感情一つ一つにうまく対処していかないと、うまく怒りを収めることができない。自分の特徴を自分で見極めながら進んでいくことが必要である。まずは怒りの奥底にある一次感情に気付くこと、それに対処し解決に導くことが重要である。アンガーマネジメントの習得は、生徒との関係だけでなく家族関係もずいぶんと変化するのでおすすめである。

ここで、怒りを爆発させないためにはどうしたらいいのかをまとめてみたい。1つは、心のコップがいっぱいになる前に、うまくコップに穴を開ける。つまり、対処法を学んでおくということだ。2つ目は、どれだけストレスが強くなってもコップがいっぱいにならないようキャパシティを増やすために体質改善をすることである。すなわち、短期的には対処法を使い、長期的には体質改善を狙うのである。次に『べき』ということを考えてほしい。この『べき』は何か。怒りの原因はその人の譲れない価値観にある。「こうであるべき」「こうすべき」の『べき』だ。“生徒だったら教員に対してもっと尊敬の念を抱くべき”だ。“これだけ頑張っているのだからもっと評価されるべき”だ。この現実と理想との間の中で、“こうすべき”を抱えるわけだが、これがまさに譲れない価値観や信条である。これを「コアビリーフ」と呼ぶ。我々は、様々な人に対して「期待」をするが、その期待したものと現状がかけ離れてくると、それが怒りの強さに反映されていく。相手に期待しているのに期待外れだったりするとイライラするし、やるべきことをふざけて真面目にやらなかったりすると、カッとなったりもする。この『べき』をもう少し詳しく解説すると、怒りの感情は自分の期待や理想が裏切られた時、その通りにならなかった時に生まれる。『べき』の他に『せっかく』や『はず』というものもある。“せっかく私がこれをやったのに”“こうやったら喜ぶはずだ”。そういうことを我々は考える。この『べき』『せっかく』『はず』というものを我々は使いながら日常の生活しているのだが、コアビリーフは人によって異なる。同じ学校で働く同僚であっても多様だ。したがって、まずは自分がどのような『べき』を持っているのかを知っておかなければいけない。自分はどの程度の『べき』を望んでいるのか。それらは周囲の人と同じなのか。周囲の人は違うのに、自分はこうすべきだと思っていると、そうしない人に対してすごくイライラする。しかし、お互いに明確に伝えあうことをすれば、ズレがなくなる。例えば、部活で考えた場合、9時から練習が始まる時には、10分前には来て、5分前にはいつでも始められるという状態にして、9時になった瞬間にパッと始める。そのように先生が思っていることを、明確に生徒に伝えておかないといけないのだ。それを伝えずにいて、時間ぎりぎりに来る生徒に対して、「お前はどのようなつもりなんだ」と怒っても、これでは絶対に伝わらない。これは教員間でも同じだ。自分はこうすべきだと思っていることを、お互いに対話をするような機会をつくっておく必要がある。そして、最終的には心の許容度を広げていくことが求められる。自分のストレスを下げるためにも、自分の怒りをマネジメントするためにも、この心の許容量を変化させていくのだ。人それぞれに絶対に許せない「NGゾーン」、グレーだけど受け入れ可能な「許容ゾーン」、許せる「OKゾーン」に分かれた『べき』の境界があり、イライラする人は、この許容ゾーンが極端に狭いのだ。したがって、イエスカノーかの二択になってしまうことが多い。よって、「許せない」を少し縮めて、「まあ許せる」を増やししながら、許せるゾーンを徐々に増やしていくことが、結果としては“自分のストレスを減らす”ことになる。なぜこんなことを言うかということ、怒りは体に悪いからだ。怒るのは自分のせいではなく相手のせいと言っても、相手は自分の健康を守ってくれないから、自分の健康は自分で守るしかない。怒りがずっと強い状態というのは、ある意味、緊張感が続いている状態なのだ。だから、自律神経などにかなり影響が出てくる。イライラして興奮状態で眠れなくなる。眠れずいろいろなことを思い出して朝になる。そして、寝不足のまま学校へ行く。すると、さらに負のスパイラルが形成され、生徒が何か言ったときに、過剰に反応してしまったりする。海外の研究では、怒りの強さが心臓疾患や脳血管疾患にかなりの相関を持つという多くの研究結果が出ている。そういう意味でも、とにかく怒らないようにすることが肝心だ。怒りの負の影響力は、思っている以上に大きい。日常的に怒りを感じ、何かの弾みで怒りのスイッチが入って、カッとなってしまったりする時、暴言や暴力行為、体罰にも発展してしまうのだ。

加えて、怒りの特徴として、それを動かす「刺激」というものがエスカレートすることが挙げられる。刺激とは、おいしいもの、楽しいこと、悪いことなど様々だ。そのメカニズムはDVをする人と同じである。DVであれば、最初は大声、罵声であって、次第に拳での殴打、蹴りへとエスカレートしていく。これと同様に、怒りもエスカレートすることを覚えておくべきである。また、腹が立つとはどういうことかよく考えてみると、自分の思ったようにならない時に腹が立つことがわかる。“せっかくこうしてやったのに”、“こうすべきなのに”、こういうことと強く関連している。人には人の考え方があって、違うストーリーがある。そこ

に気付かないことは、私にも経験がある。人は自分のストーリーの中だけで考えてしまうのだ。教員は教員で、生徒達のために一生懸命やっているというストーリーがある。一方で、生徒には生徒で、違うストーリーがあるのだ。人にはそれぞれのストーリーがあって、言い分がある。それをつい自分の価値観だけで測ってしまいがちだ。一步引いて、どういうことか聞く余裕を持たないといけない。怒ってイライラしているとそれができないことが問題である。

そこで、具体的な対処法をまず覚えておいてほしい。大別すると、とっさの対処術など怒りをうまくコントロールするためのもの、そして、長期的に体質改善するためのものの二つである。興味のある方はぜひアンガーマネジメントの方法論を書籍などで学んで欲しいと思うが、今回は7つの対処術と4つの体質改善テクニックの概要を説明したい。

1つ目は「スケールテクニック」。簡単にいえば、怒りを数値化すること。今、起こっている怒りはスケールの中でどれくらいだろうかと考え、怒りが少し収まるため、それを“見える化”する。2つ目は、思考を停止させる「ストップシンキング」。これは、スポーツ選手がよく使っている。怒りを感じた時、心の中で“ストップ”と唱える。または、頭の中で白紙を思い浮かべる。そうすると心が落ち着き、これからどうしたら良いのか冷静に考えられるようになる。3つ目は、「タイムアウト」。例えば、保護者からクレームにきたときなどは、とにかくその場から離れるのだ。離れて時間を稼いで、その間に自分の気持ちを立て直すことが大事だ。人の怒りというのは、実はあまり長く続かず、ピークは6秒と言われている。そのため、よく「カウントバック」という手法を使う。これが4つ目の対処術。腹が立ってきたら数を数えるのだ。そうして元の自分に戻るための時間を稼ぐことができる。5つ目は「深呼吸」。これもすごく大事だ。鼻から吸って口から出す、この腹式呼吸を普段からやっておく必要がある。ポイントは吸うよりも吐く時間を倍にすることだ。これはメンタルトレーニングでも使う。頭はすごい勢いでいろいろなことを考えている。パソコンで言うと、CPUがフル回転しているような感じだ。スマホでも使いすぎると熱を持ち、誤作動が起きる。精密機械はラジエーターを使ってうまく空気を取り入れて正常に作動しているわけだが、人間の場合はこれを呼吸でやらなければいけないのだ。怒っているときは息を止めていることが多いので、深呼吸でしっかりと脳に酸素を供給すると誤作動が起きない。人間の誤作動というのは、判断ミスに他ならない。言っただけいけないことをつい言ってしまうなどの判断ミスが起きないように、呼吸は十分に行わなくてはならない。6つ目は「コーピング・マントラ」。これはいわゆるキーワード法だ。ピンチになった時に、セルフトークの中で自分の決められたフレーズを話すというやり方だ。前もって自分自身でキーワードを決めておいて、それを言葉にすることで気持ちを落ち着かせるというやり方である。最後の7つ目は「グラウンディング」。グラウンディングとは、怒りの矛先から違うものに目を向けるというやり方だ。例えば、腹が立った時に、ペットボトルのお茶を手にとって、ラベルの成分を見たり、製造場所を見たり、全く違うものを見ながら怒りの矛先を変える。しばらくすると、あんなに怒らなくても良かったなということに気付いたりする。

次に4つの体質改善テクニックだが、1つ目は「アンガージュルナル」。人によって様々な怒りの癖があるが、それにはほとんどの場合、コンプレックスが関わっている。そのため自分のコンプレックスについて他人から指摘されたりすると思わず反発してしまうものだ。怒りを感じた時、日時、場所、起こった事実などを書き出し、その時自分がどう思ったのかを克明に記す。そして、さらに怒りの強さに点数を付けていく。そうすると、次に怒りを感じた時には「あっ、あのパターンだ」と落ち着いて対処できる。2つ目は「べきを洗い出す」。「〇〇すべき」「こうあるべき」を書き出し、振り返ってみる。自分にこだわりがあることを知ることで、周りの人にもこだわりがあることを受け容れられるようになる。3つ目は「ストレスを書き出す」。ストレスを4ブロックに振り分けて、“見える化”する方法である。それは、変えられるものか、変えられないものか、重要か、重要でないか、4分割した表にあらわして考え、枠組みを整理していくやり方だ。これは教職員研修などでやっても面白いと思う。アンガーマネジメントを題材にした研修をすると、この人がどういう人か理解が進む。この人が何を大事にしているか、何にこだわっているのか、その人のストレスや怒りの勘どころが掴めるようになる。最後、4つ目は「身体運動」を使うこと。特に軽い有酸素運動を行うことで、ストレスを緩和したり、リラックスしたりすることができる。また、所作を丁寧にすることも重要だ。怒っていると、物を荒っぽく扱ってしまうため、あえて丁寧にやることで、心が落ち着くということもある。あとは言葉遣いに気を配る。いくら怒っていても言葉遣いが丁寧だと、ハラスメントになりづらいという傾向がある。

怒りに関して興味深いデータがある。“怒りが増加するとケガも治りづらくなる”というものだ。ストレスホルモンのコルチゾールが増えて回復が悪くなるため、スポーツにおいても怒りは何も良いことがないのだ。特に悪いのは、思い出して怒ること。そこで、『ソリューション・フォーカスト・アプローチ』という方

法を多くのトップ選手たちが実践している。簡単に言うと、思い出し怒りをうまく解消するための解決志向で未来をどうすべきかを考えるというアンガーマネジメントのベースになっている考え方である。この解決志向のポイントは、過去は変えられないのだから、過去にはこだわらず、それよりは未来志向で、今できることに集中し、最善の結果を目指そうというものだ。これはメンタルトレーニングの中でも使われる手法だが、まずは、変えられないものがあるということを受け容れるのだ。しかし、怒っても仕方のないことに怒りを抱いても無意味と分かっている、人間は思考の罫にはまったとき、なかなかそうは考えられなくなる。天気に怒っても何も変わらないし、渋滞にイライラしても解消されるわけではない。そこで、イライラするのはもったいないことだから、何をすればいいのかということだけに目を向けるやり方だ。それを解決するためには何が必要で、解決できないのであればどうしたらいいのかという考え方をする。雨が降ったら傘をさせばいいし、渋滞に巻き込まれたら好きな曲を聴くなど、結局できることをするしかないことに気付くことが大切だ。「リフレーミング」という呼び方をするが、これは物事の見方を変える、捉え方を変えるという技術だ。違う角度から見られるようになると、違うものが見えてくる。したがって、相手に対して怒りを充満させている時に、少し違う角度から見て、“怯えているから、こんな言い方しかできないのかも”と捉え方を変化されることで、自分の中でうまく怒りがコントロールされ、イライラも解消される。リフレーミングの話をする時、例に出される「ダンシング・ドール」という動画がある。会場中のみんなが同じように回っている人形を見ているはずなのに、回り方が右回りか左回りか、人によってまったく見え方が違うのだ。これは錯視によるものだが、物事の見方がこれほど異なるのか体験的に知ることができる。“物事の見方が変われば、行動が変わり、行動が変われば結果が変わる”ことが起こる。

先生方は毎日、生徒達と関わっている中で、叱らなければいけない場面がたくさんあると思う。1990年代から「褒めて育てる」ことが流行した。そうして訳も分からず褒めなければ駄目だと思って教育が進んでしまった結果、今、悲惨なことになっている。もう30年間やり続けているが、若者の自己肯定感は一向に高まらず、何の成果が出ていない失敗事例が多く顕在化している。その問題のひとつは、褒め方のコツがきちんと行き届いておらず、褒めるとかえって悪くなることが起きている。「叱る」時は“冷静に相手のことを思って叱っているか”が重要だ。「怒る」は、とにかく自分のストレス発散のために相手を傷つけようとしている。「怒る」にならないように気を付けることが大事だ。そして「叱り方のポイント」は“人間性を叱らず行動を叱る”ことにある。子どもであっても、人間性を叱られると直す気になれない。人の根は短期間で変わらないことを知っているからだ。したがって「君は良い人間だけれど、君がとったこの行動はいけない。この行動が変わったら君は相変わらず良い人間だ」ということをしっかりと伝えなければいけない。我々はよく『いつも』『必ず』『みんな』などという言葉を使って、話を大きくしてその人を攻撃しようとする。ときに、それは冷静さを失っているときに使う場合が多い。行動を叱る時は、自信を持って叱って大丈夫。その代わりに、その行動を変えたら褒める。褒める時も、良いことであれば褒めることを遠慮する必要はない。そして、叱り方のポイントの2つ目は“Iメッセージで伝える”ということだ。とかく、人のことを悪く言う時には“君はこうだ”“お前が〇〇した”のように主語がYouの“Youメッセージ”になりがちだ。それを「私はこう思う」という『Iメッセージ』に変えることが重要である。

それでは「スリー・グッド・シングス」というものを紹介しよう。もし、自分の幸福度が低いと感じてポジティブになれない人がいたら、スリー・グッド・シングスをやらせてみてほしい。寝る前に1日の中で良かったことを3つ書かせるのだ。これは本当に簡単なことで良くて「夕焼けがきれいだった」とか「お昼に飲んだコーヒーが美味しかった」とか、そんなことで良いのだ。1日の中ではたくさん嫌なこともあるが、人間は絶頂と最後をどう感じたかで全体の評価が決まるという特性がある（ピーク・エンドの法則）。だから、1日の最後に良かったことを思い出してから寝ると、半年ほどで幸福度がグンと向上するのだ。これはネガティブでなかなか前向きになれない人にはすごくおすすめのプログラムである。

最後に、柳の枝は決して折れない。つまり“強い”のだ。強いこととは、絶対に相手に負けない、絶対に引かない、相手のことを打ち負かすことのように思われるかもしれないが、本当に強い人は、むしろ、どんなに相手に非礼なことをされても、ひどいことを言われても、崩れないし、壊れないし、諦めない人である。まるで『柳の枝』だ。冬になると大木に雪が積もって、枝や幹にひびが入ったり折れたりする。だから雪国では、雪囲いをするのだが、柳の枝だけは絶対に折れたりしない。雪が降り積もっても、うまい具合に雪を落として、柔軟性に富み、しなやか、なのだ。このストレスの強い時代、我々が目指す強さとは、この『しなやかさ』ではないだろうか。



## 生徒指導部会

### 「総括」

藤井学園寒川高等学校 校長  
乃村久信

本日の当部会の講演について、報告させていただきます。

講演Ⅰでは、医療法人社団光風会三光病院の海野順院長より「ネット・ゲーム依存症～i Swing を用いた支援の提案～」と題してご講演頂きました。ネット・ゲーム依存症について脳科学の面から分析されており、スマホの使用時間と学力の相関には驚かされました。ネットの使用時間は確実に増えており、いち早い対策が必要と感じています。回復プログラム「i Swing」のご提案もあり、関係機関との連携が大切であることを強調されました。その中に関連用語がたくさんあったと思いますが、これを知ることによって生徒ともしっかりコミュニケーションが取れるのではないかと思います。

講演Ⅱでは、本郷さくら総合法律事務所代表弁護士／兵庫教育大学大学院准教授の神内聡氏より「18歳成人の時代における学校教育と生徒指導の役割」と題してご講演頂きました。成人年齢の引き下げの前に選挙権の年齢引き下げが先行したこと、日本における成人年齢の歴史を説明されました。かつて子どもは学ぶべき存在ではなく、労働者の扱いであったこと、18歳成人として可能なこと（メリット・デメリット）を整理して頂きました。成年高校生へどのように学校側は対応していくか等細かく説明頂き、「生徒指導」から「生徒支援」への切り替えについても考えさせられました。

講演Ⅲ・ワークショップでは、高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門 矢野宏光教授より「アンガーマネジメント～適切な教育に向けたぶれない心の作り方～」と題してご講演・ワークショップをして頂きました。生徒指導といいますと、つい生徒を叱るイメージがございますが、アンガーマネジメント（怒りの感情とうまく付き合うこと）の大切さを学ばせて頂きました。怒りのコップがいっぱいになる前に水を適度に抜いてあげること、不安等の一時感情に気をつけて日々を過ごしていくこと、コップ自体を大きくすること、「べき」思考からの脱却、怒りと身体の関係性等の重要性も学びました。ワークショップではご参加の先生方が皆、活発に意見を出し合っていました。意見交換等も踏まえ、全国的なネットワークが構築できたかと思いますので、今後、情報交換して頂けたら幸いです。

先生方におかれましては、今大会で学んだことを各校に持ち帰り、学校運営に活かして頂けたらと思います。以上、総括とさせていただきます。

# 特色教育部会

現代の若者たちには激変する社会、予測困難な時代の中を生きていく力が求められている。SNS 等ネット社会の発展により、多くの情報を容易に収集できるようになり、さまざまな人と交流できるようになったが、直接見る、触れる、感じる体験も大切である。

若者たちの多様な能力・適性、興味・関心等に応じて、学習意欲を喚起し、可能性や能力を最大限に伸ばす教育を行わなければならない。

当部会では、講演や実践発表を通して、高等教育機関や地域社会と連携・協働し、生徒のさまざまな進路や地域の期待に応じていくために、私学ができる学びを考えていきたい。

- 1 研究目標 地域、社会と連携した若者たちの学び
- 2 会 場 JR ホテルクレメント高松 3階「玉藻（西）」
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、教員
- 4 参加人員 72名
- 5 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15	45	30	15	15	45	45	
11月10日 (金)	開 会 式	講演 I	実践 発表 I	実践 発表 II	昼 食	講演 II	研究協議 (全体会)	閉 会 式

## 6 内容・日程細目

8:30	受 付 (馬場 洋平／三好 亜希子)	機材担当：日山 貴浩 記録(写真)担当：馬場 洋平 集録担当：佐藤 祐子
9:00	開 会 式  1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：諸星 祐子／記録：佐藤 祐子  特色教育部会運営委員長 下 山 優
9:15	講 演 I  演 題 「地域、社会と連携した若者たちの学び」 講 師 梶 谷 俊 介 岡山トヨタ自動車株式会社 代表取締役社長	司会：諸星 祐子／記録：佐藤 祐子 講師紹介：諸星 祐子
10:45	実践発表 I  テーマ 「みんなで創る、教科『未来クエスト』—普通科アビリティコースの挑戦—」 発表者 日 山 貴 浩 尽 誠 学 園 高 等 学 校 教 頭	司会：諸星 祐子／記録：佐藤 祐子
11:30		

11:30	実践発表Ⅱ テーマ 「地元企業×高校生 SDGs 観点で社会課題を考える東大阪未来プロジェクト」 発表者 林 丈 嗣 近畿大学附属中学高等学校 高大一貫教育部主任	司会：諸星 祐子／記録：佐藤 祐子
12:15	昼 食	
13:15	講演Ⅱ 演題 「急変する時代に私学の強みを活かした特色ある探究的な学びの構築に向け取り組むべき3つのこと」 講師 吉田 大作 京都芸術大学クロステックデザインコース 准教授	司会：日山 貴浩／記録：佐藤 祐子 講師紹介：日山 貴浩
15:45	研究協議（全体会） テーマ 「私学の特色教育を考える」 ●具体的実践例の紹介・共有 等 事前アンケート実施し、高知県・高知中央高等学校教諭の岡田俊介先生、北海道・札幌静修高等学校教諭の石井翼先生、島根県・益田東高等学校教諭の森山順弘先生・大庭敏文先生の4名にそれぞれの特色教育について発表頂きました。	司会：日山 貴浩／記録：佐藤 祐子
15:45	閉会式 1. 開式の辞 2. 総括 3. 閉会の辞	司会：日山 貴浩／記録：佐藤 祐子 特色教育部会運営委員長 下山 優
16:00	解散	

#### 7 講師・発表者（順不同）

梶谷 俊介	岡山トヨタ自動車株式会社	代表取締役社長
吉田 大作	京都芸術大学クロステックデザインコース	准教授
日山 貴浩	尽誠学園高等学校	教頭
林 丈 嗣	近畿大学附属中学高等学校	高大一貫教育部主任

#### 8 運営委員・指導員（順不同）

委員長 下山 優	尽誠学園高等学校	校長
副委員長 諸星 祐子	英明高等学校	教頭
委員 日山 貴浩	尽誠学園高等学校	教頭
三好 亜希子	尽誠学園高等学校	教諭
佐藤 祐子	英明高等学校	教諭
馬場 洋平	英明高等学校	教諭

特色教育部会 講演 I

## 「地域、社会と連携した若者たちの学び」

岡山トヨタ自動車株式会社 代表取締役社長

梶谷 俊介



時代が大きく変化する中、いかに持続可能な社会を築いていくかは、我々にとっても大きな問題である。それを掲げて、私学ならではの教育をどのように創造していくのかを議論されていることに心から敬意を表す。私がここで話をするきっかけになったのは、社会と共に生徒を育てるという特集の取材記事がきっかけだ。その記事で私は、「未来の若者を育てる責任は我々全員にあり、学校や教師だけではない。対等な立場での学び合い、共に育っていく」という話をした。私は企業経営者だが、2010年に岡山県の教育委員を拝命し、学校現場の様々な問題に気づく中で、経営者は学校教育に大きな影響を与えていることが分かった。企業経営者がどう学校教育に関わっていくかは、自分にとってとても大きなテーマになっている。私学は教育機関であると同時に、持続可能な経営体として企業そのものだとも言えるので、私学の経営と企業の経営はかなり近いのではないだろうか。岡山県では、学芸館高校の校長が岡山商工会議所の副会頭になるなど、私学経営者が経済界でも活躍しており、経済界と学校は遠い存在ではない。

私は愛媛県で生まれたが、小学校2年の時、父が祖父の会社を継ぐために岡山県倉敷市に戻った。高校生の時には、祖父、父の跡を継いで経営に携わらなければならないと覚悟を決めていた。大学は、祖父が好きなことをやったらと言ったので、工学部で環境工学科に進み、都市計画を研究した。当時は経営にまったく関係がないと思っていたが、社会環境の中で経営をするわけだからかなり関係がある。大学院生の時はヨーロッパに4ヶ月滞在した。英語が苦手だったが、身振り手振りでなんとかかなるという自信がついた。遡るが、小学校3年の時からボーイスカウトに入っていたのも、いろいろな学びのベースになった。子ども達だけでいろいろ企画し、実行するという経験が大きなバックボーンになっている。卒業後は出向などを経て父の会社に戻った。岡山青年会議所に入って、修練、奉仕、友情という精神でお互いに切磋琢磨しながら学び合い、地域貢献活動として事業や祭りの立ち上げに関わった。岡山県での全国大会の時は、その目的や、自分たちにとっての意義、参加者にとっての意義、地域にとっての意義をみんなで議論し、企画をしていったのも私のバックボーンになっている。自社だけではなく、社会的な団体に所属して地域活動をするのは大きな意味のあることだ。1991年に入会した中小企業家同友会では、さらに企業経営を学んだ。経営の根幹はやはり人であり、働くとはどういうことなのか、経営理念を確立し成文化する、ビジョンを明確にして社員とともに進めていくというのが大きなテーマだった。中小企業家同友会で社員教育委員長をしてほしいと言われた時にはできないと答えた。ところが、できないからするのだ、できる人にしてもらわないといわれて引き受けた。そこで、社員教育というのは、実は経営者が社員とともに学ぶ場なのだと気づいた。そうしているうちに、中小企業家同友会全国協議会のほうの社員教育委員長を拝命し、10年が経とうとしている。2010年から県の教育委員をし、2021年から2年間は中教審初等中等教育分科会の教育課程部会委員も務めた。こうしたことが、今日の話の背景になっている。教育委員になった頃、「モンスターペアレント」という言葉があった。学校では親に対しても苦勞があるのではないだろうか。なかなか家庭教育ができないと聞いたときに、その家庭の親は誰が教育しているのだろうか、企業がどのような人材育成をしているかが大きく関わってくるのではないだろうかと思った。あまり企業と関係してないように見える学校教育も、企業経営者がどのように社員と向き合い、お互いに育ち合っているかが大きく関係し、企業経営者の教育責任も関わってくるのではないだろうか。中小企業家同友会では1983年の全国総会で総会宣言として教育宣言をした。その中に、「共に学び合う気風に満ち、新しい時代にふさわしい労使の信頼環境をつくることが、社員教育の基本

であることを確認した。この共に育ち合う土壌づくりともいうべき同友会の社員教育の理念を、企業経営の範囲のみにとどめておくことはできない。今こそ地域の人々の暮らしを見つめ、家庭、学校、社会における教育と結合して、人間が人間として息づく環境を共につくり上げていかなければならない。国民の大多数が働いている中小企業は、これからの時代を担う人間を育てるための頼れる学校でもある。その誇りと自覚を持って、社会的責任を果たすことにより、中小企業の繁栄は約束される。」としている。これは、中小企業の経営者が自社の社員だけではなく、地域の人材育成に責任を持つという宣言であり、地域の人材育成なくして中小企業と地域の発展はないという自覚と覚悟の表れではないかと思っている。企業経営者はお金もうけしか考えていないと思われているかもしれないが、そうでない経営者もたくさんいる。特にこの香川県で中小企業家同友会は活発に活動していて、いろんな学校とも連携している。最近では、共育型インターンシップという取り組みをしているようだ。中小企業家同友会では、教育の本質についての議論もしている。そこで日本教育学会の元会長、大田堯先生から、教育、エデュケーションの語源、語義は、教えるではなくて引き出すことだと教えていただいた。先生は人間の特質として3つを挙げられている。まずは「多様性」。一人一人違うということ。一人一人は違い、違うからこそ一人一人がかけがえのない存在として平等なのだ。次に、「自己創出力」。自ら変わる、その気になる。人間はその気になって自ら変わろうと思ったときだけ変わるのであって、人から言われても変わらない。内発的に選りながら人格をつくっていく。そして、「関係性」。他者との関わりの中で生きて、他者との関わりの中で自ら変わっていく。あらゆる関係性に支えられて生きている存在だよといわれた。この3つは、教育を考える上でとても重要だ。学ぶこと、生きることは、一人一人違いがある。その違いを認め、わかり合い、一人一人の大切さを理解して、助け合って生きていく能力を身につけるために学ぶのだ。そして自分の生き様を、本当にこれで良いのか、人間の名において、人類の未来にかけて絶えず問い続け、自分で答えを出し続けていくことこそ人間的な生き方だと言われた。

改めて、学びをどう捉えたら良いのだろうか。一人一人違うからこそ、お互いを理解するのは難しく、誤解によって争いが起きる。国同士なら戦争だ。昭和45年に国連の教育科学文化機構として設立されたユネスコの憲章前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて、世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。文化の広い普及と、正義、自由、平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つ、すべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神を持って、果たさなければならない神聖な義務である」とある。今のウクライナやイスラエルの問題を見ると、教育の根幹というのは、相互にどう理解し合うかということなのだ。お互い不信や民族、国家の違いを乗り越えるために教育は重要だ。みんなが望んでいない戦争をなくすために、違う相手を理解する。それが学びなのだろう。

私は、先にいった3つに加えて、命について考えてほしいということ、新人研修などで話している。今生きているのは、多くの祖先の命が集まって生まれてきたからだし、この先も多くの命につながる可能性がある。また、今生きるために必ず他の命を食べているし、他の人が作ってくれたものを使って生きている。自分がどういう関係の中で生きているのかを、しっかり理解してほしいのだ。また、視点によって同じものでも違って見える。意見が対立したときには、自分も正しいけれど、相手も正しいかもしれない。相手も正しいという見方ができれば、全体像という実態が見えてくるのではないだろうか。意見が対立した時こそ、相手がどのような背景を持って発言しているかを理解し、自分が何にこだわっているのかを振りかえるチャンスにもなる。自分だけでは1つの行動、見方しかできない。それでは問題は解決しない。意見が対立し、けんかになりそうな時こそ、相手の視点、自分の視点を振りかえることが重要だ。それから、誰かに言われたからした、という行動も実は、すべて自分の選択だと自覚すべきだ。親からいわれても、しないことも選択できたのだ。言われたからということにして逃げているのだ。自分が選択していると思えば、自分の選択を変えることができる。人の悩みの多くは、本来変えられないものを変えようとして発生する。自分を変えることに集中すれば悩みが消えるが、人はどうしても相手に変わってほしいと思い、不満を募らせ悩んでしまうものだ。太田先生が話されたように、人は自ら変わらなければ変わらないのだ。しかし、人は人との関

わりの中でしか生きられないので、それを踏まえれば、どのように生きていけばいいかということにもつながっていくだろう。1985年にユネスコは学習権宣言を出した。3月にパリで行われた第4回ユネスコ国際成人教育会議でのことなので、対象は子どもだけではないが、教育を考える上ではとても重要だ。冒頭で、「学習権を承認するか否かは人類にとってこれまでも増して重要な課題となっている」とし、「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手立てを得る権利であり、個人的、集団的力量を発揮させる権利である」、とある。原文は英語だが、訳したのは子どもの権利条約を推進する会で、インターネットなどにもよく引用されている。あらゆる教育の手立てを得る権利ということで、まさに一人ひとりに学習権があり、自分で選んで教育を得られるということも書かれている。「学習活動は、あらゆる教育活動の中心に位置づけられ、人々を成り行き任せの客体から、自らの歴史をつくる主体者に変えていくものである。それは基本的人権の一つであり、その正当性は普遍的である」とある。果たして、問い続け深く考える権利を、私たちは保障してきただろうか。企業の中でも、こうしなさいというだけで、個人が問い続けたり深く考える時間を取らなかったり、想像し創造する権利も確保できていないだろう。一人の人間がどのように生きていくかを自問し、さまざまな教育の手立てを得て創造していけば、個人的、集団的力量を発揮できるようになるだろう。それができる環境があるだろうか。こういうことを中小企業家同友会で学んだ。一人ひとりが主体的に自分の人生をよく生きていけるようにすることが教育の基本ではないだろうか。今回、文部科学省が社会に開かれた教育課程を提示した。これは公教育のみならず私学の教育においても大きな根幹になっているだろう。学習指導要領にある、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、それぞれの学校において必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく。」という理念を見たとき、私は、これは学校教育だけの問題ではないと思った。その前に、地方創生や持続可能な社会という課題があったが、まさにこれは地方創生をどうしていくのかと直結している。人口減少や少子高齢化の中で、どのように地域を持続可能にしていくのか、大きな課題になっている。よりよい学校教育を通じてよりよい社会をつくるために、よりよい社会とはどんな社会なのかということは、それぞれの地域でしっかりと考え、議論し、地域社会と学校が共有していかなければならない。将来を考えると、大人だけではなく、子どもたちも巻き込んだ議論が必要だ。よりよい社会がどんな社会なのかが見えてきて初めて、どのような資質、能力が要るのか。それを身につけるためにどのような学びをしていかなければならないのかが見えてくるだろう。学びの主体者で、学習権のある子どもたち自身がどのような学びをしたいのか、どんな資質、能力を身につけたいのか。社会との連携、協働によって実現できればとても面白いだろう。そこで生まれ育った子ども達が、自分たちの地域をこういう社会にしていきたいという思いを持って学び、行動すれば、それが地方創生につながる。まさに、これからの教育は地域をあげて取り組むべき課題であり、それを地域の方々に理解してもらうことが重要だ。こうしたことは文科省から各学校へは伝えられているだろうが、総務省や経済産業省から自治体や企業関係者にはあまり伝えられていないようだ。私学の場合は、必ずしも生徒が地元出身ではないかもしれないが、学校と地域との関わりは避けられないものだ。とはいっても、いきなり企業とつながるのは難しいので、社会に開かれた教育課程の理念と概要、そこから導き出された学校と企業の連携の重要性を企業に周知していくことが必要だ。そのためにはまず、それぞれの地域にある経済団体に理解してもらい、そこから各企業に周知してもらうとよい。そのためにも経済団体と教育行政との定期的な情報交換や、経済団体に社会に開かれた教育課程に関するシンポジウムなどを開催してもらったり、また、教育行政の動向や、学校と企業の連携の取り組み事例などを経済団体に広報してもらうなどができる。実際、中小企業家同友会と文部科学省は定期的に意見交換しているし、岡山県ではいろんな経済団体が教育に関するシンポジウムなどを開いている事例がある。それから経済団体と教育行政が地域課題と教育の方向性を共有し、学校教育への理解を深め、相互の役割を認識することで、学校に関わる企業を広げていくために、連携して教職員の研修や学校教育への企業の参画を推進しよう。教育研修への企業人の参加や、学校への出前授業への企業人の派遣、職場体験、インターンシップの受け入れをより増やしていくということだ。SDGsをテー

マとする探究活動での企業との協働もある。SDGs は学校だけでなく、企業にとっても大きなテーマなので、共通テーマになりやすいだろう。企業の持つさまざまな学習プログラムを学校で活用できるようにしたり、学校運営協議会や地域学校協働活用にも企業人の参画を図っていくこともできるだろう。また、探究学習と学びの場へ企業や地域が関われば、学校横断的、公私横断的な取り組みも可能になる。探究合宿や探究フォーラム等への企業の参画や、企業による探究学習プログラムを実施し、そこに先生、生徒に来てもらい、児童生徒や教職員等と関わりながら、可能性を生かし合うことができるのではないだろうか。学校と企業の関わり方の課題の1つとして、人材育成は学校と企業の共通事項であるという認識をしっかりとってもらう必要がある。学校も企業も人材育成という同じテーマを抱え、相互に学び合う姿勢が大事だ。目的を共有し、相互理解を深めるために、教育関係者と企業関係者が幾度も話し合い、お互いを理解しなければなかなか進まないだろう。まだ少ないそういう場をどう作っていくか、つなぎ役の存在も重要になってくるだろう。職場体験や出前授業を教育上よりよいものにしていくためには、事前に目的や課題プログラムをしっかりと協議し、企業はそれを受け入れて実施し、事後に振り返り、次につなげていくべきだ。その際、保護者へも周知しながら好循環にしていくことも必要である。今はまだ前後の取り組みが少ないと思っている。よりよい地域づくり、社会づくりのために立場の違いを乗り越えて、学校、企業、家庭、地域が連携するためには、組織というより、一人ひとりの個人がどう地域と関わっていくかということが問われているだろう。これは企業人も学校の先生も一緒だ。個人として地域にどう関わっているかをベースに企業、または学校を背景を持った大人と一緒に子どもたちと関わっていくことが必要だ。そこで、改めて人間の本質を追究し、何のために生まれたのかと問いながら充実した人生を全うすることを共に目指していくことが原点になる。社会に開かれた教育課程を実現するためには、社会で大きな役割を務める企業を抜きにしては実現できない。むしろ、協働することによってお互いの役割も明確になっていくだろう。

経済団体の取り組みにはどんなものがあるだろうか。中小企業家同友会では、文部科学省と中小企業家同友会全国協議会が年に数回取り組み等について意見交換し、社会に開かれた教育課程についての情報提供をシリーズにして新聞紙上で全国配信している。各地の同友会ではインターンシップや教員研修をしている。岡山県では総合研究センターで行う主幹教諭の教員研修に企業関係者も参加し学び合う場を作ったり、昨年は商業教育協会の研究集会に中小企業家同友会の代表が基調講演をしたあと、学校の先生方や中小企業の経営者が学びについてディスカッションをした。2000年度の全国総会には全国から中小企業の経営者が集まり、学習指導要領の執筆に関わった文部科学省財務課長の合田氏に会場いただき、中小企業が地域の人材育成を担うというテーマで、学習指導要領についてどのように企業が関わったらいいかという議論を深めた。その成果は冊子にして配布している。岡山経済同友会では2001年から毎年教育フォーラムを開催している。ここでは学校教育に関するテーマも多く取りあげている。2020年度、第20回教育フォーラムは社会に開かれた教育課程をテーマとして開催された。岡山県教育長が基調講演で今の学習指導要領が何を狙っているのかを話したあと、現場の先生、大学の先生、NPOで地域コーディネーターをしている方々や私がパネルディスカッションで、学校と企業がどうつながり、どんな教育ができるのかという議論をした。大きなテーマSDGsについては、岡山SDGsマップを作成している。これは、ある高校の先生から、実際にSDGsをしている企業にどうアプローチしていいかわからないと銀行の担当者が聞いたことから、経済同友会会員企業でSDGsに取り組んでいる企業の取り組みの概要と問い合わせ先を集めたものを作って全高校に配布したのが3年前だ。担当者から高校生へのメッセージなども入れ、経済同友会メンバーと県の高校教育の担当者として何が必要か話し合いながら、なんとか企業が学校と高校生の学びに関われないか模索した。こちらは経済同友会のホームページからPDFでダウンロードできるが、そろそろ中身の改訂が必要だろう。2023年の教育フォーラムのテーマは、部活動の地域移行である。今回は文部科学省ではなく、岡山県で教育次長を経て、スポーツ庁で部活の地域移行を担当していた方に来ていただき、語り合う。

岡山トヨタの事例の紹介をする。岡山トヨタも企業としてさまざまな学校との取り組みをしている。県立一宮高校とのコラボイベントでキッズエンジニア体験をした店舗がある。ユネスコ部の生徒がお店でワークショップをし、フードロス減らすドギーバッグという活動や、コロナ禍の偏見をなくすためのシトラスリ

ボンの活動を紹介してもらった。岡山トヨタは車の販売会社で店舗があるので、そこで高校生の活動の紹介や販売をしてもらっている。山陽学園中学・高等学校の JRC、赤十字部は店舗でクッキー販売などのチャリティーや活動紹介などもした。企業を自分たちの発表の場に使ってもらうわけだ。県立高校には探究の学習の一環として企業訪問をし、社員が企業活動を発表し高校生がそれを聞き、取り組み状況を見て回るということもある。実は、企業が学校の教育に関わると費用がかかるのではないかと教育課程部会でも言われた。企業にとっては、高校生と関わることによって、自分たちの仕事にはこういう意義があると社員が元気をもったり成長につながったりする。逆に SDGs についてはよく勉強している高校生に教えられ、自分たちも負けずに勉強したいという社員も出た。学校教育に企業が関わることで、われわれ自身の学びも深まるのを感じる。岡山トヨタが発行しているコミュニケーションマガジンという季刊誌には、岡山中学、高校の活動を載せている号や、鷺羽高校の取り組みを載せている号があるが、社員が高校へ取材に行ってまとめた。このようにスポットを浴びるのは高校生にとっても励みになるようだし、われわれも今の高校生がどうしているか知ることになる。コミュニケーションマガジンのバックナンバーは岡山トヨタのホームページで見られる。今、企業が高校生の SDGs 探究活動をサポートし、発表の場を設けようと BeLive というイベントをしている。経済同友会が共催をし、私が実行委員長を務めている。コロナ前の 2020 年に JTB が立ち上げ、ハワイとつないで現地の高校と慈善活動をしたりしていたが、コロナ禍でできなくなった。しかし、高校生の探究発表の場は大切だし、裏で支えていた企業から止めるのはもったいないという意見が出て継続することになった。費用は経済同友会の会員企業に協賛を募り捻出している。実行委員会は銀行・企業関係者や県の教育委員会で高校の魅力化推進をしている方、総合教育センター指導主事、大学の先生、大学生、マスコミの関係者がメンバーになっている。高校生の持つ柔軟な発想と、岡山に根ざす企業・団体の力を合わせた SDGs の取り組み発表を通して、新しい未来を創造するプロジェクトというカッコいい形を取っているが、実際にはまだ試行錯誤を繰り返している。高校生と行政、企業の連携を深めて、地域の SDGs 活動をよりよく活性化させること、取り組みを通じて高校生に地元岡山への愛着や関心を高めてもらうこと、高校生と企業が関わり合うことで県内就職を考える一助になること、高校生の柔軟な発想に触れることで企業も新たな視点を見つめることを目的にしながら取り組んでいる。ウェブサイトには今までの活動の状況や、昨年の高校生の発表動画を載せているのでご覧いただきたい。昨年の 5 月にキックオフしたときには、高校生と企業、教育関係者で、岡山の地域課題についてグループディスカッションをした。8 月には、企業と有志の高校生が SDGs に関する取り組みのブースを出し、どんな取り組みをしているかお互いに知り合う場を作った。12 月には、高校の PBL の取り組みの事例紹介や岡山大学の SDGs 担当の副学長による探究活動のやり方について講演を聞いたあとに、学校と企業が関わることで、どんなことが可能かを議論するなど、教員と企業の交流を行った。1 月の終わりには、高校生に 1 年間の取り組みをプレゼンテーションしてもらって審査、講評をし、優秀賞を選出した。審査員は企業経営者、行政関係者、国の機関の方や教育長にも入ってもらった。多様な人が発表を見て、高校生のすごさを認知できたのではないだろうか。教育関係者だけではなく、いろんな人が一緒になって審査をするなかで、審査委員同士の繋がりもできただろう。

また、ローカルサミットというものもある。よりよい地域を作っていこうという有志の会議で、2016 年に倉敷で実施した時には、これからの社会のために中高生から提言をもらおうと中高生の分科会を作った。そこには大人や大学生も入っていたが、中高生を中心とする議論の中で出てきたのは、「大人はきちんと本音を語り、自分の考えをわれわれ子どもに伝えてほしい。私たちは大人と意見交換をする場を協働して作りたい。そのための知識、スキルを得る努力をするので、大人はその環境を整えてほしい。このようにして自分たちの意見や考えを持って、現実社会に主体的に参画したい」という子どもたちからの提言だった。参加した教育関係者からは、「こういう場を作ってよかった。学校の中でだけ、こうなさい、こうだ、ああだ、と言って、今まで中高生を社会に関わらせてこなかったのではないか」という感想があった。この時、私の印象に残っているのは、「自分にとって一番身近なのは東京で、次に世界である。地元が一番縁がない」と、一人の高校生が言ったことだ。とてもショックだった。なぜと思ったが、自宅と学校の往復しかしていない子どもには、東京の情報が一番入ってくるのだらうと思った。インターネットや SNS は東京発の情報が多し、テ



レビ番組も東京や世界の情報ばかりだ。地元の情報は、リアルで地元には接していないと入ってこないのだが、そういう場はない。地域で小学生や中学生と一緒に社会活動をしている高校生は、「小学生の発想は面白い。でも、小学生だと実現はできない。だから実現できるようにサポートするのが私たちの役目だ」と言っていた。高校生が大人と交渉して、小学生の発想を実現していくのである。これを聞いたとき、持続可能性というか、世代間の役割というのは、そういうことなのだと気づいた。次の世代のいうことは、上の世代からは突拍子もないことに思えるが、それを面白いと受け止めて、サポートし、実現するために上の世代が動くということだ。企業に置き換えてみると、いろいろな決定権をもっている年配の我々が、若い新入社員が出してきた案を面白いと受け止めて、やっごらん、難しかったらサポートするからと言えらるうか。何馬鹿なことを言っているんだと言っはいいないだらうかということだ。学校の現場でも起きていけるかもしれない。高校生はもう保護されるだけではなく、積極的に社会に関わって主体的に変えていける存在であり、我々大人もそう認識し、もっと社会に対しての役割を与えていくべきだらう。そうしたことを子どもたちからのメッセージで気づいた。他にも子どもからのメッセージはたくさんある。岡山県真庭市はSDGsの円卓会議として、大人も高校生も対等な立場で発言ができるようにしている。岡山県の新見高校は探究活動で議会に対する政策提言を考え、陳情している。山陽新聞が開催しているSDGs地域課題を探るという連続シンポジウムの司会は、毎回高校生が担っており、事前のワークショップにも高校生が参加している。山陽新聞は、高校生によって活性化するという特集も組んでくれた。子どもたちをそういった位置付けにしていけるかが非常に大事で、その中でどのような教育をしていくのかが問われているだらう。地域の未来は、そこに住む人たちの責任で作っていくものだ。地方創生法には、国や自治体の責任のあとに、事業者や国民一人ひとりの責任にも触れている。そこに住んでいる子どもたちも、一人ひとりが主体的なメンバーとしてきっちり取り組んでいくことが必要だ。子どもたちを地域の一員として、未来をつくる責任者として対等に扱い、大人と共に学び合っていくべきである。先の長い子どもたちがこんな未来を作っていきたいといった時は、対等に受け止め、一緒に世界を作っていこう。BeLiveでは岡山の勝山高校蒜山校地の生徒から、子どものことだけを次世代と言うなというメッセージがあった。次の世代に対しては、大人も責任を担っているのだというのだ。確かにその通りである。子どもたちがいて、対等になることによって、新たなものが生み出されていくし、元気になれるのだ。大人も子どもと一緒に学び、死ぬまでいろいろ学びを続けていくのが生涯学習で、今まで社会と切り離されてきた学校教育もそのなかに位置づけて行く必要があるだらう。それを進めていくためにいろいろな活動が行われているが、ばらばらの状態だ。一緒にやっていくために情報共有の場を作るのが必要だらう。いろいろなところとつながっていくと、互いに学び合うということは非常に楽しいことだとわかってくるだらう。学校教育のあいだに、学びというものはとても楽しいし、自分の可能性をどんどん広げてくれるものだという体験をし、自分が動けば社会が変わるという実感をもってもらうことがとても大切だ。

特色教育部会 実践発表 I

## 「みんなで創る、教科『未来クエスト』

### —普通科アビリティコースの挑戦—

(香川県) 尽誠学園高等学校 教頭

日山 貴浩

#### 【アビリティコースの誕生】

アビリティコースってどんなコース？と聞かれたら、今は、「こどもたちに充実した楽しい高校生活を送ってもらいながら①自分の興味関心に合った専攻に所属して 1 つでも多くの“できる”を増やし、②進学、就職のいずれにも対応した、③彩り豊かな未来を創造する力を養うコースです！」と胸を張って答えることができる。裏を返せば、新設の議論が始まった当初に目指すべき姿があったわけではない。令和 2 年度までは、普通科(体育コース・教養コース・進学コース・特別進学コース)・商業科・衛生看護科の 3 学科体制であったが、少子化の影響もあり年々商業科を志望する生徒が減少しており、今後について考えざるを得なくなっていた。ただ単に『商業科廃止』を打ち出すと、周りからネガティブなイメージで取られてしまうのではないかと…ということで、商業科の特色と普通科教養コースを融合した『普通科改編』を行うことで意見が一致した。周りには、商業科は『廃止』ではなくあくまで『募集停止』であり、我々は新しいチャレンジをしているんだ、という攻めの姿勢をアピールして回った。

方針が固まり、普通科コース改編委員 10 数名が招集されたが、なかなか意見がまとまらない。ふとメンバーを見渡したとき、あることに気づいた。この人たちは ICT 系が得意だな…このグループは芸術肌だな…このメンバーは外部とのやり取りが得意だな…。それに気づいた後は話が早かった。それぞれの教師たちが得意なこと、興味関心のあることを学びの柱に据えることが決定し、どんどんとアイデアが湧き出て構想が膨らんでいった。

こうして学校設定教科『未来クエスト』(6 単位)のもと、学校設定科目『情報デザイン専攻』『パフォーミングアーツ専攻』『キャリアプランニング専攻』が誕生することとなった。

#### 【情報デザイン専攻】

- ・ 学びの内容 プログラミング(Swift)、動画制作、ドローン操縦・空撮、プロジェクションマッピング、資格取得(IT パスポート、ドローン操縦、日商 PC 検定 etc.)
- ・ めざすゴール 情報社会の先にある未来、Society5.0 で活躍できる人材を育成
- ・ 外部とのつながり まんのう町(行政)、NTT docomo、JA、地域振興商社、短期大学、専門学校 etc.

#### 【パフォーミングアーツ専攻】

- ・ 学びの内容 音楽(カブス、ハンドベル、管楽アンサンブル etc.)、演劇(他己紹介、鏡、人間知恵の輪 etc.)、ダンス、書道、保育実習
- ・ めざすゴール 音楽、演劇、ダンスなどの作品作りを通して豊かな表現力やコミュニケーション能力を育成
- ・ 外部とのつながり 大学、短期大学、劇団、多度津町文化体育振興事業団 etc.

#### 【キャリアプランニング専攻】

- ・ 学びの内容 職業体験(T シャツ制作&販売、農業・漁業、専門学校での実習 etc.)、企業訪問(工場見学&実習、社長講話 etc.)、秘書検定、自己 PR、進学・就職試験対策
- ・ めざすゴール 「知って、見て、体験して、感じる」経験を通して働くことを考え、社会で活躍できる能力を身につける
- ・ 外部とのつながり プラスワンインターナショナル、タダノアイレック、テーブルマーク、中国銀行、川上板金工業所、坂出自動車学校、短期大学、専門学校、穴吹カレッジ etc.



### 【専攻の決定方法】

入学後 30 時間のオリエンテーションを経て専攻を決定する。全体オリエンテーションのあと専攻別にオリエンテーションを行い、生徒はすべての専攻を体験する。専攻を決定する前には個別面談をおこない、本人の将来の希望等を把握しながらミスマッチが起こらないように努めている。所属する専攻の変更は、1 年生 1 学期終了時点でのみ受け付けることとしている。

### 【お伝えしたいこと】

#### ①教師が楽しむ！

教師がつまらなそうな顔をしていて、生徒が楽しいわけがない。自分たちが「やりたい、おもしろい」ということをどんどん企画・実践していけばよい。

#### ②学校教育のお手伝いをしてみたい！と思っている人（企業）は意外と多い

最初のころの失敗は、「何でもやりますよ！」とせっかく言っていたのに、全然話が前に進まなかったこと。その理由は、遠慮の気持ちもあって、やって欲しいと思っていることを素直に口になかったため。「何でもいいのでお願いします」では、いくら相手に協力する気があっても前に進まない。実現できるかどうかは別問題として、お願いしたいことは遠慮せず具体的に伝えるべき。経験上、街おこしに関心のある方や、若い経営者の方々は非常に巻き込みやすいし、積極的に力を貸していただける。市役所ならば、商工観光課や地域振興課などが色々な人脈を紹介してくれるはず。

#### ③行動の判断基準はこどもたちにとってプラスになるかどうか

新しい試みに対する Yes or No の判断基準は、こどもたちにとってプラスになるかどうか。角度が 1 度でも上向けば成功だと考えている。いくら机の上で議論を重ねても、実際に Challenge してみないと正解か不正解かも分からない。もし失敗したら、つぎは失敗しない方法を考えれば良い。

#### ④できるだけ多くの成功体験を組み込む

授業の中には“できた”を実感できる瞬間を組み込むように心がけている。こどもたちは“できた”を実感すると自信を持ち、自信がつくと“やる気”を出す。“やる気”は新しい自分を生みだし、大きな成長のチャンスとなる。

#### ⑤“学校らしさ”って何？変化を恐れていたなら何も始まらない

外部の方とお話させていただいているときに、「学校なのにそんなことやってるの!」「学校なのにそんなことしても大丈夫なの?」とよく言われる。先ほども申した通り、私たちの判断基準は「こどもたちにとってプラスになるかどうか」。固定観念に囚われていてはせっかくのチャンスも無駄にしてしまう。チャンスは生徒のためにあり、学校のためにあるのではない。アビリティコース創設時の校長は、私たちにとって本当に良き理解者であり、常に背中を押し続けてくれた。見守ってくれる人の「それ、ええーやん!」の声が、Creative な発想を生むと強く感じた。この会に参加されている先生方は、現に管理職の先生方もいらっしゃるし、将来学校を背負って行かれる先生方ばかりだ。若い先生方が、新たなチャレンジをしようとアイデアを持ってこられた時は、ぜひ「それ、ええーやん!」と言って後押ししてあげていただきたい。そうすればきっと、本校のように活気にあふれた、元気な学校になるはずだ。

### 【最後に】

先日とある雑誌で、『学校の中だけで教育を完結することに限界を感じ、自身で教育ビジネスを立ち上げた』方のインタビュー記事を拝見した。世の中には立派な方がいらっしゃるなあ…と敬服した。規制やしがらみや周りの目など、自分が教師になった 20 数年前と比べて随分やり辛い世界となってしまったことをあらためて実感し、すごく共感した。しかし、その方に言ってあげたい。「こどもたちを育てる環境はみんなで創る時代がやってきましたよ」と。これからの私たち教師に求められることは、教育のため、言い換えれば、こどもたちのために、周りをどう取り込むか、周りとうつながるか、だと思う。

## 特色教育部会 実践発表Ⅱ

### 「地元企業×高校生 SDGs 観点で社会課題を考える

### 東大阪未来プロジェクト」

(大阪府) 近畿大学附属中学高等学校 高大一貫教育部主任

林 丈 嗣

#### 1, プロジェクト開催の背景・概要

東大阪市は、持続可能な社会の実現を目指し、地域の課題解決に取り組んでいる。近畿大学附属高等学校と地元企業は、この目標を達成するために「東大阪未来プロジェクト 2022」を立ち上げた。開催の背景として、メディア関連企業と SDGs に関連する企業関係者が学校と地元企業をコネク特してくれたことが大きなきっかけである。その一連の流れや苦悩を発表した。学校単独ではこの規模のプロジェクトを開催することはなかなか難しいという印象をもっていることも皆様にお伝えした。特に地元企業との連絡や広報活動はメディア企業にお任せしていたことも同時に発表し、プロジェクト開催の背景とした。特に広報活動を専門にされている参画企業がいたことはかなり良かった。



#### 2, 具体的な活動

具体的な活動については時系列と生徒・教員の活動に分けて発表。

##### 《時系列》

2月：生徒募集&参加企業募集 5月：第1回ワークショップ&キックオフ

6月：週1回の集合と基礎知識インプット 7月：中間発表 8月：プレゼン

##### 《生徒の活動》

①SDGs 講演会に参加&アイスブレイク ②社会問題を知る&チームビルディング

③企業訪問&中間プレゼン ④グループミーティング ⑤最終プレゼン準備&発表

##### 《教員の活動》

①生徒への案内&校内調整 ②安全&安心な場づくり ③企業との調整

④日程調整&メンター活動 ⑤広報活動&校内調整

#### 3, 生徒の成長

Q: 実際のところ、生徒はどうだったのか?

① 他者との繋がりが下手

② 様子を伺う生徒が多数

③ 消極的な動き

Q: 活動をしていく中で生徒はどのような変化をしたのか?

中間発表と企業訪問をさせていただく中で、変化出てきた。話し合いや責任感から成長。

#### 4, 教員の苦悩

① 外部とのつながりを作ることに苦労：学びの姿勢を教員自体が作る

② 心理的安全性を維持：知らない人とも安全・安心な場を作るチームビルディング

③ 場づくりの設定：学校内外での発表をするセッティング

④ 対話：生徒の意見を聴き、共に考え共に解決するマインド

※『ファシリテーション』と『対話』に悩む=スキルを上げる必要性。

#### 5, プロジェクトの成功とは

このプロジェクトの成功とは何か。参加者の皆さんで考える機会を設ける。各学校の目的を達成することが成功である。例えば、「生徒のアウトプットの機会を設ける」であるとか「学校が地域創生に関わっている

ことを外部に発信する」などである。生徒の主体性を育み、教員が生徒を否定しない環境でプロジェクトが進めることができれば私は成功であると考えている。答えのない問いを生徒に投げかける以上、我々教員もその難題に立ち向かう必要がある。協働してくれる同僚教員と外部のコネクター・参画企業の方と何度もミーティングを重ねていきながら、見つけていただければと感じている。

#### 6. まとめ

今回のプロジェクトは官学民が一体となったプロジェクトの実践報告を行った。普段の教員の仕事である教科書を使用した授業・机に向かった生徒の学習活動とは大きく違うものである。だから学校・教員も戸惑うことが多く、二の足を踏むことが多いように思う。また教員の心理的な面からも「失敗したくない」といった感情が芽生え、「自分にはできない」といったこと言葉が多く見られると思う。しかし、現在生徒に求められている力を育むためには、学校外の力を借りて、生徒を育成する必要があると感じる。少子化が進む中、「学校や教員の変化」が求められているように感じている。今回のプロジェクトを通して生徒は「挑戦する力」や「人前で発表する力」また「他者との協働する力」がついたと実感している。さらにこのプロジェクトメンバーの中から次のプロジェクトの参加メンバーが出てきたり、自ら地域の大人と繋がって新しいチャレンジを進める生徒も出てきた。こうした活動を通して、生徒が主体的に自らの人生を他者と協働していく姿は教員だからこそ見ることができると感じている。生徒・教員の新しいチャレンジを応援している。私も負けないように新しいチャレンジをしていく所存である。

特色教育部会 講演Ⅱ

## 「急変する時代に私学の強みを活かした特色ある探究的な学びの構築に向け取り組むべき3つのこと」

京都芸術大学クロステックデザインコース 准教授  
吉田 大作

京都芸術大学のクロステックデザインコースは、今から7年前、これからの社会に芸術大学から1つの問題提起をしようと思い、作ったコースだ。今までは、芸術系、理系、文系という縦割りを早期に選択させ、掘り下げた専門性というI型で勝負をしていくことに注視されてきた。しかし、そのような考え方はAIに最初にとって代わられるのではないかという危機感がある中、芸術大学が文系、理系、芸術系という縦割りを壊した場合、何が生まれるのだろうかと考えたのである。私たちは、元々得意としている企画やデザイン、誰かを笑顔にすることや誰かの課題を解決することに、どのようなテクノロジーを合わせ、そして、それを本当の意味で持続可能にするためのビジネス的視点を作るため、コースとして立ち上げた。立ち上げて6年がたった今、ビジネス的な視点を持つ学生がほしいというお声を企業からいただけるまでになった。社会の理解を得るのに時間がかかったとしても、できないから諦めるのではなく、できる方法を考えていくことが、私学にとっては大切だと思う。また、イノベーション理論では、新しいイノベーションが起こった時、社会に浸透するには平均13年かかると言われている。その13年の間に心が折れてしまわないよう、チャレンジを続けていきたいとも思っている。そして、同じタイミングで、大学の中に会社も立ち上げた。およそ2割はいるフリー志望の学生は、自分たちで新規の仕事を取ってきたり実績を作ることが難しいため、私達が取ってきた企業や自治体の案件を、卒業生が起業した会社やフリーランスの学生にマネジメントしている。そうすることで、実績をつけさせ、新しいチャレンジをしたい学生の土壌作りをしたいと思い、取り組んでいる。先生方には就業規則もあるかもしれないが、これからは高校から、先生方が起業し、そのノウハウを教育の現場に持ちこめるようになると、新しいチャレンジが生まれるのではないだろうか。



そして、私はこのような取り組みを行いながら、全国の高校から年間100件ほど、探究や進路についての講演に呼んでいただいている。中には、私の肩書を見て、芸術大学の教員が、探究や進路について、どのような話をするのかと思われる方もいるだろう。実際、「芸術大学のセンスで、私達に思いつかないようなアイデアを出してほしい」と言われることも多くあるが、私達は、天から降ってきたような感覚で仕事をしているわけではない。アート思考というのは、人間とは何か、社会とは何か、自分は何を実現したいか、自分はどう生きたいのかという問いを立て続けるトレーニングで、自分を、会社や学校、地域に置き換えて考えることなのだ。そして、それらは働いている人達にも必要だと言われており、私も企業研修に呼ばれることがある。そこでは、企業研修の80分でアート思考が身につくようにしてほしいと言われることもある。だが、それは無理なことで、アート思考には、幅広く、深い教養が必要で、これは人生をかけて問いを立て続けることのため、すぐに身につくものではない。歴史、文学、言語、数学、政治、経済等、幅広い学問を学んだ先で初めて、私たちは、人間とは何か、社会とは何かということがわかるのだ。そして、こういったことを、絵画、彫刻、写真、映像で表現するのが、アートという表現の手段である。

また、アートは自分のため、デザインは人のためという、対立構造だと考えている人がいるが、私はセットだと思っている。デザイン思考のベースは、自分の経験や専門を信じるだけではなく、物事をよく観察して多角的に物事を捉えることだ。そうでなければ、問題が本当はどこで起こっているか分からない。そして、何が問題かを発見し、解決への具体策を考えることがデザイン思考である。そ

れでは、そもそもアート思考やデザイン思考が、なぜ問われるようになったのか考えてみよう。それは、今の世の中の A という問題が、B という原因だけで発生していることはほとんどなく、C、D、E、F 等の様々なものが、長い歴史や地域と複雑に絡み合い、今の課題として生まれているからだ。一方面からのアプローチだけではなく、丁寧に観察して研ぎほぐさなければ、問題が解決できなくなっているということが、デザイン思考が問われているポイントではないだろうか。

では次に、通常のアートコンサルやデザインコンサルでやっていることを、今日のテーマに置き換えてみたい。

私たちが企業や自治体から依頼を受けた際、まず最初のステップとして、課題の可視化と整理をする。皆さん困っているのは確かで、困っているということ共有はしているのだが、例えば、市長の想いと、商店街の人の想い、農家の人の想い、小学生のお子さんを持つ親の想いは、重なっているところもあれば、重なっていないところもあるのだ。そのような時に、地方創生や街づくりとおおまかにまとめてしまうと、それぞれの主観になってしまう。そこで、皆さんが抱えている課題がどこにあるのかを整理し、マッピングするのだ。そして2番目のステップとして、なんのためにそれをやりたいのかという目的を確認する。これは、私たちが目的を設定するのではなく、その自治体や企業、学校の方の、自分達はなぜそれをしたいのかという目的をはっきりさせるためだ。そうしなければ、次のステップである手段の良し悪しの判断ができないのだが、3番目のステップである「手段」ばかりが議論される傾向にある。例えば、学校で、「タブレットを導入すればいいのではないか、あるいは隣の学校使用しているミロを導入すればいいのではないか」という意見が出たとき、すべての手段を利用することはできない。まずは課題を整理し、なんのためにそれをやりたいのかをはっきりさせたあとに、手段を列挙して優先順位を確認するのだ。そうして初めて、皆さんの共通言語が作られ、実際にスタートできるのだ。そして、ここで大切なことは、スピードのあるトライである。トライしてうまくいかない場合は修正すればいいので、とにかくトライしていく。

よく課題解決、問題解決と言われるが、それができない理由は、ある2つのものが欠けているからだと言われている。1つは、何をいつまでに達成したいのかという明確な目標の設定で、もう1つは、目標はあるけれども、自分たちの目標に対して何ができていて何が不足しているのかという正確な現状分析だ。この2つができて初めて解決すべき課題が見えてくる。だが、私たちに相談が寄せられる時は、何をいつまで達成したいのかという目標が定まっておらず、現状の分析も不正確な場合が多く、課題解決が困難な状況なのだ。そのため、まず今ある現状から進んでいった先には、どのような未来があるのかというフォアキャストを大切に。その一方で、いつまでたっても目指す形にならない場合、バックキャストとして、未来のあるべき姿に到達するのが3年後なのか、10年後なのか、20年後なのかと、現在を見直すのだ。20年もかけられないときは、これを5年でやるには何が必要かと、もう一度、フォアキャストに立ち、5年で目標に達することができるのか現実に照らし合わせて、目標の設定として正しいかどうか、行き来していく。

私達は普段から、二項対立をできるだけ避けるようにしている。AかBか、白か黒かというのは、入力する条件によっても答えが変わるため、そこをきちんと整理した上で、組織としてAを選択するならば、それを明確にする。このことを、普段は「共通言語の形成」と言っている。先生方のそれぞれの学校での目標というのは、それぞれの学校でしっかりと作っていただくことが必要なので、今日は、まず正確な現状分析というところで、一緒に共通言語を作っていきながら、考えていきたい。

高校で進路講演をすると、担当の先生から感想が送られてくる。高校生が書く最も多い感想は、今日の話は親と一緒に聞いてほしかったというものだ。このような感想があまりにも多いと、同じ学校から保護者会での講演に呼ばれることもあれば、他学年にも聞かせたいと呼ばれることもある。私は、高校生が親と一緒に聞いてほしかったという感覚は、とても大切だと思っている。歴史的に見て、組織や個人・チームや国が敗れる理由として、思い込みや先入観が存在し、最新で正確な情報があるにもかかわらずアクセスせず、今までの自分たちのやり方への慢心が生じ、変化させてトライすることができなかったことが挙げられている。この思い込みや先入観は、正確な情報が不足する事態に陥らせてしまうのだ。したがって、いつも高校生と保護者の方に説明しているのは、なぜ今、探究

と言われているのか、なぜ今、AI の話が出ているのか等、親世代と高校生世代の違いを、比較観察してほしいということだ。

今の高校生の保護者の方を 50 代と想定して平成元年（1989 年）に時間を戻すと、それは人口が毎年 50 万人近く増えていた時代である。日本の人口が約 50 万人増えるということは、50 万人分の家、学校、生活用品や服、交通機関、食堂や病院も必要になる。作るそばからものが売れていく時代、そんな時代を私たちは歩んできた。その当時の経済・産業はどのような状況だっただろうか。平成元年に、世界で最も企業価値が高かった会社は NTT だ。世界トップ 20 の上位には、NTT や金融機関、東京電力等の日本企業が並び、さらに日本の自動車メーカーや銀行、家電メーカーが続いていた。当時は、大学を出て大手銀行に就職すると、生涯年収 6 億円と言われた時代だ。まさに、日本の自動車や家電という「ものづくり」が世界ナンバーワンの品質を持ち、それが輸出産業になり、インフラを整える会社も一緒に成長し、獲得した外貨を金融機関や証券会社が次々と運用して、日本中が成長していたのが 30 年前だ。過去を否定するつもりはないし、当時は、そのやり方が正解だったと思う。世界中の企業が視察にきて、教育現場を見にくるという状況で、世界水準で頑張れば、豊かさや幸せを手に入れられるだろうという期待があった時代なのだ。この時代の大学進学について、保護者の方は強烈な体験をしていると思う。この時代は大学に行くのが非常に困難で、高校生の 44% は大学進学に浪人を覚悟しなくてはいけなかった。また、高校 3 年生のときに芸術大学に行きたいと思っても、今からやっても絶対に受からないから、2 浪、3 浪の覚悟ができるか両親と相談するようにと進路指導されていた時代だ。だが、30 年たった今の高校 3 年生が美大に行きたいと言ったとき、やはり今からやっても間に合わないと進路指導で言われるのだ。それは、当時の強烈な体験の印象が、保護者の方にも先生にも強く残っているからだろう。

心理学では、上司と教員と親には、ある欲求が働くと言われている。それは、有能性の証明欲求と言い、自分がいかに正しい答えを持っているかを示すことで、この関係性の維持を期待することだ。しかし、何が同じで何が異なるのかを見比べておかなければ、良かれと思ったアドバイスが時代錯誤かもしれない。今の現役高校生世代は、日本の人口が毎年 50 から 60 万人減少しており、昨年 1 年間で、日本の人口は 55 万人減っている。この人口の統計の予測をそのまま進めていくと、今の高校生が 30 代後半になる 20 年後には、1400 万人減少する試算だ。少子化と言われるだけではリアリティがないため、数字にしてみよう。1973 年生まれの人は 205 万人いるが、今の高校 3 年生が 109 万人で、この時点ですでに 100 万人近く減っている。そして、昨年生まれた子は 77 万人なので、今の高校 3 年生よりさらに 32 万人減少しているのだ。50 年で 60% 減少しているということは、5 クラスに増やした学校を 2 クラスにしないと維持できない状況になっているのだ。このような状況になることは何年も前からわかっていたが、手を打ち始めるのは何かが起こったあとで、イノベーション理論でいくと、手を打ち始めて 13 年が経つまで、体力が持たないというケースもあるのだ。

では、経済・産業はどのように変化したのだろうか。現在の 1 位はアップル、2 位はサウジアラムコというサウジアラビアの石油会社、3 位はマイクロソフト、4 位はグーグル、5 位はアマゾンだ。グーグルやアマゾンは、平成元年には、まだ誕生していなかった会社である。世界トップのだった、アメリカと並ぶ日本経済は、20 年経ち、世界トップ 100 のうちなかで 51 位のトヨタ 1 社だけになった。日本は、この成長し続けていく世界の中でのなかから、失われた 30 年に突入し、2010 年には急進した中国にがそれを急進して、今では追い抜かれているのだ。1 位だった国際競争力が 31 位になった現状を理解し、悲観するのではなく手を打つべきだと、経産省は言っている。終身雇用を続けることが難しくなっているという状況や、世界 1 位だったアパレルメーカーの廃業等を見ると、30 年先はわからないのが現状である。若い世代には、安定をただ求めることはやめようというメッセージを発信しているが、今の大学生が就職に求めているものは安定なのだ。このギャップを、私たちは正しく伝えられていないのではないかと、考えなくてはいけないのではないだろうか。

今の大学は、平成 3 年に大学の設置基準が緩和されたことで、300 大学増加し、800 大学を超えている。大学進学率も増加しているが、唯一の誤算は子どもの大幅な減少だ。半分しか大学・短大・専門学校に行かず、そのうち 4 人に 1 人しか 4 年制大学に入れなかった時代と、大学・短大・専門学校合わせて約 84% の高校生が進学し、そのうちの 56% が 4 年制大学に行っている現代とは、前提が違うの



だ。このような状況の中、私立大学の604大学のうち53.3%、つまり、2校に1校以上はすでに定員が割れている。私学の収入の大半は学生・生徒の納付金で、大学の大半は、80%強から90%を学生の授業料で賄っている。定員割れとは、歴史ある学校で蓄えがある学校はいいが、借金して作っている学校には非常に厳しい状況で、200から300校は維持できなくなるだろうと言われている。そして今、2校に1校は願書を出せば受かる状態だ。昨年、コロナで入試を欠席したのに合格通知が届いたことがあったそうだ。学校に問い合わせると、願書が届いた段階で全員分の合格通知を用意しており、欠席した子の通知を抜き忘れて送ったそうだ。これは笑い話ではなく、2校に1校は入試が機能していないのである。

また、アメリカ進学を目指していた中国人留学生が、中国とアメリカとの関係を考えて末に日本に流れてきており、多くの中国人留学生が日本の大学を受験している。そして、定員割れしている大学は、全員合格させる。今年、私の大学には、総合型選抜に留学生だけで600人きたが、残念ながら大半は落とした。理由は、授業をして意味が理解できない学生がいると、その子たちに合わせないといけなくなるからだ。そうになると、やる気がある学生たちは、進みの遅い授業にモチベーションを下げるだろう。したがって、授業についてこれないと判断した学生は落とした。だが、落とせない状況の大学は入れざるを得ない。そうすると、留学生比率が5割、もしくは学科によって7割から8割のコースも出てくるのだ。授業をするとわかるが、この状況では授業にならない。今は統廃合を決意する学校が、続々と出ている。私の大学は、ありがたいことに志願者が増え続けているが、20年前は、私の大学は淘汰される側だと思っていた。そのときに20年先を考え、思い切った教育改革をしたのだ。すると、そこから13年経ったころから、志願者が右肩上がりになった。他とは違うことをやり始めたということが社会に浸透し始めて、増えてきたという状況だ。

何かに取り組むということは、ある程度の判断が必要だと思っている。私の大学の建学の理念は「芸術立国」だ。芸術を学んだ学生たちが、単なる自己表現にとどまるのではなく、身の回りや社会の課題解決や、人を笑顔にすることに貢献することにより、世界平和に貢献する大学を作りたいという、創設者の理事長の思いがある。したがって、学生募集という側面ではなく、歴史的、経済的に対立関係になりがちな東アジアをネットワークングして、そこに人の繋がりや拠点を作るため、ソウルと上海と台北に事務所を作り、そこで様々な芸術交流活動を続けている。今から10年以上前、私の大学に留学希望の子が上海や台北の窓口にくると、留学生の保護者からは、留学生のための奨学金はないかという質問をよく受けた。私の大学は芸術大学で私学のため、1年間の学費は167万円だ。やはり高いため、留学生向けの奨学金はないかということと、留学生向けの寮はないかという質問が多かった。そこから10年以上経ったが、最近でも学費と家について質問されるそうだ。だが、質問の中身がまったく違う。台湾の高校より学費が安い大丈夫かということと、大学院まで6年通うことを考えると、賃貸ではなく家を購入し投資対象にしたいという問い合わせが増えてきているそうだ。このような状況下では、こちらがよっぽどアンテナを張っていないといけなない。未だに、日本に出稼ぎにきていると思っている保護者もいるかもしれないが、このように、大きく状況は変わっているのだ。

では私たちは、先入観から離れるために何を考えないといけなないのだろうか。まず、大学合格をゴールにしないことだ。大学に合格することは大切だが、大学合格をゴールにすると、受かった瞬間に学ぶのを止めてしまう。総務省の社会生活基本調査で、1日で学業に充てる時間は、小学6年生が5.2時間、中学6年生（中学3年生と思われる）が6.25時間、高校3年生が6.36時間をピークに、大学生は3.4時間と小学生より勉強しなくなる。また、大学生の1日の時間配分は、授業2.84時間、授業以外の学習1.07時間、サークル・アルバイト・娯楽に3.48時間、スマートフォン7.5時間と文部科学省の調査で出ており、大学4年間の大半を、スマートフォンとサークルとアルバイトに使うことになるのは、私たちがこのようなマインドセットをさせてしまったからかもしれない。一方で、企業は就職活動中の大学生に、学生時代に力を入れたことと、その根拠を尋ねる。だが、スマートフォンの使用に力を入れたとは言えないため、アルバイト、もしくはサークル活動に力を入れていたと言うだろう。それを否定するわけではないが、企業からすると、それであればこの大学でも良かったのではないかと思うのではないだろうか。このような状況でも、なんとかかなるだろうという彼らの慢心を作ってしまったのも、私達がきちんと考えておかなければいけななかったことだと思う。

こうした中で、AI が急激に発展してきた。今年の3月に ChatGPT の有料版が出た。私は GPT-4 を使った時、4月からの大学の授業を変えなければ、今の大学生が大きな不利益を受けると思った。今までの大学は、生活者や消費者より専門性という情報量が多く、この差に仕事が生まれるチャンスがあったのだが、それを AI は無料ともいえる金額ですべての人に開いたのだ。今までは、医学の現場でも法律の現場でも、知っているということが専門性だったところを、知っているだけでは価値を下げているという状況にしたのが、生成 AI のもたらしたものだ。

私の大学では卒業製作研究を1年かけて行う。昨年までは、大学で習った p5.js というプログラムコードを使ったアニメーション制作でも許可していたが、今年の4月からは、小学生がやっても20秒でできるものに、なぜ1年かけてやるのかと言わざるを得なくなったのだ。それは学生のせいではなく、世の中が変わったときに見て見ぬふりをするのか、変化した時代がきたことを受け止めるのか、ということだと思う。アイデアとは、既存の情報を組み合わせることだというのが世界的な定義である。今までは、引き出しを増やして組み合わせを考えるために学んできた。だが AI は、指示すると24時間365日学習し、何万通りもの組み合わせを提示するのだ。自分たちが学んで提案することは、既にすべての人に開かれているという状況であることを、きちんと理解しておかなくてはならないのだ。

私は、人口、経済・産業、大学進学、AI の登場等、以前と変わっている状況だとわかった上で、何が必要なのかを考えるべきだと思っている。まず、いい大学に進学すれば大丈夫という、このマインドセットを大人が作らないということが鍵になってくるだろう。高校生に、大学合格がゴールではなく、大学入学後に何を学び、どのような経験をして、どのような失敗をして、何に気が付いて、どういうネットワークを作るかということが勝負なのだ、受かった子にも落ちた子にも言っている。また入学式では、AI 時代という困難な時代を前にして、困難を悲観して漕ぐのをやめるのか、それとも困難な先に明るい未来があると思って船を自分で漕ぐのか、これからの4年間で一緒に船を漕ぐ力を身につけようという話をした。こういったマインドセットを繋いでいくことが重要だと思っている。

ここで考えなくてはいけないことは、前提条件が変わると、How といったやり方は検索できるということだ。これから本当に考えるべきことは、何をという What を見つけることと、なぜそれをするのかという Why を考えていくことで、これを、人生をかけてやっていかないといけないのだ。やりたいことが見つからない、または自分で決められないという学生も出てくると思うが、それは、分からないのではなく知らないというのが大半だろう。そして、今すぐに決められない学生には、情熱はあとからついてくるのだから、今、目の前のことを、とにかく一生懸命やりなさいと話している。見つけようとするのではなく、なんとなくやっていたら楽しくなってきた時に、本当の情熱がついてくると、カル・ニューポート先生が言っている。私達が天職だと思っているものも、実は、一生懸命やってきた仕事が、今、面白くなっているだけかもしれないのだ。

教育の役割には2つのポイントがあると思っている、1つは、その過程で感動の喜びが与えられているかどうかだ。私達が子ども達に、すごいな、面白いな、というものに出会わせられているかどうかだと思う。そして、いつも私たち自身が、すごいなと、面白いなと思えているかということが、感動の喜びとして大切なのではないだろうか。もう1つは、習熟の喜びとして、なんとなくできるようになってきた、少しずつ前に進んでいる、という感覚を持たせられているかどうかだ。小さなマイルストーンを置いていき、その小さなマイルストーンを達成していった先に、自分が何をしたいのか、なぜやりたいのかということを見つけてほしいと思っている。

そして、ここからやっていくべきことは、知識と実践と人間力の3つにあると思っている。多角的な視点での学びの構築と、解像度の高い知識の習得に向けた実践の振り返り、子どもたち自身が身につけられるような学びの態度の形成という「応援され力」だ。自分の子どもと AI を使っているときに、AI が進歩したら私たちはどんなことを考えておいたらいいのかと聞かれた。そのときに、AI の得意、不得意なことを知ろうと話した。AI の得意なことは、24時間365日学習し何万通りもの組み合わせを考えることができることで、AI の不得意なことは、多角的に学ぶこと。解像度の高さは AI にはないのだ。例えば、ChatGPT は、平均的なデータは得意だが、個人を特定する情報には途端に解像度が弱くなる。ここに、私たち人間の役割が出てきて、クリエイティビティを支えるイメージーションになるのだ。クリエイティビティを支えるイメージーションとは、自分の心で考えるのではなく、相手の心

の立場になって考えていくことだ。企画でもサービスでも、プロダクトを作ってもビジネスを起こしても、届けたい人の顔がきちんと浮かんでいる人と浮かんでいない人の差は大きくなるだろう。解像度が上がって初めて、私たちはその人に本当にプレゼントを送ることができるのだ。企画やサービス、プロダクトや仕事を、プレゼントと置き換えると、顔が見えている人でないとプレゼントを送れないよねということ、先日、小学生にも話した。だから、とにかく興味を持つことが大切で、興味を持ったら調べてみて、調べてわかったつもりになるのではなく、会いに行って話を聞いてみて、実際に質問するということを繰り返すことで、解像度は上がっていくのだ。この姿勢を、どのようにして探究的な学びや実践的なプログラムにつなげていくかが重要になってくると思っている。

私達の大学は、幅広い教養、コースの専門、実践する場所、この3つを三角形で回しながら学ぶシステムを20年前に考えた。一例だが、アート思考にも教養の授業がある。たとえば、京都を縦軸に学ぶという授業で、京都の伝統文化の家元方に15回きていただき、その人たちの多角的な視点で京都を捉えていく授業だ。あるときは、たん熊の料理長が旨味についての授業を始めた。旨味とは、グルタミン酸、イノシン酸、グアニル酸という旨味成分で感じるもので、ここを解きほぐして料理人は和食を作っているそうだ。フランス料理では、鶏の肉を煮てイノシン酸を抽出する。水に含まれるカルシウムと結合すると灰汁ができるが、その灰汁を取り除くために硬度が高い水で取ったほうが清浄なブイヨンができるのだ。ところが日本料理は、硬度の高い水で出汁を取ってはいけなくて教わるのである。硬水ではカルシウムのぬめり成分であるアルギン酸が結合するため、表面に被膜ができてグルタミン酸が抽出されにくくなる。したがって、超軟水の井戸水を使っていた京都だからこそ、和食という文化が生まれたのだという授業を受けた。ここまでは知識だが、そのあと、京都の井戸水で取った昆布出汁と、同じ昆布を使って東京の水道水で作った昆布出汁を飲み比べる。水でこんなに違うのかと学生が言ったそのとき、知識が体感になり、初めて理解に繋がるのだ。AIに聞けば、このような情報はすぐに出てくる。しかし、そこを実体験として体験をすることで、それが分かってくるのだ。そして次の週、日本画の教員が、水墨、清酒、豆腐、和食は、すべて水の文化なのだと話し、硬水と軟水で炭のすり比べをする。すると、硬水と軟水では発色が違うことに気が付くのだ。それが分かると、クリエイターは水から素材を選ぶようになるだろう。情報がどれだけあったとしても、解像度が高くなければ実際に使える状況にはならないのだ。1つ1つの関係ないことが、あるとき繋がった瞬間を **Connecting dots** と呼んでいるが、これは、意味があるとか役に立つとかではなく、点を打った人にしか繋げることができないのだ。役に立つから学ぶとか、役に立たないから学ばないのではなく、学んでいることはすべて点を打っているのだ。そして、この点を繋いだ瞬間に、新しい発見が生まれるということ、入学時から繰り返し伝えることが大切だと思っている。

そして、実践と振り返りには、繰り返しが必要だ。実践のあとに複層的にチェックして、別の角度から同様の話をし、また気づきを促すことが必要になってくるだろう。この、機械にはできない超並列型思考は、目で見て、耳で聞いて、手を動かしながら考えることが重要だと言われている。しかし、今の私たちの授業は、目で見て、耳で聞くことに偏重なため、そこに身体性をもう少し加えていくことが、より重要になってきていると思っている。

私は探究についてのアドバイザーもしているが、授業計画がきっちり作られすぎているように感じる。2月や3月に発表して、1時間まとめをして終わるというイメージだが、私の大学では、本番を10月か11月に行い、残り3カ月間でフィードバックとリフレクションを行う。それは、本番を行っても、まだ気づいていないとは限らないからだ。今の2年生の社会実装演習では、10月9日に本番を行った。そこでできなかった部分について、1カ月後には別の企画を、そしてそこでも足りなかった部分をポイントにして、さらに1カ月後に企画を行う。この、短いサイクルでのチェックとアクションが非常に重要だと改めて感じている。これは去年の反省点で、学年が上がったときに学びが言語化されていないことを感じたため、このような授業計画を立てた。

今の学生は、アクティブラーニングと言われてきた子どもたちのため、プランとミーティングはたくさん行うが、Doをほぼしない。このDoをしない限り、プランとミーティングの検証ができていないことになるため、この小さなサイクルを探究の中で回していけないといけいないのだ。だが、学生たちは、失敗するのが怖い、一歩踏み出す勇気がない、ということからDoができないようである。私の

大学では、企画とビジネスも教えているが、やったことがないのに企画とビジネスを語り始めているのは、かなり危険なことだと思っている。そこで、このまま頭でっかちになって卒業させてはいけないと、3年前から、2年次で予算規模1000万円の企画を自分たちで行わせている。もちろん、学生は、そんなのやったことないし無理、できないと言う。その時に、それを分かっているやらせているのだと話す。それはなぜかという、企画やビジネスを学んだ学生が、分かったつもりになって世の中に出るのが1番危険なことで、企画をやるのが動けないくらい怖いことだと知ることが大切だからだ。学生の今は、教員に聞けばいいし、サポートも受けられるのだから、分からないから一歩踏み出す勇気がないというのはやめようと伝えている。そして、この授業で、学生は2つのタイプに分かれた。1つは、失敗するのが怖く一歩踏み出す勇気がないから、もっと知識を教えてほしいと言う学生や、これがなんの役に立つのかと言う学生。そしてもう1つは、とにかくやったことがないからやってみようと思った学生だ。なんの意味があるのか分からないと言う学生には、意味があるか役に立つかは、やったことがない君にどうして今すぐ分かるのか、やってみて初めて意味があるかないか分かるもので、やる前から意味のあるなしについて考えると、答えが決まっていることしかできなくなるということを伝える。これは、私達がそう言わせるような教育を大学でしてきたという反省点だと思っている。そして、教員は正解を持ってはいけなくとも思われがちだが、初めて彼らがやることに対して、一緒に考え、伴走することも重要な役割ではないかと思っている。

このような授業を行って思うことは、学生たちに人間力や応援力が形成された時、大学で伸びる学生とそうではない学生を見てみると、伸びる学生は先入観が少ないということだ。何かを言われた時、失敗を恐れずに行動する学生は、やはり、伸びると感じるし、そういう子には、助けてくれる人が出てくるのだ。私は、この助けてくれる人を見つけるということも、人生の財産だと思っている。ところが、なかなか伸びない学生は、ビジネス書に書いてあったことや、誰かの発言の一部分等、ある特定の情報に左右され、いつまでも行動しない。そうすると、いつまでも解像度が上がらないため、調べたら分かるようなことだけを言ってしまうのだ。また、できない理由を探せばかりいと誰も手伝ってくれず、最後は自分1人でやらなくてはならなくなり、ハードルが高くなっていくように感じる。多角的に学び、実践し、体験すること、さらにそれをしっかりと繰り返して振り返ること、そして、その先の「応援され力」を身につけた生徒を育てていくことがこれから重要なことで、私学だからこそ、長期的なスパンと短期的なスパンの両方ができると思っている。

## 特色教育部会

### 「総括」

尽誠学園高等学校 校長  
下山 優

まず、講演Ⅰでは、岡山トヨタ自動車株式会社代表取締役社長の梶谷俊介様より「地域、社会と連携した学び」と題し、学校教育を生涯教育の一環として位置づけ、さらに地域創生も視野に入れ、学校と社会が学校教育を通じて「よりよい社会を創る」という目標を共有し、それぞれの学校で必要な教育内容を「どのように学ばせ、どのような資質・能力を身につけられるようにするか」を社会との連携・協働によって実現を図っていくという、これからの教育理念の下、梶谷様が具体的にどのように教育界へ働きかけ、連携し、実践されているかをお聞かせ頂きました。私達が特色教育を実践するにあたり、地域・企業との連携強化は大きな課題ではありますが、梶谷様のように学校教育に非常に関心を持たれた経営者の方々が皆様の地域にもいらっしゃることは大きな自信となり、企業の方に私学教育がどんどん関わって頂いても良いのではないかと勇気を頂きました。続いての実践発表Ⅰでは、香川県・尽誠学園高等学校教頭の日山貴浩先生より「みんなで創る、教科『未来クエスト』—普通科アビリティコースの挑戦—」と題してご発表頂きました。アビリティコースの立ち上げから学校設定教科「未来クエスト」での具体的な取り組みについて発表頂きました。昨日の松尾先生の記念講演でも話がありましたが、PDCA サイクルの高速化を可能にするためには、管理職や学校の理解が必要であることを認識いたしました。次の実践発表Ⅱでは、大阪府・近畿大学附属中学高等学校高大一貫教育部主任の林丈嗣先生より「地元企業×高校生 SDGs 観点で社会課題を考える東大阪未来プロジェクト」と題してご発表頂きました。林先生に与えられたミッション、そして、東大阪未来プロジェクトで行われている具体的実践の紹介を頂きました。その中で、心理的安定性を高めるためのイントロ実践を同校の平田先生のご協力の下、会場の先生方に体験して頂きました。体験後、会場の雰囲気が一気に変わったことを皆さんも感じられたのではないのでしょうか。先生方の苦悩の中で、学力では測れない能力を伸ばす活動として、様々なアイデアを創造され、アプローチされていると感じました。午後の講演Ⅱでは、京都芸術大学クロスステックデザインコース准教授の吉田大作様より「急変する時代に私学の強みを活かした特色ある探究的な学びの構築に向け取り組むべき3つのこと」と題してご講演頂きました。少子化、また、日本経済の低迷、生成 AI の出現により昔と同じ教育観で良いのかという問題提起から、多角的な視点での学びの構築、解像度の高い知識の習得に向けた実践と振り返りの繰り返し、「応援され力」を身につける学びの継続性が、我々教育現場にいる人間の使命であり、探究や特色教育の進むべき道を示して頂きました。私達が先入観から脱するべきであると強く感じました。最後のプログラムである「研究協議」では、昨日、皆様から頂いた事前アンケートから、高知県・高知中央高等学校教諭の岡田俊介先生、北海道・札幌静修高等学校教諭の石井翼先生、島根県・益田東高等学校教諭の森山順弘先生・大庭敏文先生より各校のご紹介を含め、特色ある教育についてご紹介頂きました。

本日、特色教育部会は「地域、社会と連携した若者たちの学び」を研究目標として、皆様と時間を共有いたしました。生成 AI が急激に進歩した今、探究や特色ある教育の価値は非常に高く、これから社会を背負っていく子ども達に地域、社会と連携し、どんな力をどんな風に身につけさせるかを深く考え、実践する力と勇気を与えられ、そして、充実した時間を皆さんで過ごして頂いたかと思っております。これまでの学校教育を見つめ直し、昨日の平方所長の報告にあった「自由のないところに創造力は育たない」という言葉を肝に銘じ、新しい教育チャレンジができる学校を目指そうと私も決意を固めた次第でございます。2 日間の教育内容を各学校にお持ち帰り頂き、各校で情報を共有して下さい。そして、本日、当部会にご参加の皆様方が私学教育にイノベーションを起こして頂けたらと思っております。

# 参加者アンケート（感想）

全体集会（記念講演・報告・私立学校活動紹介）についてのご意見ご感想



## 【記念講演】

- これからの社会がどのように変わっていくかを教えられ、若者も変わってきていると実感した。
- 人工知能において、「時間（サイクル）を早く回す」という視点が印象的。人材育成の場面では、まず一歩踏み出すこと失敗を認めることが必要であることを感じた。
- ICT活用をはじめ、生成AIを教育活動全般において、今後どのように効率的に活用するかを真剣に考えていかなければならないと思った。
- 今一番ホットな話題「生成AI」について、専門家の最新の研究結果や状況をお聞かせ頂く貴重な機会となった。難しい公式も多々あったが、とてもわかりやすく言い換えて頂いたり、例を示して頂いたりして、結論まで想像でき、大変興味深かった。
- 驚きの連続であった。これからの時代、AI抜きでは学校教育も語れない時代になっていくと確信した。深層学習をどのように学校教育に取り組んでいくか早急の課題であると感じた。Chat GPTの登場で生徒にはもちろん、教員も使い方にルールみたいなものを設けなくてはならない気がした。

## 【報告（吉田晋会長）】

- いつもながら吉田会長の熱い想いに感動した。今回は創造性について配慮頂いたが、STEAMのAは経営者や校長にとっての教養であると考えている。
- 吉田会長のリーダーシップと内容について、具体的で分かりやすく良かった。
- 私学を取り巻く状況について具体的に数字を挙げて説明されていたのでわかりやすかった。

## 【報告（平方邦行所長）】

- 短時間での報告の中、大変有益なものであった。
- 自由がないところに創造性は育たないということに共感した。
- 普段は考えもしないこと、見過ごしがちなことを伺えて良かった。

## 【私立学校活動紹介】

- 生徒の活動に元気をもらった。生徒達の輝ける場として、今後も続けてほしい。
- 少林寺拳法も和太鼓も初めて拝見し、感激した。生徒が仲間とそろって行う演武、演奏に一生懸命に取り組んでいるのを強く感じた。
- 少林寺拳法演武も和太鼓演奏も迫力があり、AI時代の中、人間にしかできないことは人を感動させることなのだと感じた。

## 各部会の内容等についてのご意見ご感想

### 【私学経営部会】



#### 〈講演Ⅰ〉

- 猪熊画伯の「存在そのものが美」は教育の原点だと思う。
- 芸術を通じて、創造性について考えることができた。
- 藤島武二やマティスからの言葉を自分ごととしてしっかり受け止める姿勢が素晴らしいと感じた。
- 猪熊氏の画風の変化から、日々変化する社会情勢の中で本質的なものを大切にしながらも各校が大胆に変化しなければならないと思った。

#### 〈講演Ⅱ〉

- 感銘を受けた。社会における役割を自認しているからこその中津万象園運営だと思う。
- 具体的な内容で、問題に対してより先に進むように新たな取り組みをされていることは素晴らしいと感じた。バイタリティとチャレンジする大切さを学んだ。
- 眞鍋社長の建設業者としての見識は見事であり、仕事＝事業への情熱…万象園庭園の持続化と未来への展望もあり、素晴らしかった。学校経営にとって、分析と5年先、10年先への展望をする上で参考になった。

#### 〈パネル・ディスカッション〉

- 私学本来の役割である、子ども達をどう育てるかという視点・実践研究を広石氏から聞いて良かった。
- 人件費比率について、人員調整について、質問事項に対し、可能な範囲でご回答いただきありがたかった。
- 各地・各学校において本県とはかなり違う部分や、参考になる意見や発表を聞く事ができてとても良かった。
- 東京電機大学の改革は大変参考になった。

### 【教育課程部会】



#### 〈基調講演〉

- 実際にやってみる似顔絵、サイコロを使ったトーク、生徒側の気持ちをイメージできる楽しいワークショップが印象的だった。
- インプット＝学ぶの成果をスピーディにアウトプットしていく環境作り、きっかけ作りをしていく重要性を感じた。

- 一番印象に残った講演だった。つまらない授業が生徒の学力を向上させていないと感じた。体験を通して、それを振り返り、意味づけするところまでを実際に経験し、おもしろいと改めて感じた。
- 大変感銘を受けた。消極的なミスではなく、積極的なチャレンジをすることの楽しさを感じた。これからたくさんチャレンジしてみようと思う。

#### 〈ワークショップ〉

- 有意義であった。すぐに学校に帰って実践できる内容でよかった。
- とても楽しく学んだ。不安を取り除くための傾聴力の重要性やツールとして何を使っていくのかなど、たくさんのお土産をいただきありがたかった。
- 各活動で、先生方とコミュニケーションを取れる場面が多くあり、とても楽しかった。

#### 〈実践発表Ⅰ〉

- 読書を通して生徒を指導する話、大変勉強になった。
- 個人的にもっと詳細を聞いてみたいと思える内容だった。

#### 〈実践発表Ⅱ〉

- 地域の企業と連携した探究学習の取り組みが大変参考になった。
- 自分の学校ではアイデアとして出していない考え方がたくさんあり、驚いた。また、アプリケーションの使い方がとても参考になった。

#### 〈その他〉

- 「何か授業がつまらないな、生徒が発言しないな」とまさに感じていたところだった。今日学んだことを意識しながら、授業の場を活発なものに変えていきたいと思う。

#### 【法人管理事務運営部会】



#### 〈講演Ⅰ〉

- 信頼関係の重要性がよくわかり、内容もよく理解できた。
- 働きやすさと働きがいの境がよくわかっていなかったと痛感した。働きがいとは奥深いものだと理解できた。
- 時短にとらわれて、働きがいに目が向いていなかったことを痛感した。職場の人間関係が何より必要だと勉強になった。教職という仕事が誇りを持って続けられるように、焦らず考えていくことが大切だと思った。
- とても参考になった。本校は働き方改革に取り組んでいこうと動き出したばかりである。まずは、長時間労働改善から取り組んでいこうと思っており、そこでの大切な考え方を知ることができた。職場でフィードバックしたい。

#### 〈講演Ⅱ〉

- 部活動のあり方について考えることができた。その部活動が存在する意義、活動の中で生徒が何を得られるのかという、「部活動」を多角的に見直すことが大切だと思った。
- 部活動を「正式な教育活動」と位置付ける時期にきていると感じており、講演を参考に検討したい。

#### 〈講演Ⅲ〉

- 保護者対応は具体的で今後活かしていきたい。
- いろいろなケースや判例の話をお聞かせいただき、大変参考になった。
- 保護者対応について、濁さずハッキリ説明して頂き、とても役に立った。



## 【生徒指導部会】



### 〈講演Ⅰ〉

- 依存症の仕組みなどよく理解できた。しかし、連携して取り組めるような組織が同時に必要とも感じた。
- ゲーム以外の依存状態でも使えそうなプログラムを教えていただき、これを活用して応用できる場所はしていきたい。
- 具体的事例を多く提示頂き、勉強になった。また、ネット・ゲーム依存のメカニズムについては、子どもの心の動きのメカニズムまで教示いただき、非常に有益だった。倍の時間をかけてでも聞きたかった。
- ネット、ゲーム依存に関する講演では様々な誤解や偏見、また適切なアプローチについて知ることができた。i Swing の 2 冊の冊子など資料が充実しているのもよかった。香川県のゲーム条例についても興味があり、その言及もあったのでとても有意義な時間となった。

### 〈講演Ⅱ〉

- 法律の観点では認めないといけないことでも、教育的な効果を考えたときに、法律通りでなくても良いという部分があることは救いだと感じた。
- 現場だけの経験では知ることのできない幅広い考え方や法的な側面などを学ぶ事ができて貴重な機会となった。
- 18 歳成人の高校生と法律・校則との関わりを聞いて良かった。現場にいると、どうしても法律の観点が見えにくくなるので、注意したいと感じた。
- 現在の校内にもおこりうることで大変参考になりました。特に Q&A はすぐにでも役立てそうだなと思った。

### 〈講演Ⅲ〉

- 講演内容に非常に興味を持って、自校での実践に利用できそうな内容だった。
- 「アンガーマネジメント」についての話は、学習指導、部活指導、私生活についても、とてもためになった。
- 生徒に対してだけではなく、自分の気持ちのコントロールについてもしっかり向き合うことができたので良かった。
- 他教員と情報交換ができ、今後の勉強になった。

### 〈その他〉

- 生徒指導は新種の事案が増えており、その対応に苦慮しているのが現状である。その観点で大変参考になった。
- 講師 3 名には勤務校で話をさせていただきたいと思うほど、充実した内容だった。
- 通常指導にも、すぐに活用できるものばかりだった。

## 【特色教育部会】



### 〈講演Ⅰ〉

- 企業と学校の連携などに関するお話が大変参考となった。本校においても3年生の就職などで地元企業のお世話になることも多くあると考えており、非常に有益な内容であった。
- 特色教育以前に学校教育と社会とのつながりについて、改めて認識することができ、明日からの教育現場で様々な形で役立つ意識づくりになった。
- 一般企業の方のお話はとても貴重でありがたかった。学校と企業が意外と近いことを知ることができて良かった。

### 〈講演Ⅱ〉

- 探究的な活動について、様々な学校の特長、やりがいがあり、学ぶことが多かった。様々なやり方を本校でできるように、小さなことから実践していきたい。
- 今、授業をしていて悩んでいたAIとの組み合わせ方の根本的な姿勢や考え方を学ぶことができ、非常にありがたかった。
- 吉田先生が話されることは、私学教育ならではの特色を改めて考え直す事、そして海外に目を向けた教員側の視点のあり方について、気づきを得ることばかりだった。

### 〈実践発表Ⅰ・Ⅱ〉

- 各校の取り組みがとても刺激的だった。当校の今後の施策を考える上での参考になった。
- 他の学校の実践について知れて刺激になった。どの学校も特色ある私学らしい取り組みをされていた。本校も負けていけないなと感じた。
- 日山先生と林先生が取り組まれている授業展開、そして、生徒達が自主的な活動を高めている取り組みには終始圧巻だった。本校の取り組みにはないものばかりで、とても参考になった。今後の学校運営に役立てていきたいと思う。

### 〈その他〉

- 企業や地域との結びつきが重要であり、地域から応援されるような学校を目指そうと感じた。
- 講演、実践報告ともに興味深い内容で、また、本校での今後の参考になる内容だった。皆さんが自分の必要と思われることに向かって着実に歩みを進めていることに感動した。若い方の発想、実践、また、生徒の可能性をおおいに感じた。

# 参加者数

総参加者数 513 名

参加者数（部会別・都道府県別）

◆部会別参加者数

No.	部会名	参加者数
1	私学経営部会	137
2	教育課程部会	88
3	法人管理事務運営部会	104
4	生徒指導部会	90
5	特色教育部会	72
6	全体集会のみ参加	21
計		513

◆教育懇談会参加者数 277名

◆都道府県別参加者数

No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数
1	北海道	22	17	石川	1	33	岡山	14
2	青森	0	18	福井	1	34	広島	31
3	岩手	2	19	山梨	1	35	山口	5
4	宮城	2	20	長野	1	36	徳島	6
5	秋田	6	21	岐阜	1	37	香川	52
6	山形	4	22	静岡	5	38	愛媛	56
7	福島	1	23	愛知	16	39	高知	34
8	新潟	2	24	三重	3	40	福岡	8
9	茨城	1	25	滋賀	3	41	佐賀	3
10	栃木	7	26	京都	25	42	長崎	8
11	群馬	2	27	大阪	29	43	熊本	8
12	埼玉	1	28	兵庫	7	44	大分	27
13	千葉	6	29	奈良	2	45	宮崎	1
14	神奈川	21	30	和歌山	2	46	鹿児島	8
15	東京	41	31	鳥取	25	47	沖縄	0
16	富山	0	32	島根	12			
計					43都道府県	513名		

# 開催地・研究目標一覽

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
1	東京都	宝仙学園中学高等学校	昭和27年4月27日～29日	185
2	東京都	女子聖学院中学高等学校	昭和28年11月20日～23日	235
3	東京都	早稲田大学	昭和29年11月20日～23日	283
4	東京都	東洋大学	昭和30年11月11日～14日	402
5	京都市	立命館大学	昭和31年11月9日～12日	995
6	東京都	明治大学	昭和32年11月22日～25日	679
7	名古屋	椋山学園大学	昭和33年10月3日～6日	857
8	東京都	法政大学	昭和34年11月20日～23日	846
9	札幌	北海道学園大学	昭和35年8月20日～23日	958
10	東京都	日本大学	昭和36年11月22日～25日	954
11	横浜市	神奈川大学	昭和37年11月22日～25日	841
12	広島市	進徳女子高等学校	昭和38年11月12日～15日	993
13	東京都	学習院大学	昭和39年11月20日～23日	612
14	福岡県	中村学園女子高等学校	昭和40年11月21日～24日	1,100
15	東京都	明星大学・明星学苑	昭和41年11月3日～6日	750
16	仙台市	東北大学	昭和42年11月5日～8日	1,172
17	東京都	文化女子大学	昭和43年11月22日～25日	1,074
18	大阪市	相愛学園	昭和44年11月15日～18日	2,294
19	宇都宮	作新学院	昭和45年11月11日～13日	382
20	西宮市	武庫川学院	昭和46年11月11日～13日	2,513
21	東京都	昭和女子大学	昭和47年11月23日～25日	764
22	静岡市	静岡雙葉学園	昭和49年11月7日～9日	926
23	札幌市	札幌市民会館	昭和50年10月2日～4日	978
24	広島市	広島市公会堂	昭和51年10月26日～28日	1,216
25	東京都	千代田女学院中学高等学校	昭和52年11月16日～18日	1,054
26	福岡市	福岡市民会館	昭和53年11月7日～9日	1,714
27	埼玉県	埼玉会館	昭和54年11月20日～22日	1,043
28	仙台市	仙台白百合学園中学高等学校	昭和55年10月22日～24日	1,533
29	京都市	KBS京都放送会館	昭和56年11月12日～14日	1,923
30	東京都	学習院記念会館	昭和57年11月17日～19日	1,370
31	福井市	金井学園	昭和58年10月26日～28日	992
32	札幌市	札幌市民会館	昭和59年9月26日～28日	1,040
33	山口市	山口市市民会館	昭和60年10月31日～11月2日	1,210
34	福岡市	福岡市民会館	昭和61年11月12日～14日	1,696
35	千葉県	千葉県文化会館	昭和62年11月11日～13日	1,867
36	新潟市	新潟県民会館	昭和63年10月19日～21日	1,651
37	大阪市	大阪国際交流センター	平成元年10月25日～27日	2,530
38	東京都	学習院記念会館	平成2年10月24日～26日	1,773
39	愛知県	愛知県勤労会館	平成3年10月23日～25日	1,473
40	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成4年9月30日～10月2日	1,123
41	岡山市	岡山シンフォニーホール	平成5年10月27日～29日	1,306
42	熊本県	熊本市市民会館	平成6年10月26日～28日	1,170
43	神奈川県	国立横浜国際会議場	平成7年10月25日～27日	2,134
44	山形県	米沢女子高等学校	平成8年10月16日～18日	829
45	京都市	京都会館第一ホール	平成9年11月12日～14日	1,222
46	東京都	東京国際フォーラム	平成10年11月4日～6日	1,422

回数	研究目標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方 ・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を上げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を發揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和50年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立って私学教育を考える―新教育課程をめぐる今日的課題―
26	新教育課程への移行と実践―私学教育の独自性と充実をはかる―
27	新教育課程実践の道―建学の精神と教師の役割―
28	私学の使命と特色教育―新教育課程の展開―
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育―私学の原点に立って―
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
47	静岡県	静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)	平成11年11月10日～12日	1,042
48	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成12年10月4日～6日	862
49	徳島市	徳島文理大学徳島校	平成13年11月15日～17日	827
50	宮崎市	宮崎観光ホテル	平成14年11月6日～8日	928
51	水戸市・土浦市	茨城県立県民文化センター	平成15年10月29日～31日	1,590
52	福島県	郡山市ホテルハマツ	平成16年10月28日～29日	774
53	神戸市ほか3市	神戸ポートピアホテル	平成17年11月10日～11日	1,383
54	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成18年11月9日～10日	1,354
55	石川県	石川県立音楽堂コンサートホール	平成19年10月25日～26日	791
56	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成20年10月9日～10日	722
57	松江市・米子市	島根県民会館	平成21年10月22日～23日	505
58	佐世保市	ウインズ佐世保ゲルックホール	平成22年10月14日～15日	621
59	高崎市	群馬音楽センター	平成23年10月27日～28日	437
60	盛岡市	ホテルメトロポリタン盛岡 NEWWING	平成24年10月11日～12日	501
61	大阪市	シェラトン都ホテル大阪	平成25年10月24日～25日	621
62	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成26年10月16日～17日	1,023
63	長野市	ホテル国際21	平成27年10月29日～30日	592
64	札幌市	京王プラザホテル札幌	平成28年10月27日～28日	587
65	松山市	松山全日空ホテル	平成29年10月19日～20日	542
66	鹿児島市	城山ホテル鹿児島	平成30年10月25日～26日	681
67	宇都宮市	ホテル東日本宇都宮	令和元年10月17日～18日	603
68	秋田市	秋田キャッスルホテル	令和2年10月22日～23日	334
69	京都市	国立京都国際会館	令和3年10月21日～22日	380
70	岐阜市	長良川国際会議場	令和4年10月20日～21日	541
71	高松市	JR ホテルクレメント高松	令和5年11月9日～10日	513
72	大分市	iichiko 総合文化センター iichiko グランシアタ	令和6年10月31日～11月1日	(500)

回数	研究目標
47	21世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育－中国・四国からの発信－
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて－伝統と創造－
52	特色ある私学教育を求めて－建学の精神と国際化－
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして－悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして－私学教育の挑戦－
59	日本の未来を拓く私学教育
60	未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～
61	私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～
62	21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～
63	新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～
64	今こそ私学～明日への挑戦～
65	時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～
66	新時代に向けたさらなる私学の躍進
67	人間力（コンピテンシー）を高める私学教育
68	新しい時代のリーダーを育てる私学教育
69	世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～
70	これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～
71	持続可能な社会を実現する私学教育の創造
72	新しい時代の創造に向けた私学の挑戦～多様性と包括性の実現に向けて～

# 編 集 後 記

香川県では、令和 2 年度に第 31 回四国地区私学教育研修会（香川大会）を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、2 年後の令和 4 年 11 月に延期しておりました。令和 5 年度に全国私学教育研究集會を開催しますと、大規模の研修大会を 2 年連続で開催することになり、そのようなことが実際可能なのだろうかと思ひました。しかし、毎月開催されている校長会で提案した際、四国地区開催校の大手前丸亀中学・高等学校の先生方や香川県私立中学高等学校連合会の皆さんの力を結集して、質の高い充実した大会を目指そうと賛同が得られ、実際ほっとしたことを思い出します。

令和 3 年 11 月、日本私立中学高等学校連合会四国支部と香川県中学高等学校連合会 10 校の先生方が中心となり、香川大会開催に向けた準備が始まりました。

開催当日は、全国から 513 名の先生方をお迎えすることができ、関係者一同熱い気持ちで運営にあたることができました。これも関係の皆様から子細にわたり御指導をいただいたおかげであり、改めて感謝申し上げます。

「持続可能な社会を実現する私学教育の創造」を香川大会のテーマとして、香川県ならではの伝統と文化に触れていただきたいという思いで大会の内容を構成いたしました。

全体会では、香川県私立学校活動紹介として、坂出第一高等学校少林寺拳法部の個人・団体演武、尽誠学園高等学校和太鼓部による演奏披露と、香川県に根差した活動を生徒たちが生き生きと発表いたしました。また、記念講演では香川県出身の東京大学大学院工学系研究科人工物工学研究センター技術経営戦略学専攻教授の松尾豊先生による「人工知能の進展と人材育成」の演題で最新の研究の一端を大変興味深く聞くことができました。

私学経営部会等各部会でも、特色ある講演やワークショップが展開され、参加者皆様の心に深く残るものがあったのではないかと思っているところです。現在、混沌とした世界情勢の中、日本においては少子高齢化の波は避けられず、それを前提とした確かな取組が求められています。最適解を求めることも難しい状況ではありますが、教育は私学からという心意気と柔軟性を内に秘め、地域や世界で主体的に活躍する人材を育成していこうと考えています。

ここに、大会の成果として研究集録が完成いたしました。今後の皆様の教育実践のお役に立てただけでしたら幸甚でございます。

結びにあたりまして、本大会の開催にあたり、すべての関係各位に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

来年度、大分大会で皆様にお会いできますことを楽しみにいたしております。

令和 5 年度全国私学教育研究集會香川大会  
副実行委員長 香 川 泰 造  
(香川県私立中学高等学校連合会会長・高松中央高等学校校長)



---

---

**令和 5 年度  
全国私学教育研究集会香川大会  
研究集録**

印刷 令和 6 年 3 月

発行 令和 6 年 3 月

発行人 一般財団法人日本私学教育研究所  
所 長 平 方 邦 行

発行所 一般財団法人日本私学教育研究所  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷 UN ビル 6 階  
電話 (03)3222-1621

編集 一般財団法人日本私学教育研究所  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷 UN ビル 6 階  
電話 (03)3222-1621

印刷所 株式会社マツヤマクリエーション  
〒356-0052 埼玉県ふじみ野市苗間 558-10  
電話 (049)263-0075

---

---

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。

